
西園寺蘭子の霊感情話（完全版）

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

西園寺蘭子の霊感情話（完全版）

【Nコード】

N2042L

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

私は西園寺蘭子。霊能者です。他に占いや骨董品の鑑定もしています。

よく人から「いい年して、カマトトね」と言われますが、全然気にしていません。

ようやく「いけない私」を克服し、華麗(?)に復活です。

申し訳ありませんが、15禁専門になってしまいました。

ご了承ください。

淫の気を操るインチキ陰陽師、謎の怪異、百合の園、強姦魔と様々

な人物が登場します。「オレ様」な裏蘭子の「活躍」も見逃せませ
んが、困った事なのですよ、私としては。

廃校の階段

G県のT市は、合併で面積が大きくなり、児童生徒数も大幅に増えました。

しかし、逼迫した財政を立て直すため、小中学校の統廃合を進めたのです。

そのため、多くの児童生徒が通学する学校を変える事になりました。

廃校になったある山沿いの小学校に、ある噂が立ち始めたのはそれから数ヶ月後の事でした。

「廃校になった小学校に少女の幽霊が出る」

そのような噂でした。

噂はやがてテレビ局の知るところとなり、在京キー局が取材に訪れました。

スタッフとりポーター役のタレントの、合わせて20名程が、その噂の廃校に突撃しました。

そして、恐怖におののき、まさしく逃げるように帰って行ったの

です。

地元の人達は皆口々に、

「触らぬ神に祟りなしだ。近づかない方がいい」

と言い、それ以降マスコミの取材を拒否するよう、市役所に申し入れました。

そもそもそんな噂を信じていなかった市の教育委員会は、テレビ局のスタッフの慌てように驚愕していました。

「放っておいていいものか？」

「子供達が近づいて、取り返しのつかない事になったら」

彼らは一計を案じ、私のところに連絡して来ました。

私の名前は西園寺蘭子。霊能者です。

教育委員会は、私に除霊を依頼して来ました。

私は引き受けるかどうか、一度現場を見てから決めたいと答え、廃校を訪れました。

その建物は戦前に建てられた木造二階建てで、あちこちが朽ちて

います。

「ここは・・・」

私は啞然としました。

廃校が建っているところは、昔の刑場でした。

たくさん罪人が殺されたところです。

しかし、矛盾します。

噂では少女の霊が出ると言う。

テレビ局のスタッフ達の話でも、霊は少女らしいのです。

私は考え込んでしまいました。

そして、取り敢えず建物の中に入ってみる事にしました。

！

そしてわかったのです。

刑場の怨霊が学校によって封じ込められている事が。

「何、これ？ この建物が、結界になっている。どついでい事？」

廊下に入ると、空気が一変しました。

「まさか。まさかとは思うけど・・・」

私が下した結論は「少女は学校の人柱にされた」というもの。

「こっちなね」

私は廊下を奥へと進み、階段の前に来ました。

「ここから一番波動を感じる。この下なの？」

古い木製の階段。

私は一段一段踏みしめるように昇りました。

「えっ？」

私は足が動かせなくなったのに気づきました。

「何？」

足下を見ました。

するとそこには無数の小さな手が出ていて、私の足を押さえつけています。

「・・・」

私は心の中で地藏菩薩の真言を唱えました。

その小さな手は消え、私は再び階段を昇りました。

すると今度は階段そのものが少女の姿になり、私に襲いかかって来ました。

「オンカカカビサンマエイソワカ」

再び地蔵真言を唱えます。少女達の霊は消えました。

「でも妙ね。生徒達がいた時は、ここにはそんな噂はなかったと言
うし」

私は廃校を出て、市役所に向かいました。

「廃校を撤回しろ？ 無茶を言わんで下さい」

教育委員会の答えは始めからわかっていました。

しかし、あの幽霊達が現れたのは、廃校になってからです。

彼女達は、その寂しさから姿を現し、「いたずら」をするようになつたのです。

今まで通り小学校として使えば、何も問題は起こらないはずなのです。

「もう廃校は議会の承認も得ている決定事項です。それに、幽霊が

出ると言う噂の小学校に自分の子供を通わせる親御さんなんて、いないと思いますよ」

確かに彼らの言う通りかも知れません。

1人の力で何とかなるような事ではありません。

私はもう一度廃校を訪れ、彼女達に詫言いました。

彼女達の声は聞こえませんでした。が、残念がっている波動は感じました。

その小学校は今でも取り壊されずにあるようです。

いつか、彼女達の願いが叶えばいいな、と思っています。

親友 八木麗華

私は西園寺蘭子。霊能者です。

一般の方々のイメージだと、私達は非常に特殊な能力を持っている人間と思われがちなのですが、実はそうではないのです。

霊を見たり感じたりする力は、誰もが持っています。

ただ、それが自分でコントロールできるか出来ないかの違いなのです。

これからお話するのは、類い稀な霊能力を持ちながらその力に翻弄された人物のお話です。

八木麗華。今では私の親友であり、一番のライバルでもあります。

彼女はわずか3歳で霊感に目覚め、5歳で除霊に成功した、天才霊感少女でした。

但し、まだ私と出会う前の麗華は、私の友人の小学生のように自信に満ち溢れておらず、常に自分の力に怯え、周囲の人々の奇異の目と戦っていました。

成長するに連れ、麗華の能力は加速度的に強大になり、彼女が数珠を持って現場に現れるだけで、浮遊霊達は浄化され、怨霊は鎮まり、悪霊は退散しました。

そして彼女の不安は、能力の増大に比例するように高まって行きました。

彼女はある偉大な霊能者を尋ね、力を失いたいと相談していました。

しかしその霊能者は麗華の能力を見抜いていたので、その力の素晴らしさに驚嘆し、

「そんな事を考えない方がいい。その力は将来きつと役に立つ時が来る」

と諭して、何とか麗華を説得しました。

それでも麗華は悩み続けました。

昼夜を問わず聞こえる霊の声。

麗華はノイローゼになりそうでした。

彼女の精神が、もう少しで破綻してしまうという時に、私は彼女と出会いました。

その時、私も自分の力に悩んでいたのです。

同じ苦しみを持つ麗華に出会い、私は随分と楽な気持ちになりました。

それは麗華も同じだったようです。

私達はお互い気持ちは楽になりました。

でも、悪霊達にとって私達の出会いは悪夢だったらしく、私と麗華はたびたび悪霊の一団に襲撃されました。

代々霊能者の家系の私は、それなりの訓練と鍛錬を積んで来たので、ある程度戦う事ができました。

でも、一般家庭で突然霊能力に目覚めてしまった麗華は、その能力の方向性が定まらず、強力な怨霊集団の前に身動きが取れなくなっていました。

麗華はやがて怨霊に取り憑かれ、その能力を乗っ取られてしまいました。

そして怨霊は私に襲いかかって来たのです。

怨霊だけなら何とでもできたでしょうが、麗華の力が加わったとなると、私にも勝ち目がありません。

攻撃を凌ぐので精一杯でした。

私は麗華に心の声を最大にして呼びかけました。

『麗華、惑わされないで！ 目覚めて！ 貴女ならできる。貴女なら抜け出せるはずよ！』

でも麗華には届いていません。

彼女は怨霊の依り代となってしまう、私は肉体的にも霊的にも傷

つきました。

それでも私は呼びかけ続けました。

『麗華、お願いだから目覚めて！ 貴女は負けない。貴女は私の一番の親友なのだから！』

麗華の動きが止まりました。

「うおおおおおっつっつっ！」

憑衣していた怨霊が苦しみ始めました。そして麗華が強烈な光を放つと、怨霊は霧散しました。

麗華がようやく私の呼びかけに応えてくれたのです。

怨霊集団は私達の能力で全て浄化し、戦いは終わりました。

「蘭子」

麗華はニッコリして言いました。私もニッコリして、

「麗華」

と応じました。すると麗華は急に真顔になり、

「今回はウチの負けや。けどな、この次はそうはいかんで」

「えっ？」

私は啞然としました。

「ウチはあんたよりずっと強いんや。今度は必ずあんたを…」

「私を？」

私が促すように麗華の顔を覗き込むと、彼女は顔を赤らめて、

「あんたをウチが助けたる。覚悟しときーや」

と捨て台詞のような言葉を吐き、立ち去りました。

でも私は信じていました。

私と麗華は、生涯を通じて親友なのだ。

それから数年後。

私は様々なところに行き、除霊や浄霊、お清めの仕事をこなしています。

そして時々耳にしてしまうのです。

「八木麗華は確かに優秀な霊能者だが、同時に金の亡者でもある」という話を。

いつかじっくり彼女と今後の活動について話し合いたいと思って

います。

幽霊アパート

私は霊能者の西園寺蘭子。依頼を受けて除霊・浄霊・祈祷・厄除等をしています。

今日の依頼主はアパートの大家さんです。

アパートは綺麗で、どの部屋も自殺者が出た訳ではないのですが、何故か幽霊騒ぎが頻発するのだそうです。

私は早速そのアパートに行ってみました。

古いアパートを想像していたのですが、行ってみるとまだ築三年ほどしか経っていない真新しいアパートです。

確かに建物からは霊の気配は感じません。

それから、よく言われる「霊の通り道」がある訳でもないようです。

私はアパートの周囲を歩き、波動を調べましたが、どうしても霊の存在を感知できませんでした。

他に方法がないので、アパートの住人の皆さんに聞き込みをしてみました。

住人の方全員が、真夜中に霊が現れると言っています。

時間的な問題なのかも知れないと考え、私は真夜中まで待つ事に

しました。

そして深夜十二時。

辺りは静まり返り、虫の音も聞こえません。

私はもう一度気配を探ってみました。

言われていた時間になっても、全く霊の気配はありません。

不思議でした。

明日また来てみようかと帰りかけた時です。

誰かが近づいて来るのを感じました。

普通の人の気配ではありません。

私と同業の方が、質たちの悪い人か。

私は気配を消して、物陰に隠れました。

月明かりの中、そこに現れたのは、山伏のような装束姿の老人でした。

その老人は、腰に下げているホラ貝を手に取ると、吹き始めました。

いえ、正確に言うと、吹き始めたものではありません。

音は全く出ていませんので。

ホラ貝の先から出て来たのは、霊でした。

しかも、妖気すら漂っているような悪霊です。

何？ この人は何をしようとしているの？

私は老人を問い詰めるため、危険を覚悟で近づきました。

「誰じゃ？」

老人は私に気づいて、鋭い眼で睨んで来ました。

「私は西園寺蘭子。このアパートの大家さんから、霊の調査を依頼されました。貴方は何をしていますのです？」

そんなやり取りをしている間にも、悪霊はどんどん大きくなり、アパート全体を覆い尽くすほどになっていました。

「小娘風情が邪魔立て致すな。儂も依頼を受けて呪詛しゅそをかけているのだ」

「呪詛？」

聞き捨てならない言葉です。老人はアパートに呪いをかけているのです。

「何故そんな事を？」

「依頼についてお前に話す必要はない。死にたくなければ立ち去れ。邪魔すると言うのなら、命はないぞ」

老人は再びホラ貝を吹き、悪霊を出しました。その悪霊は私に襲いかかって来ます。

「オンマリシエイソワカ」

私はすかさず摩利支天まりしてんの真言を唱えました。

「やるな、小娘。しかし、我が僕はその程度では防げぬぞ」

悪霊は一瞬動きを止めたのですが、また私に襲いかかって来ました。

「どっつして？」

私は数珠を振るい、悪霊を退けました。

「儂の依頼主の事を何も知らぬお前が、何故儂を悪と決めつけて邪魔をするのだ？」

老人はホラ貝に悪霊を戻して私に言いました。

「妖気が漂う霊を使役するのは邪法師。悪でなくて何だと言つのです？」

私の言葉に老人はニヤリとし、

「なるほど。小娘のようで、実は相当な修行を積んでいるな、お前は。儂の僕の妖気がわかるか。しかし、それでも儂は悪とは言えんよ」

「……」

私は老人の開き直りとも取れる言い方に啞然としました。

「えっ?」

私はある事に気づきました。悪霊はアパートを覆い尽くしてしまいましたが、アパートの住人に危害を加えている訳ではないのです。

呪詛はアパートそのものにかけていました。

要するに、アパートが傷んでしまうように呪っているのです。

「どっという事です?」

私は意味が分からなくなり、老人に尋ねました。

「この土地は、元は儂の依頼主の持ち物。それを騙し取られた。だから、取り戻そうとして儂に頼んで来た。儂は誰も殺す気はない。この土地を依頼主に戻してくれば、もうここには来る必要はなくなる」

「……」

私は老人の話を鵜呑みにする訳にはいかないのです、

「わかりました。今夜はお引き取り下さい。私は明日、依頼主に問い質してみます」

「良かるう。何も進展がなければ、再びここに来る事になる」

老人はアパートを覆っていた悪霊をホラ貝に戻し、立ち去りました。

翌日、私は大家さんのところに行き、事の経緯を説明しました。

大家さんはその話を聞いて素直にに応じてくれるかと思ったのですが、

「そんな事はない。あの土地は代々ウチの土地。そのジイさんが嘘をついているのだ」

と言い、全く私の話に耳を傾けてくれませんでした。

あの老人の言葉が全て信用できる訳ではありませんが、大家さんの言葉も信用できません。

人は嘘を吐くと、身体から悪い気が出るのです。

老人は術者ですから、気の巡りを操れるので、悪い気が出ていなくても、嘘を吐いている可能性があります。

でも、気の巡りを操れない大家さんの身体から、たくさん悪い気

が出てくれば、どちらが本当の事を言っているのかわかります。

私は力になれない事をお詫びし、依頼を辞退しました。

大家さんは随分と口汚く私を罵りました。

私はそれについては何も反論せず、大家さんの家を出ました。

大家さんがこの先どうなってしまうのかは大家さん自身の責任です。すから、私はそれほど心配していませんが、可哀想なのはあのアパートの住人の皆さんです。

私は家に帰るのをやめ、もう一度そのアパートに向かいました。

「あ」

すると、そのアパートのそばに昨夜の老人が立っていました。

「やはり来たか。どうだ、悪者が誰かわかったか？」

老人の皮肉に私は頭を下げました。

「申し訳ありませんでした。私が間違っていたようです」

老人はニヤリとして、

「わかれば良い。しかし、儂もまた間違っていたな」

「はい？」

私は老人の言葉の意味が分かりません。老人は私に背を向けて、

「呪うべきはこのアパートではないという事だ」

と言い、大家さんの家の方に歩き出しました。私はハツとして、

「あまり脅かし過ぎないで下さいね」

「わかっておる」

私は老人は本当はとてもいい人なのだと感じました。

悪霊の言い分

私は西園寺蘭子。霊能者です。腕が良いと思われていますが、実はとても弱い人間です。

その事を示すのに良い事例があります。それをこれからお話ししましょう。

私は数年前、ようやく独り立ちして活動を始めた新米でした。まだ親友八木麗華とも出会っていません。

ある人の依頼で、取り壊し予定の廃ビルに行きました。

ここに悪霊が棲みつき、工事を妨害しているのです。

怪我人も多数出ており、一人亡くなった方もいます。

私は霊に話を聞かされ、同情してしまっただけで危うく命を落としかけた事がありました。

ですから、その頃は、非情に徹していて、情け容赦なく除霊していたのです。

霊の世界でも、私の名は知られているようで、私が現れると観念して自ら浄化を希望する霊もいました。

そのせいで、私は自覚はないながらも、自惚れていたのかも知れ

ません。

「はっ！」

私はその廃ビルに入った途端、空気が変わったのを感じました。

今までの霊と違う。明らかに憎悪の塊になっています。

もう浄化は無理だと判断しました。ところが、それが誤りでした。

「オマエカ、レイノウシャハ？ オレハジヨウカサレナイゾ！」

悪霊が敵意剥きだしの妖怪のような姿で現れました。私はお札を取り出し、

「そうね。貴方は消し飛ばすしかないようね」

と言い返しました。悪霊は大笑いをして、

「オマエゴトキ、ヒヨツコニ、ナニガデキルカ！」

「その口、封じてあげるわ！」

私はお札を投げつけました。しかし、悪霊には通じませんでした。

「オロカモノメ、ソノヨウナモノガ、オレニツウジルカ！」

私は動揺してしまいました。そのお札は、私が使っているもので最強だったのです。

「そんな……」

なす術がなくなり、私は硬直してしまいました。

「オマエモ、オレノクルシミヲ、シレ！」

悪霊が私に襲いかかりました。私は防御もできないまま、彼の悪意をつけてしまいました。

「あ……」

その時、彼の心が見えました。

彼はこのビルを建てた時に転落死した作業員でした。

彼の事故は隠され、遺族はビルの所有者に弔慰金をもらって口を噤くみました。

結局、きちんと弔われなかったため、彼は地縛霊となつてここに居ついてしまいました。

やがて彼の周囲に悪意が集まり、彼は悪霊になつてしまったのです。

弔ってもらえなかった悲しみと、金で口を噤くんでしまった家族への怒りで、彼は暴れました。

ビルでは怪奇現象が続き、人が寄りつかなくなりました。

それが原因でテナントが出て行き、転売が続き、最終的に取り壊

しが決まったようです。

「ごめんなさい」

私はいつの間にか泣いていました。すると霊が悪意を放つのをやめ、人間の姿に戻りました。

「やっと巡り合えた。私の心を見てくれる人に……」

作業員の霊は笑顔で言いました。

私は彼が成仏できるように祈りました。

「ありがとう。これで私もあちらに行ける」

彼は光に包まれ、天に昇って行きました。

私はそれからは、必ず霊の言い分を聞いています。もちろん、同情はしません。

彼らがこの世に居ついてしまうのは、生きている人達のエゴが原因なのです。

温泉幽霊

私は西園寺蘭子。霊能者です。

占い、魔除け、厄払いと何でもお好みに応じて引き受けています。

そんな忙しい毎日をごしている私に、親友の八木麗華からお誘いがありました。

温泉でゆっくりと骨休めをしないかと。

何となく不安でしたが、断わると後でどんな嫌味を言われるかわからないので、承諾しました。

つくづく私って人が好いと思います。

G県。靈感少女箕輪まどかちゃんの家からそれ程離れていない温泉街に到着しました。

元々G県は温泉の宝庫で、とにかくたくさんの温泉地があります。

ですから、麗華がG県を選んだのも別に他意はないと思うのですが。

温泉旅館に着いて、その「他意」を感じてしまいました。

「G県警鑑識課」一行様

旅館の玄関の脇に、大きな看板が掛けられています。

そしてその隣には、

「八木麗華様」

という看板があります。もう……。

「慶一郎さん目当てなのね、麗華？」

私はほんの少し怒り気味に言いました。

「ハハハ、偶然や、偶然。ウチも知らなかったわ、慶君が来てるなんて」

白々しい嘘を吐く麗華。呆れてしまいます。

「そう目くじら立てんといてえな、蘭子。旅費も宿泊費も、この太腹な麗華さんが出すんやから」

それが一番引っかかっているのです。

麗華は只では舌も出さないとされるほどの人間なのですから。

「さっ、行くで、蘭子」

「え、ええ」

私は仕方なく、麗華に従う事にしました。

何かある。その不安を拭えないままに。

旅館のフロントで部屋の鍵を受け取り、エレベーターへと進みます。

すると前からお風呂上がりの女性が来ました。

あら？ その人の発する気に覚えがあります。

確かこの気は、慶一郎さんに憑いていた生き霊の気です。

私はその人と目が合ったので、会釈しました。その人も会釈を返してくれました。

「里見まゆ子さんですね？」

私が突然名前を言い当てたので、まゆ子さんはビックリして、

「あ、あの、どこかでお会いしましたか？」

まさか、貴女の生き霊とお話をしましたとも言えないので、

「私、西園寺蘭子と言います。箕輪まどかちゃんと友達なんです」

「まどかちゃん？」

まゆ子さんは私がどういいう経歴の持ち主なのか、瞬時に悟ったよ

うです。

「あ、まさか、この旅館、出るんですか？」

彼女は小声で尋ねて来ました。私は苦笑いをして、

「いえ、違います。私達もお休みを取って、骨休めに来たんです」

「そ、そうですね」

まゆ子さんはまるで信じた様子がありません。

「あ、あのそちらの方は？」

まゆ子さんは麗華に気づいて尋ねました。

麗華はムスッととしていて、機嫌が悪そうです。

「私は八木麗華。蘭子のマブダチや。それから、慶君とは付き合^おつてる」

「!」

まゆ子さんの顔色が変わりました。麗華ったら、何て事言っの!？

「し、失礼します」

まゆ子さんは蒼ざめた顔で、その場から走り去りました。

「麗華、知っていて言ったでしょ？」

「は？　ウチは何も悪い事は言^ゆつてへん」

「それはそうだけど……。あの人は……」

私が更に嗜^{たしな}めようとするど、

「わかつとるわい。ウチは、好きな男に何も言えんような女は嫌いなんや。イジイジしとるから、生き霊になったりするんや」

「麗華……」

麗華の性格では、まゆ子さんのような女性は何もかも否定される存在かも知れません。

でも人にはそれぞれ得手不得手があるのでから。

「それにしても、もう少し言いようがあると思っけど」

「知らんわ」

麗華はエレベーターに乗り込みました。

「早よ乗りや。扉が閉まってしまうぞ」

「え、ええ」

私は慌ててエレベーターに乗りました。

「そろそろ本題に入るわな。ここ、出るんや」

「えっ？」

私もそんな気がして、いろいろ探っていたのですが、何も感じません。

「感じへんやろ？ でもいるねん。どえらい奴がな」

麗華は妙に嬉しそうに言いました。嫌な予感がします。

私達は部屋に荷物を置き、地下にある温泉に向かいました。

「風呂に出るんや。とんでもないのがな」

「お風呂に？」

一番嫌です。湿っぽいところは、霊がより活性化するのです。

「旅館に頼んで、今はウチらの貸し切りにしてある。だから、裸にならんでええで、蘭子」

何でしょう、麗華の勝ち誇った笑みは？

確かに、麗華と違って、私は胸は小さいです。でも、別に……。

そんな事はこの際関係ないので、やめておきます。

浴場の入口に着きました。微かに霊がいる気配がします。

「どんな霊なの?」

「痴漢や、痴漢。この風呂場で覗きしようとして、女湯と男湯の境の塀から転がり落ちて死んだアホな男の霊や」

「……」

何だか除霊するのが嫌です。

「やてと。どこや?」

蘭子は風呂場と脱衣所の間のドアをガラガラと開け放ち、中を見渡しました。

「来た!」

確かに。何か壮絶な気を放ちながら、近づいて来る者がいます。

お風呂のお湯が波を立てています。霊がこちらに接近しているようです。

「あれか?」

麗華は舌なめずりして、

「ナウマクサマンダバザラダンカン!」

と不動明王の真言を唱えました。炎が渦巻きながら、霊に向かいます。

「ソナモノガ、キクカ！」

霊は温泉のお湯を束ねて、炎を消してしまいました。

「次や！ インダラヤソワカ！」

次は帝釈天の真言です。稲妻が霊を攻撃します。

「キカヌ！」

稲妻は跳ね上げられた飛沫しぶきに伝わり、消えてしまいました。

これは案外強敵のようです。

「こら、蘭子！ ボオツとしとらんで、何とかせんかい！」

麗華が叫びました。

霊がお湯から飛び出し、無数の飛沫をまるで針のようにして私達に飛ばして来ました。

「オンマリシエイソワカ！」

すかさず摩利支天の真言で防御します。

「マダダ！」

痴漢の霊はさすがにしつこいです。

次に彼は、洗い場にある桶やシャンプーセットを浮遊させ、ホルター騷霊現象を起こしました。ガイスト

「アホか、おのれは!？」

麗華が切れました。いつまでも抵抗する霊には、彼女は容赦しません。

「女の裸がそないに見たいんか？ なら、ずっと見とれ、ドアホ！」

麗華は胸元から大きなお札を取り出しました。

「ウオオオオツ！」

痴漢の霊は遂にその姿を現し、桶やシャンプーセット共に私達に向かって来ました。

「成仏せい、腐れ外道が！」

麗華はその大きなお札を掲げました。痴漢の霊はそれに吸い寄せられるように飛んで来ます。

「フオオオオツ！」

彼は断末魔と共にお札に吸い込まれてしまい、騷霊現象も収まりました。

「どうや、痴漢、満足か」

麗華はガハハと笑いながら、私にそのお札を見せてくれました。

お札は麗華の等身大の際どい写真が付けられていて、そこに真言が書かれていました。

こんなの、効力があるのかしら？ 非常に疑問でした。

そして夜になりました。

私達は、鑑識課の方に呼ばれて、宴会に参加しました。

「こんな綺麗な方なら、是非私も除霊して欲しいですな」

すっかり出来上がった鑑識課長さんが、セクハラ発言をしています。

「うちの料金は高いで。それでもええか？」

麗華は課長さんに近づいてニコニコしています。警察に取り入る気でしょうか？

そして、麗華に腕を組まれて、逃げるに逃げられない慶一郎さんも哀れです。

「あの」

私がぼんやりしていると、まゆ子さんが話しかけて来ました。

「あ、はい」

私はハツとして彼女を見ました。

「私、負けませんから」

「えっ？」

私は何の事を言われているのか、すぐにはわかりませんでした。

「まどかちゃんから聞いています。箕輪さんは、あの八木さんではなくて、貴女の事が好きなのだ」と

「……………」

もう、まどかちゃん……。後でゆっくり話さないかね。

「私、負けませんから」

まゆ子さんはそれだけ言つと私から離れてしまいました。

あら？ 千鳥足？ 彼女も酔っていたのかしら？

そんな訳で、また更に複雑になった私達の関係でした。

それから。

麗華は除霊のお礼として宿泊費を只にさせ、旅館までの交通費も出させたそうです。

結局彼女は何も損していませんでした。

触らぬ神に祟りなしその一

私は西園寺蘭子。霊能者です。お祓い、霊視、除霊、浄霊、占い、厄除けなど、様々な事をお引き受けしています。親友の八木麗華に言わせると、「靈感の大安売り」をしているそうです。

でも、その麗華は、私から見ると、「靈感のボツタクリ」をしていると思うのですが。

さて、今回私のところに依頼に来たのは、G県の南G郡にあるS村の村長さんです。村を流れている川の護岸工事をするため、県の大手企業の工事車両が川の上流に行つたのですが、次々に原因不明の事故が起こつて作業員が亡くなつたそうで、下請けも孫請けも逃げ出し、全く工事が進んでいないという事でした。

「何かいわくがあるのでしょうか、その川は？」

私は酷く怯えている村長さんに尋ねました。村長さんは唇を震わせて、

「その川は、昔、自害沢と呼ばれておりました。今はS川と名前が変わっておりますが」

「そうですか」

川の昔の名前を聞いただけで、気の弱い人は近づく事ができないでしょう。

村長さんが話してくれたのは、壮絶な昔話でした。

戦国時代の頃の事です。S村付近は、上杉謙信と武田信玄の争いによって、戦場となる事がしばしばあつたそうです。

そんな時、上杉勢に味方していた地元の領主が武田勢に攻められ、城は焼かれ、多くの家臣がそこで討ち死にし、その領主の家系は途絶えました。そればかりではなく、城を脱出した家臣の妻や子も、逃げ切れないと判断して、互いに槍や小刀で付き合い、自害したの

だそうです。乳飲み子まで巻き添えにしての、悲惨な最期でした。その人達の血が近くを流れていた川に流れ込み、水が真っ赤に染まりました。それ以降、昭和初期まで、その川は「自害沢」と呼ばれました。

「でも、今までその川で、何か祟りのような事はありましたか？」
私は気になったので聞いてみました。

「いえ。村の古い書物を調べても、祟りがあつた記録はありませんでした」

「わかりました。何が原因か、調査してみます」

村長さんは私が依頼を受諾したのでびっくりしたようです。

「ほ、本当に受けて下さるのですか？」

「はい？」

とても不思議な質問です。頼んでおいて、そんな反応はないと思うのですが。

「あ、すみません、今まで何人もの霊能者の方に断わられましたので……」

村長さんは私がムツとしたと思ったのか、慌てて謝りました。

「そうなのですか？」

何かあつたのでしょうか？

「どういった経緯いきわづらひで依頼を断られたのですか？」

「それがわからないのです。依頼を受けるとお返事をいただいた翌日、全員の方が断わりのご連絡を下さいます……」

「……」

何かやりがいのあるような依頼です。

「私は断わつたりしませんよ、村長さん。原因が何か、大凡おおよその見当はついていきますから」

「そ、そうですね。宜しくお願いします」

村長さんは何度も頭を下げて言いました。私は苦笑いをして、
「祟るからには理由があるはずです。それを取り除けば、事故はな

くなるはずです」

と答え、村長さんを送り出しました。

「あら？」

携帯が鳴っています。麗華からです。地獄耳の彼女の事ですから、何か掴んで電話して来たのでしょうか？

「どうしたの、麗華？」

「どうしたのやあらへんで。蘭子、あんた、ホンマに命知らずやな
！」

「えっ？」

何の事でしょう？

「あんた、G県の自害沢の依頼、受けたやる？」

「さすが地獄耳ね、麗華。もう知ってるの？」

私は本当に感心して言いました。

「依頼を断わった霊能者の話、聞いたんか？」

「聞いてないわよ」

しばらく沈黙が続きました。

「何ちゆう能気な女や、あんたは！ ホンマに命落とすでエ」

「どついう事なのよ、麗華？」

私は半分呆れながら、尋ねました。

「あそこはあかん。わかってる者は手エ出さんとこや。悪い事は言
わん、やめとき」

麗華がここまで私の心配をするなんてない事です。

「詳しく聞かせて、麗華」

「聞いてどうする気イヤ？」

私は一呼吸置いて、

「調査の参考にするのよ」

「あんなア……」

麗華は完全に呆れたようです。

麗華の話は、依頼を受けた知り合いの女性の霊能者から聞いた話

のようです。

その霊能者の方は、村長さんの話を聞いたその日の夜、気がつく
とS村の自害沢の河岸に立っていました。

辺りを見回すと、何百人という数の霊が、取り囲んでいます。皆、
とても恨めしそうな顔でその人を睨んでいたそうです。

またハツと気がつくとき、その人は自分の家の寝室にいました。夢
かと思つたそうなのですが、その人の足の裏には、土が着いていて、
間違いなく自害沢に行ったのでした。

それだけなら、その方も依頼を断わつたりしなかつたでしょうが、
隣で寝ているご主人の足にも土が着いていたそうです。要するに、
家族ぐるみで呪われそうだったらしいのです。霊能者も、仕事を離
れれば一人の人間、一人の女です。家族が危ない目に遭うのは避け
たいと思うのは、決して身勝手とは言えないでしょう。

他の霊能者も、同じような理由で依頼を断わつたようです。

「あんただけではすまん話なんや。あんたの家族も呪われるんやで」
麗華は本当に心配そうに言いました。でも私は、

「平気よ、麗華。私には家族はいないし、恋人もいないし」

言っていて悲しくなりますが、巻き込まれる人がいないのは確か
です。

「あ、阿呆、ウチがおるやないか。ウチはあんたの事、家族や思っ
とる」

「麗華……」

嬉しい言葉ですが、冷静に考えてみると、麗華は自分の心配をし
ているのだとも思えます。でも、そんな深読みはしたくないので、
素直に麗華の言葉に感謝します。

「ありがとう。でも、大丈夫よ。私はもつとずっと強烈な霊と戦っ
た事あるから」

「あのなア……」

私は微笑んで、

「麗華は巻き込まないわよ。今から貴女の事は家族とは思わないから」

「お、おい、蘭子、ウチは別にな……」

自分の考えを見抜かれたと思ったのか、麗華は狼狽えています。でも、私はそんなつもりはありません。本当に麗華の事は親友だと思っと思っていますし、家族だと考えています。

「それに、もう少し私の事を信用してくれないかな、麗華？ 私はそんなに弱い？」

「そ、それは……」

麗華は口籠ります。

「もし危なくなったら、貴女に助けを求めるかも知れないけれど、お願いね」

「……」

麗華は何も答えません。

「麗華？」

私は麗華が怒ってしまったと思い、呼びかけました。

「わかった。そうやな。あんたは強い。ウチを助けてくれたんやから、ホンマに強いんや。そのあんたがピンチの時は、ウチが何としても助けたる」

「ありがとう、麗華」

こうして私は、G県のS村に行く事を決意しました。

触らぬ神に祟りなしその二

そしてその日の夜。待ちに待った訳ではありませんが、大きなイベントが控えています。

どんな方法で私を自害沢に連れて行ってくれるのか、いろいろと想像しながら、ベッドに入りました。

私は様々などころに出かける事が多いので、家にはほとんど帰りません。貸しビルの一室を事務所として利用しているのですが、今日はそのままそこに泊まる事にしました。家に帰っても良かったのですが、私の家に来られる霊はそれほどいません。自慢ではありませんが、完璧な結界が張り巡らせてあるので、相当強い悪霊でも、中に入る事はできず、無理に入ればそのまま浄化されてしまうはずです。

それも一つの解決方法ですが、私はその自害沢の霊達を除霊しようとは考えていません。恐らく、悪いのは生きている人間達の方でしょうから。

「さてと」

私はソファをベッド代わりにして、毛布を掛けて眠りました。

程なく、異変が起きました。

(何?)

私は目を開けました。すると、さっきまでソファの上に寝ていたはずなのに、もうS村の自害沢の河岸に寝ていました。

「こんなところに寝させないでね」

私はゴツゴツした石の固さを感じながら、立ち上がりました。

「まあ……」

周囲には、麗華の話に出て来たように、たくさんの霊がいました。全員、私を怨み骨髄の目で睨んでいます。

「最初から喧嘩腰ですか、あなた達は？」

私は霊達に話しかけました。しかし、霊達は全く敵意を鎮めようとしません。

「何があつたのか、教えて下さい。私はあなた達を除霊するつもりはありません。あなた達を助けようと思っています」

私は霊に話しかけながら、自分が肉体ごとここに運ばれて来たのを確認しました。

(テレポートさせられたという事なのかしら?)

そんな凄い力をもっている霊は、周囲に感じられません。妙な感じです。

「教えて下さい、何があつたのか」

私の呼びかけも虚しく、霊達は消えてしまいました。少なくとも今周囲にいた霊達は、怨念が強かったですが、決して悪霊ではありません。何か警告を発しようとしていた気がします。それが何なのかはわかりませんが。

「あつ！」

次の瞬間、私は事務所のソファの上にはいました。

「どういうカラクリなのかしら？」

服に付着したのは、間違いなく土と小さな石です。私は自害沢に連れて行かれた。

恐怖より先に、興味が湧きました。この謎、絶対に解いてみせる。そして、あの怨みに満ちた目をした霊達を浄化する。そう心に誓いました。

私はもう一度眠りにつきましたが、今度は自害沢ツアーはありませんでした。

そして翌朝です。

「蘭子、生きとるか？」

驚いた事に、あの麗華が朝早くに私の事務所に来たのです。宵っ張りの朝寝坊の彼女がこんな早くに姿を現す事の方が驚きでした。

「麗華、どうしたの？ こんな朝早くに？」

私が尋ねると、麗華はムツとして、

「何ちゆう言い草や！　ウチが心配して、大阪から飛んで来たつちゆうのに！」

「ごめん、ごめん。ありがとう、麗華。とにかく、入って」

私は麗華を事務所に入れて、コーヒーを出しました。

「ホンマ、ウチ、こないに朝早ようから動いたん、生まれて初めてや。偉いしんどいで」

「で、何？」

私はちよつと恩義せがましい麗華にイラツとして尋ねました。麗華も、私が怒っているのに気づいて、

「ま、それはええとしてや。夕べ、出たんか、霊の奴らは？」

「ええ、自害沢ツアーに行つて来たわ」

私が旅行に行つて来たようなノリで言ったので、麗華は呆れて、

「ホンマ、あんたはお気楽な女やな。もしかしたら、死んどつたかも知れんのかで」

「そうね。でも、妙な事がわかつたわ」

「妙な事？」

麗華はコーヒーを啜りながら鸚鵡返しに尋ねました。

「ええ。噂の自害沢に行つたけど、言われているような怨霊はいなかつたわよ。どういふ事なのかしら？」

「ホンマか？」

麗華はコーヒーカップを荒々しく置いて言いました。私はカップが割れていないか確認しながら、

「本当よ。どうも様子が違うのよね、貴女から聞いた話と」

「ウチは嘘は吐いてへんで」

「そうは言わないけどね」

私は、麗華や、麗華に話をしてくれた霊能者の人が嘘を吐いているとは思っていません。でも、自害沢の噂と、実際の自害沢の雰囲気、気があまりにもかけ離れていたの、違和感があったのは事実です。「それからね、もう一つ大きな疑問があるのよ」

「何や？」

麗華はまたコーヒークップを乱暴に置いて言いました。この子には、紙コップで出した方がいいかも知れません。

「それ程の怨霊がいるのなら、どうして依頼者である村長さんには何も起こらないのかしら？」

「おっ！」

麗華はなるほど、と手を打ちます。そして、

「村長が黒幕か？」

「それはないわね。あの人、本当に善人のオーラしか出していなかつたから。もし村長さんが黒幕なら、それはそれで凄いけど」

「そうかア……」

何故か残念そうな麗華です。

「この一件、本当に自害沢の霊達の仕業なのか、とても疑問なのよ。本当は、もっと何か複雑な事が起こっている気がするの」

「どういう意味や？」

難しい事を考えるのは苦手な麗華は、鬱陶しそうな顔で尋ねました。

「それはわからない。とにかく、G県のS村に行ってみるしかないわね」

「行くんか、蘭子？」

麗華が目を見開いて訊きました。

「貴女はついて来なくていいわよ、麗華」

私が冷たく言い放つと、

「あ、阿呆！ 無二の親友が死地に赴くっちゅうんに、ウチだけ安全圏にいられるかいな」

麗華は剥れて言いました。私はそんな彼女が可愛くて、思わず吹き出してしまいました。

そして一時間後。私と麗華は、私の車でG県に出発しました。

「慶君に会いたなるなア、G県に行くと」

麗華は呑気な事を言い出しました。

「麗華、今日はそんな用件で行く訳ではないわよ」

私もまどかちゃんに会いたくありませんが、今回は彼女を巻き込みたくはありません。今までもそれなりに危険な目に遭いましたが、今回はそれを遙かに凌ぐものだからです。

「わかつとるがな」

「無事着けるといいわね」

「縁起でもない事言わんといてエな、蘭子」

麗華は本気で怒っています。彼女、験担ぎにはこだわる方で、そういう事を口にする事自体が良くない事だと主張します。私も言霊は信じますが、そんなに気にしない方が生きて行く上で楽だと思います。

「ま、氣イつけるんに越した事はないけどな」

麗華はシートに身を沈めて言いました。

「悪いけど、少し眠らせて」

「いいわよ」

言うのが早いか、もう麗華は眠ってしまった。道中何かあるとは思いませんが、起きていて欲しかったです。

S村は、Mインターで降りて、三十分程一般道を走ったところにある、農業が主の閑静な村です。道路の両側は、水田や畑が続ぎ、牧場や養鶏場が見えたりします。

「着いたわよ、麗華」

「お、おう、早いな」

私達は、ひとまず村役場に立ち寄り、村長さんを訪ねました。

「西園寺先生、ようこそお越し下さいました」

村長さんは、土木課長さんと出迎えてくれました。

「どうしても行かれますか？」

土木課長さんは不安そうです。自分の知り合いも、事故で亡くなっているのです、余計なのでしょう。

「はい。突き止めて何とかしないと、事故でなくなった方々が浮かばれません」

「はア……」

土木課長さんは村長さんと顔を見合わせました。

「場所をお教えします」

課長さんは大きな地図を広げて言いました。

「この役場の前を流れているのが、S川です。それで、ここから二キロばかり遡ったところが、現場です」

「そうですか」

地図の感じから、私が霊達に連れて行かれたところと同じです。

「それで……」

課長さんは不安そうな顔で私を見ます。私はすぐにピンと来て、

「大丈夫ですよ、私達だけで行きますから」

「あ、はい、そうですか、はい」

課長さんはホツとしたのか、急にニコニコしました。きっと村長さんに道案内をしてくれと言われていたのでしょう。

私達は村役場を後にして、S川を左に見ながら、県道四十四号線を西へと進み、S川の上流を目指しました。

「あっ！」

私と麗華はほぼ同時に叫びました。

「おい、蘭子、今、何かの結界を突き抜けた気イがせんかったか？」

「したわ。何かしら？」

私は周囲を見渡しました。木々の高さが日差しを遮り、昼尚暗い森の中に入りました。麗華が開けた助手席の窓から、川のせせらぎが聞こえます。

「何や知らんけど、楽しゅうなって来たで、蘭子」

「ええ、そうね」

「どうやら敵は、怨霊ばかりではないようです。厄介な事にならないと良いのですが。」

触らぬ神に祟りなしその三

私と麗華は、G県S村にある自害沢の上流を目指し、車を走らせています。

「さっきの結界、塞いでるんとちゃうな。何かを封じとるもんやった」

麗華が川を眺めながら言いました。私は頷いて、

「そうね。結界を通り抜けた途端に、もの凄い霊圧を感じるわ」

「ああ。何や、この怨念の塊みたいな気イの流れは？ 偉い気色悪いで」

麗華は周囲を見回しています。私は県道から脇道に入り、広くなつたところに車を停めました。

「やってもうたんやな、工事の連中が？」

麗華は車を降りて呟きました。それは私にもわかりました。恐らく、この森は元々は古墳でしょう。それが長い年月の風化で削れて原型がわからなくなった。それでも、昔の人達は口伝や古文書などによって、この森が侵してはならないものだとして認識していたのでしょう。だから、今まで祟りはなかった。

「それをいち早く気づいた誰かが、この森全体に強力な結界を張つたのね」

私は脇道を進みながら、この怨念の源泉を辿ろうと周囲を探索しました。

「あんたが見たんは、多分武家の人達の霊や。でも、その人らの死んだ場所はここやない。もっと上や」

「ええ。でも、私をこの川の河岸に連れて来たのは、その霊達ではないわ。この結界を作った人が、私に対して警告を発するために連れて来た」

私達は、やがて沢に降りる道を見つけて、下りました。

「祟つとるんは、その霊達やないな。その霊達も、ホンマは自害し

たんやない」

「そうみたいね」

私は、歴史の真相が見えて来て、少し背筋が寒くなりました。

「この森、恐ろしいで。千五百年以上も祟もつとる者もんがある」

「ええ」

私は、途中まで進められて重機もダンプカーも放置されている工事現場に出ました。もう何日もそのままですから、すっかり泥だらけになっています。開けられた窓には、雲の巣が張っている程です。「あれか？」

麗華が指差す先には、砕けてしまった石仏のようなものの残骸がありました。重機が踏み潰してしまっただか、掘削してしまっただけでしょう。

「封じていた物なのね、この森の霊を……」

私は、もうその封印は取り返しがつかない物になっているのを知りました。

「何て事なの……。自害沢の由来は……」

私は見てしまいました。

自害沢の名前の由来は、戦国時代にこの沢の近くで自害した人々の血で赤く染まったからと言われていますが、本当は違うのです。

戦国時代に、この沢の付近で人がたくさん死んだのは事実ですが、自害ではありませんでした。彼等は追手を逃れて森を進むうちに、この森の霊を封じていた物を壊してしまっただけなのです。そして、それによって現れた霊に全員殺されたのが真相でした。

それからしばらくして、徳の高い僧侶がこの地を訪れ、石仏と真言で霊を封じ、事は収まりました。

「そして、あまりに壮絶な事件だったので、地元の人達はその事を完全に封印し、誰一人語らなかつた。書物にも何も真相が残っていないのは、意図的にそうしたからだったのね」

私はさすがに衝撃を受けました。今までいろいろな霊現象の起こる場所を訪れましたが、ここまで凄いとこころはありません。

「おい、蘭子。さつきから、この森の主さん達が、ウチらの事をジイツと見とるで」

麗華が言いました。私もそれに気づいていました。

「一人二人じゃないわね。古墳のような感じだから、豪族の首長クラスが眠っているのかと思っただけ」

「多分そうなんやろ。でも、その頃の王さんは、一人で寝るのが怖かったみたいやで」

「そのようね」

時代的には古墳時代。まだ、ヤマト政権が関東までその支配力を及ぼしていない頃です。つまり、王が死ぬと、たくさん人間が一緒に埋葬されたのです。しかも、生きたままで。

「そら、怨むわな」

麗華は身震いしました。私はその霊達の無念さに心が痛みました。

「ホンマやったら、その王さんを怨むのが筋やが、怨む相手が死んだからな。怨みの行く先が無うなって、ここに吹き溜まつつたちゆう事か」

「それでも何とか封じていたのでしょうけどね。でも、封印というものは、何度も破られるうちに効力が落ちるわ。いくら封じ直したとしても」

私は周囲に渦巻いている霊の怨みを感じながら、石仏の残骸に近づきました。

「蘭子、危ない！」

麗華が叫びました。

「はっ！」

石仏のすぐそばに、生き埋めにされて死んだ古代人の霊が無数現れました。

「フーアーツ！」

何体もの霊が一齐に私に取り憑こうとして来ました。

「オンマリシエイソワカ！」

私はすかさず摩利支天の真言を唱えます。霊達は私の周りにでき

た摩利支天の結界に押し返されました。

「麗華！」

今度は麗華の上にたくさんのお霊が現れました。

「舐めるんやないで、この麗華様を！」

麗華は上を見て、

「インダラヤソワカ！」

と帝釈天の真言を唱え、霊を蹴散らしました。

「麗華、除霊じゃなくて……」

「悠長な事を言うつとると、死ぬで、蘭子！」

「そうだけど……」

麗華のいう事も理解できませんが、これでは火に油を注ぎかねませ
ん。

「なかなかお強いようじゃの」

どこからか、男性の聲がしました。

「誰や？」

敵意剥き出しで麗華が怒鳴りました。すると川の対岸に黒い袈裟
を着た年老いた僧侶が現れました。

「じゃが、被^はつていたのでは埒^{はら}が開かんぞ」

老僧は落ち着いた声で諭すように言いました。私は尚も喧嘩腰の
麗華を制して、

「あの結界、ご住職のなさったものですか？」

するとその老僧は微笑んで、

「私は破戒僧ゆえ、住職ではない」

「破戒僧？」

老僧は微笑んだまま、スーッと印を結び、付近に集まり始めてい
た霊を押し止めてしまいました。凄いです。私にも麗華にも真似で
きません。

「おお、ジイさん、やるやないか。さすがやなア」

麗華はニコニコして老僧に話しかけました。

「今まで幾人もの修行者がここに来ようとしたが、私の試しに怖じ

気づいてしまった」

「……」

私は麗華と顔を見合わせました。私を自害沢の河岸に連れて来たのは、この老僧のようです。

「お二人は、それでも怖じ気づかず、ここまでお出でなされた。これではようやくこの森も封じられる」

「どういう事ですか？」

私は妙に思って尋ねました。すると老僧は、

「ここでは落ち着いて話をできぬゆえ、場所を変えようか」と言いました。私と麗華はまた顔を見合わせました。

触らぬ神に祟りなしその四

私と麗華は、沢の石を渡り、向こう岸にいる老僧のところに行きました。

「申し遅れました、私、西園寺蘭子です」

「ウチは八木麗華や」

私達は自己紹介をしました。すると老僧は微笑んで、

「私は乗如まじゆと申す。乗るに如実じゆじつの如と書きます」

「乗如様ですか？ では浄土真宗の？」

私が尋ねますと、老僧は苦笑いをして、

「いやいや、破戒僧ゆえ、そのようなところとは繋がりはありません」

「そうですね」

麗華がイライラして、

「早よ話聞かせてんか？」

「そうですね」

乗如さんは歩き出しました。私は麗華と顔を見合わせてから、乗如さんを追いました。

「ここはもう、随分以前から関わっておりますね」

歩きながら乗如さんは話し始めました。すると、早速古代人の霊が近づいて来ます。

「オンマリシエイソワカ！」

私が押しやります。麗華が舌打ちしました。

「消し飛ばせばええんや、蘭子」

「そういう問題ではないと思うわよ、麗華」

「ほー、さよか」

麗華はバカにしたような口調で言いました。私は呆れましたが、何も言い返しません。

「いくら貴女が力が強くて、この霊を全て消し飛ばせば、多分

死にますよ、麗華さん」

乗如さんは穏やかな口調で凄い事を言いました。私もそう思います。この辺りに浮遊している古代人の霊は、尋常な数ではありません。何千人といるようです。全員が、生き埋めで死んだのではないようですが、家族も子々孫々に渡り、犠牲になっっているようです。いくら麗華が強力な真言を使えるとしても、全て除霊して行けば、力尽きます。さすがに麗華もそれはわかっていているようで、黙っています。

「封じ直すには骨が折れましてね。それで、力を貸して下さい方を探していました」

「それにしても、あの自害沢ツアアはどうしたらできるのですか？」

私は乗如さんの力を知りたくて尋ねました。

「あれは、簡単です。貴女の霊体をここまで呼び込み、返す時に一緒に土と砂を運ばせるのです。ですから、肉体はここには来ていませんよ」

私は驚きました。

「でも確かに私は……」

「それは私がそう思わせたからです。企みを全て見抜かれてしまうと、作戦は成功しませんからね」

「そうだったのですか」

私はこの老僧を少し怖いと思いました。あの恵比寿顔の裏に別の顔があるとしたら、恐ろしいです。

「この辺までくれば、もう大丈夫でしょう」

私達は沢の上まで出ました。川の向こうに、私の車が見えます。

「実は、戦国の頃、ここで霊を封じたのは、私の祖先なのです」

「そうなんですか」

「そうなんや」

私は麗華と思わず顔を見合わせました。

「それで、もし封が破られた時は、その時代の者が命に代えて封じ直せと言われております」

「でも、封印は二度破れましたから、今回は相当大変ではないですか？」

私の言葉に乗如さんはニッコリして、

「そうですね。だからこそ、お二人の助けが必要なのですよ」

「はい」

私は麗華を見ました。麗華は、

「ま、乗りかかった船やし、腕試しにはちょうどええくらいの量と質や。やったるか、蘭子？」

「そうですね」

私達は頷き合って、乗如さんを見ました。乗如さんは微笑んで、

「ありがとうございます、お嬢さん方」

何故かお嬢さんと言われると、何となく居心地が悪くなります。

「坊さん、お嬢さんはやめてえな。ケツがむず痒うなるで」

麗華は全く「ぼかす」という事ができない子なので、ストレートな表現で言いました。私が恥ずかしくなります。

「そうですね」

乗如さんは笑って言いました。そして、

「日が落ちないうちに片づけないと、厄介な事になります。急ぎましょ」

と言うと、道を山の方へと歩き出しました。この先には、恐らくこの森の主である豪族の首長の眠る石室があると思われます。

「そもそも始まりは、墓泥棒が石室を開き、封印を剥き出しに事にあります。永らく誰もこの森に入ったりしなかったので、何事もなく時は過ぎましたが……」

乗如さんが言っているのは、最初に起こった悲惨な事件の元の話のようです。

「逃げるのに夢中だった戦国武将の家族達が、知らないうちにその封印を壊してしまったのですね」

「ほオ、そこまでわかりか。さすがですな」

乗如さんはまだ私達を試しているようです。それくらい、この一

件に関わる霊達は強力なのでしょう。

「何や、気に入らん」

麗華が小声で言いました。彼女も乗如さんのしている事がわかっているようです。

「ウチらを誰やと思うとんねん」

麗華はイライラしているようです。でもね、麗華、私も乗如さんの考え方、正しいと思うわ。そう思うのですが、その事を説明している時間も惜しいくらい、私は森の主達の霊圧が気になっていました。

「うわ……」

森を登り詰めたところは少し開けていて、土が剥き出しになっています。その剥き出しの土のほぼ真ん中に石室らしき石組みが見えています。その石組みの周りには、何重にも古代人の霊が纏わりついています。気持ち悪いくらいです。

「これはこれは、団体さんでお迎えか？」

麗華は舌なめずりしています。また消し飛ばすつもりなのでしょうが、それは無謀です。

「フーアーオー！」

私達に気づいて、霊達が襲いかかって来ます。皆怨みが凝り固まったような顔をしています。恐らく窒息死しているのでしょうか。余計に形相が凄まじいです。

「効率よくいくで、蘭子！」

「ちよつと、麗華！」

麗華が真言を唱えようとした時、

「オンアマリタテイゼイカラウン」

乗如さんが「十八番あはじ」と思われる阿弥陀如来の真言を唱えました。

「フーオーアー」

古代人の霊達は、スーツと消えています。さすがです。

「まずはこの石室を封じ直さねばなりません」

乗如さんはそう言いながら、石室に近づいて行きました。先手を

打たれた麗華は、ムスツとしながら後に続きます。私は肩を竦めて麗華に続きました。

まだまだ困難が待ち受けていそうです。

触らぬ神に祟りなしその五

乗如さんは、石室の入口に近づき、中を覗き込みました。

「この中はすでに何も残っていません。広くなっています」

私と麗華も中を見ました。

「何や、あれは？」

麗華が携帯の明かりで中を照らして言いました。石室の中にぼんやりと浮かび上がっているのは、人の形のようにも見えますが、胡座をかいている仏像のようにも見えます。

「何かしらね？」

私は霊の気配を感じ、振り返りました。いつの間にか、私達は何百という数の古代人達の霊に取り囲まれていました。

「オンアミリタテイゼイカラウン」

乗如さんの真言が霊達を押しのかます。

「この霊達は、王に対する怨みから、ここに集って来るのです。王はすでにこの世には何の未練もなく霊界に行ってしまったのですから、いくら集まってみたとところで何もなりません」

乗如さんの言葉に私は生き埋めにされた人達の悲哀を感じました。

「おい、蘭子、さつき河原で見かけた連中まで、ここに辿り着いて来とるで」

麗華が言いました。私もそれに気づき、

「あの河原にある石仏が封印だったのよ。あれを何とかしないと、全ての霊がここに集まってしまうわ」

夢に出そうなくらい怖い顔で迫って来る霊の団体は、私達を押し潰そうとするかのように押し寄せて来ます。

「何とかここを突破して河原に戻りましょう。あの石仏を何とかしないと……」

私が乗如さんに声をかけた時、乗如さんは石室の中を覗いていました。

「た、大変だ！」

乗如さんは大声で叫びました。私は麗華と顔を見合わせてから、
「どうしたのですか？」

乗如さんは石室の中を指差して、

「中を見て下さい」

「えっ？」

私と麗華は言われるがままに石室の中を覗きました。

「あっ！」

その瞬間、私達は崩れ落ちるように石室の中に入ってしまいました。
た。

「な、何や？」

暗がりでは麗華が叫びます。何が起こったのか、すぐにはわからない程、私は混乱しました。乗如さんが私達を穴の中に落としたので
す。

「すまん、お嬢さん方。ここを封じるには、どうしても贄にえが必要
なのじゃよ」

石室の入口でニヤリと笑う乗如さんの顔。

「ジイさん、あんた、何考えとんのや？」

麗華が怒鳴りましたが、乗如さんはそれには答えず、石室の入口
に何かで蓋をしてしまいました。

「……」

途端に訪れる漆黒の闇。本当に何も見えません。

「何ちゆうジイや、ホンマに！」

麗華が携帯を開き、辺りが見えるようになりました。

「これ……」

私は、さっき覗き込んだ時に見えた仏像のような物が何なのか知
りました。

「これ、即身仏かしら？」

麗華が顔を近づけ、鼻をヒクヒクさせます。

「そのようやな。ここ、石室やなんて言いくさって、あのジジイ、

とんでもない嘘つきや。この山全体を鎮めるために、徳の高い坊さんほんが入って、即身仏になったところやで」

「そうみたいね。乗如さんはここに封印があつたような事を言っていたけれど、違うわね。すっかり騙されてしまったわ」

私がそう言うと、麗華は溜息を吐いて、

「ホンマにあんたは人が好過ぎるわ。少しは疑わんと、長生きできんで」

「そうね」

それは確かにそうかも知れません。

「あのジジイ、ご先祖様がどうやってこの山を鎮めたんか知って、恐ろしゅうなつて代わりに死んでくれる人間を探しとつたんやな」

麗華は即身仏をじつと見ながら言いました。私も携帯を取り出し、周囲を照らしてみます。

「入口はあそこだけかしら？」

「多分な」

私は乗如さんが塞いだところを触ってみました。石です。薄い石ですが、その上に何か乗せてあるらしく、私達では動かす事ができません。

「でも、麗華」

「どうした？」

私はある事に気づきました。

「私達は出られないけどね」

「何や？」

麗華はイライラしているようです。

「霊達はどんどん入って来られるみたいよ」

「そらそうや、あいつらには蓋も何も関係ない」

私達は知らないうちに古代人の霊で溢れている穴の中にいたのです。

「ヒーオーアー」

霊達はその壮絶な形相で私達を睨みながら溢れて来ます。何か気

持ち悪くなりました。

「酸欠になりそうなくらい、増えて来たな？」

麗華が言います。霊達は呼吸をしませんから、その心配は無用なのですが、この狭い空間にいつまでもいると、本当に私達もお仲間になつてしまつてしまうでしょう。

「蘭子、もう止めるんやないで。ウチが一発ぶちかましたるからな」

「ええ、お好きだけどうぞ」

私は麗華から離れて、身を屈めました。麗華は、

「オンマカキヤラソワカ！」

と大黒天の真言を唱えました。

「フーアオー！」

何十といた霊達が一斉に消滅しました。次に麗華は、

「インダラソワカ！」

と蓋を雷撃で吹き飛ばしました。

「出るで、蘭子！」

麗華は大股開きで穴から這い出し、私に手を貸してくれました。

「逃げよつたな、あの生臭坊主！」

麗華は辺りを見回して怒鳴りました。古代人の霊達の集合は留まる事を知らず、穴に落ちる前より、その数は増えていました。

「ここを突破しないと。さっき見かけた石仏を何とかしましょう」

私の提案に麗華は大きく頷き、

「よし！　ウチが吹き飛ばす。蘭子は摩利支天の真言で道を確保してや」

「ええ」

私達は見事なまでの連携プレーで、その場を離れ、道を下りました。霊達は執拗に追いかけて来ます。辺りは薄暗くなり始めていたので、彼等の凄みが増していました。多分同年代の女性だったら、確実に気を失っています。

「蘭子！」

麗華はまるで私の彼氏のように手を貸してくれ、河原を渡らせて

くれました。彼女が実に「男前」に見えて来ます。

「あそこや」

私達は遂に石仏のところに辿り着きました。私は崩れた石仏を拾い集め、

「オンアロリキヤソワカ」

と観世音菩薩の真言を唱えました。石仏が輝き、元に戻ります。

「ヒーウアー」

古代人の霊達が、その石仏に吸い寄せられて消えて行きます。

「こつちもやな」

麗華も石仏を拾い集め、真言を唱えました。

「ウーヒーアー」

霊達は次々に吸い寄せられ、消えて行きました。

「一段落したわね」

私は石仏を河原の端に持って行き、そこに建てました。麗華もその隣に置きました。

「凄いな、この石仏。あっちゅう間に霊を吸い込んだで」

「ええ、そうね」

でもまだいました。まだ何百もの霊が近づいて来ているのです。

「全然足りへんやないか。どんだけいるんや、こいつら！」

さすがの麗華も泣きそうです。私もですけど。

その河原にあった石仏はその二体だけです。もう品切れ状態でした。

「何？ もつとあつたの、もしかして？」

それから私はある事に思い当たりました。

「事故で人が亡くなっているのよね。それは何をしていた時なのかしら？」

「何言い出すねん、蘭子？ 工事の事なんか、どうでもええがな」

麗華は迫って来る霊達を吹き飛ばしながら怒りました。

「現場はここではないのよ、麗華。もつと先だわ」

「何やねん、蘭子？」

私は泥だらけの重機を横切り、川の下流に向かいました。

「まさか……」

私は恐ろしくなりました。知らないという事がどれほど怖い事かよくわかったのです。

「見て、麗華」

「何や？」

私は工事現場の一角を指差しました。麗華はそこを見て、

「現場の連中、何ちゅう罰^{ばち}当たりな事をするねん！」

と呆れ顔で言いました。工事の基礎を作る行程で、彼等はあるう事が、石仏を何体もその中に組み込んでいたのです。いくら丁度いい大きさだとしても、これでは霊が怒るのも無理はありません。

「これは骨が折れそうね。このままじゃ、観音様も霊を導けないわ」「そっやな」

私達は思わず顔を見合わせてしまいました。その間にも霊達は追って来ています。

「どうする？」

私は麗華に尋ねました。麗華は、

「どうするで、蘭子……」

絶体絶命かも知れません。

触らぬ神に祟りなしその六

私達二人は、古代人達の霊に取り囲まれ、絶体絶命になりかけていました。

「あの生臭坊主、次に会うたらギッタギタにしたる！」

麗華が毒づきます。

「会えたらね」

私はそんな皮肉を言えるような余裕があった訳ではありませんが、言わずにいられませんでした。

「阿呆、そないな後ろ向き発言、許さんで、蘭子！」

麗華は本当に怒っているようです。声が裏返っています。

「ねえ、麗華」

「何や、急ぎの質問か？」

麗華は服の下に隠し持っているお札を探しているようです。

「どうしてこの霊達、私達に付きまとうのかしら？」

「あん？ そないな事、わかるかいな」

麗華はまだ服を触っています。

「あ」

私はジャケットのポケットに何か入れられているのに気づきました。石のようです。

「何だろ？」

取り出してみると、それは石仏の破片のようでした。

「これ……」

多分あの乗如さんが入れたのでしよう。麗華の服には入れるところがないから、私の服だけに入れたのだと思います。

「何や、それ？」

「石仏の破片みたい」

「何やて！？」

「これのせいみたい」

私はその破片に観世音菩薩の真言を唱えました。

「オンアロリキヤソワカ」

途端にその破片が輝き出し、周囲の霊が吸い込まれました。

「この霊達、帰りたいのね」

「はア？」

消し飛ばす気満々の麗華は、素っ頓狂な声で言いました。

「帰りたいのよ。帰る術をなくして、怒っていたの。だから、私達に付きまとったのよ」

「氣イ悪いわ、ホンマ」

麗華は少しだけ減った霊の隙を突いて走り出しました。考えてみれば、追いかけていたのは私だけですから、彼女は違う方向に逃げれば良かったのです。そんな事を言ったら、もの凄く怒るでしょうけど。

「麗華！」

「待つとけ、蘭子。今ウチが何とかしたる！」

麗華は服の下から出したお札で霊を弾き飛ばしながら、重機に向かって走りました。

「何をするつもりなの、麗華？」

私も摩利支天まろしてんの真言を唱えながら、麗華を追いかけてました。

「あのコンクリートに埋まった石仏を掘り出すんや！ それしかない！」

「ああ」

麗華にしては、非常に合理的で正しい判断です。

「事件が解決したら、この村からガッツリ報酬もろうて、この工事した阿呆な建設会社に賠償請求や。霊に襲われて死にかけた言ゆうてな。たんまり取ったるで」

結局お金？ 本当にもう。でも多分その訴えは受理されないわよ、

麗華。日本の法制度は、霊の存在を認めていないから。

「よし、このコンボ、動くで」

「麗華、免許あるの？」

「この緊急時に何堅い事を言つとんねん」

麗華はエンジンを始動させて、パワーシヨベルを動かしました。

「ああ」

また霊達が寄つて来ます。もう石仏とか関係ないようです。麗華が仲間を吹き飛ばしたので、私達は敵と看做されているのです。

「蘭子、そいつらは頼んだで。ウチはあの仏さんを掘り出す」

「ええ、何とか」

私は大変な団体さんを見て、ちょっと躊躇してしまいました。

「あつ、そうか」

私はある事に思い至りました。

「麗華、頑張つてね！」

「おい、蘭子、どこ行くねん？」

私は団体さんを惹きつけるためにさつき地面に建てた石仏のところに走りました。

「これでもう一度」

石仏を持ち上げ、さつき即身仏を見つけた穴へと走ります。団体さんは面白いように私について来てくれました。

「頼んだわよ、麗華」

「任せとき、蘭子」

麗華の操るパワーシヨベルは、護岸工事の現場に到着しました。

「オラオラ！」

麗華が叫びながらアームを動かしています。何とかなるようです。

「あらあら」

私は団体さんがすぐそばまで来ているのに気づき、また走りました。

「あの即身仏さんに助けてもらおうしかない」

私は、即身仏の力をこの石仏に分けてもらおうと思っていました。本来、あのお坊さんはあそこを守っている方の方ようですが、今は河岸の方が荒れてしまっています。お移りいただく方が確実なのですが、あのお身体ではそうもいきません。

「わわ」

ところが、即身仏様のところにも、また霊が集まり始めていました。どうした事でしょう？

「お嬢さん、おかしな事をしないでいただきたいですな」

乗如さんが森の奥から現れました。

「逃げたのかと思いました」

私は彼を睨みつけました。でも乗如さんはへらへら笑って、

「逃げる訳ないでしょう。貴女方を始末するのが、私の仕事ですから」

「えっ？」

何ですって？ 今の発言、聞き捨てなりません。

「この山と森は、このまま乱しておくのですよ。鎮めたりしないで下さい」

「どういう事です？」

私は後ろから霊が迫っているのも気にせず尋ねました。

「そうすれば、護岸工事はできない。そんな事されると、迷惑する人がいるんです」

「さっぱり意味がわからないわ」

私はちよつと切れて来ました。何を言っているのでしょうか、この人は？

「マーケットというものがあります。ここは定期的に霊が暴れてくれるようにしたいのですよ」

「はあ？」

いけません。このままこんな会話を続けると、いけない私が表に出てしまいそうです。

「祟りがある。そういう噂が広まれば、工事は進まない。そして、霊が出るとなれば、私達のビジネスになる。そういう事です」

「もしかして、あの工事現場の石仏は……」

私はムカツとして尋ねました。訊きたくありませんでしたが。

「お察しの通り、私が壊しました。そして、基礎に組み込ませたの

も、私です」

「何て事を！」

私はすでに限界でした。いけない私は、もうすぐそこまで来ています。

「何故、護岸工事をされると困るのですか？」

「そんな事、もうすぐ死ぬ貴方達に教えても仕方がないでしょう」

乗如さんは高笑いをして言いました。

ブチッ。何かが切れる音がしました。そう、私の堪忍袋の緒が切れたのです。

「どうしました？ 恐ろしくなりましたか？ でも、もう謝ったとしても許しませんよ」

乗如さんは私が震えているのを見て、怖くなったと思ったようです。とんでもない勘違いです。

「うるせえんだよ、生臭坊主。恐ろしくなった？ はあ？ 寝言は寝てから言いな」

「！？」

乗如さんは、麗華が来たと思ったのか、辺りを見回しました。ごめんなさい、今のは私です。

「どこ見てるんだよ、生臭坊主。この蘭子様には怖いものなんかないんだよ」

乗如さんは完全に仰天していました。ああ。いけない私、登場です。

触らぬ神に祟りなしその七

私西園寺蘭子はとうとう本性を現してしまいました。ごめんなさい、これが本当の私です。

と言いたいところですが、違います。私の修行が足りないのです。こんな下品な人格が表に出してしまうなんて。

「おい、生臭坊主。さっきまでの私とは訳が違っぞ。命を落としても、怨むなよ」

いけない私は、ニヤリとして乗如さんに言い放ちました。耳を塞ぎたくなる言葉ですが、どうする事もできません。

「ほう、二重人格ですか。それはそれは、お気の毒な。ならば、せめて私の手で、貴女を地獄にお送りして差し上げましょう、西園寺さん」

乗如さんの気が変わりました。何でしょう？ 僧侶の気ではありません。妖術師のような気です。

「これは私の偉大なる師匠から頂いた力です。こんな事はしたくなかったのですが、貴女がどうしても逆らおうとするからですよ。悪く思わないで下さいね」

乗如さんは、まだ私に勝つつもりのようです。あまりにも無知です。あの麗華が、何故私が怒ると素直に応じるのかを考えてくれれば、決してそんな強がりとは言えないはずですよ。

「バカなのか、あんたは？ この私を誰だと思っているのさ？ 西園寺蘭子様だよ」

私は大きく足を開いて、啖呵を切りました。死にたいくらい恥ずかしい私がいいます。

「随分と身の程知らずですね、貴女は。私は温厚な性格なので怒ったりしませんが、もしここに私の師匠がいいたら、貴女は一瞬にして灰にされていますよ」

乗如さんは肩を竦めて私を諭すように言いました。でもそれこそ無駄なのです。今の私は、例え亡くなった両親が説得に来ても言う事を聞かないくらいの性格なのですから。

「口だけは達者だな、生臭坊主」

いけない私は、ますます調子が出て来たようで、下品にも、中指を立てて乗如さんを挑発します。ああ、記憶から削除したい。でも覚えているんです、元の私に戻っても。

「ならば今すぐ楽にしてあげますよ。綺麗な貴女の口から、それ以上汚い言葉は聞きたくありませんからね」

乗如さんは遂にセクハラ発言までし、私に対して構えを取りました。何をする気でしょうか？彼の周囲に蜻蛉のように気が沸き上がり始めました。

「これは肉体にも霊体にも大きな痛手を与える攻撃です。一発で死なせてあげますから、安心して地獄に行って下さい」

乗如さんは凶悪犯のような顔をして、優しい口調で言いました。矛盾した状態です。

「かかって来な、生臭坊主」

私はニヤツとして言いました。挑発し過ぎです。乗如さんはクワツと目を見開き、

「終わりだ、小娘！」

と叫ぶと、風のような速さで私に突進して来ました。

「遅い！」

私の渾身の踵落としが、乗如さんの脳天に炸裂しました。

「ぶへっ！」

乗如さんはそのまま地面に顔からめり込み、気絶してしまいました。

「バカめ！この蘭子様にはさからうんざ、一億年早いわ！」

残酷にも、私は乗如さんを更に踏みつけて、大声で怒鳴りました。何て事でしょう。

「おう、蘭子、こっちは片付いたで……」

麗華が嬉しそうに走って来て、私の異変に気づいたらしく、固まっ
つてしまいました。

「そうか、麗華。よくやった。お前にしては上出来だったな」
私はガハハと大口を開けて笑いました。

「……」

麗華は啞然として何も言いません。すると、さっきまで私達の放
つ気で遠巻きに見ていた霊達が、また近づいて来ました。

「まだいるのか、雑魚共が。全部まとめ、面倒見てやるぞ！」
私はそう言い放つと、

「オンマカキヤラソワカ！」

と大黒天の真言を唱え、周辺にいた霊を残らず消し飛ばしてしま
いました。ああ。何て事を……。

「？」

力を存分に使ったせいで、いけない私はいなくなってくれました。
ようやくいつもの私に戻れたようです。

「蘭子？」

麗華が恐る恐る私に声をかけます。私はニッコリして、

「麗華、ありがとう」

「お、おう」

麗華は私が元に戻っているのを知り、ホッとしたようでした。

「そうか。それは大変な事やな」

私は乗如さんを縛り上げてから、麗華に事情を説明しました。

「神仏をビジネスにするような連中は、ロクなもんやない。ホンマ
に性根の腐った奴らやな」

麗華はムツとして言いました。でも、乗如さんも、彼の師匠も、
麗華にはそんな事を言われたくないと思います。

「ここはこれで万事解決でしょうけど、乗如さんの背後にいる人達
の事は、これから調べないとね」

「やめとき、蘭子。手エ出したらあかん。何も得せエへんで」

麗華は結び目を確認しながら言いました。

「得とか損とか言う問題ではないわよ」

祟りとか心霊現象を悪事に利用する人達を野放しにする事はできません。

「ウチは協力せんからな」

「そういう事を言うの」

私は只そう言ったただけだったのですが、麗華は何故かビクツとして、

「わ、わかったがな。そない怒らんでもええやん、蘭子」

と慌てたように言いました。私はキョトンとしてしまいました。

私達は、もう一度石仏を全部並べ、祭壇を作り、正式な方法でその場をお祓いしました。古代の霊達もそうですが、その霊達に殺された戦国時代の人達、そして今回事故で亡くなった人達もまとめて、浄霊しました。これでもうここで祟りとか霊現象は起こらないはずですよ。

「知らないという事は、本当に怖い事ね。自害沢の由来になった事件も、この土地に昔の出来事が正確に伝えられていたら起こらなかつた事だし、工事現場の事故も、乗如さん達の悪い考えもあつたかも知れないけど、昔の話が伝えられていたら、やっぱり防げたのよね」

私は祭壇を片づけながら、麗華に言いました。

「そうやな。触らぬ神に祟りなし。それが一番なんや。ウチかて、何も好き好んで、霊を吹き飛ばしている訳やないからな」

「……」

私はそれには同意できません。麗華は趣味で霊を吹き飛ばしている気がします。

「な、何や、蘭子？ 何か言いたそうやな？」

「別にイ」

私は道具をまとめると、車に向かって歩き出しました。

「ああ、そつや。この仕事の報酬、いくらや？」

麗華が私を追いかけて来て言いました。

「五千円くらいかな」

「な、何やて！？ 嘘やろ、蘭子？ ウチ、氣イ失いそうになつたで」

麗華が慌てふためく様子を見て、私はクスクス笑いました。

そして、別の場所の事。

「西園寺蘭子と八木麗華。邪魔な存在のようだな」

暗がりです話す二人の男。

「はい、座主様」

知らないところで、蘭子と麗華に対する陰謀が渦巻き始めようとしていた。

危ない女子高生

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、浄霊、お祓い、占い、骨董品の鑑定も承っています。

今日は珍しく仕事の依頼がなく、事務所も早めに閉め、久しぶりに飲みに出かけようかと思っています。

それと、こここのところ、連日のように現れるある女性から逃げたというのもありました。

誰なのかは敢えて公表しません。

私はドアの鍵を閉め、悪霊退散のお札を貼ると、意気揚々と街へと向かいました。

ところがです。私は本当に運が悪いのかも知れません。

事務所のあるビルの前は片側四車線の大通りで、ビルの前に歩道橋があります。

車での移動がメインの私は、歩道橋を渡るといふ事がほとんどないのですが、何故か気になってしまい、そちらに目を向けたのです。

「ああ！」

歩道橋の欄干の上に、女子高生が立っています。自殺でもするのでしょうか？

そばには生憎あいにく誰もいないため、彼女はそのままでは確実に車道に落ちます。

うまく着地できたとしても、この時間帯の通行量は、蟻でも助からないくらいの壮絶さです。

「間に合わない!」

私はふらついているその子を助けるには普通に走ったのではダメだと思い、

「オンベイシラマンダヤソワカ!」

と毘沙門天の真言を唱え、高速移動しました。

「危ない!」

あと一瞬遅かったら、彼女は確実に彼岸あぢりに行っていました。私は落ちかけた彼女の腕をしっかりと掴み、引き上げました。

「どつして……」

そう尋ねようして、私はハッとしました。その子は、眠っていたのです。

「何?」

そして同時に、その子から悪霊の気配を感じました。

「オンマリシエイソワカ」

私は摩利支天まろしてんの真言を唱え、悪霊を遠ざけました。

「グオオオオ！」

悪霊が女子高生から離れ、逃げて行きました。

「大丈夫？」

その子の頬を軽く叩き、気を送ります。すると、ようやく彼女は目を開けました。

「あれ、どこどこ？」

私は彼女を連れ、事務所に戻りました。

彼女の名は、村上春菜。どこかで聞いたことがあるようなないよ
うな、微妙な名前です。

時々眠くなり、気がつくとは別の場所にいる事があるそうです。

これは何かあります。私は彼女の事を探ってみました。

すると、もの凄い憎悪を感じました。

何でしょう？ 私は春菜ちゃんに、

「ねえ、誰かに怨まれていない？」

「いえ、別に。怨まれるような事はありません」

春菜ちゃんは嘘を吐いていません。私達霊能者は、普通の人達が嘘を吐くとわかるのです。

「何かしら？ 貴女を酷く怨んでいる人がいるのよ。その人のせいね、時々眠くなるのは」

「ええ？」

春菜ちゃんは今時の女子高生ではありません。制服の襟章から都内のお嬢様学校だとわかりました。

その学校関係ではなさそうです。

春菜ちゃん自身が知らない人物。そこまではわかりました。

「あ！」

私は春菜ちゃんの気を探っていて、ある事に気づきました。

「貴女もしかして、村上法務大臣のお嬢さん？」

「え？ 何でそんな事がわかったんですか？ 父と知り合いですか？」

春菜ちゃんはかなり驚いています。

「私は霊能者なの。だから貴女を助けられたし、貴女のお父さんの

事もわかったのよ」

「そうなんですか」

何故か知りませんが、この言葉は知り合いの小学生が一番嫌いな言葉らしいです。

「お父さんにお会いできないかしら？」

「難しいです。娘の私も、滅多に会えないほど忙しいですから」

「そう」

それはそうでしょう。現職の閣僚が、娘との時間を大切にしているは大問題になります。

ましてや、私のような怪しい女になど会ってくれるはずもないです。

でも、あの憎悪の原因は、確実に春菜ちゃんのお父さんにあるのです。

それ以上は、私には探りようがありません。

せめて会えないまでも、近くに行く事ができれば……。

その時でした。ドアフォンがなりました。

「あ」

私は、この時間に来るのは一人しかいないと思いながら、ドアを開けました。

「よお、蘭子。今日も遊びに行こか」

親友の八木麗華が、全く遠慮なく、ズカズカと入って来ました。

「お、お客さんか？」

麗華は春菜ちゃんに気づいて言いました。春菜ちゃんは、麗華のファッションセンスに唾然としています。

「あん？　もしかして、あんた、村上天臣の娘ちゃうか？」

「え？　麗華、春菜ちゃんを知ってるの？」

私はビツクリしました。

麗華の話だと、村上天臣は、以前から何者かに呪詛をかけられており、何かあるたびに麗華を呼んでいたそうです。だから最近ずっと東京にいて、ここに現れたのです。

私からしてみれば、その呪詛より、麗華の方が厄介だと思いますが。

「なるほどな。で、大臣にかけた呪いが、この麗華様の力で全部撥ね退けられるんで、娘を狙ったんやな」

麗華はガハハと笑って言いました。偶然とは言え、麗華に救われたようです。

「安心せい、蘭子。この嬢ちゃんも、ウチがまとめて面倒見たる」

「そ、そう」

私は苦笑いしました。

「嬢ちゃん、この麗華さんがあんたを守る。せやから、もう何も心配いらんで」

「は、はい」

春菜ちゃんは心なしか怯えているようです。私に救いを求めるような目を向けています。

「大丈夫よ、春菜ちゃん。このお姉さんは、見かけはアレだけど、実力は私が太鼓判を押すわ」

「あのな、蘭子、見かけはアレで、どっという意味やねん？」

麗華が私に噛みつきます。

「まあまあ」

そんな麗華を宥め、三人で事務所を出ました。

「ほなら、今日のお楽しみは明日に持ち越しや。じゃあな、蘭子」

「ええ」

春菜ちゃんはニコツとして、

「ありがとうございます、お姉さん」

「どうぞ致しまして。気をつけてね」

「はい」

春菜ちゃんはズンズン歩いて行く麗華を追いかけてました。

「待って、おばさん」

「何でおばさんやねん！　ウチは蘭子とタメやで！」

「ええ？　そうなんですか？」

春菜ちゃんは本当にビックリしていました。

その日の夜遅く、麗華からメールが届きました。

万事解決し、呪詛をかけていた術者をコテンパンにやっつけたそうです。

良かった。

でも心配。春菜ちゃん、麗華に感化されて、あんな風にならない

かしら？

という訳で、今は一人で寂しくバーのカウンターの間で飲んでます。

誰かいい人いないかなあ。

人恋しい蘭子でした。

八木麗華危機一髪（前編）

ウチは八木麗華。大阪では一番の霊能者や。

あん？ 何で日本やのうて大阪なんやて？ 細かい事、気にすんなや。

東京に、ウチのマブダチの西園寺蘭子がおるからやないか。

蘭子には何度か命を助けられとるから、あの子にウチは敬意を表してるんや。

だから、大阪で一番て言う^ゆとくねん。

ウチ、慎ましいやろ？ ガハハ。

え？ G県の小学生に語り口が似とる？

アホな事言いないな。何でウチがあんなアンポンタンのガキと一緒ににされなあかんねん？

しばいたるか、ボケ！

おっと。つい、言葉が下品になってしもった。

偉いすんまへん。堪忍やでエ。

あ、すまん、蘭子。前説が長過ぎたな。

ほな、後は頼むで。さいなら。

もう。麗華は騒ぐだけ騒いで、何も後片付けしないのですから、本当に困ります。

ああ。私は西園寺蘭子です。除霊、浄霊、お祓い、骨董品の鑑定など、お受けしております。

先日、法務大臣のお嬢さんを助けて、その縁から私も大臣の警護を依頼されました。

どうやら、麗華が私のマネージャーだと言ったようです。

可哀相な村上法務大臣。一体どれほどの「ファイトマネー」を要求されたのでしょうか。

そんな訳で、私と麗華は法務省の大臣室に呼び出されました。

途中で何度も身体検査をされましたが、麗華が怒り出し、一番最後はパスとなりました。

「ウチはここに何度来たら、顔パスになるねん？」

麗華のイライラもわかりますが、彼女の服装では、何度来ても要注意人物でしょう。

「不愉快な思いをさせて申し訳なかったね」

大臣室に入ると、大臣の席に座った紳士然とした男性が言いました。どうやら村上大臣その人のようです。

テレビで見ると、ずっとイケメンですね。麗華はサービス価格で引き受けた事でしょう。

「まだ続いてるんか、大臣？」

麗華はソファにふんぞり返って尋ねました。私はその隣にチヨコんと座りました。

「いや、違うようだ。君に先日もらったお札が破られた。この前より、上の奴らしい」

大臣は、ボロボロになったお札を机の上に出しました。

「あれを破った？ そらまた、強烈やな」

麗華は信じられないという顔で私を見ました。

確かに麗華が大臣に渡したお札は、そんじょそこらの悪霊や術者には破れない代物です。

「あー！」

私はその時、以前感じた事のある気を感じました。

「麗華、これって……」

麗華も気づいたようです。

「ああ。こいつはあれや。G県でとつちめた坊主の気イと似とる。多分、同じ術者のもんやな」

G県で出会った乗如というお坊さんは、心霊現象を商売にしてお金儲けをしている一団のメンバーらしく、いろいろと調べたのですが、何もわかっていない状態です。

「知っているのかね？」

大臣が尋ねます。麗華は大臣を見て、

「知ってるも何も、一度そいつらの仲間とやりおうとるからな。これは、遠回しの罫やな、蘭子？」

私は麗華の推理に全面的に賛成ではありませんが、

「そうかも知れないわね」

と同意しておきました。そうしないと、麗華のご機嫌が悪くなるからです。

「大臣、安心しとってええで。ウチと蘭子が組んだら、最強や。な、蘭子？」

麗華の言葉に、私は苦笑いするしかありませんでした。

「了解した」

大臣は立ち上がって、

「よろしくお願いしますね、西園寺さん」

と微笑んで言ってくれました。

何でしょう？ 私は今までに感じた事のない気持ちになりました。顔が紅潮しているのがわかります。

「何でや？ 何で蘭子だけにそないな事ゆうねん、大臣？ 鼻屑はあかんで」

人一倍そういう事に敏感な麗華が騒ぎます。大臣は頭を掻いて、

「いや、そんなつもりはなかったのだがね」

「ホンマか？」

それでも疑う麗華です。もう。別の意味で顔が赤くなって来ました。

そして。ある場所にて。

「そうか。やはり、出て来たか？」

薄暗がりです話す二人の男。

「はい、座主様」

どうやら、以前乗如が「お師匠様」と呼んでいた男のようだ。

「嗅ぎつけるのは犬並みだな。我が弟子乗如を可愛がってくれた礼だけはさせてもらおうか」
座主様と呼ばれた男は、微かに笑った。

八木麗華危機一髪（中編）

私は西園寺蘭子。霊能者です。親友の八木麗華の仲介で、村上法務大臣の警護の仕事に就きました。

何やら、先日「お世話」になった団体さんが黒幕のようで、かなりリスクな予感です。

「取り敢えず、大臣には人形ひとがた渡しとくわ。これが身代わりになるから、しばらくは心配ないで」

麗華は呪文が書かれた人形を村上大臣に渡しました。

「わかりました。これをどうすればいいのですか？」

大臣は何故か私に尋ねます。困りますよ、その視線。麗華がまたムツとしています。

「何でウチに訊かんねん、大臣？」

「あ、いや、そういう訳ではないのだが……」

大臣はどうやら麗華が苦手らしいです。そんなところへ現れた私は、まさしく救いの神なのかも知れません。

（そういう事なのかな？）

何か寂しい気持ちになる私。ああ、どうしてしまったの？ 自分でも不思議です。

「まあ、ええ。それは、肌に直接触れるように持つといてくれ。それから、今夜は家にも宿舎にも帰ったらあかん。蘭子の事務所に行ってもらう」

「わかりました」

また私を見て答える大臣。麗華が今度は私を睨んでいるので、どうかその視線はやめて下さい。

「ウチらは先に行つとる。氣をつけてな、大臣」

麗華はムスツとしたままで言います。

「行こか」

麗華は私を睨んだまま、大臣室を出ました。私は大臣に会釈をして、麗華に続きます。

「蘭子」

麗華は前を見たままで話しかけて来ます。

「何？」

私はドキドキして答えました。

「あなた、大臣に惚れたやろ？」

「え？」

ズバリ核心を突かれて、私は酷く狼狽しました。

「あなたが、あないな乙女顔になったん、初めて見たで」

「……」

顔真つ赤状態です。自分でもそんなつもりはないと否定していたはずなのですが、付き合いが長く、恋愛にかけては大先輩の麗華には、丸わかりな態度だったようです。

「応援したいとこやけど、やめとき」

「そんなつもりはないわよ」

私は火照る顔を仰ぎながら言い返しました。でも麗華は、

「嘘言わんでええよ、蘭子。ホンマ、こんな時やなかつたら、ガンガン攻めたれって言うとこや。今は、タイミングが悪い」

「だからね……」

私はそれでも否定しようとはしました。

「大臣は、奥さんに先立たれて、もう十年になる。そろそろ、寂しい頃や」

「麗華、あのね……」

こうなってしまうと、事件が解決するのが怖いです。麗華はどんな手を使っても、私と村上大臣をくっつけようとするでしょうから。

ああ。憂鬱になって来ました。

私達は、私の運転する車で、私の事務所があるビルに向かいます。

た。

「!」

しばらく走ってから、それは訪れました。

「何や、あれ?」

麗華が呟きました。車の斜め上に、人が浮いています。ボンヤリしていますが、どうやら僧侶のようです。ちょっと気味が悪いです。

「霊、ではないようね」

私もその妙な現象を見て言いました。

「蘭子は運転に集中せい。あれは、ウチが始末する」

麗華がお札を胸の間から出して言いました。相変わらず、変なところにお札を入れています。そのうち、バチが当たるのではないのでしょうか?

「八木麗華。知っているぞ、私は」

その僧侶が喋り出しました。私は思わず麗華と顔を見合わせてしまいました。

「何や、お前? ウチの事、知つとるんか?」

麗華はキツとして僧侶に言い返します。そして、サンルーフを開くと、立ち上がりました。

「危ないわよ、麗華」

「このままにしとく方が危ない」

麗華は僧侶を睨んだままで言いました。

「お前に私を始末する事などでできぬ。お前は、本当はとても弱い人間だからな」

「何やて!?!」

麗華はカツとなったようです。私には敵の真意がわからず、何となく嫌な感じになっています。

「ほう。随分と『弱い』という言葉に敏感なようだな」

「五月蠅いわい!」

麗華はすっかり敵のペースに吞まれています。このままやり合っていたら、危険です。

「いけない、麗華！ 相手の誘いに乗り過ぎよ！」

「黙つとれ、蘭子！ 弱い言われてそのまま引き下がれるかい！」

麗華はすっかり逆上してしまっています。彼女のNGワードは、「弱い」なのです。普通の人以上にその言葉に反応してしまうのです。

（でも何故そんな事がわかるの？）

もしかして、敵はそういう能力の持ち主？ だとすると、ここは逃げないといけません。

「麗華、ごめん！」

私はアクセルを強く踏み込み、急加速しました。

「わっ！」

麗華はそのせいでバランスを失い、座席に倒れ込みます。

「蘭子、あんたな！」

怒る麗華に構わず、私は速度を上げました。

「いくら逃げてでも無駄だぞ。私から逃れる術すべはない」
斜め上の僧侶はずっとそのままです。

「ならば！」

私は摩利支天の真言を唱えました。

「オンマリシエイソワカ！」

しかし何も起こりません。

「愚か者が。私は悪霊ではない。聖なる存在なのだ。お前らの使うどのような術も、この私には通用しない」

私はギクツとして、僧侶を見ました。一体何者？

「うわああああっ！」

麗華の様子が変です。どうしたのでしょうか？

「麗華！」

私はすぐに近くの路肩に車を停めました。

「八木麗華は、すでに私の術中にある。死んだも同然だ」

僧侶の言葉に、私は麗華を見ました。彼女はガクガクと震え、頭を抱えてしんくわ踞すくっています。

「あああああつ！」

「何をしたの、麗華に!？」

私は僧侶を睨みつけました。

「大した事ではない。その女のトラウマを呼び起こしただけの事。今、その女は、昔の自分に戻り、悪霊に追いかけられている」

「何ですって？」

やはり、心を操る術。しかも、そういう呪術に対して耐性を持っているはずの麗華を易々と陥れてしまう。これは危険です。

「麗華！」

私は麗華を車から引きずり出し、抱えるようにして走りました。

「逃げてても無駄だぞ」

僧侶は言いました。でも何故か追いかけて来ません。私の読みは当たっていました。あの僧侶は、車のどこかに貼られたお札を介して現れているようです。でも、心を操ったのは、別の場所からです。確かに逃げてても無駄かも知れません。

(でも、私の事務所に着ければ!)

私は絶望的な思いで、走りました。

「麗華……」

怯えて震えている麗華。彼女は今は力を使いこなせなかった頃に戻ってしまっています。そして、あの僧侶。一体どうしたらいいのか、私は必死で考えました。でもわかりません。只逃げるだけ。私達は本当に追いつめられていました。

八木麗華危機一髪（後編）

私は西園寺蘭子。霊能者です。親友の八木麗華と共に村上法務大臣の警護の仕事を引き受けましたが、その帰り道、とんでもない「お客様」に遭遇し、麗華は心を操られてしまいました。

私は麗華を連れ、歩いて事務所まで向かっている最中です。

「麗華、しっかりして」

どんな言葉も今の麗華には届きません。彼女はトラウマ地獄に落ちてしまったのです。

「わあああ！」

まるで子供のように怯え、騒ぐ麗華。このままの方が世の中のためかも、などと思ってしまうそうです。

ビルが見えて来ました。もう一息です。私の事務所に入れば、あの「お客様」も攻撃できないはず。

「見つけた」

え？ 何、今の声は？ ふと見上げると、先日村上大臣のお嬢さんである春菜ちゃんを助けた歩道橋に「お客様」がいました。

（もしかして、私の事務所も知られているの？）

嫌な予感がします。こんなところで待ち伏せしているという事は、事務所も安全ではないかも知れません。

困りました。身動きが取れない状態です。

「お前も、我が僕としてやろう」

歩道橋の怪人が言いました。

「くっ！」

私はまた走り出しました。

「無駄だと言っておろう」

声が聞こえます。それでも走るしかありません。麗華はすでに限界です。このままの状態が続けば、廃人になってしまうでしょう。

（何か反撃する方法はないの？）

私は走りながら考えました。

(そうだ!)

心を操るには、その心と繋がる必要があるはずです。ならば、あの僧侶は、麗華の心に繋がっているはず。私はそれに賭けてみる事にしました。

「麗華、我慢してね!」

私は麗華をその場に座らせました。この際、いろいろと見えてしまっても仕方ありません。そばを歩きかうサラリーマンのおじ様達が、驚愕の眼差しを麗華に向けています。

「インダラソワカ!」

私は麗華の心に向かって帝釈天の真言を放ちました。

「うわあああ!」

案の定、麗華は悶絶して地面をのた打ち回りました。ああ、あまり覗かないで、おじ様達。見世物ではないのですから。

「ぐおおお!」

効果があったようです。僧侶も歩道橋の上で苦しんでいます。

「おのれ!」

そう捨て台詞を吐き、僧侶は麗華の心から離れました。作戦成功です。

「麗華、しっかりして!」

私は麗華を抱き起こし、野次馬で溢れ返った歩道を脱出しました。そして、逆襲の方法も思いつきました。

私の親友をここまで苦しめたお礼は、三倍返してさせてもらいます。

「く……」

闇の中で、その僧は齒軋りした。

「おのれ、西園寺蘭子め。このままではすまさぬ」

僧はそばに控えていた男に、

「すぐにあの女のところに行き、二人共始末しろ。手段は問わぬ」

「はい、座主様」

男は答え、フツと消えた。

私達はやっとの思いで事務所に辿り着きました。

「おおきに、蘭子」

何とか精神崩壊を免れた麗華が、ソファに座るなり言いました。

私は微笑んで、

「どう致しまして。困った時はお互い様でしょ？」

麗華は真剣な顔で、

「今度はこつちから仕掛けたる。あのクソ坊主、只ではすまさん」

「お返しの方法なら、私が思いついたわ」

その言葉を聞いて、麗華は目を輝かしました。

「どんな方法や？ 坊主がチビるくらいの仕返しか？」

下品な麗華は嫌いです。

「そうなるかどうかは知らないけど、二度と私達に関わる事がないくらいは、後悔させてあげるわ」

「そうか。それはええな。思いつきり、ビビらせんと、ああいう手

合いは懲りんのか」

麗華は嬉しそうです。でも、本当に彼女が無事で良かった。無二の親友だし、生涯の友ですから。

その時でした。

ドン！ 事務所の入口のドアに何かがぶつかる音がしました。

「何や？」

麗華が身構えます。私も辺りの気配を探ります。

「霊ではない。さつきみたいないな力でもない」

「単純な肉体労働か？」

「みたいね」

力任せの人が、ドアを蹴破ろうとしているようです。

「そのドア、借り物なんだから、壊されたら大家さんに追い出されちゃうわ」

私は肩を竦めて、ドアに近づきました。

「はい、どうぞ」

私がいきなりドアを開けたので、もう一度蹴飛ばそうとしていた男の人は、バランスを崩して事務所に転がり込んで来ました。

「あの坊主の手下か？」

麗華が睨みつけます。男は立ち上がりました。鎖帷子を着た、忍者のような姿です。

「座主様のお仕事の邪魔をする者は、悉く滅するが私の仕事だ」

顔は頭巾で隠していて、鋭い目だけが見えています。

「阿呆。どっちが邪魔しとんねん？ ザスやかマスやか知らんけど、大概にせいよ」

麗華が立ち上がりました。私もドアを閉めて、男の背後を取ります。

「死んでもらう！」

男は懐から小刀を取り出し、麗華に斬りつけました。

「誰が殺されるか！」

麗華はバツと飛び退き、

「インダラヤソワカ！」

と人の事務所でいきなり帝釈天真言を唱えました。私はビツクリして、

「麗華、ちよつと！」

稲妻が男を襲います。一瞬でケリが着いた、と思いました。

「効かぬ」

でも何故かその忍者さんはケロリとしていました。

「な、何やて？」

麗華は啞然としてしまいました。私も声が出ません。どういふ事なのでしょつ？

「私には真言は一切効かぬ。そう鍛えられておる」

「何ですつて？」

真言は、鍛えて耐えられるものではありません。恐らくこの忍者

さんは、神経系統を弄られているのです。とんでもない事です。

「ほなら、肉弾戦じゃ！」

考えるより先に身体動くタイプの麗華は、忍者さんに後ろ回し蹴りを放ちました。

「無駄だ」

忍者さんは私が睨んだ通り、痛みや苦しみ、そして恐怖と言った感情を何かの呪文で消されているようです。麗華の回し蹴りが顔面にヒットし、顔中から血が出ているのに、ニヤニヤしています。気持ち悪いです。

「私は身体を極限まで鍛えたので、そのような攻撃、何ともないわ。そう思わされているだけですよ、とりたいのですが、この人はそんな事を信じないでしょう。身も心も、あの謎の僧侶に支配されているようです。」

「阿呆、ダラダラ血イ流してるモンが言うセリフか！」

麗華が更に攻撃しようとした時、忍者さんはバツタリと倒れました。

「言わんこつちやないな。アホやな、このおっさん」

「麗華、離れて！」

私は忍者さんの異様な雰囲気を感じ、怒鳴りました。

「何や？」

麗華も感じたのか、後ろに飛びました。すると倒れた男はムックリと立ち上がり、

「我が術で操りし者をここまでいたぶるとはさすがだ。しかし、部屋の中に入らせたは、失策よ」

と喋り始めました。どうやら親玉が忍者さんの身体を使って話しているようです。

「あんたが親玉か？」

麗華がまた不用意に近づきます。

「待って、麗華。この人は私が相手する」

「何やて？」

麗華がキツとして私を見ますが、私も麗華を睨み返します。すると麗華は、

「わ、わかった」

と引き下がってくれました。

「貴方は人の心を操るようね。でも、私は絶対に操れないわよ」

「何？」

忍者が私の方を見ました。私はニツとして、

「できるものなら、やってごらんなさい。貴方はそんな事ができるほど強くないのだと証明してあげるから」

「おのれ、愚弄しおつて！　そこまで我が術にかかりたいなら、望み通りにしてやる！」

忍者を操っている僧侶が、私に対して意識を集中し始めました。

「……」

確かに凄い力です。しつかりと身体の気を巡らせていなければ、一瞬で取り込まれてしまいそうです。

「ハハハ、口ほどにもない。もうすぐお前は我が僕となる」

僧侶は高笑いして言いました。

「それはどうかしらね」

私は私の心に取り憑いて来ている僧侶の意識を逆に辿り、彼の本体に辿り着きました。

「ぬおっ！」

彼は意識の大半を私に振り向けています。だから、彼の本体は無防備同然でした。

「思った通りね。観念しなさい。オンマカキヤラヤソワカ！」

私は大黒天の真言をお見舞いしました。

「ぐおおおおおっ！」

僧侶の本体はその衝撃で気を失い、倒れました。

「バカめ、私の身体が留守なら、お前の身体も留守であろう」

僧侶は勝ち誇ったように叫び、私の身体の中に自分の意識を飛ばしました。

「何？」

でも、私の身体は留守ではありませんでした。

「誰だ、お前は？」

彼は私の無意識層で別の私に出会ったのです。そう、あの「いけない私」です。

「誰？ 私は私だよ。何か文句あるのか、この生臭坊主が！」

「いけない私」は、仁王立ちで言い返しました。僧侶はその「私」に啞然としてしまいました。

僧侶がどうなってしまったのかは、ここでは言えません。とにかく、事件は解決しました。

「蘭子、ウチ、絶対あんたを裏切らんから、裏蘭子には会わせんといてな」

麗華が真面目な顔でそう言った時、私は本当に落ち込みました。

その後、住居侵入罪で警察に連行される忍者を見送ってから、私達は大臣をお迎えしました。

「無事に片付いたで、大臣」

「そのようだね」

大臣は今度は麗華にお礼を言いました。ホッとします。

「よし、ほなら、後は若いもんにお任せしてつちゆう事で、ウチは退散します」

ニヤニヤしながら、麗華はサツサと事務所を出て行ってしまいました。

「あ、麗華！」

私は顔を火照らせて、彼女を呼び止めましたが、無駄でした。

「あ、その、西園寺さん」

「は、はい」

私はドキツとして大臣を見ました。ああ、優しく微笑んでいます。ダメです、おかしな気持ちになります。

「もし宜しかったら、これからお食事でも如何ですか？」

「は、はい」

まるで中学生のようにドキドキしてしまっている私。

「娘が、西園寺さんに大変お世話になったとかで」

「あ、いえ、そんな事は……」

「娘も呼んでいますので、是非」

「ああ、はい……」

そういう事でしたか。何か残念。でもホッとしている私もいます。

でも、いい人がほしい西園寺蘭子でした。

蘭子、恨みを買っ?。(前書き)

箕輪まどかの霊感推理の「再びあの人が登場したのよ!」の前日譚
です。

ややこしくすみません。

蘭子、恨みを買う？

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、浄霊、お祓い、骨董品の鑑定、占いなどをお受けしています。

先日、村上法務大臣の護衛を引き受け、ちよつとだけ大臣に心を惹かれました。

娘さんも同席でしたが、お食事に誘われ、ドキドキしながら過ごしました。

「また会いたいな、蘭子さんに」

大臣の愛娘である春菜ちゃんにそう言われました。

「でも、あの関西の人は呼ばないでね」

私は苦笑いするしかありませんでした。可哀相な麗華。

どうして皆さんに敬遠されるのか、本人に考えてもらう必要があるかも知れません。

そんな事があつてから数日。事務所で書類を整理していた時です。

村上大臣はお仕事が忙しくなり、全く家に帰って来ないと春菜ちゃんからメールがありました。

「あら？」

私はそのメールを開封した時、妙な気を感じました。

「何だろう？」

私は第六感を研ぎ澄ませて、その正体を探りました。

「キャッ！」

突然携帯から火花が走り、私は思わず手を放しました。

当然の事ながら、携帯は重力に引かれて地面に落下し、床に当たって砕けてしまいました。

「あーあ」

それほど高かった訳ではありませんが、機械に疎い私は、やっと慣れたその機種に愛着があったのです。

ちりとりで拾い集めて、レジ袋に入れます。

とても修理できない状態に見えますが、万が一という事も考えられるので、細かい破片に至るまで拾いました。

「？」

さっき感じた気は、完全に消えていました。火花と関係があるようです。

となると、発信元の春菜ちゃんも危ないかも知れません。

私はレジ袋を携え、事務所を出ました。

春菜ちゃんの高校の場所はわかりますので、そこへと向かいます。

「え?」

車のエンジンがかかりません。まずいと思い、

「オンマリシエイソワカ!」

と摩利支天まりしてんの真言を唱えました。

「ヒーアー!」

悪霊が叫び、消滅しました。

「どづいつ事?」

私は車を降り、バス停に向かいました。

バスなんて、高校以来乗った事がありません。

「ああ!」

今度はバスが歩道に乗り上げて、バス停に突っ込んで来ました。

「危ない!」

私は逃げ遅れたお婆さんを連れ、その場から逃げました。

バスはバス停の屋根と支柱に激突し、止まりました。幸い、乗客はおらず、運転手さんも無事の様子です。

「何、これ？」

私は交通機関を使うと危ないと思い、徒歩で春菜ちゃんの高校に向かう事にしました。

すると今度は、上空を飛んでいた鳥が、私に向かって急降下して来ました。

「オンマリシエイソワカ！」

再び摩利支天まろしてんの真言で鳥達に取り憑いている悪霊を浄化します。

（本当にどういう事？）

先日倒した敵が復讐して来たのでしょうか？

そんな根性ないと思うのですが。

違うようです。感じた気の質が別の物です。

憎悪。もの凄い強さです。

そんな恨みを置く覚えはないのですけど。

敵の標的は私のおようですので、春菜ちゃんは大丈夫です。

私は敵との対決に集中する事にしました。

「こつちね」

私は敵のいる方へと走りました。それほど離れていないようです。

「あ」

私は思わず立ち止まってしまいました。

そこにはあの箕輪まどかちゃんのお兄さんである慶一郎さんがいたのです。

慶一郎さんは誰かを待っているらしく、時々腕時計を見ながら、周囲を見渡しています。

私は思わず隠れてしまいました。あの人、苦手なんです。

「は」

また敵が動きました。

「く」

いきなり背後から、悪霊に取り憑かれた野良犬が襲いかかって来ました。

「オンマリシエイソワカ！」

悪霊を消し飛ばします。すると、その声に気づいた慶一郎さんがこちらに近づいて来ました。

「蘭子さん！」

嬉しそうに手を振りながら走って来ます。

「……」

私は作り笑いをして手を振り返しました。知らないフリもできませんから。

「奇遇ですね」

慶一郎さんがそう言いかけた時、

「慶君」

と声がし、何か黒い物が動きました。

何？ いえ、誰、かな？

最初は人だと思わなかったのですが、それは間違いなく人でした。

「ひー！」

慶一郎さんは、何故か顔を引きつらせてます。

「行きましょ、慶君」

黒いものの正体は、女性でした。

漆黒という表現が一番合っている長い髪。顔の半分を覆い隠すそれは、生き物のようです。

そして、闇と例えるのがいいと思われる色のワンピース。スカートのは、足首まであります。

靴も真っ黒で、先が尖っています。

全体を例えると、「魔女」。

慶一郎さんは何度も振り返りながら、その女性と歩き去ってしまいました。

「もしかして、今のが？」

敵？ でもどうして？

「ああ！」

とそこに聞き覚えのある声が。振り返ると、更に見覚えのある顔が。

「麗華」

「蘭子！」

麗華はどつちやら慶一郎さんを見かけてここに来たようでした。

「誰や、あの女？ 化けもんみたいな奴やな」

麗華は腕組みして呟きました。

「ええ、そうね」

私は、あの「魔女」さんを何となく知っているような気がしました。

でもどうして怨まれているのかはわかりませんでした。

蘭子は恋愛初心者

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、浄霊、お祓い、占い、骨董品の鑑定などをお受けしています。

最近何故か人恋しい私は、毎日のように飲みに出かけています。

親友の八木麗華は相変わらず派手な交友関係で、今日は東京、明日は福岡と飛び回っているようです。

そんな麗華を羨ましく思っている私は、恋愛したい症候群なのでしょうか？

以前、麗華にそう言われた事があります。

「ふう」

また一人で、行きつけのホテルのバーのカウンターの片隅に陣取っています。

自分を客観的に見てしまうと、余計落ち込みそうです。

決して、先日心を惹かれた村上法務大臣の事を引き摺っている訳ではないです。

大臣は、私を娘さんの友人として接してくれていただけで、恋愛感情は全くなかったのですから。

それがわかってしまう自分のこの「力」が悲しいです。

「お一人ですか？」

そんな私に声をかけてくれる奇特な人がいました。

「はい？」

声の主を見ると、イケメンです。麗華なら襲いかかってしまうでしょう。

その人はニコツとして、私の隣に座ります。何、この人？

私は基本的に人見知りなので、いきなり接近して来る人は苦手です。

「その世界では、音に聞こえた霊能者である西園寺蘭子さんともあろうお方が、バーの隅っこで一人でグラスを傾けているなんて、とっても寂しい光景ですよ」

私はギクツとしてその人を良く見ました。この波動は？

「失礼。僕は霊能者の神崎新かみやまあらたと言います」

「ご同業の方、ですか？」

それでも警戒心は解けません。私の事をどこで知ったのでしょうか？

「はい。貴女の事は、以前から存じ上げています。実は、八木麗華とは幼馴染でして」

「え？」

それは本当に驚愕の事実です。麗華と幼馴染？

「とは言っても、もう十年以上会っていないんですよ。彼女は僕の事なんて忘れていても知れませんが」

「そうなんですか」

私はずっと神崎さんを見ていた事に気づき、視線を逸らしました。顔が火照るのがわかります。

「それにしても、不躰ぶじつげでしたね。申し訳ありません」

神崎さんは私の動揺を感じたのか、詫びて来ました。

「いえ、そんな」

私は視線を合わせずに否定しました。

「お詫びの印に、一杯奢らせて下さい」

「はい？」

私は思わず神崎さんを見てしまいました。

ああ。何て事でしょう？ どんどん彼の事を好きになって行く自分がいいます。

「はい、どつぞ」

差し出されたグラスをボンヤリとしたまま受け取り、私は神崎さんに微笑みました。

「貴女の瞳に乾杯」

神崎さんも自分のグラスを持ちました。

「素敵な出会いに乾杯」

そんな台詞は断じて言わないと思っていたのに、あっさり口にしてしまいました。

どうしてしまったのでしょうか？ 私が私でなくなりそうです。

しばらくカウンターで語り合った私は、神崎さんのエスコートで店を出ました。

そして気づくと、エレベーターに乗っていました。

（あら？）

何かを考えようとするのですが、まるで霧がかかったかのように思考が停止してしまいます。

「さ、降りましょう」

神崎さんに言われるまま、私は廊下を歩きます。

「どいぞ」

ドアを開き、私を部屋に招き入れる神崎さん。いけない大人の時間が始まりそうなのはわかります。

でも、何故か抵抗できません。

「では、本日のメインイベントに入りましょうか、蘭子さん」

神崎さんの目が野獣のようにギラつきました。それでも私は逃げ出す事ができません。

「あ

ベッドに押し倒されます。神崎さんの顔が迫って来ます。

後もう少して唇を奪われると思った時です。

「こらあ、エロ神崎イ！ 何しとんねん！」

麗華の叫び声が聞こえました。

「げ、れ、麗華！」

神崎さんは真っ青になり、私から離れました。私には、まだ状況が飲み込めないままです。

「ようもウチの親友を手にかけてようとしたな！ 許さへんで！」

「わーっ！」

「インダラヤソワカ！」

麗華の怒りの真言が炸裂し、神崎さんは雷撃を受けて失神しました。

「麗華？」

私は徐々に頭の中がすつきりして来るのを感じ、起き上がりました。

「蘭子、大丈夫か？ 危ないとこやったな」

麗華は私の頭を撫で、頬を擦ってくれました。

「え？」

倒れている人を見ると、見た事もない人です。誰でしょう？

私は何が起こったのかわからなくなり、麗華を見ました。

「これがホンマの神崎の姿や。不細工で、肥えてて、その上ハゲや」

「……」

私は神崎さんのあまりの変わりように言葉がありません。

「こいつ、昔からそうなんよ。変な力持っとな。女を騙して、ホテルに連れ込んだりしてっとな」

「そうなの」

私も危うくその犠牲者になるところでした。神崎さんは私に幻影を見せていたのです。

「こいつも悪いが、あんたもあかんで、蘭子」

麗華のお説教タイムのようです。長くなりそうです。

「あんた、ホンマに恋愛に免疫がなさ過ぎやねん。少しは修行せんと、また同じ目に遭うで」

「そ、そうね」

気をつけないと。

それでも、いい恋したいと夢見る蘭子でした。

兇悪な存在（前編）

私は西園寺蘭子。霊能者です。

除霊、浄霊、お祓い、祈祷、骨董品鑑定など、いろいろとお受けしています。

でも最近是人恋しくて、先日貞操の危機も経験しました。

親友である八木麗華には、

「あなたはカマトト過ぎる」

と非難されましたが、私は決してそんなつもりはありません。

私の実家である西園寺家は、平安の昔から続く由緒ある霊能者の家系です。

そのため、小さい頃から修行の毎日で、友達と遊ぶ事もなく、ましてや男性と楽しく過ごす事などなかったのです。

ああ。話していて、ドンドン悲しくなってきたのがわかります。

私は、本当に私の事を思ってくれる人が欲しいのです。

もちろん、麗華もその一人ですが、彼女は女性です。

麗華と愛を語らうようになると、別の場所に引っ越してお話を進

めないとはいけません。

「冗談はその辺にしましょう。」

「何だか私まで、あの箕輪まどかちゃんのような語り口になってしまいました。」

「私はある町役場の依頼を受けて、ある家に向かう途中です。」

「その家は、三年前に殺人事件が起こり、高校生の娘さんと、そのご両親が惨殺されたのだそうです。」

「親戚一同が彼等の死を悼み、僧侶三人を呼んで読経させました。葬儀は盛大に行われ、つい最近まで何もなかったのだそうです。」

「ところが、です。」

「一週間ほど前から、廃墟となったその家に怪奇現象が起こるようになりました。」

「セーラー服を着た血まみれの女子高生が、近くを歩く人達を襲ったり、胸に包丁を突き立てられたままの主婦が、近所の人達を追いかけたりしているのだとか。」

「私は話の真偽を確かめるため、その家に来たのです。」

「？」

誰かが怒りの声を上げています。

私は声の主を探るべく、その声のする方へと歩き出しました。

「おのれーっ！ 許さん！ 絶対に許さん！」

男の人の声です。もちろん、生きている人ではありません。

「何があつたのですか？ 貴方はどこにいるのです？」

私はその人に話しかけながら、廃墟の家に足を踏み入れました。

「えっ？」

そこには信じられない光景がありました。

男性の霊が、お札の結界で身動きが取れなくなっているのです。

「これは？」

私はそのお札の結界を解除するために、

「インダラヤソワカ！」

と帝釈天の真言を唱え、お札を雷で焼きました。

「おお」

その男の人の霊はようやく結界から解放された喜びからか、

「ありがとう、お嬢さん」

と嬉しそうに言いました。

「これはどういう事なのですか？」

「実は……」

男の人が話そうとした時、

「ゴオオオオッ！」

と雄叫びが後ろから聞こえました。

「何？」

私はハッとして振り返ります。

そこには、血まみれのセーラー服を着た女子高生の霊と、包丁を胸に突き立てたままの主婦の霊がいました。

「グアアアアッ！」

二人が一斉に私に襲いかかって来ます。

「くっ！」

私が真言を唱えようとすると、

「お嬢さん、待ってくれ。二人は操られているだけなんだ。除霊しないでくれ」

男の人の霊が私に懇願します。

「どづいつ事？」

私は真言を変更し、

「オンアロキヤソワカ」

と観世音菩薩真言を唱え、二人の霊から悪意を取り除きました。

「ああ」

女子高生と主婦の霊は、綺麗な状態に戻り、男の人のそばに行きました。

「貴方」

「お父さん」

どづやら、この三人がここで殺された家族のようです。

「これは一体どづいつ事なのですか？」

私が三人に尋ねた時です。

「うわ、何してんのよ、おばさん。アタシが折角奴隷にして遊んだのに」

そう言って姿を現したのは、女子高生です。見た目は、その、ア
シです。

茶髪のロン毛、鼻ピアス、パンツ丸見え寸前のスカート、おへそ
も見え隠れしている短いブラウス。

「奴隷にして遊んでいた？」

私はカチンと来て、その子を見ました。

それに「おばさん」呼ばわりも聞き捨てなりません。

「貴女は自分がどんな事をしたのか、わかっているの？」

私はその女子高生に近づきながら言いました。

「あつは、何それ、もしかして、正義感すか？ 正義感すか、おば
さん？」

その子はまるで悪びれる様子もなく、またしても「おばさん」呼
ばわりです。

「そんな事は関係ないわ。すでに霊界に行き、修行を開始している
霊達を現世に呼び戻したばかりでなく、術で自分の思い通りにしよ
うとするなんて、許される事ではないわ」

私は語気を強めて続けます。

「あつは、おばさん、名前教えて。あんたも殺しちゃって、アタシ

の奴隷にしたげるから」

また「おばさん」。いけない私が出て来そうですが、この子はいけない私では倒したくないので堪えます。

「私は西園寺蘭子。貴女は？」

「あつは、アタシは、土御門瑠莉加^{つちみかど るりか}。でもすぐ忘れるから、教えても意味ないしイ」

土御門？ それってもしかして、陰陽師の？

「すぐ忘れる？」

私は眉をひそめて尋ねました。土御門さんは、

「あつは、アタシが、おばさんの魂縛って、グチャグチャに砕いて殺してしまうから、肉体の記憶はおるかア、魂の記憶までなくなっちゃうわけエ」

と大笑いしながら言い放ちます。名前を教えたのにまだ「おばさんですか！？」

「んでもって、魂再生したら、おばさんはアタシの奴隷って事オ。超受けるウ」

何が面白いのかわかりませんが、土御門さんはゲラゲラ笑いながら、ブラウスの胸元からお札を取り出します。

「はい、おっしまいー！」

お札が私の周りをグルグルと回り、いきなり巨大化したかと思うと、まるでナマズのような大きな口が現れ、私はそのお札に飲み込まれてしまいました。

「あつは、おばさん、呆気なさ過ぎィ。シヨボ過ぎィ。マジつまんないんすけどオ」

土御門さんはまだ笑っています。

「終わっていないわよ、おバカさん」

私は他人の悪口を言えない性格ですが、この子だけは言いたくありません。

「あつは、おばさん、悪あがきィ。死に際くらい綺麗にしるよ、このクソババアが！」

土御門さんが本性を現しました。私がまだ生きている事が癪に障ったようです。

「こんな方法で、この私を縛ろうなんて、百万年くらい早いわ」

少し遠慮しましたが、土御門さんには、例え一億年かけても私に追いつく実力はありません。

「オンマリシエイソワカ！」

摩利支天の真言で、ナマズのお札は呆気なく破れてしまいました。

「……」

目も鼻の孔も口も丸くして、土御門さんは私を見えています。

「本当なら、女子高生の貴女にこんな事したくないけど、ちょっと悪戯が過ぎた子には、お仕置が必要よね」

私は更に印を組み替え、

「オンマカキヤラソワカ！」

と大黒天の真言を唱えました。

「ギャーツ！」

土御門さんは、その真言の威力を受け、そのまま後ろに跳ね飛ばされ、バツタリと倒れました。

「あら？」

土御門さんの仮面が剥がれたようです。

彼女は女子高生ではありません。

どう若く見積もっても、私の母と同年代です。

彼女から話を聞くのは後回しにして、私は可哀想な三人の霊をもう一度霊界へと送る儀式を執り行いました。

「ありがとう、お嬢さん」

三人は笑顔で天へと戻って行きました。

それにしても、これほどの術を使える人物で、ここまで巫山戯た存在は初めてです。

「起きなさい」

私は土御門さんの頬を叩き、目を覚まさせました。

「はっ！」

土御門さんは、自分の正体がすっかりバレている事に気づき、逃げ出そうとしました。

「無理よ。ここは私の結界の中。どこにも行けないわ」

土御門さんは観念し、その場にしゃがみ込みました。

「どうしてこんな事をしたの？」

土御門さんは怯えながら、

「わ、若さを手に入れられると聞いたからだ」

「若さ？ こんな非道な事をして、若さを手に入れられる訳がないでしょっ？」

「我が教祖様はそうおっしゃったのだ」

土御門さんの言葉に私はびっくりしました。

「教祖様？」

「我が教祖様は、世界救済教の開祖である。あの方こそが、世界を救って下さるのだ」

土御門さんが、急に強気になりました。

世界救済教？ あからさまに怪しい名前です。

「その人はどこにいるの？」

「そんな事、教えられるか！」

土御門さんは私を睨んでいます。

「教えなさい。いえ、教えたくなる」

私は強い力で土御門さんの意識を支配しました。

「うぐうぐうぐ……」

土御門さんは必死に抵抗しています。でも、意識の奥底まで入り込めば、いくら口を噤んでも意味がありません。

「えっ？」

その時でした。土御門さんの身体が宙に浮いたかと思うと、まるで巨人に投げられたかのように地面に叩きつけられました。

「何？」

土御門さんは、グシャツと潰れてしまいました。

これが、教祖様の力？

またとんでもない人達が現れたようです。

兇悪な存在（後編）

私は西園寺蘭子。霊能者です。

ある町の依頼を受けて、殺人事件が起こった家に怪奇現象が起こるといふ事で、その真偽を確かめるために現場に赴きました。

私はそこで、殺害された一家の霊を弄もてあそんでいる土御門瑠莉加つちみかかどるりかという女性と対峙し、彼女を倒しました。

真相究明のために土御門さんを問い詰めましたが、謎の力で彼女は殺されてしまったのです。

「何、今の？」

何も感じません。

何かの力が働いたのであれば、私の張った結界内で何も証拠を残さずにそんな事ができるはずがありません。

私は周囲を探りました。でも、全く気配がないのです。

「そんなバカな……」

混乱してしまいそうです。

「……」

土御門さんは間違いなく絶命しています。

え？ おかしいです。

彼女の霊体はどこに行ったのでしょうか？

私の結界から、霊が出られるとは思えません。

「何？ どういう事？」

土御門さんの遺体から、私はバツと身を引きました。

彼女の肉体がその魂を失ったのが、先程ではなく、ずっと以前なのを感じたからです。

「土御門さん、どこ？ 隠れていないで出て来なさい」

土御門さんと思われた人の肉体は、土御門さんではないのです。

話がややこしいですが、土御門さんは別の場所にいます。

「あつは、おばさん、超鋭いイ。アタシの術、見破ったワケ？ 受けるウ」

そのムカつく言い回しは、間違いなく彼女です。

「あ、貴女は……」

私の目の前に現れた土御門さんは、さっきと全く同じ姿でした。

「おばさん、見かけよりやるウ。アタシの部下にしてあげてもいい

かもオ」

相変わらずの言い回しで、土御門さんは笑いながら近づいて来ます。

しかも彼女は、私の結界をもともせず、そのまま通り抜けました。

「残念ねえ、おばさん。アタシのような神に近い存在には、おばさん如きの結界なんて、屁のツツパリにもなりません」

土御門さんは、肩を竦めて、私を嘲りました。

「その力、陰陽道なの？」

私が真剣な表情で尋ねると、

「あつは、受けるウ。そんなの、アタシにはわからないよ、おばさん。アタシは生まれた時からこの力を持っていたんだからさア。年の功に免じて、そういう事にしときましようよ」

どこまでもふざけた子です。親の顔がみたいです。

「その遺体は誰？」

私は潰れた女性の遺体を見て言いました。

すると土御門さんはゲラゲラ笑って、

「知らない。その辺歩いてたババアを捕まえて、アタシの姿に見

える術をかけて魂を縛ってただけエ。初めて見た人だしイ」

私は身体が震えました。「いけない私」を押さえ込むのに必死です。

「じゃあ、世界救済教っていうのは？」

「ウツソー。そんな宗教、ある訳ないしイ。おばさんを騙して、トンズラかますつもりだったのオ」

土御門さんは、自分が全く関係ない人を殺した事に何も感じる事がないようです。

「でもオ、考え変わった。トンズラする前に、おばさんと遊ぶ事にしたア」

土御門さんの後方に、何体もの式神しきがみが現れました。

陰陽師が使う物の怪です。

以前対決した安倍利明あへりめいとかいう男とは、レベルもスケールも違う力の持ち主のようです。

「ヤロウ共、やっちまいな」

土御門さんの命令で、式神達は私に襲い掛かって来ました。

「くっ！」

私は式神の攻撃をかわしながら、摩利支天まりしてんの真言を唱えます。

「オンマリシエイソワカ！」

式神が怯んだ隙に、攻撃に転じます。

「インダラヤソワカ！」

帝釈天の真言で雷撃を呼び、式神の一匹を撃破します。

「おお、やるウ、おばさん！ カッコいい！」

土御門さんは、手を叩いて喜んでいます。

私は幾度かの攻撃で、式神を全て消し去りました。

「すごい、すごい。おばさん、すごい！ ホント、アタシの部下にならない？ 小遣いたくさんあげるからア」

「自惚れないで。貴女のような人の部下になるように見えるの、私
が？」

私は全身に怒りのオーラを発動させて、土御門さんを睨みました。

「あつは、やつぱ、おばさんは殺すしかないか。つまんないなあ」

土御門さんの顔が変わりました。

さっきまでのお茶づけキャラは封印され、殺戮者の顔です。

「もうこうなったら、おばさん殺して、魂砕いて、アタシの僕しに作

り変える」

「……」

土御門さんは、フツと姿を消すと、不意に私の背後に現れます。

「死にな、おばさん！」

土御門さんは、セーラー服の下からサバイバルナイフを取り出し、私に突き出しました。

「死なないわよ！」

私はそれをかわし、回し蹴りを放ちます。スカートですけど、他に人がいないから構いません。

「げっ！」

土御門さんは私がナイフをかわし、反撃して来るとは思っていなかったようです。

「ぐは！」

回し蹴りが決まり、土御門さんは倒れました。

「黒」

起き上がりながら、彼女は謎の言葉を放ちます。

「おばさん、大人しそうな顔して、エロい下着つけてるんだ」

「……」

余計なお世話です。

今日履いているのは、親友八木麗華からもらったものですから、仕方ないのです。

「でもオ、アタシはいくら攻撃されても大丈夫ウ。だって、この身体もアタシのじゃないからア」

土御門さんは、また肉体を置き去りにして、逃亡しようとした。

「無駄よ」

私はニヤリとして言いました。

「ギャン！」

土御門さんの魂は、私が張り直した結界に阻まれ、逃げられませんでした。

「今度は出られないわよ、おバカさん。さっきあっさり結界に入れたの、不思議に思わなかったの？」

「おばさん、罨？ 罨？ アタシを嵌めたの？」

土御門さんは狼狽しています。

「今頃、貴女の本体を私の仲間が探し出して、魂が戻れないようにしているはずよ。もうどこにも逃げ場はないわ、土御門さん」

「いつの間に!?!」

土御門さんが私を睨みます。

「式神と戦っている時、仲間にも気を送ったの。いろいろと言葉を添えてね」

「……」

土御門さんは、観念したようです。

私は、土御門さんに捕縛の呪文を使い、術を使えなくしてから、魂をお札に封印しました。

知り合いに、こういう子を教育するのが得意な人がいます。

その人に頼んで、彼女を更生させることにしました。

殺されたあの女性達の弔いは麗華と私で行い、家族の方には村上法務大臣を通じて話をしてもらいました。

悲しい事件でしたが、何とか解決できて良かったです。

それにしても、土御門さんのように力の使い方を間違えている人は、思ったより多そうです。

これからは、そういう人達の事も考えて、活動していきたいと思
います。

もちろん、素敵な人も探しますけど。

西園寺蘭子でした。

幽霊バス

私は西園寺蘭子。除霊、浄霊、お祓い、祈祷、骨董品鑑定など、様々な事を承っています。

要するに「心霊便利屋」だと、親友の八木麗華に言われました。そんなつもりはないのですが。

今日は全国的に土曜日です。本当は暇で休業にしたいのですが、あの村上法務大臣の愛娘である春菜ちゃんが来るのです。

通学に使っているバスの路線で、最終のバスに乗ると、そのまま霊界に連れて行かれるという噂があるそうです。

下らない「都市伝説」なのですが、春菜ちゃんがどうしても調べて欲しいと言い、今日お友達と来るのです。

前もって言うておきますが、私は決して村上大臣に未練があつて、春菜ちゃんの頼みを聞いた訳ではありません。

余計言い訳みたいですか？

「こんにちは、蘭子さん」

そこへ、春菜ちゃんがお友達と現れました。お休みでも出かける時は制服着用が彼女の学校のルールです。

「ようこそ、春菜ちゃん」

私は二人に近づいて言いました。お友達は何故か緊張しているみたいです。

「は、は、初めまして、黒澤可奈子と言います」

この子の名前も、どこかで聞いた事があるような組合せです。でも、その名前から連想されるような体型ではなく、春菜ちゃんと同じく細身で可愛い子です。

「？」

可奈子ちゃんの背後に、何かがあります。霊？ どうした事か、よくわかりません。

「どうぞ、かけて」

私は来客用のテーブルに備え付けられた椅子を勧め、冷蔵庫からケーキを三つ取り出します。

「ああ、蘭子さん、おかまいなく」

春菜ちゃんが気づいて言います。

「遠慮しないで。お客様に頂いた物だけど、食べ切れなくて」

ウソです。そんなに食べると、ポッコリお腹になってしまつから、我慢しているのです。

「ありがとうございます」

私はケーキに添えて、冷たい紅茶を出しました。

「怖がらせるつもりはないのだけれど、可奈子ちゃんの後ろに何かいるわね」

ギョツとして顔を見合わせる二人。

「実は、お話した幽霊バスに、可奈子が偶然乗ってしまったんです」

「そうなの？」

私は可奈子ちゃんを見ました。可奈子ちゃんは震え出し、

「乗ってから気づいたんです。最終バスだって。それで、すぐにその次のバス停で降りたんですけど」

「それ以来、可奈子の身の回りに心霊現象が起こるようになったんです」

春菜ちゃんが話を引き継ぎます。

「それで、蘭子さんなら助けってくれると思って、連絡しました」

「わかりました」

私は数珠を持ち、もう一度可奈子ちゃんの後ろにいるモノを見ました。

人霊ではないようです。かと言って、狐とか狸とかの動物霊では

ありません。

「何かしら？」

そのうちにそのモノは消えてしまいました。

「心霊現象って、どんなことが起こるの？」

私は春菜ちゃんを見ます。可奈子ちゃんは震えが止まらず、とても話をできる状態ではないからです。

「可奈子の鞆が授業中急に床に落ちたり、鉛筆の芯が欠けたり、トイレの水道の水が誰もいないのに吹き出したりするんです」

「なるほど」

少し原因がわかって来ました。そして実験です。

「可奈子ちゃん、バスに乗った時の事を話してくれる？」

震えていた可奈子ちゃんが私を見ます。涙が溢れそうな目で。

「あ！」

ケーキのお皿にあったフォークが、シュツと飛翔し、私に向かいます。

「危ない！」

思わず叫ぶ春菜ちゃん。私はそれを右手で受け止め、

「一つの謎は解けたわ。可奈子ちゃんは、靈感が強いのだよ」

「え？」

春菜ちゃんはビックリして可奈子ちゃんを見ます。

「心霊現象」は、可奈子ちゃん自身の力が原因なのです。

「でも、可奈子ちゃんはそれに気づいていないの。とても危険な状態よ」

可奈子ちゃんはとうとう泣き出してしまいました。

「でも大丈夫。私が助けてあげるわ、可奈子ちゃん」

私は立ち上がって可奈子ちゃんの肩に手をかけました。

「お姉さん！」

可奈子ちゃんが抱きついて来ます。その途端、彼女の心の中が私に見えました。

この子は、小さい頃、ずっと苦しんでいたのです。

大きくなるにしたがって、力は失われたのだけれど、幽霊バスに乗った事で、封じられていた力がまた甦ってしまったようです。

「怖がらないで、可奈子ちゃん。私がついているから。私が守るから」

「はい」

可奈子ちゃんは、潤んだ目を私に向け、小さく頷きました。

自分の力を否定しようとする、話がこじれます。霊に付け入られる隙も生じます。

力を取り除く方法もありますが、まだ若い可奈子ちゃんには過酷なので、お勧めできません。

「今夜、最終バスに乗りましょう。解決方法はそれしかないわ」

「……」

可奈子ちゃんは不安そうに私と春菜ちゃんを見ます。

「大丈夫。蘭子さんに任せなさい、可奈子。きっとうまくいくわ」

「う、うん」

可奈子ちゃんは涙を拭い、頷きました。

そして私達は、その幽霊バスが現れるという路線がある通りに行きました。

驚いた事に、私が時々利用する路線です。

通り自体は、ところどころに事故死した地縛霊がいるだけで、それほど強力な霊は存在しません。

時刻表を確認します。最終バスは、午後十時です。

「でも、私が乗ったのは、その後に来たバスなんです」

可奈子ちゃんは身震いして言いました。

また一つ謎が解けました。バスそのものが、霊体のようです。

可奈子ちゃんの背後に見えたのは、バスの一部なのかも知れませ
ん。

「一度戻りましょう。夜までここにいる訳にもいかないでしょうか
ら」

「はい」

さて、幽霊バスが来るまでの長時間、時間潰しです。

こういう時はカラオケが一番、と麗華は言いますが、歌が苦手な
私はあまり行きたくありません。

でも、夜遅くまで営業していて、お金があまりかからなくて、高
校生でも大丈夫な場所は、カラオケくらいしかありませんでした。

「私は、歌いませんか!」

それだけを強く念押しして、カラオケに行きました。

春菜ちゃんと可奈子ちゃんは、ノリノリで歌いまくります。

時々、私にマイクが渡されますが、鬼の形相で拒否し、歌いませんでした。

そして、時刻は午後十時になりました。

「行きましようか」

今度は二人が尻込みします。

「行きますよ」

支払をすませ、私はカラオケを出ました。

午後十時過ぎのバス停には、さすがに誰もいません。

周囲は住宅街で、もうほとんどの家は明かりが消えています。

舗道にも人は歩いてません。

普通の女性なら、決して一人では来ないようなバス停です。

(可奈子ちゃんは、呼ばれてしまったのだろうか?)

一つ気になるのは、可奈子ちゃんの背後にいたあの正体不明の存在です。

全く邪気がありませんでした。

「あ」

やがて、クラクションの音がして、バスが現れました。

プシューッと音がして、扉が開きます。奥を覗くと、運転手さんがいません。

紛れもなく、幽霊バスです。

「さ、乗りましょう」

私は二人を押し込むようにしてバスに乗ります。扉が閉まり、バスが動き出します。

私達は吊り革に掴まり、前を見ました。バスはノロノロと走り、信号を守りながら進みます。

「怖いわ。降りましょうよ、蘭子さん」

春菜ちゃんが小声で言います。可奈子ちゃんはすでに泣いているようです。

「最後まで乗ってみましょう。多分、大丈夫よ」

私は、この幽霊バスの出している温かい気を感じ、そう言いまし

た。

これは決してあの世への路線ではないと、確信したのです。

やがてバスは、路線の終着のバス停を過ぎました。

「ど、どこへ？」

春菜ちゃんと可奈子ちゃんは、オロオロしています。

「大丈夫。慌てないで、二人共」

私は二人の肩を抱いて励まします。

バスは、私の予想通り、車庫に到着しました。

そして、後部の扉が、プシューッと開きます。

「わああ！」

春菜ちゃんと可奈子ちゃんは、大急ぎで外に飛び出します。

私は、一度手を合わせてから、バスを降りました。

「蘭子さん、バスが……」

春菜ちゃん達が指差します。バスは光に包まれて、消えて行きま
した。

「見送って欲しかったんですね」

可奈子ちゃんは涙を流しながら呟きました。

「そうよ。誰かにここまで一緒に来てもらって、自分達の旅立ちを見て欲しかったのよ。それだけなの」

私も目頭が熱くなりました。

「おじいちゃん……」

可奈子ちゃんも気づいたようです。

彼女の亡くなったお祖父さんは、この路線バスの運転手でした。

可奈子ちゃんは小さい頃、よくそのバスに乗っていたのです。

今、ここまで乗せて来てくれたのは、まさにその時可奈子ちゃんに乗っていたバスでした。

可奈子ちゃんのお祖父さんは来ていませんでしたが、バスにはお祖父さんの思いがたくさん詰まっていたのです。

「ありがとうございます、蘭子さん」

可奈子ちゃんは深々と頭を下げました。

「どついたしました。私も貴重な体験をしたわ」

生き物以外の霊体が霊界に旅立つところは、今までに見た事がありません。

「で、どうやって帰ります?」

春菜ちゃんが現実に引き戻してくれました。

「タクシー呼ぶしかないわね」

深夜割り増しで、しかもこんな街外れまでなんて、とんでもない料金になりそうです。

でも、私は麗華と違って、お金に執着心がありませんので、その点は大丈夫です。

「あ」

その時気づきました。お財布には、野口さんが二人。

どうでしょう?」

西園寺蘭子でした。

奥多摩の廃寺

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、祈祷、お祓い、落し物探しも始めました。

先日、野口さんが二人しか財布にいないというピンチを、親友の八木麗華が救ってくれました。

彼女はその有り余る資金に物を言わせて、とうとう東京事務所を立ち上げたのです。

たまたまその日、東京にいた麗華が、私のピンチに気づいてくれて、高級車で迎えに来てくれました。

一緒にいた村上春菜ちゃんとは面識があつたので、彼女は麗華のファッションセンスを知っていましたが、春菜ちゃんの親友の黒澤可奈子ちゃんは目を見開いていました。

そんな訳で、今日は麗華に付き合つて、奥多摩に来ています。

「ム力つくなあ。こない田舎や知つとつたら、来いひんかつたわ」

凸凹道を歩きながら、麗華が毒づきます。

「でも、報酬が高いんでしょ？」

私は嫌味を言います。文句を言いたいのは私の方なのですから。

いくらこの前の恩があるからと言って、足が痛くなるほど山道を歩く義理はないと思うからです。

「いくら報酬が高^たくても、しんど過ぎて、行きたなくなる」

すでにテンションが落ち捲りの麗華です。

「お。やっと、着いたようやで」

前方にボロボロの山門が見えて来ました。

そこが今回の依頼場所です。

「何十年も前に廃寺になつとるらしいんやけど、何や薄気味悪い気が漂つとるな」

「ここに何があるの？」

私もその不気味な気を感じ、警戒を強めます。

「死んだ坊主の霊が、まだ頑張つとるらしいんや。山門を抜けたら、途端に襲い掛かって来るらしいで」

「そつなの」

確かに、崩れかかった山門の向こうは異世界のように霞んでいます。僧侶の霊が空間を歪めているようです。

でも、麗華が言うように、山門を抜けた途端に襲い掛かって来る

ような殺気がありません。

『来るな!』

山門を通り抜けると、怒鳴り声が脳に直接鳴り響きます。

「うるさわい、坊主! あんたがウロチヨロしとるから、ウチのよ
うな高名な霊能者が、こんな山奥まで来るはめになったんや! 今
日で成仏させたるから、覚悟しいや!」

麗華はいきなり喧嘩腰です。私は彼女を制して、

「何故現世に留まっているのですか? 貴方ほどの高僧であれば、
行くべきところはおわかりのはずです」

私は穏やかに尋ねました。すると、前方に金色の袈裟に身を包ん
だ老齢の僧の霊が現れました。

「出たな、坊主!」

お札を取り出した麗華を押しつけ、私は前に出ます。

「何すんねん、蘭子!?!」

麗華が怒鳴りますが、私が睨みつけるとビクツとして黙り込みま
す。

「私の思いに気づいてくれる方が、ようやく来て下さったな」

僧の霊は微笑んで言いました。

「お話、聞かせて下さい」

私は微笑み返して促します。

老僧の霊は話をしてくれました。

「この寺が廃寺となったのは、私が死んだため。引き継いでくれる者もおらんかったでな」

私は麗華と顔を見合わせました。

「寺が寂れ、朽ちて行くは当然の成り行き。私には何も未練がない。しかし、ここを再開発と称して造成し、貸し別荘を建てようとする不届き者がある」

世の中、お金が大好きな人はたくさんいます。思わず麗華を見てしまいますが、彼女は何も感じていないのか、リアクションがありません。

「ここは、奥多摩でも、手付かずの自然が残る場所。だからそれを守るため、あの世の掟に背き、ここに留まる事にしたのだ」

老僧の霊の決意を知り、私は心を打たれました。

「言いたい事はそれだけか、坊主？」

麗華がとんでもない事を言い放ちました。

「麗華！」

私はビックリして麗華を見ました。老僧の霊も、麗華の言葉に顔を強張らせます。

「邪魔するなら、容赦はせぬ」

私は困ってしまいました。

麗華は恐らく莫大な報酬に目がくらみ、老僧の切なる願いなど聞き入れるつもりがないのです。

「勘違いせんといてんか、坊主。もうあんたは行くべきところに行きや。後の事は、ウチらに任せてな」

あら？ 雲行きが変わりました。麗華がまともな事を言っています。

「ここは荒らさせん。ウチが約束する。そやから、安心してあつちに行き」

麗華は得意満面で言いました。老僧はニッコリして、

「わかった。では、よろしく頼むぞ、お嬢さん方」

と言うと、光に包まれて天へと昇って行きました。

「よっしゃ、解決や！」

麗華が嬉しそうに叫んだのを聞き、私はギョツとしました。

「麗華、まさか貴女……」

麗華は私を見て大笑いしました。

「何心配しとんねん、蘭子？ 霊はいなくなった。ウチらの仕事は完了や」

「麗華、あのね……」

人としてのありようを説こうとした私は、麗華にそれを遮られました。

「でもな、その後、何があってもウチらは関係ない。そういう事や」

「え？」

麗華は別のお札を取り出し、山門に張りました。

「ここを壊したりしたら、このお札に封じてある悪霊が、大暴れするぞ」

「……」

あまり納得できませんでしたが、麗華は報酬を得た上で、あの老僧との約束も守るといふ荒業をやったのけたのです。

そして帰り道。

「ごめんね、麗華。私、疑ってしまって」

私は正直に謝りました。麗華はガハハと笑って、

「ええ、ええ。そう思われても仕方がないのんが、今までのウチやからな」

まるで心を入れ替えたような言いようです。

「さてと。後は、依頼主にどう話すかやな。偉い危ない目に遭った言つて、報酬を引き上げたろ」

「……」

結局いつもと変わらない麗華です。

ではでは。

西園寺蘭子でした。

していい事といけない事

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊だけでなく、人探しまで致します。

親友の八木麗華が東京に進出して来ました。まるで吉の芸人のようです。

「これからは、東京と大阪の二重生活や。あんたとも今まで以上に飲みに行けるで」

麗華は嬉しそうに言います。私は顔が引きつるのを感じました。

「何や、蘭子？　ウチと飲みに行くのんが、そないに嫌なんか？」

そついつ事には過剰なほど敏感な麗華です。

「そんな事ないよ。でも、いつもご馳走になつてばかりで悪いから」

「ご馳走になるといっても、割り勘にして端数が出た時にそれを負担してくれる程度なのですが、麗華にとっては「奢る」部類に入るようです。」

「遠慮せんでええがな。ウチかて、あんたにはいろいろと助けられとるんやから、氣いせんといて」

「これだから麗華と飲みに行きたくないのです。」

かと言って、数少ない親友の一人である箕輪まどかちゃんはまだ未成年です。

彼女のお兄さんの慶一郎さんは、声をかければいつでも来てくれるでしょうが、麗華以上に面倒な事になりますし、その麗華が彼を呼んだ事を知れば、激怒しそうです。

悲しくなって来ました。どうして私はこんなに友人が少ないのでしょうか？

「何落ち込んで溜息吐いてるねん、蘭子？」

麗華の声に現実引き戻されます。

「私、友達少ないなあ、と思って」

私はグラスの氷を突きながら言いました。そう、ここは激安の居酒屋でした。

「何言うとんねん。ウチがおるやないか」

「麗華しか友達がないなあって、寂しくなったの」

少し酔いが回り始めた私は、目を潤ませて愚痴りました。

「ウチは普通の友人の千人分や。心配せんとき」

麗華は豪快に笑いました。

「ありがとう、麗華」

私はお酒が入ると涙脆くなるようです。感動して号泣してしまいました。

「よしよし」

麗華が私の頭を撫でてくれます。その時でした。

「は！」

突然私が顔を上げたので、麗華の顎に頭がぶつかってしまいました。

「あいたた！」

お互い涙が出るほどの痛みです。

「何や、蘭子？ どないした？」

「ちよっとね」

私は店の隅にいる仙人のような老人を指差しました。

「うん？ 何や、あのジイさん？ 人間やないな」

「ええ。他の人達には見えないようね」

麗華がバツと立ち上がり、老人の霊に近づきます。

「麗華！」

私は千鳥足で彼女を追いました。

「待て、こら！」

老人の霊は、壁をすり抜けて外に出てしまいました。

「麗華、お勘定！」

私は慌ててバッグを二人分持ち、レジに向かいます。

麗華は、老人の霊を追いかけるフリをして、支払を私に押し付けたのでしょうか？

「もう！」

私はプリプリして支払を済ませ、外に出ました。

「麗華！」

麗華は老人の霊を追いかけて、舗道を走っていました。

「待ってよ、麗華！」

私が駆け出した直後でした。

ドーン！

地響きのような音がしました。

「え？」

私は仰天して、後ろを見ました。

居酒屋があつたはずのところ、炎に包まれています。

「な、何？」

私は何が起つたのかわからず、呆然としてしまいました。

「蘭子！」

麗華が戻つて来ました。

「これはどういふこつちや？」

麗華も驚いて、居酒屋を包み込むように荒れ狂う炎を見上げています。

「あ」

私はハツとしました。

遠い記憶が呼び覚まされます。

あの老人。見覚えがあります。

「おじいちゃん……」

そうです、あの仙人のような老人は、私の祖父でした。

当代随一と謳われた霊能者だったのです。

やがて周囲には野次馬が集まり始め、消防車と救急車のサイレンの音が聞こえて来ました。

「私達、助けられたの？」

私がボソリと呟くと、

「そつみたいやな」

麗華が私の肩を抱いて答えます。

「助けないと、中の人達を！」

「蘭子！」

そつという正義感を持ち合わせていない麗華が私を引き止めます。

「もう遅いで。あの火の回りでは、助からん」

「そんな……」

非情な現実を認めたくない私は、

「できる事はする！」

と麗華を振り切り、

「不動明王真言で、炎を空へ導けば……」

印を結び、真言を唱えます。

「ナウマクサマンダバザラダンカン！」

炎が渦巻き、居酒屋の火を空へと導きます。

「もう一度！」

私は火傷も厭わず、真言を唱え続けました。

そして。

私の努力も虚しく、逃げ遅れた人達は全員助かりませんでした。

「蘭子」

落ち込む私を麗華が抱きしめてくれます。

「あんたはやるだけやった。あんたのせいじゃない。あれは事故なんや」

「でも！」

私は泣きながら麗華を睨みました。

「阿呆！」

麗華の平手が私の左頬を打ちました。

「何自惚れてんねん。ウチらは神さんやない。人の命は、ウチらが
どうこうしてええもんやないんや、蘭子！」

麗華の言葉に私は打ちのめされました。

何て思い上がった事を考えていたのだろうと。

「あんたのジイさんかて、あの世ではきつつい罰を受けてるで。ウ
チらを助けたんやからな」

麗華は空を見上げて言いました。

そうです。

死者が、生者の命を助けてはいけないのです。

それが霊界の掟。

その掟を破つてまで、祖父は私を助けてくれました。

「おじいちゃん……」

私は祖父の思いに涙が止まりませんでした。

同級生

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、お祓い、骨董品鑑定、探し物といういろいろお受けしています。

でも、決して生活が苦しい訳ではありません。

幼くして亡くした両親の遺産で、多分老後も安泰なくらいなのですが。

あ、これは親友の八木麗華には内緒です。

そんな事を教えたら、多分彼女は、

「株やらへんか？」

と言い出すでしょうから。

私達のような力を持った人間は、賭け事や株などに関わってはいけないのです。

別に掟がある訳ではありませんが、それが霊能者の倫理というものです。

麗華は倫理観を質に入れてしまったかのように、

「そんなん、関係あらへん」

と言っています。確かにそうなんですけどね。

最近はめっきり仕事の量が減り、今日も明るいうちに店じまいです。

先日、亡くなった祖父に助けられ、その足で祖父の眠る町へと足を延ばしました。

お墓参りをすませ、帰京したばかりなので、少しペースダウンもしたかったのかも知れませんが。

祖父の件は、結構ショックでしたから。

「あの」

事務所の鍵を締めて、ドアに悪霊退散のお札を張っていた時、後ろから声をかけられました。

「はい？」

私は声の主を見ようと振り向きまます。

「貴女の弟子にして下さい！」

高校生くらいの女の子です。腰が折れてしまいそうなくらいの勢いで、何度も頭を下げています。

「弟子とか取りませんから。ごめんなさい」

私はあっさり断り、歩き出そうとしました。

「ではここから飛び降ります」

その女の子は、いきなり外廊下の手摺りを乗り越えようとした。
た。

「危ない！」

驚いて後ろから抱き止めます。

「放して下さい！ 弟子にしてくれないのなら、生きていても仕方ないんです！」

女の子は泣き叫びながら、私の腕の中でもがきます。

「落ち着いて！ 話を聞かせて」

私は彼女を宥め、鍵を開いて事務所に入らせました。

このまま放置という訳にもいきませんので。

「お名前は？」

私は冷蔵庫から紅茶を出し、グラスに注ぎながら尋ねます。

「伊藤椿いとうしほです」

素敵な名前です。でも、彼女がその名を口にしたおかげで、彼女の悩みがわかりました。

「同級生が亡くなったのね？」

「え？」

何も話していないのに、私がそう言ったので、椿ちゃんは驚いています。

「す、凄いです！ 春菜の言った通りです！」

春菜ちゃん。 村上法務大臣のお嬢さんです。

別に大臣の事を思い出して狼狽える訳ではありませんが、あまり私の事を話して欲しくないかな、と思っってしまったました。

「その同級生と話がしたいのね？」

私は椿ちゃんにグラスを渡して言いました。

「はい。彼女、私のせいで死んじゃったから……」

途端に椿ちゃんの顔が暗くなります。

ちょっと彼女の事を探ります。

同級生の名は、やなぎはらあけい柳原麻子ちゃん。

椿ちゃんとは、幼稚園からのお友達です。

羨ましいなあ。私には、そんな友人がいませんから。

一人で千人分の友人である麗華がいますけど。

二人は毎日一緒に自転車で登下校していたようです。

ある日、椿ちゃんの自転車の調子が悪くて、ノロノロ進んでいた時、後ろから追い越して来た他校の男子の自転車に掠められ、椿ちゃんがふらつきました。

「危ない、椿！」

その椿ちゃんを麻子ちゃんが庇うようにして飛び出し、車に跳ねられてしまったのです。

椿ちゃんは全身打撲。麻子ちゃんは即死でした。

運転していた男は脇見をしていて、二人に気づくのが遅れただけでなく、速度制限を大幅に上回るスピードで走っていたのです。

「それで、その時の事を気にして、ここに来たのね」

「はい。西園寺先生の弟子にしてもらって、霊界に行って、麻子に謝ろうと思って……」

言っている事は荒唐無稽ですが、椿ちゃんは真剣です。

それにしても、「西園寺先生」は照れ臭いです。

「私の弟子にならなくても、麻子ちゃんに会えるわよ」

「え？」

椿ちゃんはビククリしています。

「ちょっと明かり消すわね」

私は霊界に呼びかけ、柳原麻子ちゃんの霊を呼び寄せました。

「ああ……」

ボンヤリと麻子ちゃんの姿が見えて来ます。

「麻子オツ！」

椿ちゃんが泣きながら叫びました。

「麻子、ごめん。本当にごめん！」

椿ちゃんは土下座しました。

「私のせいで、貴女は……」

椿ちゃんは顔を床に擦りつけています。

「違うよ、椿」

麻子ちゃんは慈愛に満ちた顔で言います。

「え？」

涙と鼻水と、あまり掃除していない床の汚れでクシャクシャな顔になった椿ちゃん。

鼻の頭が黒くなっています。私も恥ずかしいです。

「私は寿命だったの。あの時、あそこで私が死んだのは貴女のせいじゃないのよ」

「え？」

椿ちゃんはわけがわからないようです。

「貴女がいてもいなくても、私はあの車に轢かれていたのよ。だから、貴女は悪くないの」

麻子ちゃんはスーツと椿ちゃんに近づきます。

「だから、私のために貴女が泣いたりしないで。私の事を思ってくれるのは嬉しいけど」

「麻子」

また泣き出す椿ちゃん。

「ほら、もう泣かないで。貴女があまり悲しむと、私、あっち靈界に行き辛くなるから」

「う、うん……」

意味はよく理解できていないようですが、麻子ちゃんの思いは伝

わったようです。

「ありがとうございます、西園寺先生」

麻子ちゃんにまで「先生」と言われてしまいました。

「じゃあね、椿。何十年後かに会いましょう」

「うん」

麻子ちゃんは光に包まれて消えて行きました。

椿ちゃんはしばらく呆然としていましたが、

「あ、ありがとうございます、先生！」

「どう致しまして。それから、私の事は先生ではなくて、名前で呼んでね」

「は、はい、先生！」

私は苦笑いしました。椿ちゃんも自分の失敗に気づき、笑いしました。

「これで決心がつかしました」

「は？」

突然椿ちゃんの気が変わりました。

「やっぱり、弟子にして下さい、西園寺さん！」

堂々巡りです。あーあ。

椿ちゃんを説得し、高校を卒業するまで待ちなさいと言って帰らせたのは、それから三時間後でした。

早く帰ろうと思っていたのに。

いい経験できたから、よしとしようかな。

西園寺蘭子でした。

ある母親の浄霊依頼

私は西園寺蘭子。霊能者です。最近、霊界の事より、人間界の事でいろいろと悩んでいます。

いつもは事務所を閉めて帰り支度の時間ですが、今日は仕事の依頼が入っていて、お客様を待っています。

いつも絡んで来る親友の八木麗華は、今週は九州に行っています。博多にも事務所を出すのだとか。

欲と二人連れだと、そこまで事業を拡大できるものですね。

私には絶対に真似できませんし、したくもありませんが。

ああ、決して彼女の悪口を言っているのではないです。

只、もう少しだけ、お金に対する執着心を抑えてくれれば、彼女はもう一皮むけると思っています。

そんな事を考えていると、ドアフォンが鳴りました。

「お待ちしておりました」

私はすぐにドアを開き、お客様を招き入れました。

入って来たのは、四十代前半くらいの女性です。

喪服姿です。とても似合っています。綺麗な方です。

「西園寺先生、このたびは私の依頼をお聞き届け頂き、誠にありがとうございました。」

その人は深々と頭を下げました。

「いえ。仕事ですから。取り敢えず、お話をお聞きしまするので、お掛け下さい。」

「はい。」

その女性の名は、大島寿美子さんです。

寿美子さんは、日本舞踊でも習っていたのか、歩き方が楚々としています。

「私の娘が、先日病気で亡くなりました。」

「そうなんですか。」

私は寿美子さんにお茶を出しながら頷きます。

「でも、娘は自分が死んでしまった事に気づいていないのです。」

「なるほど。」

私はお茶を一口飲んで相槌を打ちます。寿美子さんはお茶の茶碗を見つめたままで、

「娘が不憫なのです。西園寺先生のお力で、娘をどうか成仏させて

「いただきたいのです」

「わかりました」

私は茶碗をテーブルに戻し、寿美子さんを見ました。

「娘さんは、今どちらに？」

「通っていた大学にいます。まだ講義を受け続けているのです。大学では、娘の事は騒ぎにはなっていないようなのですが、娘がもし、とてもショックを受けるような形で、自分の死を知る事になるのも可哀想で。そうなる前に、先生に導いていただきたいのです」

「そうですね」

私は立ち上がりました。寿美子さんも立ち上がります。

「私が一人で行きます。お母さんはいらっしやらないで下さい」

「えっ？ どうしてですか？ 私も一緒に娘の説得に当たりたいのですが？」

寿美子さんは納得がいかないという顔で私を見ます。

「あのですね」

私は非常に言いにくかったのですが、意を決していいました。

「貴女が同行すると、お嬢さんに衝撃を与えてしまうと思います」

「何故です？ 私は母親なんですよ」

寿美子さんは私を責めるような目で見ます。

その気持ちもわからなくはないのですが。

「それはわかっています。貴女は、お嬢さんが貴女を見たら、驚かれるのを想定できますよね？」

寿美子さんはようやく私が言いたい事に気づいてくれたようです。

「わかりました。私は待ちます」

ようやく諦めてくれたようです。

私はホッとして、

「では、先に行って待っていて下さい。すぐにお嬢さんを説き伏せて、貴女のところに行かせますから」

「はい。ありがとうございます、西園寺先生」

寿美子さんは、再び深々とお辞儀をすると、そのまま霧のように消えてしまいました。

そうです。寿美子さんは亡くなっているのです。

病気で亡くなった娘さんが、悪い霊に取り憑かれはしないかと心配し、霊界から私のところに来て来たのです。

親バカかも知れません。

でも、そこまで娘の事を案じるのは、まさに親だからこそ。

私はとても羨ましいと思いました。

「さて」

そして、術具を用意して、出かけます。

今度は寿美子さんのお嬢さんと話さないと。

でもあれだけの母親ですから、娘もいい人でしょう。

タダ働きなんぞしおって、と麗華がいれば言われたでしょうが、世の中お金だけではないのです。

だからこそ、彼女が九州にいる今日依頼を受けたのですけどね。

西園寺蘭子でした。

一番強いのは誰？

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、お祓い、占い、骨董品鑑定、人探しも承っています。

「しっかし、何であんたんとこ、全然儲かったらんのか？」

親友の八木麗華が、見えちゃうのを気にしていないのか、見せたいのかわかりませんが、ソファにふんぞり返ります。

ここは私の事務所です。麗華が、九州のお土産を持って来てくれたのですが、私は魚の卵が苦手です。

「あんだとの付き合い長いけど、知らなかったわ。今度からは気をつけるわ」

どうしてなのかわかりませんが、麗華は真面目な表情で詫びてくれました。

「別に私にはお土産はいいわよ。貴女が何事もなく帰って来てくれたのが、何よりのお土産よ」

私はちょっと嫌味っぽかったかなと思いつつ、言いました。

「おお。蘭子、あなたはホンマにええ子や」

何故か麗華は泣き出してしまいました。

「どうしたのよ、麗華？ 泣くほどの事じゃないわ」

私はそれでも子供のように泣く麗華の頭を撫でました。

本当は麗華が九州で何か仕出かして、酷い目に遭うのではないかと心配していたなんて言えません。

「九州、事務所でけんかだったんや」

麗華はようやく泣き止み、涙で潤む目を私に向けてそう言いました。

何か可愛いです。私は決してそういう趣味はありませんが。

「何があったの？」

麗華は涙を拭いながら、

「あいつが現れた」

「あいつ？」

麗華はキツとして、

「あの呪い女や！」

呪い女？ 誰の事でしょう？ 私には思い当たりません。

「忘れたんか、G県でウチに呪いをかけた女や！」

「ああ、小倉さんね」

ようやく思い出しました。小倉冬子さん。

G 県の靈感少女箕輪まどかちゃんのお兄さんである慶一郎さん（通称慶君）の婚約者だと思いついて入っている人です。

以前、東京で慶一郎さんと冬子さんが一緒にいるのを見た麗華が激怒して、G 県に行き、慶一郎さんを問い詰めた時、冬子さんが現れて、麗華は倒されてしまいました。

その日以来、麗華は「打倒黒尽くめの女」を掲げて、パワーアップを図っていたのです。

まどかちゃんからメールで教えてもらったのですが、麗華は冬子さんをやっつけるためにG 県に行って、彼女と戦ったそうです。

リベンジは成功し、あと一撃を加えようとした時、まどかちゃんが冬子さんを庇い、麗華もそのまどかちゃんの優しさに免じて、冬子さんを許したのだそうです。

「あの女、この前ウチがぶちのめした事を根に持って、九州に現れたんや。執念深い女やで」

冬子さんも、麗華にだけは「執念深い」と言われたくはないでしょう。

「違つと思つけどなあ、私は」

「何やて?」

麗華がキツとしたので、私もちょっとだけキツとして彼女を睨みます。

「す、すまん。何でや？」

麗華が素直なのはいいのですが、最近すっかり恐れられている気がして、ちよっぴり悲しいのも事実です。

「冬子さんは貴女を怨んでなんかいないわよ。彼女の事をもっとよく見てごらんなさいよ」

「え？」

私は、冬子さんの本当の姿を知っています。

彼女は純真な女性です。少し度が過ぎるところはありますけど。

「あ」

麗華もわかったようです。

「貴女が事務所を出そうとしていたところは、以前たくさん人が死んだビルだったのよ。場所を変えれば大丈夫」

「ホンマや……。何でウチ、気づけへんかったんやろ？」

「あまりの激安に、目が曇ってしまったんじゃないの？」

私はズバリと指摘しました。

「う」

「図星ですから、麗華は何も言い返して来ません。

「今度会うことがあったら、礼、言^ゆつとくわ」

麗華は恥ずかしそうに笑って言いました。

「そうですね。そうしなさい」

私も微笑んで言いました。

でもその時はまだ、私は知りませんでした。冬子さんが麗華を助けてくれた本当の理由を。

彼女は、麗華が私の親友だとまどかちゃんから聞き、とんでもない事をしてしまったと怯えていたそうです。

その事を後でまどかちゃんから聞いて、私が落ち込んだのは言うまでもありません。

私は、昔、冬子さんに何をしてしまったのかしら？ 全然思い出せない。

西園寺蘭子でした。

霊能者裏事情

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、お祓い、祈祷、占い、骨董品鑑定、人探し。いろいろ承っております。

先日、久しぶりにG県の靈感少女箕輪まどかちゃんからメールがありました。

G県のS市にある「空の国公園」という遊園地で幽霊騒ぎがあり、まどかちゃんと彼氏の二人で除霊したそうです。

羨ましい。中学生で彼氏あり、ですか。私なんて、生まれてこの方、彼なんてできた事が……。

いけません。あまりネガティブになると、「いけない私」が出て来てしまいます。

まどかちゃんのメールには、私の親友八木麗華の事が書かれていました。

どうやら、その遊園地は、麗華のお得意様だったようです。

もし、麗華がその事を知って怒ったら、宥めて欲しいと書かれていました。

まどかちゃんは、麗華の「お礼参り」を恐れているようです。

私も、麗華ならやりかねないと思い、

「心配しないで。私が話をしておくから」と返信しておきました。

そして。私は麗華に連絡し、

「たまには高級レストランで食事でも」と誘いました。

「奢りか？」

麗華のあけすけな質問に、私はちょっとだけイラッとしたが、

「当然よ。私が誘ったのだから」

「ほなら、行くわ」

あっさりOKです。

高級ホテルの最上階の高級レストラン。窓の向こうの夜景が奇麗です。

確か以前、「ガチで食べます」という某テレビ局の番組で紹介されていたところですよ。

本当なら、素敵な殿方と来たいのですが、今日は麗華を宥めるのが目的ですから、仕方ありません。

「おお。気張ったな、蘭子。大丈夫なんか？」

麗華には私の両親の遺産の事は隠していますから、彼女は私のお財布の心配をしてくれません。

前に、タクシー代が足りなくて助けを求めて以来、彼女は私の事を「貧乏なのに無理している」というキャラ設定で見ているようです。

まあ、その方が都合がいい時もありますけど。

「大丈夫よ。この前、臨時収入があったの」

「ホンマか？ 無理せんでええで。足りんのなら、ウチが出すから」

麗華は真剣な顔で言います。そこまで貧乏だと思われるのも、何か嫌です。

「G県の空の国公園で知ってる？」

「ああ、知ってるで」

麗華は前菜をパクリと食べて言いました。

「そこのお化け屋敷で、幽霊騒ぎがあったのよ」

「ほお、さよか」

あれ？ 何か、様子が変わります。でも話を進めてみます。

「で、たまたま居合わせた私が、その霊をお祓いして、謝礼をもらったのよ」

「フーン。で、いくらもろったん？」

ここで訊きますか、そういう事を？

「内緒。だから、今日は遠慮しないでね」

「ああ、わかった」

麗華は、空の国公園の事に興味がないみたいです。

どうして？ 麗華じゃないのかしら、がめつい霊能者って？

やがて食事は終わり、コーヒータイムはロビーに降りて楽しみました。

こちらのお店はコーヒー専門店なので、レストランのものより美味しいのです。

「蘭子」

麗華が急に真剣な表情で言います。

「何？」

私はコーヒークップをソーサーに戻して彼女を見ました。

「あんだ、ヤバいで」

「え？」

麗華は声を低くして、

「空の国公園のお化け屋敷は、顧問の霊能者があるはずや」

「え？」

何て事でしょう？ がめつい霊能者とは、麗華の事ではなかったのです。

「確か、小松崎瑠希「小松崎瑠希弥」弥「希弥」っていう、ものごつつがめつい女や」

麗華が言っと、本当に凄くがめつそうに聞こえます。

「そんな奴やから、自分の商売を邪魔されたら、呪い殺されるかも知れんで」

「ええ？」

私は仰天しました。

「でも、大丈夫か。蘭子なら、あんな二流霊能者、屁エでもないな」

麗華はおかしそうに笑いました。

まずいです。

その小松崎さんが空の国公園に連絡すれば、除霊をしたのがまどかちゃん達だとわかってしまいます。

「ねえ、その人、どこにいる人なの？」

私は心配になって尋ねました。麗華はニヤツとして、

「あんたが相手にするような霊能者やないで。多分、あの女、相手があんたで知ったら、シヨンベンちびるで」

「……」

麗華の品のない言葉はこの際どうでもいいです。

このままにしておく、まどかちゃん達が危険です。

「そんな事はどうでもいいから、小松崎って人の居場所を教えなさい」

私は麗華を睨みつけて言いました。麗華は途端に居ずまいを正して、

「は、はい」

ああ。また怖がられてしまった。

小松崎さんは、私の事務所からそれほど離れていないところに住んでいました。

翌日、私は早速小松崎さんのところに向かいました。

「この辺ね」

私は古いアパートが立ち並ぶ狭い路地を歩きました。

「ここみたい」

目の前の木造アパートは、

「幽霊屋敷？」

と尋ねたくなるような造りです。築五十年くらい経っています。蔭もたくさん絡まっています。

「うわ」

アパートは路地に対して横向きに建てられているので、各部屋に行くには隣のアパートとの境界のボロボロの板塀沿いに奥へと進まなくてはなりません。

しかもろくに日が当たらない地面にはコケがビッシリ生えていて、慎重に歩かないと滑って転びそうです。

「この部屋？」

表札には、

「小松崎」

と書かれています。

「ごめん下さい」

私はドアをノックしながら呼びかけました。

「お金ならないよ」

小松崎さんでしょうか？ 私を借金取りと間違えています。

「違いますよ。私は西園寺蘭子と言います」

その途端、ドタドタと足音が響き、ガシャツとドアが開きました。

「さ、西園寺先生、ですか？」

顔を出したのは、まだ高校を卒業したばかりくらいの若い女の子でした。

がめついと聞いていたので、てっきり麗華のような雰囲気的女性かと思ったのですが。

それは偏見ですね。ごめんなさい、麗華。

部屋を覗くと、酷く汚れています。でも、小松崎さんは、キッチン

とお化粧をしていて、衣装も華やかです。

どちらかと言うと、霊媒師っていう感じですね。

「な、何でしょうか？」

小松崎さんが私を見る目が、アイドルを見る目と一緒にです。キラキラしているのです。

「取り敢えず、出られますか？ お話をしたいので」

「ああ、はいはい、大丈夫です！」

小松崎さんはニコニコしながらそのまま部屋を出て、鍵をかけます。

「すぐそこに喫茶店があったので、そこで話しましょうか」

「はいはい」

何だか拍子抜けです。いい子みたいで、ホッとしました。

喫茶店に着くと、私は彼女にまず仕事を取ってしまった事をお詫びし、報酬を渡すと言いました。

ところが、彼女は意外な事を言ったのです。

「そんな事はお気になさらずに。それより、お願いがあります」

「はい？」

私はキョトンとしてしまいました。

「私を先生のところで働かせて下さい。いえ、修行させて下さい！」

小松崎さんは、深々と頭を下げました。

「えーと……」

困ってしまいました。こんな展開になるなんて……。

でも、丸く収めるためには、承諾するのが一番のようです。

「わかりました。でも、私の修行は厳しいですよ」

「ありがとうございます！ 頑張ります！」

キラキラとした目で私を見る小松崎さん。

ああ、これからどうなってしまうのかしら？

西園寺蘭子でした。

有能な秘書？ 小松崎瑠希弥

毎日暑い日が続きます。皆さん、如何お過ごしですか？ 霊能者の西園寺蘭子です。

先日、ある事がきっかけで、私の「弟子」になった小松崎瑠希弥「小松崎瑠希弥」さん。

彼女はまだ今年の三月に高校を卒業したばかりの新米霊能者です。

でも、私なりの「適性検査」の結果、その能力は、こんな事を言うと絶交されそうですが、G県の霊感少女である箕輪まどかちゃんより上です。

私のところで修行の必要なんか全然ありません。

不思議だったので、尋ねてみました。

「どうしてそれほどの力があるのに、私の弟子になりたいなんて言ったの？」

すると、小松崎さんはニッコリして、

「私のバッチヤが、西園寺先生のお父様に命を助けてもらった事があるんです」

「まあ」

私の両親は、私が幼い時に亡くなっていますので、そんな話は初めて聞きました。

「バツチャも霊媒師でした。でも、降霊術に失敗して、悪霊に取り殺されそうになったんです。それを助けて下さったのが、西園寺先生のお父様なんです」

「西園寺先生」はやめると、何度も言いましたが、やめてもらえないので、今は何も言いません。

「ですから、これはバツチャの恩返しなんです」

「お婆ちゃん思いなのね」

私はジーンとして言いました。すると小松崎さんは涙ぐんで、

「大好きでした。去年、亡くなりましたけど」

「まあ、そうなの。ごめんなさいね、辛い事を思い出させてしまっ
て」

私もちよつと目が潤んでしまいます。

「ああ、気にしないで下さい、先生。バツチャはあっちに行っても時々会いに来てくれますから」

「……」

霊媒師だった人ですから、その辺はお手の物なのですな。うーん。

そんな事で、それからは、小松崎さんが「営業」に回り、仕事を取って来るようになりました。

しかも彼女は交渉人としても優れていて、私ならサービスしてしまいそうなものもしっかり請求します。やっぱり、「がめつい」というのは本当のようです。

只、彼女の事を庇う訳ではありませんが、決して「強欲」ではありません。

取るべきものは取る。ビジネスとして割り切っているので、そういう発想ができるのでしょうか。

今、ふと親友八木麗華の事を思い出してしまいましたが、彼女とは違うタイプの「お金にシビアナ人」です。

私は、自分が両親の遺産で生活して行けるといふ安心感から、お金に無頓着過ぎたのを反省しました。

もし、両親の遺産がなければ、今頃公園の野草を食べていたかも知れません。

「先生、今日は公園に出る霊をお祓いして欲しいという依頼が入っています」

小松崎さんは、初めて出会った時に着ていた派手な衣装を封印し、今は「できる女」の印象を与えるスーツ姿です。しかも黒縁の伊達

メガネをかけています。しかも、手に持っているのは、今流行のえ
ーっと……。

「ああ、iPadです」

小松崎さんは、私がメカに弱いのを完璧にカバーしてくれていま
す。

その点は本当に感謝しています。

現場に着きました。

悪霊と聞いていたのですが、只の浮遊霊で、諭してあげると落ち
着き、素直に霊界に行きました。

「では次は、駅のトイレに出る痴漢の霊です」

「はい」

小松崎さんは、一生懸命なのはわかるのですが、仕事を取り過ぎ
です。

それも、放っておいても差し支えのない霊まで除霊対象として受
けて来るので……。

「あのね、小松崎さん」

私は休憩のために立ち寄った某コーヒーストップで切り出しまし

た。

「何でしょうか、先生」

小松崎さんは、笑顔全開です。ああ、言いづらい……。

「あんまり頑張らなくても、大丈夫だから。ちょっと働き過ぎよ」

私は彼女を傷つけないように言葉を選んで言いました。

「あ、申し訳ありませんでした！ 調子に乗って、一日に何件も仕事を入れてしまって……。先生がお疲れなのに、私……」

小松崎さんは涙ぐんで頭を下げました。

「あああ、そういう事じゃないのよ。私は貴女の身体を心配しているのよ」

「ありがとうございますウ、先生」

彼女は号泣しています。はあ。麗華と違う意味で疲れる子です。

そんな事で、私達は事務所に戻りました。今日の仕事はこれで終わりです。

「西園寺蘭子靈感事務所です」

小松崎さんが、ワンコールで電話に出ます。

「先生、イズモ銀行さんです」

「はい」

私は電話を代わりました。何でしょうか？ 残高が足りなくて、引き落としができなかったのでしょうか？

でも、先方の用件は意外なものでした。

「西園寺先生、是非、当行の定期預金をご利用いただけませんかでしょうか？」

相手は支店長でした。支店長代理とはよく話した事があるのですが、支店長とは初めてです。

「はあ？ 定期預金、ですか？」

「はい。是非。普通預金では、お利息がほとんど付きませんので、お考えいただけませんか？」

「私の通帳には、そんなお金ありませんよ」

そう答えながらも、バッグの中の通帳を探してみます。

そんなにたくさん通帳に入れてないはずなのに。

「え？」

通帳を開いて仰天しました。ゼロが幾つあるのかすぐにはわから

ないような金額が印字されてます。

「考えておきますね」

私は支店長が何か言っているのを無視して、そのまま受話器を置きました。

そして、私をジッと見ていた小松崎さんを見ます。

「小松崎さん」

「はい」

彼女は笑顔です。そうでしょう、悪気はないのですから。

「この前除霊依頼を受けた会社から、一億円も振り込まれているのだけど、どういう事？」

「請求したからですよ」

小松崎さんはニコニコしたままです。私は溜息を吐き、

「私は、そんな巨額な除霊料を請求してと言った覚えはないわ」

「でも、先方様がお支払しますとおっしゃったのですから、いいのではないですか？」

小松崎さんは微笑んで答えました。

あああ。このままでは、私は麗華に「金の亡者」と言われてしま

うそつです。

でも、小松崎さんは悪い事をしている訳ではないですし。

「それにしても、一億円は高過ぎます。今後、請求書を送る時は、私に言ってね」

「はい」

小松崎さんは、少しだけションボリしたようです。

「私はそんなにあくせく稼ぐつもりはないのよ。でも、貴女にお給料を払うくらいは働くつもりですから、心配しないでね」

「と、とんでもないです！ 私は先生からお給料なんていただきません！ そんな事したら、バツチャに叱られます！」

小松崎さんは顔色を変えて言います。この子、どついつ子なのかしら？

悪い子ではないのは確かなのですが。

いろいろ困った事が起こりそうです。

西園寺蘭子でした。

嘘も方便？

私は西園寺蘭子。霊能者です。

ある事がきっかけで、小松崎瑠希弥こまつしほきという女の子の霊媒師れいばいしを「弟子」にする事になりました。

彼女は能力が高く、私の弟子として修行するようなレベルではないのです。

とても不思議な女の子です。

只、霊能の仕事をビジネスと割り切っているようで、ちょっと私とは相容れない部分がありますが。

そんなある日、恐れていた事が起こりました。

「よお、蘭子、元気か？」

いつもの調子で、親友の八木麗華が事務所にやって来ました。

「うん？」

彼女は、私の席の隣の机で請求書を作成している小松崎さんに気づきました。

「いらっしゃいませ」

小松崎さんは手を休めて立ち上がり、麗華にお辞儀をします。最近はずっかりスーツ姿が定着しました。

「あんだ、確か……？」

麗華がムツとした顔で言いかけ、私を見ます。

「蘭子、どういう事や？ 何でこの女がここにおるんや？」

麗華が凄い剣幕で私に詰め寄りました。すると、

「先生、危ない！」

と小松崎さんがお札を取り出し、麗華に投げつけました。

「うわ！」

そのお札は「不動金縛り」のお札で、麗華は動けなくなってしまいました。

「ぬおお、このガキ、何するんじゃ！？」

全く動けない状態で凄んでいる麗華は滑稽です。

しばらくこのままにしておこうかと思いましたが、うるさいので助けます。

「小松崎さん、この人は、見た目はアレだけど、私の親友の八木麗華という霊能者なの」

「見た目はアして、どういう意味や!？」

怒りが解けない麗華が騒ぐので、私は本気で睨みました。

「す、すまん」

麗華はすぐに大人しくなりました。

「申し訳ありませんでした、八木様。お許し下さい」

小松崎さんは麗華の前に来て、土下座をしました。

「あ、ああ、もうええよ、あんた。気にしてへんから」

麗華は私に睨まれたのが効いたのか、作り笑いをしています。

「ありがとうございます、八木様」

小松崎さんは泣いていました。この子、涙脆いようです。

「小松崎さん、悪いんだけど、飲み物をお願いね」

「は、はい!」

こういう事を頼むのは好きではないのですが、私が動く可悲しそうな目で見るので、仕方なく彼女に頼んでいます。

本当に、私に尽くすのが生きがいのようなようです。私が男性だったら嬉しいのでしょうか。

かと言って、小松崎さんが男性だったら、とは思いません。

「あの子、例の小松崎瑠希弥やる？」

小松崎さんが給湯室に行った際に、麗華が小声で訊いて来ます。

「ええ、そうよ」

私はあの子との関わりを麗華に説明しました。

「フーン。あなたの親父さんがあの子の婆さんをな。そうか」

麗華はフツと笑って、

「ほなら、心配ないな。何か企んどるんやないかと思ったけど」

「私も、あの子から全く悪意を感じないから、大丈夫」

すると麗華は何故か顔を赤らめて、

「何か、妬けるな」

「え？」

私はギクツツとして麗華から離れました。麗華は私の反応を見てムツとし、

「アホ、そういう意味ちゃうわ！ あんたとあの子の関係、ええなあと思ったんや」

「そうなの」

麗華が「そっち」の気があるなんて微塵も思いませんが、さっきは一瞬ドキツとしてしまいました。

「お待たせ致しました」

小松崎さんが、アイステイを入れたグラスを二つトレイに載せて近づいて来ます。

私はハツとして、

「ああ、ありがとう、小松崎さん……」

と受け取りに行きましたが、遅かったのです。

「きゃああー！」

小松崎さんは、全く何もないところで躓き、盛大にグラスを放り出してしまいました。

「いたたあ」

小松崎さんは肘と膝を打ったようで、立ち上がれません。

「大丈夫、小松崎さん？」

これが日常茶飯事なのです。だから私が動きたいのです。

「蘭子、ここ、シャワーあったよな？」

麗華が言いました。

「ええ、あるわよ……」

小松崎さんを助け起こしながら、麗華を見ると、彼女はグラスを両手に持ち、アイスティを頭から被っていました。

私は苦笑いするしかありません。

「あわわ、八木様、重ね重ね申し訳ありません！」

小松崎さんが膝の痛みを我慢して、ひょこひょこと麗華に近づこうとして、また転びました。

「うわー！」

今度は私が何とか抱き止めたので、彼女はどこも打ちませんでした。

「あ、ありがとうございます、先生」

「どうぞ致しまして」

また泣いている小松崎さんです。

麗華はシャワーを浴びて、隣の仮眠室で休んでいます。

小松崎さんは、酷く落ち込んでいて、まだ泣いています。

麗華も彼女が気の毒になったので、仮眠室に行ったのです。

麗華がいると、余計小松崎さんが落ち込みそうでしたので。

「私、落としたらいけないと思うと、余計落としてしまったり、転んではいけないと思うと、絶対転んでしまうんです」

「そうなの」

私は急に思いついて、彼女の背後を見ました。

「小松崎さん、落ち込まなくていいわ。貴女に憑いている霊が、貴女に悪戯をしていたのよ」

「え？」

小松崎さんは潤んだ目で私を見ました。私は彼女に微笑み、

「今、被ってあげる」

と言った、

「オンマリシエイソワカ」

と摩利支天まろししてんの真言を唱えました。

「もう大丈夫よ、小松崎さん」

「は、はい！　ありがとうございます、先生！」

小松崎さんは笑顔になりました。ホッと一安心です。

実は、彼女に霊なんて憑いていません。

でも、こうする事によって小松崎さんが自信を取り戻してくれれば、「嘘も方便」です。

こんな良い子、今時珍しいですね。なかなかいいです。

あ、今ふとG県の箕輪まどかちゃんを思い出してしまいました。

決して彼女が「良い子」でないという事ではありませんから。

西園寺蘭子でした。

新たなる生活

私は西園寺蘭子。霊能者です。

現在、小松崎瑠希弥さんという、霊媒師の女の子を「弟子」として一緒に仕事をしています。

私は、寂しさも手伝って、小松崎さんに、

「一緒に暮らさない？」

と、一部の人が聞けば、ビックリするような事を言いました。

「ありがとうございます、先生。でも、恐れ多くてそのような事はできません。死んだバツチャに叱られます」

小松崎さんはどこまでも低姿勢で、本当に謙虚な子です。ビジネス以外は……。

「スナックリッキー様ですか？ 先日の除霊料が、まだ振り込まれていないようなのですが？」

仕事に関しては、鬼のような面を見せます。

「お振込いただけない場合は、原状回復が基本ですが、よろしいですか？」

原状回復とは、つまり、「除霊した悪霊を元に戻す」という意味です。

もちろん、そんな事はできないのですが、小松崎さんは涼しい顔で言ってるのけます。

「須坂建設様ですか？ 地鎮祭のお祝い料がまだお振り込みでないようですが？」

裏の小松崎さん？ そう思ってしまうくらい、怖いです。

私が彼女にそんな事を言える立場ではないのは、よくわかっています。

裏蘭子と裏瑠希弥が組んだら、さぞかし恐ろしい組織が誕生しそうですね。

「小松崎さん」

私が声をかけると、あの迫力満点の凄み顔がサツと消え、笑顔全開になります。

「はい、何でしょうか、先生？」

私はその変わり身の早さに苦笑いし、

「お客様にあまり催促しなくてもいいわよ。ウチはそれほど困っている訳ではないのだから」

すると小松崎さんは、泣きそうな顔になり、

「申し訳ありません、先生。私、自分でさんざん借金取りに追い込

みかけられて、東京湾に沈められそうになった事もあったので、ついで……」

「そ、そう……」

相当苦勞して来たようです。

「今はもう大丈夫なの？」

「あ、いえ、その、ハハハ……」

まだのようです。私は小松崎さんをソファに座らせ、質問する事にしました。

「貴女はどうしてそんなに借金に追われているの？」

「霊媒師の衣裳を購入したり、夜遊びが過ぎたりして、いろいろと……」

小松崎さんは恥ずかしそうに言いました。

「わかりました。借金があるところを全部書き出さない。私がかまとして清算します」

「え、そんな事は困ります、バツチャに叱られます……」

小松崎さんはオロオロしています。でも私は、

「もちろん、貴女には後で返済してもらいます。私の仕事を手伝ってもらってね」

「先生！」

小松崎さんはサツと床に土下座して、

「ありがとうございます！　どんな事をしても、必ずお返し致します！」

「どんな事をしては困るわよ」

私は小松崎さんの肩に手を置いて言いました。

「はい、先生」

彼女は涙で濡れた目を私に向けました。

そして私は小松崎さんの借金先を聞き出して連絡を取り、全て返済しました。

「先生、本当にありがとうございます！」

また泣き出す小松崎さん。私は彼女の頭を撫でて、

「これからもよろしくね、小松崎さん」

「はい」

私はちよつと照れながら、

「で、私と一緒に暮らすの、考えてくれない？」

「あ、はい！ そうさせて下さい。先生のお世話、全部させて下さい」

「ありがとうございます、小松崎さん」

私が微笑んで言うと、小松崎さんはモジモジして、

「あの、私の事、名前で呼んでいただけませんか？」

私は一瞬キョトンとしてしまいましたが、

「ええ、いいわよ。瑠希弥さん」

「いえ、呼び捨てで」

小松崎さんはニコツツとしています。私は肩を竦めて、

「じゃ、瑠希弥」

すると小松崎さんは、

「きゃああああー！」

と絶叫し、泣き出しました。どうしたのでしょうか？

「憧れの西園寺先生に名前で呼んでもらえて、猛烈に感動していますー！」

「ああ、そうなの」

呆れてしまいました。

瑠希弥は（とこれからは呼び捨てです）、あのオツチヨコチヨイも治り、私のマンションで完璧な仕事をこなしています。

朝は私より二時間早く起き、夜は私が寝るまで絶対に寝ません。

「身体壊すわよ」

心配になって言います。すると瑠希弥は、

「元気なのが取り柄ですから！ それにまだ十代ですし……」

そこまで言っつて、何かに気づいたように土下座します。

「も、申し訳ありません、先生！ 決して先生がお歳だという意味ではなくて、その、あの……」

「気にしてないから、大丈夫よ」

本当はちょっとだけ気に障ったのですが、些細な事ですから、拘るつもりはないです。

「さあ、今日は結構大きな仕事だから、気合入れて行くわよ、瑠希弥」

「はい、先生！」

さあ、今後私達はどんな道を歩む事になるのか。

登場しない八木麗華の事が気になります。

西園寺蘭子でした。

蘭子の秘密

私は西園寺蘭子。霊能者です。

有能な「弟子」である小松崎瑠希弥こまつき るきでと一緒に暮らすようになって一週間。

改めて、私は寂しがり屋だと思いました。

朝の事です。

「おはようございます、先生」

耳元で瑠希弥の声がします。

「え？」

私はハッとして目を覚ましました。

「あれ、どこ？」

いつの間にか、私は瑠希弥の部屋に来て寝ていたようです。

しかも、瑠希弥の使っているダブルベッドにしっかりと陣取っていました。

その上、瑠希弥を押しつけて……。

「感激です！ 『寂しいから、一緒に寝ていい？』 って先生に言われて、夢かと思いました」

感動して目をウルウルさせている瑠希弥を見て、

（悪夢だ）

と思いました。

しばらく一人暮らしが続いていたので、全快したと思っていたのですが、私の夢遊病は治っていませんでした。

一人でいるとずっと自分のベッドで寝ているのですが、誰かがいると、知らないうちにその人の寝ているところに行ってしまうのです。

「どうされましたか、先生？」

落ち込んでいる私に瑠希弥が声をかけます。

「私、変な事言わなかった？」

何故か顔を赤らめる瑠希弥。え？ な、何を言ったの、私？

「あ、あの、『蘭子寂しいから、抱っこして寝て』と仰いました」

瑠希弥より私が恥ずかしいです。幼児退行？ 昔より酷くなっています。

「それで？」

ビクビクして続きを尋ねます。瑠希弥は目を輝かせて、

「もちろん、しっかりと抱かせていただきました」

と言ってから、

「キヤアアアッ！」

絶叫して枕で顔を隠す瑠希弥。私は消えなくなるほど恥ずかしかったです。

「ごめんなさい、瑠希弥。迷惑かけたわね。今度は、鍵をかけて寝てね」

「と、とんでもないです！ 先生がお困りなら、私はいつでもこの身を捧げますので」

何か際どいセリフですが、彼女にそんなつもりはないのでしょうか。

「あ、ありがとう……」

そんなつもりはないと思いながらも、ちょっとだけ退いてしまいました。

さて、朝食をすませてクライアントのところに向かいます。

「すみません、一刻も早く、免許を取りますので」

助手席で申し訳なさそうに瑠希弥が言います。

「いいのよ。家の事、全部瑠希弥がしてくれているのだから、これくらいはしないとね」

「ありがとうございますウ」

また涙ぐんでいます。若いのに涙腺が緩過ぎです。

そして現場に到着しました。

「わ」

そこは、所謂風俗店でした。

もちろん、朝からは営業していないので、そういう事がお好きな殿方はいませんが。

「お待ちしてました、西園寺先生」

店の中から店長とオーナーが出て来ました。

「一番奥の部屋です。そこにお客さんが入ると、幽霊が出てくるみたいで……」

店長は怖がりなのか、震えながら話します。オーナーは、

「とにかく、店の評判が落ちるので、手っ取り早くお願いしますよ」

と如何にも高圧的。ムツとして何かを言いそうな瑠希弥を制して、

「行くわよ」

私は店内へと足を踏み入れます。

入った瞬間、わかりました。います。そうとう怨念の塊になってしまった霊が。

「あら、ここ？」

私は中を見渡して、ドキッしました。

ここには殿方は来ないようです。どうやら、女の人を好きな女の人が集まるお店のようです。

「何か、強烈な霊がいますね」

霊媒師である瑠希弥は、鳥肌が立っています。

「ええ。気をつけてね」

私は数珠を取り出し、奥へと進みました。オーナーと店長は、入口のところから見ていただけで、ついて来る気はないようです。

その方が仕事がり易いのでいいのですが。

「この部屋ね」

私はドアを開き、中へと足を踏み入れました。

「右手奥、若い女性の霊が一体」

私は瑠希弥に言いました。瑠希弥も数珠を握りしめ、

「はい」

と応じます。その時でした。

「あ！」

霊が突然動き、瑠希弥に乗り移ってしまったのです。

「殺す！ ころす！ コロス！ ころ……すウツ！」

霊は雄叫びを上げながら、次は私に襲い掛かりました。

（瑠希弥の波長と同調したの！？）

瑠希弥程の霊能者が、あっさり身体を乗っ取られるなんて、相当な霊です。

私は攻撃せず、瑠希弥ごとその霊を抱きしめてあげました。

「寂しかったのね。常連さんが来なくなって、別のお店で別の子と仲良くしていて……。それで、自殺して、ここに吸い寄せられるように来てしまった……。でも、受け入れて」

私は泣いていました。その霊の純真さに触れて、涙が止まりませ

ん。

「貴女は行くべきところがあるわ。ここは貴女の居場所じゃない」

スーツと霊が瑠希弥から出て行くのを感じました。

「ありがとう……」

女性の霊は生きていた頃の明るさを取り戻し、天へと昇って行きました。

「浄霊完了ね」

私はホツとして眩きました。

「せ、先生」

瑠希弥の声がします。

「あ、ごめんなさい、瑠希弥」

私は慌てて瑠希弥から離れました。

「あああ、目が回りますウ」

瑠希弥はその場に倒れてしまいました。

霊に取り憑かれたので、疲労したのでしょうか？

「しっかりして、瑠希弥！」

私は瑠希弥を抱き起こして背負い、部屋を出ました。

「あ」

瑠希弥は、後部座席で目を覚ましました。

「気がついた？ 大丈夫、瑠希弥？ 霊の影響で疲れたの？」

私は車を停めて尋ねました。すると瑠希弥は、

「いえ、先生に抱きしめられたので、頭がポオツとしてしまっ…
…。申し訳ありません！」

と頭を下げました。私は苦笑いして、

「そ、そうなの。それなら、良かったわ」

まさか瑠希弥、目覚めてしまったのでは？

ドキドキしてしまいます。

西園寺蘭子でした。

誤解は反対？

私は西園寺蘭子。霊能者です。

先日、昔の病気が再発してしまい、私は一緒に暮らしている霊媒師の小松崎瑠希弥「小松崎」のベッドで目を覚ましました。

瑠希弥は大喜びしていましたが、私は恥ずかしさでいっぱいです。

しかも、瑠希弥には、「もしかして、女性が好き？」という疑惑が湧いて来ました。

G県に住んでいる親友の箕輪まどかちゃんからのメールで、

「瑠希弥さんに彼を盗られるかと思いました。全然眼中にないみたいでホッとしました」

と教えられました。

その時は、只微笑ましかったのですが、最近の瑠希弥の言動を見ていると、まどかちゃんの話が別角度で見えて来たのです。

まどかちゃんの彼は、写メで見ましたが、イケメンです。

多分、私の大阪の親友である八木麗華なら、襲いかかるでしょう。

あ。ごめんね、麗華。

でも、瑠希弥はその彼をメロメロにしたにも拘らず、全く興味を

示さなかったのです。

勘繰り過ぎかも知れませんが。

それに、

「今度は私が先生のお部屋で一緒に寝てもいいですか？」

と頬を赤らめて言われると、退いてしまいそうです。

純情な瑠希弥ですから、そんな態度をとれば傷つくと思いますので、

「ええ、そうね。是非」

と合わせています。

そして私は、麗華が東京に来たのを良いきっかけに、彼女に相談する事にしました。

瑠希弥は依頼を受けた場所の下見に出かけたので、私は麗華を事務所に呼びました。

「なるほどなあ」

麗華は妙に嬉しそうです。

「ちょっと！面白がっていないで、ちゃんと相談に乗ってよ」

私はムツとして言いました。すると麗華は、

「案外、逆なんちゃう？」

「え？ どういう意味？」

私がキョトンとしていると、

「あの子の方が、あんたをそういう人やと思ってるんじゃないか？」

「ど、どうして？」

麗華は呆れ顔で、

「そもそも、あんたが一緒に暮らさないと言うたんやろ？ で、あんたがいきなりあの子のベッドに潜り込んだんやろ？ そら勘違いされるで」

「あー！」

そうです。そもそもの原因は、私なのです。

この前除霊に訪れた風俗店で、瑠希弥があっさり霊に取り憑かれてしまったのは、そのせいかも知れません。

「彼女の誤解を解かんと、また何かあった時、対処できへんで」

麗華はいつになく真面目な顔で言いました。

「あの子は、ホンマにええ子なんよ。だから、蘭子がそういう人なら、それに合わせてもええて思うとるんやで」

「そ、そうね……」

瑠希弥の事を警戒するあまり、私は彼女の気持ちを全然理解していなかったのです。

「あの子は純真過ぎる。もし、どうしてもそないな関係がええのなら、ウチが相手したるで、蘭子」

顔を真っ赤にして麗華に言われた時、私はドン引きしてしまいました。

「あ、ありがとう、麗華」

その時の私は、これでもかというくらい、表情と言葉が一致していませんでした。

麗華は自分の事務所に戻りました。

そしてそれからまもなく、瑠希弥が帰って来ました。

「瑠希弥、話があるんだけど」

「は、はい……」

瑠希弥は真っ直ぐに私を見つめます。

私は意を決して、言いました。

私はそういう人ではない事を。

すると瑠希弥はホツとしたようです。

「そ、そうなのですか。ああ、そうなのですか」

あまり嬉しそうにすると失礼だと思っているのか、彼女は抑え気味に言いました。

「だから、無理に私と一緒に寝なくてもいいのよ」

「はい」

誤解は解けたようです。

「じゃ、行きましょうか」

「はい、先生！」

早速仕事です。

今回は、マンションの建設現場です。

地鎮祭を執り行ったのですが、地縛霊がいたらしく、工事が進められないそうです。

「霊のプロフィールです。男性で、享年五十歳。現場の土地の元所有者で、地上げ同然の方法で立ち退かされたようです。それで、その恨みから現場で焼身自殺をしました」

瑠希弥の下調べがあるおかげで、私の仕事はとてもし易くなっています。

「ご家族はいないの？」

「はい。奥さんは亡くなっていて、子供はいません。孤独な方だったようです」

瑠希弥はちょっとだけ霊に肩入れしてしまっているようです。

「わかりました。除霊ではなく、浄霊にしましょう」

「はい、先生」

私は現場に到着すると、祭壇を組み、浄霊を開始します。

「ふおおおお！ 俺に干渉するなああ！ 放っておいてくれええ！」

男の霊が鬼のような形相で現れます。

「瑠希弥！」

「はい！」

私は瑠希弥に、彼の奥さんの霊を降ろしました。

「貴方……」

瑠希弥が奥さんの声で語りかけます。

「つ、月美……」

男の霊は狼狽えました。表情が穏やかになります。

「貴方、もういいでしょう？ 私をいつまでも一人にしないで下さい。こちらにいらして下さい」

奥さんの言葉に、男の霊は鎮まりました。

「わかった。行こうか、月美」

「ええ」

二人は抱き合い、天に昇って行きます。

「ありがとうございました」

お礼を言われました。霊能者をしていて、一番嬉しい瞬間です。

「帰りましょうか、瑠希弥」

「はい、先生」

私達は車で事務所に向かいます。

「瑠希弥は好きな人とかいないの？」

私は会話を思いつけなくて、そんな事を聞いてしまいました。

「さ、西園寺先生です！」

「そういう意味じゃなくて。男の人で好きな人はいないの？」

瑠希弥は黙り込んでしまいました。

「私、男の人が怖いんです。子供だと、何ともないんですけど」

「そうなの」

だからまどかちゃんの彼は平気だったのね。まどかちゃんが知れば、怒りそう。

「私もそうだったけどね」

私がそう言うと、瑠希弥は私を見て、

「先生はおモテになると思っていましたか？」

と意外そうだ。私は苦笑いして、

「実は恋愛経験ゼロなのよ」

「そうなんですか？」

もの凄く驚かれてしまいました。そうかも知れませんが。

「今度、麗華の合コンに参加してみる？」

「え？ 八木様のですか？」

瑠希弥は麗華が苦手のようにです。困った顔をしています。

「私も怖いんだけど、何事も経験だから」

「は、はい！是非参加させて下さい！」

急に意気込む瑠希弥を見て、私はクスツと笑ってしまいました。

次回は合コンか。

西園寺蘭子でした。

蘭子、合コンに行く

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、浄霊、お祓い、占いなどを承っています。

今日はお仕事ではありません。

今まで何度も誘われてお断りしていた「合コン」に出席してみる事にしました。

もちろん、主催は親友の八木麗華です。

一人で行くのは心細いので、同居人の霊媒師である小松崎瑠希弥（こまつき るき）と行く事にしました。

その事を麗華に伝えると、

「えええ！？ そうなんか？ あの子が来ると、ウチら、不利やで」

「どうして？」

私は不思議に思って尋ねました。

こちらも三人、あちらも三人であるなら、不利も有利もないと思うのですが。

「蘭子は何も知らんねんなあ。合コンはな、バトルなんや」

「バトル？」

私は完全にキョトン状態です。

「男っちゅう生きもんはな、若い女が大好きやねん」

麗華の合コン講座が始まります。長くなりそうなので、私は携帯をスピーカ状態にして、机の上に置きました。

「若い女って……。麗華も私も、若いでしょ？」

すると麗華の溜息が聞こえました。

「確かにウチらは二十代やから、全体で見れば若い部類や。けどな、二十代も、十代には勝てんのか」

「そうなの？」

確かに女子高生を見ると、ちょっと負けてるような気がしてしまふ事はありませんが。

「よし。瑠希弥が来るんなら、男のメンツを考えんな。ほな、またな」

あら？ 意外に短い講座でした。まあ、良かったですけど。

「遅くなりました！」

瑠希弥が息を切らせて帰って来ました。

「大丈夫よ、まだ時間はあるから」

「そ、そうですね」

瑠希弥は妙にソワソワしています。

「どうしたの、瑠希弥？」

瑠希弥はポツと頬を朱に染めて、

「私、男の人とお話するのが、初めてなんです。何だか、ドキドキしてしまっ」

私は微笑んで、

「私も男の人が苦手だったから、あまり話した事ないの。今日は苦手意識を克服しましょう」

「はい、先生」

瑠希弥は笑顔で答えました。

確かに、殿方は、こんな子が好きなのでしょうね。

私達は一度私のマンションに戻り、それなりの服に着替える事になりました。

私は変に気取らない方がいいと思ったのですが、麗華が、

「絶対カジュアルな服で来たらあかんぞ！」

と釘を刺されたのです。

「これでどうでしょうか？」

瑠希弥が着替えを終えたようです。

「え？」

それは、私と瑠希弥が初めて出会った時の霊媒師の服でした。あちこちがキラキラしてます……。

確かに「カジュアルな服」ではありませんが……。

「うーん。それだと、派手過ぎない？」

「そうですね？ でも私、後はスーツしかありません」

瑠希弥は悲しそうに俯きました。

「スーツでいいのよ。私もそうするから」

「わかりました」

私達は、結局お洒落と縁遠いのかも知れません。

でも、麗華の普段の服装から考えて、彼女にだけはファッションセンスをあれこれ言われたくないのも確かです。

そして約束の場所へ行きました。まだ約束の時間まで二十分ほどあります。

イタリアンレストランで、個室があるところです。

「おう、来たか」

そこには麗華が一番乗りしていました。

相変わらず、目を疑うようなファッションです。胸は半分見えていますし、スカートも短過ぎます。

そして、イヤリングは耳が取れそうなくらい大きいです。

「蘭子、あんたら、法事の帰りか？」

言われてしまいました。確かに黒系のスーツだと、そう見えてしまいます。

ましてや、私と瑠希弥はそういう商売ですから、余計似合ってますね。

私は麗華の隣に座り、瑠希弥がその隣に座ります。

「う……」

瑠希弥が急に震え出しました。

「どうしたの、瑠希弥？ 冷房効き過ぎ？」

私が尋ねると、瑠希弥は首を横に振って、

「何かが来ます……。もの凄く悪意に満ちた何かが……」

「どういう事？」

私が更に尋ねようとした時、個室のドアが開き、男の人が入って来ました。

イケメンです。麗華の好みです。

でも、私は好きになれないタイプです。

瑠希弥の震えが酷くなりました。

「この人？」

私は瑠希弥に小声で尋ねます。

瑠希弥は黙って頷きました。

「今宵はお招きに預かり、光栄至極です。僕、有栖川光太郎です」

そのイケメンさんは、フツと笑って髪を掻き揚げました。

ナルシスト？

でも、その程度で瑠希弥が震えるはずがありません。

肝心の麗華は、有栖川さんの「イケメンビーム」で役立たずになっています。

私は震える瑠希弥の肩を抱き、

「貴女が感じている事を私に伝えて」

と囁きました。

「おうおう、今日は大漁の予感や！」

麗華は狂喜しています。

「今晚は」

次に入って来たのは、双子のイケメンさんです。

この二人からは「邪気」を感じません。

瑠希弥から伝えてもらったのは、恐ろしい波動でした。

有栖川さんは、「女子高生キラー」なのです。

彼が今まで付き合ってきたのは、全員女子高生。

しかも、頂く物だけ頂いたら、捨てているのです。

人の皮を被った鬼か悪魔ですね。

十代の瑠希弥が震えるはずです。

有栖川さんの背後には、幾人か自殺をした女子高生の霊が憑いています。

そして予想通り、有栖川さんは積極的な麗華を完全に無視して、瑠希弥の前に座りました。

「君、可愛いねえ。何歳なの？」

有栖川さんは、その裏の顔を隠して瑠希弥に尋ねます。

「じゅ、十八歳です」

瑠希弥は震えながら答えました。

「へえ、そうなんだ。大人っぽいね」

一瞬ですが、有栖川さんの裏の顔が見えました。

「何や、こいつ。子供は嫌いです、とか言いよったくせに」

麗華が小声で毒づきました。

「麗華、見えるでしょ、この人の後ろに」

「ああ、見えとる」

麗華もようやく冷静な目を取り戻したようです。

「あのオ、お仕事は何をされているのですか？」

双子のイケメンさんが、私達に話しかけますが、私も麗華も有栖川さんを見たままです。

「あのお……」

双子さんがそれでも笑顔で話しかけてくるので、

「ああ、霊能者や。悪霊を退治しとる」

と麗華が有栖川さんを見たままに言いました。

双子さんはビックリしています。

有栖川さんは瑠希弥に話しかけるのに夢中で、気がついていないようですが、彼に憑いている霊達が私達に敵意を剥きだしにし始めました。

「心配しないで、私達は貴女達の味方よ」

私の言葉に、女子高生の霊達は顔を見合わせました。

「有栖川さん、貴方に悪い霊が憑いています。今除霊しますね」

「え？」

有栖川さんは、ようやく自分の事を言われているのに気づいたようです。

私は麗華と息を合わせて帝釈天の真言を唱えました。

「インダラヤソワカ！」

バチバチツと雷撃が走り、有栖川さんを直撃します。

「ぎよええええ！」

有栖川さんは感電し、バツタリと倒れ伏しました。

「……」

啞然として固まる双子さん。ホツとした顔の瑠希弥。

「さあ、もう逝き。あんたらが呪って殺すほどの値打ちもないわ、このボケは」

麗華が女子高生達の霊を諭します。彼女達は頷き、消えて行きま
した。

「仕方ないなあ、有栖川はんは。もう潰れてもうたんか？」

麗華はガハハと笑い、

「じゃあないな。別のメンツ、呼ぶわ。それまで待っててな、蘭子」
でもその必要はありませんでした。

双子さんは、知らないうちに逃げ去っていたのです。

初めての合コンは、散々なものになりました。

西園寺蘭子でした。

女子校は怖い？

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、浄霊、お祓い、祈祷、占い、人探しと、様々な依頼を受けています。

成り行きで私の「弟子」になり、今は同居までしている小松崎瑠^{（小松崎）}希弥^{（きや）}とも、お互いにそういう趣味ではない事がわかり、ホツとしたところですよ。

そんな中、瑠希弥がまたちょっと怖いところから依頼を受けて来ました。

私に怖い事があるのかと、親友の八木麗華なら言いそうですが、今の私にはとても怖いところです。

依頼主は、女子校の理事長なのです。

理事長が怖いわけではありません。

私は、学校はずっと共学でしたので、「女子校」という場所がよくわかりません。

「女子しかないのですから、安心ですよ、先生」

瑠希弥はそんな事を言っています。

でも、違うのです。

随分前になりますが、一度だけ女子校に仕事で行った事がありま

す。

その時は、除霊ではなく、校舎の位置関係を鑑定して欲しいという依頼でした。

その時、私は筆舌に尽くし難いほどの憎悪を感じました。

それも一つや二つではないのです。

嫉妬、羨望、怒り。

様々なものが渦巻いていて、震えてしまいました。

トラウマというほどではないのですが、そんな体験があるので、女子校が怖いのです。

そして、私と瑠希弥は、その女子校へと赴きました。

もちろん、私が憎悪を感じたところとは違います。

校門をくぐり、校庭に入っても、あの時のような感じにはなりません。

「良かった」

つい、そう言ってしまいました。

「どうされたのですか、先生？」

瑠希弥が尋ねます。

「ううん、何でもないわ」

私はそう言って誤魔化しました。その時でした。

「あああ！　すっごく奇麗なお姉さん達！」

どこかからそんな声が聞こえました。

誰の事？　お惚けではなく、私は周囲を見回しました。

「きゃああ、ホントだあ！　奇麗なお姉さん達だあ！」

ふと気がつくと、私と瑠希弥は、女子高生達の集団に囲まれていました。

「化粧品、どこの使ってます？」

「そのマスカラ、素敵ですね！　どこで買ったんですか？」

「香水もいい香りイ！　通販ですか？」

パニックになりそうなくらい、私は衝撃を受けていました。

「貴女達、お客様に失礼ですよ！　教室に戻りなさい」

年配の女性が一喝します。すると、まさに蜘蛛の子を散らすように女子高生達は逃げて行きました。

「失礼しました。私はこの高校の理事長を務めます、大久保利子です」

「西園寺蘭子です。こちらは助手の小松崎瑠希弥です。よろしくお願ひ致します」

私と瑠希弥は名刺を大久保理事長に差し出しました。大久保理事長も革の名刺入れから名刺を取り出し、

「こちらこそ、よろしくお願ひ致します。さ、こちらへ」

理事長は私達を先導して理事長室に案内してくれました。

「驚かれたでしょう、西園寺先生？」

理事長が廊下を進みながら言います。学校関係者の方に「先生」と呼ばれると、いつも以上に違和感を覚えます。

「はい。皆さん、元気で明るくて、いいですね」

「ええ。上辺はね」

「え？」

理事長の声のトーンが変わりました。どうしたのでしょうか？

「女性の方がいらっしやると良いのですが、男性が来ると、敵意むき出しになって……」

私はその言葉にハツとなりました。そして瑠希弥を見ます。

「先生、この学校、妙な気に包まれていますよ」

瑠希弥は霊媒師なので、私以上に気に敏感です。

これは、霊の気ではありません。生きている人の気です。

「では、お茶でも飲みながら、詳しいお話を……」

私は、理事長がドアを開きかけたのを制して、

「原因がわかりました。理事長先生は、こちらでお待ち下さい」

と言い、瑠希弥に、

「行きましょう」

「はい、先生」

私はその妙な気を出している人の元に向かいました。

「先生、これ……」

瑠希弥は顔を赤らめています。

「ええ。淫の気ね。それも、女性が女性に発しているわ。さっきの校庭での出来事も、この気が原因ね」

「そうみたいです」

瑠希弥は気に吞まれてしまいそうです。

「瑠希弥、この数珠を。そして、摩利支天まりしてんの真言を唱えて！」

「はい、先生！」

瑠希弥は数珠を持ち、真言を唱えます。

プロでしょうか？ 瑠希弥が吞み込まれそうになるほどの淫の気を発するなんて。

気の元は、体育館です。

まだ授業は始まっていませんから、生徒達はいません。

体育館の用具室。そこから発せられているようです。

私も数珠を握っていないと吞み込まれそうです。

一体これは？

用具室の扉に手をかけ、私は一気に開きました。

「……………」

一瞬、凍りつきそうになりました。

そこには、二人の若い女性の先生がいました。

しかも、全裸で、妙な油に塗れて互いを舐め合っています。

「はー！」

二人は私達に気づき、慌てて服を手に取り、肌を隠しました。

「学校で、そんな淫術を行ってはいけませんよ」

私は用具室に漂う油とお香の匂いを消すために、窓を開けました。

話を聞いてみると、二人はこの学校の卒業生で、ずっと互いに惹かれ合っていたそうです。

そして、その思いが引き寄せたのか、二人共この高校の先生になりました。

最初は互いのアパートでふざけ合っている程度でしたが、やがてそれが抑え切れなくなり、ここで互いの「愛」を確かめ合うようになったそうです。

「でも、生徒達にまで悪影響が出ているなんて……」

さすがに先生です。生徒を巻き込みかけていた事を知ると、泣き出してしまいました。

「淫の気は、強さによっては人を惑わせて狂わせます。少なくとも、職場では慎んで下さい」

私は穏やかな口調を心がけて諭しました。

「はい。申し訳ありませんでした」

二人の先生は泣きながら頭を下げました。そして、

「この事は、理事長には……？」

私は瑠希弥と顔を見合わせてから、

「説明するのが恥ずかしいので、言いません」

と答えました。二人はまた頭を下げました。

「ありがとうございます！」

私と瑠希弥は理事長室に戻りました。

「悪い気はお被いしました。もう大丈夫です」

「原因は何だったのですか？」

理事長が興味津々の目で尋ねたので、私はニツとして、

「お知りにならない方がよろしいですよ」

と返しました。理事長は蒼ざめていました。

そして、帰り道です。

「私、修行が足りませんね。淫の気を感じて、呑み込まれそうになっ
つてしまっ……」

久しぶりに瑠希弥が泣きそうです。

「仕方ないわ。まだ瑠希弥は若いのだから。正直言って、私も飲み
込まれそうだったけど」

「そうなんですか」

瑠希弥はホッとして笑顔になりました。

そんな彼女の笑顔を見てホッとする私……。

考えるの、やめますね。

西園寺蘭子でした。

八木麗華は心を入れ替えたのか？

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊や祈祷、骨董品の鑑定、占い等もしております。

先日、同居人の小松崎瑠希弥こまつかきと共に訪れた女子校で、衝撃的な光景を見てしまいました。

世の中にはまだまだ知らない事がたくさんあると思いました。

何だか、小学生の作文みたいですが、幼児退行しそうな程、私にとっては刺激が強かったです。

今日は事務所に親友の八木麗華が遊びに来ています。

そのせいか、瑠希弥はソワソワしており、落ち着きません。

「ほお。随分とおもしろいもん見たな、蘭子」

麗華はソファにふんぞり返ってガハハと笑い、女子校の出来事のご感想を述べました。

「ウチも見たかったなア、先生同士の絡み」

麗華はニヤニヤして私を見ます。私はムツとして向かいのソファに座り、

「な、何よ、麗華？」

「麗華は私に顔を近づけて、

「瑠希弥とそないな気イにならんかったか？」

「バ、バカ！」

私は瑠希弥に聞こえたのではないかと心配して彼女を見ましたが、瑠希弥は麗華を見るのが怖いのか、iPadに集中していました。

「今度そんなハレンチな事を言ったら絶交よ、麗華！」

私は本気モードで麗華を睨みます。途端に麗華は焦り出して、

「あ、アホ、そないに怒らんでもええがな。冗談やて」

「冗談にも程度問題があるのよ、麗華」

「悪かったがな、蘭子。許してエな」

麗華が泣きそうなので、私は許してあげました。

「それで、今日は只遊びに来ただけなの？」

私は本題に入るために言いました。麗華はニツとして、

「さすが蘭子や。ウチは遊びに来た訳やない。仕事を手伝^{てつて}てほし
いんや」

「どんな仕事？」

すると麗華は、

「ついて来ればわかるて」

と言うだけで、詳しい話をしてくれませんか。

そんな訳で、私と瑠希弥は、麗華に連れられてある川の畔ほとりに行きました。

その川は結構広い川で、たくさんの船が行き交っています。

「わかったやろ、仕事の内容が？」

麗華が私達を見て言います。

私は川を見渡して、

「この川、先日の豪雨で、たくさんの方が亡くなっているのね」

川のうちここに、まだ自分が死んでしまった事に気づいていない霊が幾人もいます。

このままでは、その霊達は悪霊化してしまうのです。

「ウチ一人だと、手に余るねん。力貸してくれへんか？」

「いいわよ。ね、瑠希弥」

私が瑠希弥を見ると、彼女は会心の笑顔で、

「はい、先生」

私達は声を揃えて観世音菩薩の真言を唱えます。

「オンアロリキヤソワカ」

彷徨い歩いていた霊達が観音様の慈悲の光に包まれ、天へと昇って行きます。

霊達は、皆私達に微笑みながら、消えて行きました。

「おおきに、蘭子、瑠希弥」

瑠希弥は麗華にお礼を言われて恥ずかしそうに微笑みます。

「で、一体いくらで請け負ったの、この仕事？」

私は裏に何かあると思い、単刀直入に尋ねました。すると麗華は、

「阿呆、ウチかてたまには只働きもするがな。人を守銭奴みたいに言わんとして」

私は嬉しくなりました。ようやく麗華も「世の中、金」主義から離脱できたようです。

「そうなの。ごめんなさい、麗華」

私が頭を下げると、麗華は照れ臭そうです。

「そこまでせんでもええがな、蘭子。ウチは今までそないな事ぎょうさんして来とるんやから、しゃあないがな」

どうしたのでしょうか？ 麗華がおかしいです。ここまで人は変わるものなのでしょうか？

その時、妙な音楽が鳴り響きました。

「おっと、ウチの携帯や」

麗華は何故か胸の谷間から携帯を取り出して、

「毎度、鳥楯ローンでおま」

と言いながら、私達から離れて行きました。

とりたてローン？ 何の事でしょう？

後でじっくり訊かせてもらう事にします。

西園寺蘭子でした。

蘭子と麗華

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、お祓い、人探しなどをお引き受けしています。

先日、親友の八木麗華が事務所に来て、一緒に近くの川で洪水で亡くなった人達の霊をあちらの世界に送る仕事をしました。

麗華が只働きをしたので、世界が滅びるのかと思いましたが、彼女はその裏でしっかりとサラ金の取り立てのアルバイトをしていたのです。

何も変わっていない麗華にホツとしましたが、正直呆れもしました。

「しゃあないがな。サラ金の取り立てかて、立派な人助けや」

麗華は開き直りました。

「わかりました。もう貴女は私には近づかないで下さい。今日を最後に、親友でも友達でも知り合いでもありませんから！」

私は麗華の態度に我慢ができず、そう言い放ちました。

「え、蘭子、そない怒らんでも……」

狼狽える麗華に更にダメ押しです。

「貴女は、その鳥楯ローンがどれほどの人達を自殺に追いやっている

るのか、感じていないの？ 霊能者として最低よ！」

「！」

麗華はその言葉にアツとなりました。

「ウ、ウチ……」

麗華は涙ぐんで俯きました。でも私は許しません。

「行きましょう、瑠希弥」

「は、はい、先生」

私は、瑠希弥が追い込みをかけられたサラ金が鳥楯ローンなのを知っていたので、余計腹が立ってしまったのかも知れません。

「先生、あの……」

瑠希弥もその事に気づいたようです。

「すみません、私のせいで、八木様と……」

「貴女は悪くないわ、瑠希弥。麗華には、本気で反省してもらわないと」

私は瑠希弥の心の傷を心配しただけではありません。

人の死に乗った商売を平気で続けているような人間達と、例えばお金だけとは言え、繋がりを持つ事は、麗華のためにならないのです。

悪くすると、麗華は霊能力を失うかも知れないのです。

もし、彼女が悪霊退治を始める前だったら、それも人生の岐路でしかなかったでしょう。

でも、今力を失う事は、彼女にとって危険なのです。

麗華はその戦い方の乱暴さで、悪霊達ばかりか、敵対する勢力からも怨まれています。

麗華が力を失ったと知れば、我先にその連中が彼女を襲撃するでしょう。

もちろん、その時は私が全力で彼女を守ります。

でも、守りきれない時もあるのです。

だからこそ、麗華には本気で反省してもらいたいのです。

「方便なのですね？」

瑠希弥が私を嬉しそうに見ます。見抜かれたようです。

「ええ。あの子とは、一生付き合っ行ってきたいから、今は厳しく接するの」

私は真っ直ぐな眼差しの瑠希弥を見て、照れ臭くなりました。

「私も、先生と一生お付き合いしたいです」

「瑠希弥」

つい、涙ぐんでしまいます。それを見て、瑠希弥が号泣しました。

「先生」

涙脆過ぎですね、私達。

事務所に戻った時、麗華から携帯に連絡が入りました。

「はい、西園寺蘭子です。只今留守にしております。メッセージをどうぞ」

ふざけて言いました。すると麗華は、

「ご、ごめんなさい。ウチ、いえ、私がまちご、いえ、間違っていました。許して下さい。ほんま、いえ、本当に反省しています」

麗華は一生懸命お詫びの言葉を言っています。

「お帰り、麗華。私の一番の親友」

私がその声をかけると、どんな動物が雄叫びを上げたのかというような声で、麗華が泣き出しました。

「また連絡するね」

泣き止まない麗華に言つて、私は通話を切りました。

本当に反省したのかな？

でも、それが麗華なのですから、これからもうまく付き合つて行くしかないですね。

「さあ、今日も仕事、頑張りましょう、瑠希弥」

「はい、先生！」

気合を入れ直します。

西園寺蘭子でした。

死の予告

私は西園寺蘭子。霊能者です。

先日、親友八木麗華のあまりにも考えなしの行動をかなり強めに窘めました。^{たしな}

嫌われてもいいと思って言ったのです。

でも、麗華はわかってくれて、謝ってくれました。

そんな私達のやり取りを見ていて、同居人の小松崎瑠希弥が、^{こまつかき るきや}

「私も、先生と一生お付き合いしたいです」

と言ってくれたので、私は泣いてしまいました。で、瑠希弥は号泣。

涙脆い瑠希弥の波動が、私も涙脆くしたのでしょうか？

そんなある日。

仕事を終えて、私と瑠希弥は私のマンションに車で向かっています。
した。

「先生！」

霊媒師としては、私より遙かに勘が鋭い瑠希弥が何かを感じたよ

うです。

「どうしたの、瑠希弥？」

私も自分の「アンテナ」を敏感にし、周囲を探りました。

「そこを左です。何かがいま……」

彼女は震え出しました。

私にはまだ何も感じられません。

「？」

大通りを左折して脇道に入ると、遂に私にも瑠希弥が震えたものの正体がわかりました。

「何、あの女の子？」

私は車を路肩に寄せて止め、ある中年男性の後ろにニヤニヤしながら立っている五歳くらいの女の子を見ました。

服装は黒い着物です。髪は腰まで届きそうな長さ。可愛い顔をしています。

彼女は当然の事ながら、人ではありません。

かと言って、悪霊でもありません。

でも、瑠希弥ばかりでなく、私まで震え出すほどの強烈な霊威を

放っています。

その時、私達の後ろから一台の大型トラックが走って来て、その中年男性の方へ突っ込んで行きました。

驚いた事にそのトラックには誰も乗っていません。

「え？」

私と瑠希弥は、あまりの出来事に動く事ができません。

トラックは中年男性を跳ね飛ばし、その先の電柱にぶつかって停まりました。

男性は即死です。周囲にいた人達が驚いて集まり出しました。

後ろにいた女の子はその男性の霊を伴い、空へと浮き上がって行きます。

ほんの一瞬、彼女は私達を見ました。

生まれて初めて、死を恐れた瞬間でした。

「あ、あれは………？」

瑠希弥が震えたままで呟きます。

「死神、ですか？」

彼女は恐る恐る言いました。その言葉をあの女の子に聞かれるの

が怖いかのよう。

「死神かどうかはわからないわ。でも、尋常ではない靈威だった。人の死を司ると言われている死神が、あれほど強烈な力を放つとは思えない。もしそうなら、私達は四六時中死神を感じるはずよ」

私の推理は何の根拠もないものですが、あの女の子は死神ではないと感じました。

「そうですね」

瑠希弥も少しホツとしたのか、少し微笑みます。

「帰りましょう」

「はい」

私達はマンションへ帰りました。

そして数日後。

私と瑠希弥は、またあの女の子を見ました。

今度はビルの建設現場の前です。

女の子の前には、携帯電話で話す若い男性が立っています。

女の子はその男性を見上げ、ニヤニヤしていましたが、私達に気

づくとその笑みを消しました。

私と瑠希弥は女の子が何か仕掛けてくると思い、身構えます。

しかし、女の子は上を指差すと、消えてしまいました。

「え？」

私達はハッとして空を見ます。

次の瞬間、若い男性の上に数メートルはある鉄骨が落ちて来ました。

「うー！」

私と瑠希弥は思わず目を背けました。

男性は鉄骨の下敷きになり、即死です。

辺りは騒然としました。

何者？ 私は瑠希弥と顔を見合わせました。

『教えてしんぜよう』

不意にその女の子が私の足元に現れました。

私と瑠希弥はハッとしました。

すると女の子は面白そうに笑って、

『我は、人を殺めながらもその罪を免れし者を地獄に導く者。お主らの言う死神とはちと違う』

と言つと、消えてしまいました。

つまり、先日の中年男性も、さっきの若い男性も、殺人者だといふ事です。

「天網恢恢疎にして漏らさず」

その諺を思い出しました。

西園寺蘭子でした。

新たなる敵

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、祈祷、お祓い、人探し、厄除け等、承っております。

先日、正体不明の女の子の霊を見かけ、その子が「罪を免れた殺人者を地獄に送る」のを生業なりわいとしている存在だと教えられ、驚愕しました。

「怖いです。そんな存在が、私達を見ているなんて」

私の同居人の小松崎瑠希弥こまつさき るきやが眩きました。

「そうね」

私達はいかに弱い存在なのかを思い知った事件でした。

そんな私達の思いをまるで無視するような性格の人物が現れました。

私の親友である八木麗華です。

彼女はここ何日か、私に叱られた事を気にしていたのか、連絡はくれますが、事務所には来ませんでした。

ですから、会うのは二週間ぶりくらいです。

「最近姿を見せないから、嫌われたのかと思ったわ」

私が出迎えてそう言つと、麗華はギクツとした顔をして、

「そ、そんな事ある訳ないやないか。あんたは死ぬまで親友やで」

と酷く慌てた様子で言いました。

「ありがとう、麗華」

相変わらず、瑠希弥は麗華が苦手のようので、ビクビクしています。

「で、今日はどうしたの？」

ソファに座りながら尋ねます。すると麗華は、

「除霊の依頼を受けたんやが、今まで何人かの霊能者が死んどるらしいねん」

私は思わず瑠希弥と顔を見合わせました。

「取り敢えず、どんな霊なのか教えて」

私は先を促しました。

麗華の話だと、除霊の対象は、ある武家に奉公に上がっていた少女の霊です。

その少女は武家に奉公に上がると、主に暴行あゐじされました。

すると奥方はそれを少女が誘ったせいだと言いがかりをつけ、毎日のように折檻せうかんをしたそうです。

少女は疲れ果てて、庭の井戸に身を投げて死んでしまいました。

奥方の怒りはそれでも収まらず、少女の遺体は服を剥ぎ取られ、川に投げ込まれました。

遺体は様々な動物に食われ、腐り、下流の岸で漁師に引き上げられました。

それを見かけた旅の僧が少女を哀れに思い、供養をし、付近の人々の助けを借りて碑を建てたそうです。

そのおかげで少女は怨霊にはならず、成仏しました。

ところが、何百年も経った現在、その供養の碑を工事のために移動する際、落として壊してしまっただけです。

工事現場で次々に怪奇現象が起こり、作業員が怪我をしました。

著名な霊能者達が訪れ、除霊をしようとしたましたが、皆怨霊に取り殺されてしまったそうです。

「どう思う、蘭子？」

麗華が尋ねます。私は顎に手を当てて、

「妙ね」

麗華はニヤツとして、

「あんたもそう思うか？ そやねん、妙やねん」

後ろで聞いている瑠希弥には意味がわからないようです。

「どついう事なんですか？」

私は瑠希弥を見て、

「作業員達は怪我ですんでいるのに、どうして霊能者だけが命を落としたのか？ 不思議でしょ？」

「ああ、そうですね」

瑠希弥も意味がわかったようです。

「少女の霊は無関係ね。何かどす黒いものを感じるわ」

私は工事現場を探ってみて、虫酸が走りました。

「そつやる？ とんでもない事をしとる連中がおるねん。大体、何が目的かはわかつとるがな」

麗華も苦々しそつに言いました。

「碑が落ちたんも、怪奇現象が起こつたんも、霊能者が死んだんも、全部同じ奴の仕業や」

「ええ」

私は立ち上がりました。麗華も立ち上がります。

「瑠希弥、出かけるわよ。一刻も早く、この一件解決しないと」

「はい、先生」

私達は事務所を出て、現場に向かいました。

犯人は私達が動くのを予測して、必ず現場で仕掛けて来ると思ったからです。

やがて私達は現場に到着しました。

すっかり再開発された河岸は、恋人達のデートスポットのようです。

カップルばかりの場所に女三人でいると、何だか惨めになって来そうです。

「あれね」

そんな考えを振り切って、私は破損した碑のそばに行きました。

ブルーシートがかけられ、周囲にはロープが張られ、「立ち入り禁止」の札が下げられています。

「ここには何もいないわ。やっぱりそういふ事ね」

私が言うと、麗華が、

「そういふ事や」

するとそこへ、工事関係の人が現れました。

「お待ちしておりました、八木先生、西園寺先生」

どうやら建設会社のお偉いさんのようです。

「如何でしょう？ 除霊はできますか？」

彼は恐る恐る尋ねます。麗華が怖い訳ではありません。

怨霊に祟られるのではないかと危惧しているのです。

「心配あれへん。もう除霊はすんだ。大した事なかったわ」

麗華がそう言った時、黒いものが動きました。

「式神？」

黒いものは、陰陽師が使う式神でした。

霊能者達は式神に攻撃され、殺されたのです。

「オンマリシエイソワカ！」

私は摩利支天まりしてんの真言を唱えました。

式神はグオオオと叫び声を上げて後退します。

「瑠希弥！」

「はい」

瑠希弥は建設会社の人を誘導し、碑から離れました。

近くにいたカップル達が、ビックリして私達を見えています。

「手緩いで、蘭子！　こういう奴には、これや！」

麗華が印を結び、大黒天の真言を唱えます。

「オンマカキヤラソワカ！」

式神はその威力の前に煙のように消えてしまいました。

「ほほほ、さすがですな、お二人共」

そこに恰幅のいい穏やかな笑顔のおじさんが現れました。

半分禿げ上がった頭と、やけに太い指が「キモさ」を倍増させています。

霊能者ではないようですが、妙な気を纏まとっています。

後ろにはボディガードのような屈強そうな男性が二人います。その人達が陰陽師のようです。

「誰や、あんた？」

麗華がズイツと進み出て尋ねます。おじさんはニヤツとして、

「私は鴻池大仙^{こうのいだいせん}。ちっぽけな団体をやらせていただいております」

鴻池大仙？ 日本最大の新興宗教の宗主です。まさかこの人が事件の黒幕？

「そうですか。貴女方も、私達と対立するおつもりですか。よくわかりました」

急に大仙の顔が兇悪になりましたが、すぐに元の温和な顔に戻ります。

「さ、帰りましょう」

大仙は二人の陰陽師を伴って、立ち去りました。

「蘭子、ちとヤバいな」

「そうみたいね」

途轍もなく大きな団体の宗主に睨まれてしまいました。

これからどうなるのかしら？

西園寺蘭子でした。

カルテット結成

私は西園寺蘭子。霊能者です。除霊、お祓い、祈祷、占い、人探しと様々なご要望にお答えしています。

鴻池大仙こうのいたいせんと言う、日本最大の新興宗教団体の宗主に会いました。

彼は表の顔は「菩薩」ですが、裏の顔も持っていました。

目的がはっきりしないのですが、陰陽師を使って著名な霊能者を殺害したのです。

私達は事務所に戻りました。

「どうしてああいう男のところには、あの女子は現れないのですよう、先生？」

同居人の小松崎瑠希弥こまつまき るきやが言います。純粹な彼女は、本気で怒っています。

瑠希弥が言う女の子とは、「殺人の罪を免れた者を地獄に送る」と言った女の子の事です。

「確かにね。どうしてかしらね」

私も何となく不条理に思いました。すると、

「答えは簡単や。奴らが殺した霊能者が、奴ら以上に悪い連中だったからや」

あ、まだいたんだ。などと言えば、烈火のごとく怒るでしょう。

親友の八木麗華が、相変わらず丸見えな座り方でソファにふんぞり返って言います。

いくらここには女子しかいないとしても、恥知らずです。

瑠希弥が麗華を見ないのは、そのせいもあるようです。

「連中の目的は、悪い霊能者を退治する事や」

麗華が得意顔で言い放ちます。

「どうしてそんな事がわかるの？」

すると麗華は更に鼻を高くして、

「ウチにはわかるねん。どや、凄いやろ」

と半分見えている胸を張ります。

「ホームページに書かれていますね」

瑠希弥がパソコンを操作しながら言いました。

彼女が来てくれて、我が事務所は急速にIT化が進んでいます。

「いらん事、言うな！」

麗華が立ち上がって怒ったので、瑠希弥はビックリして私の後ろに隠れます。

「も、申し訳ありません、八木様」

瑠希弥の代わりに私が睨み返します。

「瑠希弥を苛めるなら……」

そこまで言うと、麗華は慌ててソファに座り、

「アハハ、冗談やで、瑠希弥ちゃん。蘭子の弟子のあんたを、ウチが苛める訳ないやないか」

と作り笑いをして言い繕います。本当に呆れるくらい変わり身が早いです。

「ところで、ホームページって、何？」

私は恥を忍んで尋ねました。麗華は勿論の事、瑠希弥までが私を悲しそうな目で見ます。

痛い。その視線が痛いです。

「そういう事やから、ウチらは狙われんよ。心配せんでええ」

麗華は私をあまり追い詰めるのはまずいと思ったのか、話題を切り替えました。

「でも、本当にそうなのかしら？ さっきあのおじさんは、明らかに私達に敵意を見せたし、あの式神しきがみも私達を殺そうとしたわよ」

私は麗華の考えが納得できず、反論してみました。

「ウチらが敵対するつもりはない事を表明すれば、大丈夫や」

麗華は「見て見ぬフリ」をするつもりようです。

儲からない事には関わらない性分は、全然改善されていないようです。

「わかりました。貴女は今回はお休みなのですね？ お疲れ様でした、お帰り下さい」

私はこの前あるイベントで見かけた「ロボット受付」の女性の口調を真似て、麗華に言いました。

「え？」

ギクツとした麗華が、私を見ます。

「どうぞ、出口はあちらです」

私はニッコリして麗華に玄関のドアを指し示します。

「あ、いや、その……」

麗華は、私が本当に怒ると睨むのではなく笑顔になるのを知って

いるので、さっきより慌てています。

「じよ、冗談やがな、蘭子。ウチがお休みする訳ないやないか」

彼女は顔を引きつらせて言いました。

「じゃあ、決まりね。大仙の団体を調べるわよ、瑠希弥」

「はい、先生」

瑠希弥はパソコンを高速タイプしました。

「大仙の率いるサヨカ会は、信者数一千万人の一大宗教団体で、財界、政界、芸能界にまでその力を及ぼしています」

瑠希弥が報告します。

「裏サイトを調べてみい、瑠希弥。連中の悪行が書き込まれとる。すぐに削除されるんで、見るの難しいけどな」

麗華がアドバイスしてくれました。

「ありがとうございます、八木様」

瑠希弥が怖々と麗華を見て言います。すると麗華は、

「麗華さんでええよ。それが嫌やったら、八木先生」

と何だかよくわからない要求を出しました。

「は、はい、八木先生」

瑠希弥には、私たちの事は「先生」が呼びやすいのでしょうか？

何だか複雑です。

「蘭子」

「何？」

いつになく真剣な表情の麗華が私を見ました。

「しばらく、G県の子供には連絡取らん方がええ。ウチも慶君には電話せんようにする」

「そつね」

G県の子供とは、靈感少女の箕輪まどかちゃんの事です。

慶君とは彼女のお兄さんの慶一郎さんの事です。

確かに彼女達が私達の関係者だと知られたら、危険です。

「あの女とは連絡取れんのか？」

「あの女？ 誰？」

私には心当たりがありません。

「あの黒尻くめの女や。あいつなら、力貸してもらえそつやからな」

「ああ、小倉冬子さんね」

確かに。でも、冬子さんは慶一郎さんと関わりがあるから、まずいのでは？

「まさか麗華、冬子さんをこの機会に……」

私は恐ろしくなってそれ以上言えませんでした。

「アホ！ そんな事、考えるか！」

さすがにいくら麗華でも、そこまで酷い事は考えないでしょう。

「いくら油断したとは言え、一度はウチを倒したほどの女や。戦力は多い方がええしな」

麗華は本気のようにです。

「そうね。何か連絡する方法はないかしら？」

私はそう言いながら、麗華を見ます。

「な、何や？」

麗華はその視線に危険を感じたのか、ビクツとしました。

「わ、わかったがな。あいつを挑発すればええんやろ。するがな」

麗華はすねたように口を尖らせます。そして、

「おおう、ウチ、慶君と結婚したいなあ。今日にでもしたいなあ」と念じました。

「何ですか？」

冬子さんを知らない瑠希弥はキョトンとしています。

「さあ、行きましようか」

「行くってどこへですか？」

瑠希弥がますます不思議そうな顔になります。

「あいつは、ここには来られんのだ。外に行くで」

麗華がドアに向かいます。

「ここには来られない？」

瑠希弥は更に首をかしげました。

私達は、事務所があるビルの裏の駐車場に来ました。

「ここなら、来るやろ」

しばらくすると、辺りに妖気が漂い始めました。来たようです。

考えてみると、私もしばらく前にちょっと見かけただけで、冬子さんの顔を見るのは久しぶりです。

「私よ」

電柱の陰に黒尽くめの女性が現れました。長い髪が顔の半分を隠しています。

小学生の時の面影はあるのかどうかわかりません。何しろ、全然覚えていませんので……。

「な、な！」

瑠希弥は驚きのあまり、言葉が出ません。

「しばらくやったな。元気か？」

麗華が声をかけます。冬子さんは私に気づき、

「ひいい、西園寺蘭子！」

と震え出します。軽く落ち込む私。

本当に小学生の時、彼女に何をしたのかしら、私？

「小倉さん、お久しぶりね。今日はお願いがあって。こんな遠くまで呼び出してごめんなさいね」

私は笑顔全開で言いました。冬子さんはようやく震えるのをやめ

て、

「私にお願い？」

私と麗華は、冬子さんに理由を説明しました。

説得は難航するかと思われましたが、彼女は、

「わかった。協力する」

と言ってくれました。そして、

「だから、もうくれんぼをするって言わないで、西園寺さん」

と凄く切なそうな顔で謎の言葉を言いました。

くれんぼ？ 何の事かしら？

こうして、史上最強と思われる四重奏^{カルテット}が結成されました。

果たしてこれで鴻池大仙に勝てるのでしょうか？

西園寺蘭子でした。

巨悪との開戦

私は西園寺蘭子。霊能者です。

先日、日本最大の新興宗教団体である「サヨカ会」の宗主である鴻池大仙こうのいだいせんに対する対抗手段として、親友の八木麗華、同居人の小松崎瑠希弥こまつりきや、そして妖術使いかと思えるくらい妖気が漂う謎の女性小倉冬子さんと共に「防衛隊」を結成しました。

鴻池氏が、どこまで私達の事を敵視しているのかわかりませんが、何かあつてから備えるよりは良いとの判断で、決定されました。

そして、怖がる冬子さんを説得し、私達は事務所に戻りました。

「ね、大丈夫でしょ？　かくれんぼなんかしないから、安心して」

私は作り笑いをして冬子さんに言いました。

「は、はい」

彼女はまだ私を怖がっているようです。

「あなた、ホンマにあの女に何したんか覚えとらんのか？」

麗華が私に囁きます。

「覚えていたら、苦労はしないわよ」

「そやな」

麗華はニヤニヤしています。一睨みすると、また慌てて、

「そない怒らんでえな、蘭子」

と焦り出すのが面白いです。

その時でした。

「先生、大変です！」

霊媒師としては私達を凌ぐ能力を持つ瑠希弥が叫びました。

「どうしたの、瑠希弥？」

「見て下さい、先生！」

瑠希弥が私の手を取り、自分が感じている事を伝えて来ます。

「ええ！？」

私は驚愕しました。

ビルの外の駐車場。

ついさっきまでいたところです。

私の車が、燃えています。

まだローンが半年残っているのに……。

「何て事を！」

私は瑠希弥に目配せして事務所を飛び出しました。

「どないしてん、蘭子？」

麗華が追いかけてきます。冬子さんはフワフワとついて来ているようです。

「ああ」

私達が駐車場に着いた時は、もうそこには車があった形跡しかなく、お気に入りのCDも、通販で買った高級ワックスも、全部消し炭になっていました。

「先生イ」

瑠希弥はすでに号泣しています。

確か、助手席には瑠希弥がカーシヨップで選んだクッションがありました。

彼女は私に、

「これを着けても良いですか？」

と訊いて、私が快諾したのを凄く喜んでいたので。

「何や、これ？」

麗華が、焼け跡近くに置かれている紙を拾い上げました。

「天誅」

毛筆でそう書かれています。何が「天」で、何が「誅」だということでしょうか？

「早速仕掛けて来たようやな」

麗華は私を慰めるように肩を抱いてくれました。

「逃がさないわ！」

突然冬子さんが動きます。

彼女は何やら呪文を唱え出しました。

「ウゲゲエエ……」

悶え苦しみながら、一人の黒尽くめの男が車の陰から現れました。

鴻池氏の子飼いの陰陽師のようです。

その男は、ビデオカメラを持っていました。

「これで何しようとしてたんや？」

麗華が苦しむ男の襟首をねじ上げ、カメラを顔に突きつけます。

「し、知らん……」

「知らんはずないやろ？ 嫌でも喋ってもらつて」

麗華が拳を振り上げた時、瑠希弥が、

「八木先生、その男から離れて下さい！」

と叫びました。

「な、何や？」

麗華は瑠希弥の絶叫に驚き、男から離れました。

「ぶへ！」

男は目、鼻、口、耳から血を吹き出し、そのまま前のめりに倒れました。

「ぐほ、ぐほ……」

男は何度か痙攣してから、絶命しました。

「どこから？」

私達は周囲を見渡しましたが、

「どこにもいない。こいつに仕掛けられた呪術よ」

冬子さんが男の首の後ろを見せてくれました。

そこには、何やら怪しい文字が書き込まれています。

「喋られる前に、口を封じる手も打ってあるっちゅう事が」

麗華はムツとして言いました。

どうにも気分の悪い相手です。

「仕方ないわね。溜希弥、お願い」

「はい、先生」

溜希弥が霊媒師として気を集中し、たった今死んだ男の霊を降霊させます。

「その手があつたか」

麗華が感心して口笛を吹きました。

「貴方達は何をしようとしているの？」

私は男の霊に語りかけました。

「我々の使命は、日本の浄化……。極楽浄土の実現……」

何それ？
御伽噺？

おとぎばなし

そう言いたくなるような美辞麗句です。

でもこの男は恐らく、本当にそう思い込まされているのでしょ

怖いのは、そういう人達が数え切れなくらいたくさんいるかも
知れないという事です。

「ふああああ！」

瑠希弥が苦しみ出します。全身の血管が浮き上がり、今にも血が
吹き出しそうです。

「まさか！」

私は麗華と顔を見合わせます。

「この男、霊体にも術をかけられてるわ」

冬子さんが言い、

「大丈夫、任せて」

再び彼女は呪文を唱えます。それにしても冬子さん、貴女は何者？

「うっっっ……」

瑠希弥の苦しみが次第に収まり、男の霊は瑠希弥から離れ、消え
てしまいました。

「信者達の魂まで縛っているというの？」

私はサヨカ会の恐ろしさを身に沁みて感じました。

鴻池氏は、只の欲の皮の突っ張ったおじさんではないようです。

本気で日本を「変えよう」としている。自分の都合の良いように。

何とかしないと、取り返しがつかなくなりそうです。

「もう、後には退けんな。いや、後になんか退きとつないけどな」

麗華が苦々しそうな顔で言いました。

私も同じ気持ちです。

西園寺蘭子でした。

サヨカ会の力

私は西園寺蘭子。霊能者です。

サヨカ会と言う新興宗教の宗主である「うづのいはいせん」鴻池大仙に敵視された私達。

彼は早速配下を送り込んで来ました。

まだ挨拶程度なんでしょうが、私の大切な車を消し炭にされてしまいました。

仕掛けたのは陰陽師でしたが、彼はサヨカ会の別の陰陽師に抹殺されました。

「死体が転がっている以上、警察に届けん訳にはいかんやろ」

親友の八木麗華が言います。同居人の小松崎「こまつさき」瑠希弥「るきや」は震えています。

「でも、この状況を何て説明するの？ 私達が疑われるわよ」

私が麗華に言った時、パトカーのサイレンが近づいて来るのが聞こえました。

「え？」

私達は互いに顔を見合わせます。

「しまった、ここまでが罠か!？」

麗華が叫びましたが、すでに私達はすっかり警官隊に囲まれました。

「無駄な抵抗はやめなさい。君達は完全に包囲されている」

テレビの刑事ドラマでよく聞くセリフが、拡声器を通して聞こえて来ます。

「任せて」

妖術使用のような小倉冬子さんが動こうとするのを私は止めました。

「待つて。ここで戦っても、私達が不利になるだけよ。様子を見ましよう」

「はい」

冬子さんは私に腕を掴まれたので、硬直しています。

こんな状況ながら、とてもショックです。

どうしてそんなに怖がられるのかしら？

私達は護送車に押し込まれ、機動隊に監視されて、近くの警察へと連行されました。

「おっさん、口臭いな。こっちに顔向けんといてんか」

麗華が機動隊の一人に毒づきます。機動隊員は麗華を睨みますが、何も言いません。

しばらくして、私達を乗せた護送車はある所轄署に到着しました。

「さあ、降りろ」

まるで容疑者のような扱いです。いえ、すでに容疑者なのかも知れません。

私達はそのまま建物奥の留置場に連れて行かれて、一人一人別々の牢屋に入れられてしまいました。

「お前らが、靈感商法で一般市民を惑わして、多額の金銭を騙し取っているのはわかっている」

捜査員の中の一人が進み出て言います。その背後を固めるように五人の制服警官が整列します。

その捜査員は麗華好みのイケメンですが、さすがの麗華もこの状況ではそんな感情は湧かないでしょう。

「思ったのですが……」。

「おお、あんた、ええ男やな。どや、ウチと付き合わへんか？」

麗華はマイペースでした。

「ふざけるな。靈感商法だけならまだしも、とうとう殺人まで犯したお前らとなど、誰が付き合うか！」

イケメン捜査官はムツとして言います。私達は殺人の罪まで押しつけられるようです。

「せめてお名前と階級だけでも教えていただけませんか？」

私が言ってみます。するとその人は私を見て、

「私は左文字隼人警部だ」

と答えてくれました。心なしか、彼は顔が赤いです。どうしたのでしょうか？

麗華が何となく気に食わない顔をしているのが視界の端に見えましたが、この際それは無視です。

「今、鑑識が現場検証をしている。証拠が揃ったら、お前らを地検に送検する」

「ええ？」

私はビククリしました。麗華も怪訝そうな顔をしています。

警察と検察庁の関係はそれほど詳しい訳ではありませんが、その日のうちに送検なんておかしいです。

「楽しみにしている」

左文字警部はニヤリとして、ネクタイを直し、留置場を出て行きます。

私はその時、彼のネクタイに奇妙な紋が入っているのに気づきました。

「警部と制服警官達が出て行くと、麗華が、

「あいつのネクタイの紋、サヨカ会の紋やで」

「え？」

私と瑠希弥はギョツとしました。

「警察の内部にまで、根を張ってるんや。抜かったな」

麗華が齒軋りをします。

「様子を見ようと思ったけど、どうやらそれは無理みたいね」

私は腕組みをしました。

「どうしましょう、先生？」

瑠希弥は涙ぐんでいます。私は意を決して、

「冬子さん、お願い」

「はーい」

冬子さんは私に頼られたのが嬉しいのか、目を細めました。

どう見ても顔が引きつったようにしか見えないのですが、笑ったのだと思います。

冬子さんの呪文が留置場内を駆け巡り、牢の錠が全部壊れました。

「おお、凄いな、あんた」

麗華がニツとして冬子さんを見ます。また冬子さんは顔を引きつらせました。

くどいようですが、笑ったのでしよう。

こうして私達は警察を脱出しました。

しかし、それすらも彼らの罠だったと知るのは、もう少し後になってからでした。

どうなるのでしょうか、これから？

西園寺蘭子でした。

サヨカ会へ

私は西園寺蘭子。霊能者です。

先日から、新興宗教団体である「サヨカ会」に狙われています。

愛車を燃やされた挙げ句、その犯人を殺した容疑で警察に連行され、留置所に入れられてしまいました。

警察の内部にまでその信者がいるのを知った私達は、妖術使いの小倉冬子さんの力で留置所を脱出し、警察から逃走しました。

しかし、それすらも彼等の罠だったとは、その時の私達は知るべくもありませんでした。

「こうなったら、こっちから連中の本部に乗り込んで、決着つけるしかないな」

私達はある鉄橋の下に身を隠し、作戦会議中です。

血の気の多い親友八木麗華がヒートアップしています。

「麗華、落ち着いて。もう少し冷静にならないと」

私はいきり立つ麗華を宥なだめます。

「そやけど、街は警官だらげや。テレビやラジオやインターネットでも、ウチらの顔写真や名前まで出されてる。このままにしておいたら、ウチらは日本中に顔を知られて、とんでもない悪人に仕立て

上げられるで」

麗華は収まりません。

「確かにそうかも知れないけど。だからこそ、今は慎重に動かないといけないはずよ」

私は何とか麗華を落ち着かせようと思いました。

「あんたは悠長過ぎるんや、蘭子。ここは一気に片をつけんと、ホンマに取り返しがつかなくなるで」

麗華はどうしても決戦を挑もうとしているようです。

私は同居人で私の「弟子」である小松崎瑠希弥（こまつき るきや）を見ました。

「瑠希弥はどう思う？」

瑠希弥は麗華の視線を気にしながらも、

「情報が少な過ぎます。それに、サヨカ会の目的がよくわかりません。彼等はどうして私達を追いつめているのでしょうか？ 私達は彼等と敵対している訳ではないのに」

「そうね」

私は冬子さんを見ます。彼女にも意見を求めたかったからです。すると冬子さんは、

「西園寺さんが、何度かサヨカ会のビジネスを潰しているからよ」

と答えました。私はビクツとして麗華と顔を見合わせます。

「ビジネス？」

私は冬子さんに尋ねます。冬子さんは頷いて、

「西園寺さんは、G県のS村で、乗如という僧と戦ったでしょう？」

「ええ。そんな事もあったわね」

私は麗華を見てから冬子さんを見ます。

「彼等の組織はサヨカ会の外部団体なの」

冬子さんの言葉は衝撃的でした。麗華が身を乗り出して、

「なら、ウチを追い込んだあの坊主もそうなんか？」

「ええ」

冬子さんは頷いて麗華を見ました。

「それから、土御門瑠莉加つちみかど るりかという陰陽師も、サヨカ会と繋がりがあ
る」

「ええっ？」

あの礼儀を知らない若い陰陽師も、サヨカ会と関係がある……。
驚きです。

「それから、奥多摩にあった廃寺を取り壊して別荘を建てようとしていたのも、サヨカ会が出資している建設会社よ」

もう驚きを通り越して、怖くなりました。サヨカ会とはどういう組織なのでしょう？

「それにしてもあなた、サヨカ会に詳しいな」

麗華が若干疑いの目を冬子さんに向けました。すると冬さんは、

「私の両親は、サヨカ会の信者だったの」

「えっ？」

麗華ばかりでなく、私も瑠希弥もギョツとして冬子さんを見ました。

「でも、会を抜けようとして、事故に見せかけて殺されたわ」

「……」

言葉がありません。何という事でしょう。

「すまんかったな、冬子さん。堪忍な」

麗華がバツが悪そうに謝罪しました。すると冬さんは顔を引きつらせて、

「いいの。気にしてないから。とにかく、サヨカ会の組織は想像を

絶するわ。生半可な事では、何もできない」

確かにサヨカ会と戦うのは、相当大変なようです。

「でも、一つだけ希望がある」

冬子さんが言いました。私達は一斉に冬子さんを見ます。

「何、冬子さん？」

私は身を乗り出して尋ねました。

「今は言えない。確信がないから。それに言葉にしてしまうと、実現しなくなる可能性があるの」

「え？」

何だか意味不明ですが、話したくないのはわかりました。

「それから、サヨカ会は誘っている気がする」

冬子さんは更に謎めいた事を言います。

「誘っている？」

麗華が鸚鵡返しに尋ねます。

「ええ。多分、サヨカ会本部に近づく事は簡単にできると思っ。彼等は畏を仕掛けて待っているだろうから」

「畏、か」

私は麗華と瑠希弥を見ます。麗華はニヤツとして、

「畏上等や。このままここで辛気くさい顔してても何も始まらんわ。行くしかないで、蘭子」

「そうね。瑠希弥？」

私は、瑠希弥にどうするか確認をしました。

「行きましよう、先生。このまま追いつめられて行くのは、どうにも気持ちが悪いです。それにバツチャがいたら、絶対に戦えっつえうと思えます」

瑠希弥はすでに涙ぐんでいます。相変わらず涙腺が緩い子です。

「決まりね。行きましよう、サヨカ会本部へ」

私達は互いに頷き合って、鉄橋の下を離れました。

恐らく、相当激烈な戦いになるでしょう。

でも、今のままにしておけないのも確かです。

まだ危害が及んでいないG県の箕輪まどかちゃん達も安全とは言い切れません。

彼女達を守るためにも、私は戦います。

西園寺蘭子でした。

中央自動車道の怪

私は西園寺蘭子。霊能者です。

いろいろと考えた挙句、私、親友の八木麗華、同居人の小松崎瑠^{こまつざき}希弥^{きや}、そして、何かと関わりができた小倉冬子さんの四人で、富士山麓にあるサヨカ会の本部に行く事にしました。

絶対に罨。そこまでわかっていながら行かざるを得ないのは、守りたい人達がいるから。

私の車は燃やされてしまったので、麗華の車で移動です。

「狭いわね、この車」

比較的小柄な私と瑠希弥は、後部座席らしきところに座りました。

「しゃあないやん。これ、元々、ツーカーなんやから。我慢して」

麗華が運転席であっさり言います。

「ごめんなさい、西園寺さん。私が大きいです……」

冬子さんがすまなそうに私を見ます。私は苦笑いをして、

「仕方ないわ、冬子さん。大丈夫、心配しないで」

冬子さんは安心したのか、前を向きました。

私達は「全国指名手配犯」なので、変装のため、サングラスとマスクをしました。

パツと見、凄く怪しい雰囲気です。それに恥ずかしいです。

「ほな、行くで」

麗華がアクセルを吹かし、車をスタートさせました。

「いきなり仕掛けて来るとかないやろな」

麗華が呟くと、

「それは大丈夫。連中の真の目的は私達を殺す事ではないから」

冬子さんの答えに麗華は眉をひそめます。

私と瑠希弥は顔を見合わせました。

「どついう事や?」

「サヨカ会は、世界中にそのネットワークを広げようとしているわ。だから、その先鋒となるべき実力者が欲しいのよ」

冬子さんが言うと、麗華はニヤリとして、

「何や、そついう事やったら、ナンボでも相談に乗ったるで。金次第でな」

私はサングラスをずらして、ルームミラー越しに麗華を睨みつけます。麗華はそれに気づき、

「冗談やて、蘭子。ウチかて、サヨカ会のやり方がえげつないってゆうのは知ってるがな。そない睨まんといてえな」

やがて車は中央高速に乗り、一路山梨県を目指します。

遙か彼方に見える雪の帽子を被った富士山は、まるで別世界のもののように美しいです。

取り敢えず全員マスクは外しました。

「インターはどこで降りるんが近いんや？」

麗華が冬子さんに尋ねます。

「河口湖ね。山中湖でもいいけど」

「そうか」

まだ先は長いです。

「あれ？」

瑠希弥が耳に手をかざしました。

「どうしたの、瑠希弥？」

瑠希弥は私を見て、

「今、箕輪まどかさんの声が聞こえたような……」

「え？ まどかちゃんのこと？」

冬子さんが振り返ります。彼女にとってまどかちゃんは「義理の妹」ですから……。

「まどかちゃんどこ何日か全く連絡を取っていないから、状況がわからないわね」

私がそう言つと、

「まどかちゃんは、彼氏の家族と一緒にサヨカ会に向かっているわ」

冬子さんが目を瞑って言いました。

「え？」

私はギクツとして冬子さんを見ます。凄いです。私にも瑠希弥にも、そこまではわかりません。

まどかちゃん、関わってしまったの？

そうか。私が全然連絡をしないので、変に思って調べたのね。

「まどかさんの彼の江原耕司君のご両親は、高名な霊能者です」

瑠希弥が教えてくれました。すると麗華が、

「ああ、知ってるで。江原雅功えはらのみやこ言いつたら、相当有名や」

「ああ、その江原さんね」

私も江原さんの名前は知っています。退魔師では、恐らく日本最強でしょう。

まどかちゃん、凄い人達と関わりがあるのね。

「母親の菜摘さんも、全国的に有名な占い師や。瑠希弥と近い感じの霊能者やで」

麗華が続けます。何故か瑠希弥は顔を赤らめて、

「江原菜摘先生に近いだなんて、恥ずかしいです」

瑠希弥の謙虚さの千分の一でもいいから、麗華に持って欲しいです。

「いやいや、瑠希弥は凄いで。ウチや蘭子より、感応力は高いがな」

瑠希弥は真っ赤になってしまいました。

「う、ウチは、代々霊媒師の家系ですから、そのせいですよ……」

最後の方はゴニョゴニョで、何を言ったのか聞き取れませんでした。

「麗華、もうストップ。瑠希弥が気絶しそうよ」

私は眩暈めまいを起こしかけている瑠希弥の頭を撫でながら言いました。

「はいはい」

麗華は嬉しそうに応じます。私は冬子さんを見て、

「ねえ、冬子さん、まどかちゃん達と合流できないかしら？ その方がいいと思うの」

「やってみるわ、西園寺さん」

冬子さんは私を見て言いました。私はニコツとして、

「蘭子でいいわよ、冬子さん」

「は、はい」

冬子さんは顔を引きつらせて前を向きました。

また怖がらせてしまったのかしら？

「瑠希弥もやってみて。二人の感応力に頼るしかないみたい」

「はい、先生」

瑠希弥は嬉しそうです。

「ホンマや。連中の妨害工作なんやろうけど、全く氣イが探れんよ

うになつとるからな」

麗華が舌打ちして言いました。

「頼むで、冬子さん、瑠希弥」

冬子さんは黙って頷きます。

「はい、八木先生」

瑠希弥は力強く返事をしました。

一応文明の利器（携帯電話）を使ってみましたが、誰の携帯も通じませんでした。

どうやら、中継局で妨害しているようです。

「コンビニでプリカ携帯を買ってみよか」

「麗華が言いましたが、

「プリカ携帯も同じよ。恐らく、私達の気を感じて妨害しているのでしょうから」

私は言いました。

「そうかあ。偉い迷惑な連中やで」

やがて車は山梨県に入りました。富士山がますます近くなります。

「まどかちゃん達は、今圏央道に入ったところよ」

冬子さんが言いました。瑠希弥が、

「まどかさんの声は聞こえるのですが、こちらの声が通じていないようです」

「そうなの。とにかく、続けて、瑠希弥」

「はい、先生」

瑠希弥は再び意識を集中します。

「本部が近づくに連れて、ますますまどかちゃん達の居場所が薄ま
って行くわ」

冬子さんが呟きました。

「ほな、ここらで待った方がええかな？」

麗華は談合坂サービスエリアに入りました。

「ちょっと休憩やな」

麗華が車を駐車場に停めた瞬間、それは始まりました。

「えっ？」

周辺にいた観光客達がいきなり私達の周りに殺到したのです。

「な、何？」

私はギョツとしました。麗華も瑠希弥も驚いて外を見ています。

冬子さんは驚いているのかどうか、表情からはわかりません。

彼らは何かを叫んでいます。

「何？」

彼らはこう叫んでいたのです。

「サーヨカサヨカ、サヨカ、サヨカ、サーヨカサヨカ、サヨカ、サヨカ……」

全員が大きな鈴を打ち鳴らし、大声でそう言っています。

「サヨカ会の信者か？」

麗華が目を見開いて言いました。

その数、ザッと見て数百人。その団体が、私達の車を取り囲んでいました。

鴻池大仙

私は西園寺蘭子。霊能者です。

日本最大の新興宗教団体である「サヨカ会」と敵対してしまい、今、私達はその信者の集団に車を取り囲まれています。

「サーヨカサヨカ、サヨカ、サヨカ、サーヨカサヨカ、サヨカ、サヨカ……」

信者達は大きな鈴を鳴らしながらそう唱えています。

「サヨカ会で、何を崇めてるんや？」

親友の八木麗華が呟くと、

「宗主である鴻池大仙（うらひの大いせん）そのものよ。彼自身が神であり、ご神体なのよ」

小倉冬子さんが答えます。

「胸糞悪い集団やな！」

麗華はいきなり最強真言を使いました。

「オンマカキヤラソワカ！」

大黒天の真言が炸裂し、信者達は弾かれるように車から離れました。

「今や！」

麗華がアクセルを踏み込み、車をスタートさせます。

「後は私に任せて」

冬子さんが呪文を唱えて、得体の知れない何かを放ち、信者達を足止めします。

敵にしたくない人です。

「とんでもない連中や。このままやと、おちおちうんこもできへんで」

恥ずかしい。そういう事をはっきり言わないで欲しいです。

「どないしよ、蘭子？　ウチ、漏れそうや」

麗華の顔色がかなり悪いです。

麗華の車ですから、漏らされても困らないのですが、しばらくの間の中にいなければならぬ事を考えると、それは困ります。

「次のサービスエリアには信者はいないわ。それまで我慢できる、八木さん？」

冬子さんが尋ねます。麗華は脂汗を垂らして、

「何とか耐えるわ」

そして私達は、次の谷村パーキングエリアで小休止しました。

そこには信者達の姿はなく、ホッと一息です。

「ふー、すっきりしたで。蘭子も瑠希弥も、全部出たか？ ウチ、今日は三日ぶりやねん」

そんな事を大声で言う麗華はある意味サヨカ会より迷惑です。

私と同居人の小松崎瑠希弥こまつさき るきやは顔を赤くして麗華からそっと離れま
した。

「蘭子さん」

まだちょっと表情が固い冬子さんが、それでも私に話しかけてく
れたのは嬉しかったです。

「何、冬子さん？」

私は怖がられないように笑顔で応じます。

「私のせいでごめんなさい」

「え？ どうして？」

冬子さんの言っている意味がわかりません。私は瑠希弥と顔を見
合わせました。

「私の魂の一部がサヨカ会のある場所に封じられている。そのせいで、私達の居場所がわかってしまうのよ」

「そうなんだ」

私は更に微笑んで、

「気にしないで、冬子さん。どちらにしても、私達はサヨカ会の本部に行くつもりなのだから」

「ありがとう、蘭子さん」

冬子さんはまた顔を引きつらせました。笑ったのだと思いますが。

私達は途中で買い込んだ山登り用の服に着替え、車に乗り込みます。

「お札はポケットに入れてね、麗華。胸の間に入れたら、取り出せないわよ」

私が注意すると、麗華はムツとして、

「ホンマ、こないな服着んと行けんところやなんて、嫌やわ」

麗華は襟がしっかり閉じている服を着るのが苦手のようです。

「虫が多いのよ。肌を露出していると、刺されるわ」

冬子さんの一言で、麗華は納得しました。

彼女は虫が大嫌いなのです。

山登りルックの麗華も違和感がありますが、黒以外の服を着た冬子さんも違和感があります。

でも彼女、本当は綺麗な人みたいです。

やがて車は河口湖インターチェンジを降りて、一般道に入りました。

近くにある遊園地のジェットコースターが見えます。

「その脇道に入って。そこが本部への入口よ」

冬子さんが言いました。

「あれから襲撃がないけど、その方が何か不気味やな」

麗華がハンドルを切りながら言います。

「そうね」

嵐の前の静けさ、でしょうか？

「あれですね！」

瑠希弥が窓の外に見える建物を指差しました。

それは寺院にも見えますし、神社にも見えます。

尖塔があるのは、教会もイメージしているのでしょうか？

何とも言いようのない不可思議な建物です。

「警戒せえよ。いつ仕掛けてくるか、わからんからな」

麗華は車のスピードを落とし、周囲を見回しながら進みます。

私と瑠希弥も周りを見渡します。

すると前が開け、さっき見えていた建物の全景が見えました。

そこには無数の信者達が立っていて、その先にはあの鴻池大仙がいました。

「本物か？ あいつ、影武者がおるからな」

麗華が呟きます。

信者達には敵意はないようです。

冬子さんの言う通り、私達を会に引き入れたいのでしょうか？

「よつこそ、西園寺蘭子さん」

鴻池氏は、何を考えているのかわからない顔で言いました。

「行くで」

麗華は車を止め、外に出ます。私達もそれに続きました。

「おやおや、小倉冬子さん。しばらくですね。ご両親を事故で亡くされたそう。お悔やみ申し上げます」

鴻池氏の上辺だけの言葉に虫酸が走る思いがします。

しかし冬子さんはそれには答えずに私を見ます。

私は冬子さんに頷いてから鴻池氏を見て、

「私達の事をどうされたいのですか？ 先ほどは、談合坂で随分な歓迎を受けましたが？」

と皮肉混じりに尋ねました。

「おかげでウチは、もう少しでうんこ漏らしそうになったんやで！」

麗華が余計な事を言います。

すると鴻池氏は、

「とにかく、奥へ。お話はそこで致しましょう」

と一言、歩き出しました。

私達は目配せし合って、鴻池氏の後に続きました。

そう言えば、箕輪まどかちゃん達はどうしているのかしら？
心配です。

西園寺蘭子でした。

サヨカ会の野望

私は西園寺蘭子。霊能者です。

今、日本最大の新興宗教団体であるサヨカ会の本部の中にいます。

宗主である鴻池大仙こうのいづいせん氏の案内で、建物の中を進みます。

「貴女方の事、調べさせていただきましたよ」

大仙氏は振り返らずに話します。私は同居人の小松崎瑠希弥こまつき るきと顔を見合わせてから、小倉冬子さんを見ました。冬子さんは、

「何のために？」

と尋ね返します。大仙氏はニヤリとして、

「我が教団は世界進出を考えているのです。そこで、優秀な人材を探しています」

「ほお、さーよか」

親友の八木麗華が、わざと「さよか」の言い方を変えて挑発します。

私達を囲むように歩いている信者達が一瞬殺気立ちます。

しかし大仙氏は動じる事なく、

「貴女方は我が教団の指導者として十分な素質を持っていらっしゃる。ですから、協力していただきたいのですよ」

やがて私達はある部屋に着きました。畳が数百畳も敷かれたとんでもなく広い部屋です。

部屋の最深部に巨大なご神体があります。大仙氏の銅像です。はつきり言って気持ち悪いです。

「何やあれ？ ブサイクなおっさんの銅像があるで」

また麗華が挑発します。信者は今にも飛び掛りそうな形相ですが、大仙氏はフツと笑って、

「ハツハツハ、そうですか。まあ、自分でも男前とは思っておりませんがね」

更に進み、私達は座布団の上に座りました。

「どうぞ」

信者達がお茶を淹れてくれました。

「ご心配なく。毒など入っておりませんから」

大山氏が私達の思いを見抜いたように言います。

「本当です。何も入っていません、先生」

瑠希弥が小声で教えてくれます。

「ありがとう、瑠希弥」

私は茶碗を手に取り、お茶を飲みました。それを見て麗華もお茶を飲みます。

「麗華、後で話があるから」

私は真顔で言います。麗華はギクツとして、

「わ、悪かったて、蘭子」

彼女は私にお毒見役をさせたのです。

本当に縁を切ろうかと思っただけです。

「さてと。本題に入らせていただきますよ」

大仙氏は私達と差し向かいに正座しました。

「答えは二つに一つです。我が教団に協力してくれますね？」

大仙氏は迫力のある目で私達を見渡します。

(この男、靈感はないのにどうしてこんなに威圧感があるの?)

大仙氏は表向きは霊能者と名乗っていますが、実際は靈感など全くない普通の人間です。

でも、何かを持っています。

何かを背負っているのを感じるのです。

「その訊き方、気に入らん。もう答えは決まってる感じがするで」

麗華が言いました。また周囲の信者達が殺気立ちます。

「そうですね。貴女方に選択の余地はありません。生きて帰りたければね」

大仙氏の顔が兇悪になりました。

「ぐー！」

頭が締め付けられるような強烈な波動が襲って来ます。

「何ですか、これ？」

人一倍敏感な瑠希弥が泣きそうな顔で叫びます。

「逆らう事はできんよ、お嬢さん方。私は神なのだ。私に従うしか生き残る道はないのだよ！」

大山氏が大声で言います。彼の背後に何かが見えました。

「何、あれ？」

私はおかしくなりそうな頭を抱えて、大仙氏の背後に蠢く何かを見極めようと意識を集中しました。

「ええい、鬱陶しいわい！」

麗華が切れたようです。

「オンマカキヤラヤソワカ！」

彼女の十八番の大黒天真言が炸裂します。

「何イツ!？」

しかし、その力は大仙氏の前で砕けてしまいます。

「愚か者め！ 神である私に、そのようなものが通じるか！」

大仙氏はすでに人間の波動を出していません。

「あれは……」

私は息を吞みました。彼の背後で蠢いているのが、その正体を現したのです。

「まさか！」

冬子さんが叫びます。

「ブオオオオッ！」

大仙氏の背後で蠢いていたのは、幾千幾万という数の死霊でした。

一体どうすればそれほどの数を集められるのかというくらい、そ

の塊は凄まじいものです。

「何であないなもんを操れるねん、あのおっさん？」

麗華が蒼ざめて言います。

「あの男が持っているのよ、その術具を」

冬子さんが言います。

「それを潰さない限り、あいつには勝てないわ」

私は麗華と顔を見合わせます。

「そして、そうしないと、私は魂の一部を取り戻せないの」

冬子さんの悲しそうな横顔。その時、私の中で何かが弾けました。

「おう、おっさん！ 面白い事できるな。ようやく、この蘭子様が本気で戦える奴が現れたようだ」

いけない私の登場です。ああ。

西園寺蘭子でした。

裏蘭子大活躍！

私は西園寺蘭子。霊能者です。

カルト教団の宗主である鴻池大仙「つひのいはいせん」が遂に正体を現しました。

彼は何か特殊な術具を持っていて、それを使って尋常ではない数の死霊を操れるようです。

尋常ではない敵の出現に、私のリミッターは振り切れてしまい、とうとう「いけない私」が降臨しました。

同居人の小松崎瑠希弥「まつしきるきやま」には見られなくなりましたが……。

「先生？」

瑠希弥は状況がわかっていないようです。

「麗華、皆を下がらせな。このクソジジイは私がぶっ潰す！」

ああ。いけない私は、いけない言葉を使います。

「わ、わかった」

麗華は動かない瑠希弥を連れ、私から離れます。

「あれが、本当の西園寺さん……」

冬子さんが震えながら後ずさりします。

冬子さん、本当の私ではないです……。いけない私です……。

「行くぞ、クソジジイ！ 私は容赦がないんだ、後で謝ったって遅いぞ！」

頭痛がしそうです。大仙はニヤリとして、

「ほう。それが噂に聞こえた西園寺家の最終奥義か。面白い」

いえ、違います。西園寺家の最終奥義ではありません。

「オンマカキヤラソワカ！」

麗華が放った大黒天真言の数十倍の破壊力の真言が大仙に向かいます。

「効かぬ！」

大仙は微動だにしません。

真言は周囲の畳を吹き飛ばし、多くの信者を蹴散らし、大仙の遙か後方のご神体を直撃しました。

ご神体は粉微塵になりましたが、本人は無傷です。

「嘘やろ？」

麗華が呟きます。確かにそうです。

いけない私は手加減などしませんから、普通の人間が立っているはずがないのです。

彼が無事だったのは、どうやらその夥しい死霊おびただの数のおかげのようです。

死霊達が楯となって、大仙を守っているのです。

それにしても、本当に尋常な数ではありません。またまるで細菌のように増殖していきます。

「ジジイ、やるな。少しは楽しめそうだ」

いけない私は麗華を見て、

「この部屋から出ている。今度はもっと凄いのをかますから」

「わかった」

霊華達は部屋から出て行きます。信者達も我に返ったのか、逃げ出しました。

「お前達はダメだ。我が糧となれ」

大仙がそう言うと、死霊が飛び、信者達を食い尽くします。

いつもの私なら目を背けるところですが、いけない私は嬉しそうです。

「なるほどな。材料はいくらでもあるってか。どうしようもねえワ

ルだな、てめえは？」

いけない私と本来の私の意見が珍しく一致しました。

「神である私に全てを捧げるのが信者の務め。当たり前的事だよ」

大仙は高笑いをします。

「わかった。じゃあ、心置きなく吹っ飛ばせるな、てめえをよ！」

いけない私は印を結びました。これは？

「オンマケイシバラヤソワカ！」

大自在天真言です。破壊力は大黒天真言を遥かに上回ります。

「無駄だ！」

大仙はそれでも動こうとしません。死霊が幾万と消えるのが見えます。

（泣いてる……）

私は死霊達が大仙の術具で縛られ、不本意なまま操られているのを知りました。

（何て事を……）

いけない私の「必殺技」である大自在天真言を、大仙は耐えました。

すでに大広間は幾本かの柱を残して、壁は全て吹き飛んでいます。その陰に散った霊の数は計り知れません。

「まだかよ。さすがに疲れたぜ」

いけない私が弱音を吐くなんて思いもしませんでした。

「随分とお疲れのようだな。お前の力が尽きたら、我が僕の餌しめへにしてやるよ」

再び大仙の周囲に死霊が増殖していきます。

「まだまだだよ、ジジイ！ 西園寺蘭子様を舐めるんじゃないよ！」
いけない私はまだいけるみたいです。

どうなってしまっのかしら？

西園寺蘭子でした。

戦いの終わり

私は西園寺蘭子。霊能者です。

新興宗教団体「サヨカ会」の宗主である「うのいだいせん」鴻池大仙と「いけない私」の戦いは壮絶です。

いけない私をここまで苦しめたのは、大仙が初めてでしょう。

いけない私のプライドが随分傷ついています。

「もう絶対許せねえ。潰す！」

いけない私は大きく足を開いて（恥ずかしさで死にそうです）

「こいつは効くぞ、おっさん！」

と言うと、右手と左手で違う印を結びます。これは？

「インダラヤソワカ！」

帝釈天真言です。そして更に、

「オンマカキヤラヤソワカ！」

と大黒天真言。その上、

「これでどうだ！ オンマケイシバラヤソワカ！」

三番目は大自在天真言です。

「ぐわああ!」

さすがの大仙も、この三連弾は効いたようです。

でも、いけない私も効いています。

「うっっっ……」

力を使い放題使ったいけない私は、ようやく下がってくれました。

「フグオオオオ!」

大仙は悶え苦しみ、燃え尽きました。

え? もしかして……。

大仙がいたところに、紙切れが落ちています。

陰陽師の使う式神しきがみのお札です。

「影武者?」

引っかかったようです。

大仙の本体はここにはいません。

別の場所からこの影武者に力を送信していたのでしょう。

「どっ？」

私はほとんど瓦礫と化した広間を走り抜け、廊下に出ました。

（先生！）

同居人の小松崎瑠希弥「まじゆき みるせ」の弱弱しい声が聞こえます。

「そっちなー！」

それにあの懐かしい箕輪まどかちゃんの波動も感じます。

来てくれたのね。

来ないで欲しいと思ったけど。

でも今は一人でも多くの味方が欲しいのです。

いけない私は多分しばらく復活できないでしょう。

親友の八木麗華と瑠希弥と小倉冬子さんもいますが、大仙の力は想像を絶しています。

しかも本体はもっと強いはずですよ。

（先生、大仙はこちらにいます。術具も持っているようです）

瑠希弥の声が私を誘導してくれます。

大廊下を進むと、別の道が見えました。

「こっちな」

進むに従い、大仙の悪意が強くなり、廊下に倒れている信者や陰陽師の数が増えていきます。

「誰かしら？」

もしかすると、まどかちゃんの彼のご両親である江原雅功さんと菜摘さんかも知れません。

お二人は格闘技も強いと聞きましたから。

粉碎された扉が見えて来ました。

その向こうに注連縄に囲まれた大仙が見えます。

麗華、瑠希弥、冬子さんも無事のようです。

「蘭子！」

「先生！」

「蘭子お姉さん！」

「西園寺さん」

みんなが私を見て微笑みました。私は頷いて、

「遅くなりました。さあ、最後の仕上げをしましょう」

と大仙を睨みます。よく見ると、皆さん相当お疲れのようです。

しかし大仙は全く疲労した様子がありません。

「西園寺蘭子、お前ももうほとんど力が残っておらんだろう。仲良
く地獄に送ってやるから、安心して死ぬがいい！」

大仙は目を血走らせて言い放ちました。

「どうして地獄なの？」

私は負けずに言い返します。すると大仙は高笑いして、

「神であるこの私に逆らった者は皆地獄に行くのだよ！」

「誰が神よ!？」

私は麗華と冬子さんが目で合図したのを見て、

「貴方だって疲れているでしょ？ 死霊の動きが乱れているわよ」

と挑発します。大仙は私を嘲るように見て、

「そんな戯言に惑わされるか、小娘。神の力を見るがいい！」

死霊が増殖しています。あの数が一斉に遅いかかって来たら防ぎ
切れません。

「皆さん、力を貸して下さい！」

私は摩利支天まろしてんの印を結びます。

瑠希弥とまどかちゃん、そして彼氏の江原君、江原君のご両親も印を結びます。

これは陽動です。気づかれないようにしなさいといけません。

「オンマリシエイソワカ！」

死霊が一瞬だけ弾き飛ばされます。

「無駄だ、その程度の力！」

高笑いする大仙の懐に麗華と冬子さんが飛び込みます。

「何!?!」

大仙は仰天していました。

「おっさん、ボディががら空きやで」

麗華の左フックが大仙の脇腹に炸裂しました。

「ぐええええ！」

大仙が苦しむ隙を突き、冬子さんが大仙の手から独鈷を奪い取りました。

「ざまあ見さらせ、ジジイ! これはウチのうんこの分や!」

麗華が踵落としを放ちました。相変わらず言動が恥ずかしいです。

「ぐはあ！」

大仙はそのまま後ろに倒れます。

術具を奪った冬子さんは何やら呪文を唱え、死霊達を呪縛から解放します。

あれほどたくさんいた死霊達はたちどころに消えて行きました。

「勝ったな」

麗華が「どや顔」で言います。

私もホツとしてまどかちゃん達を見ました。

「危ない！」

冬子さんが叫び、麗華を抱きかかえて大仙から離れました。

大仙はまだ動けたのです。彼は立ち上がり、その右手に銃を持ちました。

「貴様ら、よくもここまでやってくれたな！」

大仙は注連縄から出て来て、銃を私達に向けます。

「おっさん、無駄や。やめとき」

麗華が近づこうとすると、

「寄るな！」

大仙は容赦なく銃を撃ちました。

麗華は弾道を読んでいたので当たりませんでした。大仙の腕前は相当なものようです。

「よくかわしたな。次は外さんぞ」

彼は卑怯にも弱っているまどかちゃんに銃口を向けました。

「まどかりん！」

まどかちゃんの彼氏が彼女を庇おうと前に立ちます。

「死ねえ！」

大仙がそう叫んだ時でした。

私はギョツとしました。

大仙の後ろにあの黒い着物の少女が現れたのです。

少女は私を見てフツと笑いました。

そこにいる全員に少女は見えているはずですよ。

大仙を除いて。

大仙が引き金を引くと、銃が暴発しました。

「ぐはあ！」

その衝撃で大仙は後ろによろめき、祭壇に倒れこみます。

注連縄が切れ、周囲にあつた蠟燭が炎を吹き上げながら大仙の上に落ちて行きました。

「うわあああ！」

蠟燭の火とは思えない勢いで炎が大仙を焼いて行きます。

私は瑠希弥を庇いながら目を背けました。

まどかちゃんも彼氏に抱かれて目を伏せています。

「わはははは！」

最後は狂気が支配したのか、大仙は大笑いをしながら燃え尽きてしまいました。

黒い着物の少女は、私達を見てゾツとするような笑みを浮かべると、大仙の魂を伴い、消えてしまいました。

こうして、サヨカ会との戦いは終わったのでした。

修行に出ます。しばらくさよなら。

私は西園寺蘭子。霊能者です。

巻き込まれるようにして関わりを持った新興宗教団体「サヨカ会」
との戦いも、宗主である鴻池大仙（つうのいだいせん）の事故死という幕切れとなりました。

大仙の呪縛が消滅したため、信者達は我に返り、瓦礫の山と化したサヨカ会本部から去って行きます。

今になって気づいたのですが、以前冬子さんが「一つだけ希望がある」と言っていたのは、あの黒い着物の少女の事だったのかも知れません。

「あつけないもんやな、ホンマ。エセ宗教の正体なんて、大概こんなもんや」

麗華がボソリと言いました。

まどかちゃんと彼氏の江原君と彼のお母さんの菜摘さんは先に帰りました。

江原君のお父さんの雅功さんが帰らせたのです。

雅功さんはあの黒い着物の少女を見て、何かを感じたようでした。

「西園寺さんは、あの少女をご存知のようですね？」

雅功さんが言った。私は雅功さんを見て、

「はい。以前、この子と一緒に見ました」

私は同居人の小松崎瑠希弥こまつかき るきやを見ました。瑠希弥はそれに応じて頷きます。

「あの少女は恐らく地獄の使いです。彼女に目を付けられたら、決して助からないでしょうね」

雅功さんの言葉は衝撃的でした。麗華が一番驚いています。

「あの子供、どんな奴に目を付けるんや？」

少し怖がっている麗華は面白いです。

「罪なき人を殺め、のうのうと生きている人間を迎えに来ると聞いた事があります」

雅功さんの説明に麗華はホツとしたようです。

「な、何や、ほなら、ウチらは心配いらんやん」

雅功さんはそれにクスツと笑ってから、冬子さんを見ます。

「その独鈷いしごに貴女の魂の一部が封じられているようですね」

「はい」

何故か冬子さんは悲しそうです。

「それを私の身体に戻すと、記憶がリセットされて、皆さんの事を全部忘れてしまうのです」

私は思わず瑠希弥と顔を見合わせました。

「つまり、魂の一部を封じられた以前の記憶に書き換えられてしまうという事ですね？」

雅功さんが尋ねる。冬子さんは雅功さんを見て頷いた。

「私、あまり楽しい人生ではありませんでした。苛められてばかりで……。だから、魂の一部を取り戻して、やり直そうと思ったんです」

冬子さんは泣いていました。彼女は魂を分割されたせいで感情をうまく表現できないようです。

冬子さんが泣いているとわかったのは、私が彼女の心を覗いたからです。

普通の人には冬子さんの顔は無表情に見えるはずですが。

「でも、まどかちゃんや、慶君、それから、ここにいる皆さんに出会って、私にも楽しい人生がありそうだって思えて……」

麗華が涙ぐんでいます。彼女も私と同じであまりいい人生を歩んでいないので、冬子さんの気持ちがわかるのでしょう。

霊媒体質の瑠希弥はもう号泣しています。

「だから、魂の一部はそのままにします。私は今のままの記憶を大切にしたいので」

冬子さんの顔が微笑みます。私も微笑んで、

「ええ。そうして、冬子さん。私も貴女の記憶から消えたくないから」

「蘭子さん」

冬子さんが私を見ます。

「やっと名前で呼んでくれたわね」

私は冬子さんと抱き合いました。

とつとつ私も号泣。麗華は動物の雄叫びのような声で泣き出しま
す。

しばらくしんみりした後、雅功さんが切り出しました。

「西園寺さん、貴女方はメディアに露出して、随分叩かれています。しばらく身を隠した方がいいと思います」

「はい」

私もその通りだと思います。元々私達はあまり目立ってはいけな

い存在なのですから。

「それで、私の知り合いに高名な修験者がいるのですが、その方の元で修行をなさいませんか？」

「え？」

意外な提案に私は驚きました。雅功さんは微笑んで、

「貴女のもう一つの人格は、貴女の霊能力に対する後ろめたさが生み出しているようです。いつまでも今のままでは、貴女自身が危険です。それを修正するためにも、修行してほしいのです」

私はハツとしました。すると麗華が、

「ほなら、ウチも行くで。ええやろ？」

「ええ、構いませんよ」

雅功さんは麗華を見て言いました。

「じゃあ、私も」

瑠希弥が言います。すると雅功さんは、

「貴女にはウチに来ていただきたいのです。貴女の能力を私の妻が伸ばしたいと言っていますので」

「え、でも……」

瑠希弥は私と離れるのが不安のようです。忙しく私と雅功さんを見ます。

「瑠希弥、そうしなさい」

私は諭すように言いました。

「先生……」

瑠希弥は悲しそうに私を見ます。その目に思わず「一緒に行こう」と言いたくなりますが、

「それにまどかちゃん達のそばにいてあげて。貴女が彼女を守り、育てるのよ、瑠希弥」

と何とか言いました。瑠希弥はしばらく考えていましたが、

「わかりました、先生。お帰りをお待ちしています」

「ありがとう、瑠希弥」

今度は瑠希弥と抱き合います。また号泣してしまう涙脆い師弟です。

「まどかちゃん達は、私も守るわ。サヨカ会の残党もいるかも知れないし」

冬子さんが言います。私は彼女を見て頷き、

「お願いね、冬子さん」

こうして私達はそれぞれの進む道を決めました。

そして翌日。

私と麗華は、麗華の車で関越道を疾走しています。

目指すは山形県です。そこに江原雅功さんの知り合いの修験者の方がいらっしやいます。

「何や楽しみやな、蘭子」

麗華は妙に嬉しそうです。

「修学旅行に行く訳じゃないのよ、麗華」

私はうんざりしています。やっぱり一人で来れば良かったと後悔しているのです。

「二人でしばらく暮らすと、目覚めてしまいそうや」

麗華が怖い目で私を見ます。

「目覚めるって、何？」

「内緒や」

嫌らしい笑み。何を考えているのでしょうか、麗華は？

修行より麗華の方が心配です。

では皆さん、しばらくお別れです。

西園寺蘭子でした。

修行に出ます。しばらくとよなら。(後書き)

ここまでお読み頂き、ありがとうございます。

またお会いできる事を楽しみにしております。

山奥の教祖はイケメン（前編）

「頑張ったなあ、蘭子ちゃん、麗華ちゃん。もう修行は完了だ」

出羽の大修験者である遠野泉進様が言いました。顔がやや赤く腫れているのは、昨夜お風呂を覗いたバチが当たったのだと思います。

「世話になったな、泉進のジツちゃん」

私の親友の言葉は、全然お礼を言ったように聞こえません。

泉進様はそんな事を全く気にしていない様子です。

私は苦笑いするしかありません。

「あの嬢ちゃん達のところには寄らんのか？」

泉進様がギクツとするような事を訊いて来ます。

G県にいる私の大切な友人である箕輪まどかちゃん、そして私の只一人の「弟子」である小松崎瑠希弥（こまつき るきや）の事です。

「はい。今会つと、また挫けてしまいそうですから」

私は作り笑顔で返し、泉進様のお宅を出ました。あの二人には今はまだ会えません。

そして……。

高速道路を快調に走る真新しい赤のスポーツカー。ツーシーターなので、広々とした座席。

「全く、あのエロジジイ、あれだけボコボコにしたのに、懲りんと毎回毎回覗きくさって！」

助手席で怒鳴り散らす無二の親友である八木麗華^{やぐれいか}。

相変わらずすごいファッションセンスの服です。

そして、運転するのは私、西園寺蘭子^{さいおんじらんこ}。

二人共霊能者です。

お久しぶりです。ようやく「いけない私」を封じる事ができ、帰って来ました。

「それにしても、修行が終わった途端に仕事で、どんだけ金の亡者やねん、蘭子？」

麗華はニヤリとして嫌味を言います。

金の亡者とか、貯金通帳を抱いて寝る麗華にだけは言われたくありません。

「仕方ないじゃない。事務所の電話回線を復旧させて、私の携帯に転送するようにしたと同時にかって来たのだから」

私は少しムツとして言い返しました。麗華はガハハと笑い、

「まあええわ。最近、暴れとらんから、ストレス溜まっとってん。いっちょ、派手に行きまひよか」

と嬉しそうです。全くもう。何を考えているのかしら？

修行の成果がまるでないような気がします。

「で、場所はどこやねん？」

麗華がゴソゴソと地図を取り出します。私はチラッと麗華を見て、

「長野県の下伊那郡山奥村よ」

「うへえ、ものごつつ遠いやん。出張費、ガツポリ貰わんな」

麗華は地図を見ながらニヤニヤします。

「生きて帰れたらね」

私はすぐに釘を刺しました。

「何やそれ？ どういうことじゃ？」

麗華は地図を畳み、私を見ました。

「以前、依頼を受けて訪れた霊能者が、そのまま三ヶ月も帰って来ていないらしいわ」

「ほお、そらまた、長い出張やのう」

麗華は真面目に聞いていないようです。私は溜息を吐いて、

「その人の名前は、神崎新かみざきあけひた。貴女の幼馴染よ」

「何!？」

さすがに、麗華はギョツとしたようです。

神崎さんとは、以前ちょっとしたトラブルがあつて、麗華が神崎さんを懲らしめました。

彼はちよつと性格に難がある人でしたが、霊能者としての実力は相当なものでした。

「あいつがやられたんか。そら、氣いつけんとあかんな」

ようやく麗華の顔が真剣になりました。

「少ない情報しかないのだけれど、相手は『いざなみ流古神道』と名乗る教団で、教祖が男前らしいわ」

「そら、楽しみやなあ」

麗華はまた嬉しそうに言いました。全くもう。

「だから信者は若い女性ばかりらしいの」

「ウチらにピッタリの仕事やな」

麗華は楽しそうです。私はまた溜息を吐いて、

「そんな簡単な仕事じゃないと思うんだけど？」

「わかつとるて。新の奴があいたやられたんやとすれば、そいつらには幻術は通用せんゆう事やる？」

麗華が真顔に戻りました。

「そうね。神崎さんは幻術で女性になりすまして潜入したのでしょ
うね。でも、見破られてしまった」

「で、その教団、何が問題やねん？」

麗華がスナック菓子を取り出して食べ始めます。

「日本中の若い女性を集めて信者にして、彼女達は日本版ノアの箱舟を作り、教祖様の御子を授かるために毎日お情けを賜るのです
て」

説明している私が恥ずかしくなるような内容です。

「何や、それ？ 只の工口教祖やんけ」

麗華は袋に残ったお菓子の欠片を口に流し込んで言いました。

「でも、それだけなら、私達が行く必要はないのよ」

私はサービスエリアに入りながら言いました。

「せやな。エッチ好きな集団が勝手に子作りしとるだけやからな」

麗華は下品に笑いました。私は顔が火照るのを感じながら駐車場に停車し、

「着いたわよ」

と車を降りました。麗華が降りるのを確認し、ドアをロックします。

「問題は、若い女性達の恋人や夫なの」

「ほお」

私達はトイレに向かいながら話を続けます。

「その人達が、全員行方不明なのよ。全く理由がなく」

「殺されたな、多分」

麗華が腕組みをします。

「ええ」

私は声を低くして答えました。

「さてと。ウチはうんこするけど、蘭子はせえへんのか？」

麗華は大きな声で言います。恥ずかしいです。他人のフリをしたんです。周囲の視線を感じます。

「私はしないわよ！」

プイツと顔を背け、麗華から離れます。

「何や、また便秘か？ 身体に悪いで」

あまりうるさいので、本気で睨みました。

「わ、悪かったて……」

麗華は慌ててすぐそばの個室に飛び込みました。

ホントにもう……。下品過ぎます。

長い道のりでしたから、東京の私の事務所に着いたのは夕方でした。

クライアントは、山奥村の村長さんと助役さんです。

さつき、携帯に転送で「今東京駅に着きました」と連絡がありました。

「何で東京駅やねん？ 長野からなら、新宿ちゃうん？」

麗華が不思議がるので、

「山奥村は、岐阜県寄りなのよ。だから岐阜に出て、東海道新幹線

に乗る方が早いらしいわ」

「ほお、さよか」

麗華のその言い方、ちょっと嫌いです。

私は車をビルの地下駐車場に駐め、エレベーターで事務所のある階まで上がります。

「？」

私と麗華は、ほぼ同時に嫌な予感がしました。

「何や、今の感覚？」

麗華がキツとして言います。

「何だか、すごく胸騒ぎがする」

私はエレベーターの扉が開くのを待ち切れず、廊下に出ました。麗華が続きます。

外廊下を走り、事務所のドアの鍵を開き、真っ直ぐに事務所のテレビに駆け寄って点けました。

ニュースキャスターの女性が、深刻な顔で原稿を読んでいます。

「つい先ほど入った事故のニュースです。東京駅の近くで、タクシ
ーが謎の横転です」

私は麗華と顔を見合わせます。まさか!?

「詳しい状況はわかっていませんが、タクシーの運転手、乗客共に死亡との事です」

私と麗華は、テレビ画面を通じ、タクシーの運転手さんと村長さんと助役さんの霊がもがき苦しんでいるのを見ました。

「まさか、連中が何かしたんか？」

麗華が呟きます。私はテレビ画面を見据えたまま、

「そうとしか思えないわ。呪詛ね。タクシーに呪詛をかけたのよ」

私達は、相手にしようとしている教団の恐ろしさを肌で感じました。

「村長と助役を殺したいだけなら、村を出る前に殺せばいいはずや。これはウチらに対する警告ちゃうか？」

麗華が珍しく冷静な分析をしました。

「そのようね。何だか、やりがいがありそうだわ」

私の身体の中に闘志が漲みなって来ました。ところが、

「せやけど、村長と助役が死んだゆう事は、クライアントがいなくなっただんやないか？」

と麗華は妙な事を言い始めます。

「何が言いたいだよ、麗華？」

私は彼女の言いたい事がわからず、彼女を見ました。

「これは只働きになるで。ウチは氣イ進まん」

始まりました。儲け至上主義の麗華が復活です。

出羽での修行は、麗華の物欲を消すのも目的だったはずなのですが、全然改善されていません。

「そう。そういう事を言うの？」

私は麗華に背を向けて自分の机に歩み寄ります。

「あ、当たり前や。そないな事しても、ウチらには何の得にもならへん」

麗華は動揺しながらもまだ損得勘定で話を進めようとしています。

「今更降りたなんて言っても、敵には関係ないと思うけど」

私はさり気なく脅しをかけます。麗華がピクンとするのがわかりました。

「て、敵にウチらの事がバレとるとは限らんで」

まだ粘ります。しぶといですね。

「バレてると思うよ、麗華。あの呪詛は直接タクシーにかけられたものよ。敵は村長さんと助役さんをつけて来たのよ」

麗華の顔色が変わります。

「それでも降りるならどうぞ。私一人で山奥村に行きます」

私はロッカーから旅行バッグを出します。

「あ、アホ、蘭子一人を敵地に行かせるほど、ウチは腐っとらんでようやく動くつもりになったようです。

相変わらず、手がかかる子です。

さて、敵がどこかで私達の動きを見ているかも知れません。

知恵を絞らないと、目的地にも辿り着けないですね。

気を引き締めて行きましょう。

西園寺蘭子でした。

続きます。

山奥の教祖はイケメン（中編）

私は西園寺蘭子。霊能者です。

山形の修行から戻るなり、私と親友の八木麗華は、長野県にあると言われている『いざなみ流古神道』という淫靡いんびな宗教団体と関わりを持ちました。

その団体がある村の村長さんと助役さんが、詳しい話をするために東京に来てくださったのですが、敵の追っ手に呪詛をかけられ、無関係なタクシーの運転手さんと一緒に呪殺されてしまいました。

クライアントが死亡したので、依頼を受けるのを渋る麗華を脅して、何とか敵の本拠地である山奥村に向かう事になりました。

旅行バッグに術具と着替えを入れ、私は準備完了ですが、麗華がまだ終わりません。

「敵とは言え、教祖はイケメンなんやる？ どれ着てったら、落とせるかな？」

麗華は服装で悩んでいるようです。

「逆に落とされないでよね、イケメン教祖様に」

私は腕組みして呆れ顔で言います。

「まあ、男はみんな巨乳好きやから、自前のこいつで十分やな」

麗華は誇らしそうに自分の胸を揺すってみせます。

貧乳の私への当てつけでしょうか？

「わ、悪かったて、蘭子。睨まんといてえな」

何故か麗華に謝られ、余計に落ち込みました。

そして、事務所を出て、外廊下を歩き始めた時、敵さんが動きま
した。

「何や、これ？」

麗華が鬱陶しそうに呟きます。

強烈な淫の気です。以前、女子校の調査で感じたものの数十倍は
強烈です。

山形の修験者の遠野泉進様が、私の弟子の小松崎瑠希弥こまつなみ るきやにメール
で事情を教えてしまい、瑠希弥から、

「私も同行させてください」

と電話がありました。

「考えさせて」

と返事をしたのですが、相手は淫術を得意とする連中です。

人一倍感応力が強い瑠希弥には不向きな相手なのです。

だから、サヨカ会との戦いの時、お世話になった江原雅功さんえはらまさとしに連絡し、瑠希弥を思い止まらせて欲しいと伝えました。

雅功さんも瑠希弥の事をよくわかってくださっているので、

「わかりました。私も瑠希弥さんには危険な相手だと思いますので、説得しましょう」

と承諾していただきました。

(やっぱり、瑠希弥を関わらせなくて正解だったわね)

数珠を握り、真言を唱えていないと、変な気持ちになってしまいました。そうです。

「あかん、蘭子、はよ、ここ離れんと」

麗華も苦しそうです。ふと廊下の先を見ると、あるコンサルタン卜事務所の前で、その事務所の所長である三十代後半くらいの女性が、しゃがみ込んで大変な事を始めていました。

外廊下中に響くような喘ぎ声をあげています。

「手淫ていんか？ 取り敢えず、助けたろ」

麗華はその女性のそばに駆け寄り、

「オンマリシエイソワカ」

と摩利支天まりしてんの真言を唱え、淫の気を追い払いました。

「大丈夫か？」

麗華が声をかけると、女性は我に返ったようで、真っ赤になりました。

「わ、私……」

そして、自分の右手がどこに入っているのかに気づき、更に動揺します。

「あまり気にせんでええ。はよ、事務所に入り」

麗華はその女性を優しく立たせてあげます。

「あ、ありがとうございます」

女性は真っ赤な顔でお礼を言い、部屋に入りました。ガチャッとロックがかかる音がします。

ドアをロックしても、淫の気には関係ないのですが、そんな事を言っても仕方がないですね。

「淫の気除けや。サービスやで」

麗華はその部屋のドアにお札を貼りました。

「まあ、珍しい。今日は雪が降るんじゃないの？」

私がからかうと、麗華はムツとして、

「う、うるさいわい！ とにかく、ここを離れんと、このビルの女の子が全員、始めてまっで」

「そうね」

時間的に、ビルに留まっている女性達は少ないでしょうが、それでも全くいないとは断言できないので、私達は急いで廊下を走りま

した。

エレベーターは危険なので、階段を駆け下ります。

「ひい、運動不足が祟るなあ」

麗華は一階降りただけで息を切らせています。

「先に行くわよ、麗華」

私はヨロヨロしている麗華を置いて、階段をどんどん駆け下り、地下の駐車場に出ました。

「隠れていないで、出て来なさいよ。男らしくないわよ」

私は駐車場中に響くような大声で挑発しました。

「随分威勢がいいな」

コンクリートの柱の陰から、若い男が現れます。麗華好みの線の細いイケメンです。

イケメンさんは、黒のシャツに黒のズボン、黒の靴。妙にインパクトがあります。

「僕の淫の気を受けても正気を保っていられるなんて、さすが西園寺蘭子。大したものだ」

イケメンはニヤリとして言いました。私は眉をひそめて、

「私の事を知っているの？」

「それは知ってるさ。我々の間では、厄介な敵ナンバーワンだからね」

イケメンはフツと笑いました。ゾツとします。

「お褒めいただいて光栄です。貴方のお名前は？」

私はキツとイケメンを睨みます。ずっとイケメンと表現しているのも癪に障るからです。

「私は、あしやひつじいん蘆屋道允。由緒ある陰陽師の家系の者だ」

驚きました。多分、この道允が『いざなみ流古神道』の教祖のはずです。

「教祖自らがここまで出て来るとは思っていなかったようだね、蘭子さん？」

道允はまたニヤリとします。何だかイラツとする笑いです。

「ええ。そんなに人手不足なのですか、貴方の団体は？」

私は皮肉を込めて尋ねました。すると道允は高笑いをして、

「そうではないよ。僕は貴女に敬意を表して、ここまで来たんだ。力のある相手には、それなりの対応をしないと失礼だからね」

「では何故、村長さんと助役さんを呪殺したの！？ 無関係なタクシーの運転手さんまで巻き込んで！」

私は身体中の血が沸騰しそうなのを何とか抑制して尋ねます。

「連中は余計な事をしようとした。あれは君達への警告であると共に、村の連中への警告でもある」

急に道允の気が変わりました。淫の気をまた放出し始めたのです。

「蘭子おー！」

そこにへトへトになりながら、麗華が現れました。

「さっきのは小手調べだ。これは耐えられるかな？」

道允は悪魔のような顔になり、私を見ます。淫の気を押し留めるので精一杯の私は、何も言い返せません。

「くっ！」

麗華も数珠を構え、淫の気を阻もうとしています。

「ほお。頑張るねえ。でも、無駄だよ、蘭子さん、麗華さん。貴女達は僕の側室として、僕の御子を産むんだ」

「アホ抜かせ、ボケ！」

苦しそうな表情で麗華が言います。しかし、口ではそう言いながら、麗華の右手は服のボタンを外し始めています。

「麗華……」

私は必死に自分の右手がボタンを外そうとするのを止めましたが、道允の淫の気は更にその力を増して来ました。

「おお！ 麗華さんの胸、大きいなあ。好きですよ、そういう嫌らしい身体」

道允はニツとして麗華に近づきます。

「うっうっ……」

麗華は服を脱ぎ捨ててしまい、上半身はブラのみです。それもほとんど隠していないようなタイプ。

「いいなあ、本当に」

道允は麗華のブラを外しました。

「こらあ、外道！ 何するんや!？」

麗華は言葉では抵抗していますが、身体はすっかり反応しています。

「準備万端ですね、麗華さん」

道允の右手が麗華のスカートを捲り、彼女の秘所に触れました。

「ああ……」

麗華はその途端に崩れ落ちるように膝を着いてしまいます。

「ほら、こんなにしっとりしてる……。嬉しいなあ。僕を受け入れてくれているんだね、麗華さん」

道允は指に付着した麗華の愛液をネラネラと弄もてあそびます。

「あ、アホ、やめー!」

麗華は悔し涙を流しながら叫びました。でも、右手は自分を慰めてしまっています。

「麗華!」

私は自分の右手を止めながら、何とか言葉を発しました。

「次は貴女ですよ、蘭子さん」

もう完全に術中の麗華を放置し、道允は私に近づきます。

さつきより強烈な淫の気です。

とうとう抗し切れなくなり、私の右手はボタンを外してしまします。

「フッフ、さしもの西園寺蘭子も、とうとう陥落ですか？」

道允の人を見下すような言い方に、私は怒りが爆発しそうですが、それはいけません。

もし、このまま道允にいろいろされてしまう事になると、それだけはいけないのです。

「ああ……」

私もとうとうブラウスを脱ぎ捨ててしまいました。

麗華を見ると、もう我を忘れて自分を慰めています。

「ほう。蘭子さん、可愛いブラジャーですねえ。子供用ですか？」

道允はバカにしたような調子で言いました。

ダメです。限界です。これ以上押し留めておくのは無理です。

「ごめんなさい、泉進様。一から修行のやり直しになりそうです。」

「むっ」

道允は私のブラを外そうと近づいたのですが、私の気が変質したのに気づき、バツと飛び退きました。

「何だ、一体……?」

彼には何が起こっているのかわからないようです。

「子供用だ?!? ふざけた事を抜かしてるんじゃないぞ、このエロヤロウが!」

私の身体から、爆発的な気が放出されます。ああ。

「オンマリシエイソワカ!」

麗華がコンサルタント事務所の所長に使ったものの数十倍の威力の摩利支天の真言が放たれ、私を取り巻いていたものはもちろんの事、麗華を縛っていた淫の気も全部吹き飛ばしてしまいました。

「い、一体……?」

道允は眉をひそめ、私を見えています。

「この西園寺蘭子様をそこまで見下すとは、大した度胸だ。絶対に許してやらねえから、覚悟しろ!」

そうです。いけない私。封じたはずの私の影がまた出て来てしまったのです。

しかも、品の悪さをアップさせています。

大股開きで仁王立ちして、スカートが切れてしまいそうです。どうしましょ？

西園寺蘭子でした。ああ……。

山奥の教祖はイケメン（後編）

私は西園寺蘭子。霊能者です。今、いけない私が大股開きで大笑いしています。

このまま死んでしまいたいくらい恥ずかしいです。

でも、そうも言っていられません。

目の前にいるのは、「いざなみ流古神道」の教祖である蘆屋道允あしやだういん。途方もない淫術の使い手です。彼は私の「変貌」に目を見開いていましたが、

「なるほど、そういう事ですか」

と言い、ニヤツとしました。

「それが噂に名高い裏の蘭子さんですね？」

道允は「いけない私」の情報を持っているようです。

それにしても、「噂に名高い裏の蘭子さん」て……。

泣きそうです。

「そうかい、私はそんなに有名なのかい。嬉しいねえ。嬉しいついでに、私の親友にした仕打ちのお礼をさせてもらおうよー!」

いけない私は、更に大きく脚を開きます。スカートがメリツと音を立てました。

「ぬ？」

道允もいけない私のパワーに気づいたのか、後ろに飛びました。

「食らいな！ オンマケイシバラヤソワカ！」

いきなり大自在天の真言を唱えるいけない私。

結構頭に来ているようです。

表の私と同じく、親友の八木麗華を大切に思っているのですね。

「無駄ですよ、裏蘭子さん」

道允は不敵な笑みを浮かべて言いました。

大自在天真言は道允に届く前に消滅しました。

「何！？」

いけない私が狼狽えています。

「僕の足元をよく見てくださいよ、裏蘭子さん」

道允は人を小馬鹿にしたように笑います。

「何だと！？」

言われたように道允の足元を見ると、五芒星ごぼうせいが描かれていました。

別名、安倍晴明印あべのせいめい。最強の結界です。

「そして、この結界にはもう一つ的能力がある」

道允の顔が険しくなります。

「くう！」

消滅したはずの自在天真言の力が、私に向かって来たのです。

(術を吸収して反射した?)

私はすっかり面食らってしまいました。が、

「笑わせるな！」

いけない私は全然怯んでいません。

「オンマケイシバラヤソワカ！」

もう一発自在天真言を放ち、向かって来た真言にぶつけて、力を相殺してしまいました。

この辺の臨機応変さだけは、いけない私を尊敬してしまいます。

「バカめ、この蘭子様は何でもお見通しだ！」

身体を仰け反らせて高笑いするいけない私です。前言撤回します。

「そうですね？」

術を相殺された道允はそれでも余裕の表情を崩しません。

ちょっと不気味です。

「強がりはやせ、キモいナルシストめ。お前は女が好きなんじゃないか、お前にかす傅く者が好きなだけだろう？」

いけない私が鋭い突込みを入れます。ほんの一瞬だけ、道允の顔が歪みました。

「術が使えないのなら、こっちでぶちのめすまでだ！」

いけない私は拳を握りしめ、道允に突進します。

「そう来ると思っていたよ、哀れな二重人格者さん」

道允が嫌らしい笑みを口元に浮かべ、呪符を取り出しました。

「うるさい！ くたばれ！」

いけない私はそれでも止まらず、道允に向かいます。これは確実に「カウンター」を食らうパターンだと思いますが、どうする事もできません。

「はあ！」

道允は呪符を私に投げつけます。

「いー！」

呪符は私の額と両胸（それもちょうど乳首の上辺り）、おへそ、それとあそこ（言えませんが）に貼り付きました。

途端に緊急停止するいけない私。身動きが取れなくなってしまいました。

「蘭子！」

服を着直した麗華が叫びました。でも、まだ立つ事ができません。

さっきの淫術で何度も「逝かされた」ため、足腰がフラフラなのです。

「愚かだなあ、貴女は。僕に逆らわなければ、こんな惨い方法を探らなくてもすんだのに」

道允は肩を竦めて私に近づきます。

「その呪符はやがて貴女の身体に溶け込み、貴女を僕の忠実なる肉人形にします」

ギョツとしました。まさしく「産む機械」にされるという事です。

「貴女は胸は小さいけど、丈夫そうだし、たくさん僕の御子を産んでくれると思っていますよ」

道允はニヤニヤしながら、私の胸を弄ります。

「触るな、クソヤロウ！」

いけない私が叫びます。その発言については異論はありません。

まさしくこいつは「クソヤロウ」です。

「そのうち気持ち良くなって来るよ、蘭子さん」

道允は私の顔をベロツと舐めました。寒気がしますが、抵抗できません。

いけない私が激怒したようです。

「てめえ！ 金 踏み潰してやる！」

ああ……。いくら何でも、その発言はいけません。記憶から消し去りたいです。

「それは困るなあ。子種がなくなってしまうよ」

道允は愉快そうに笑い、スカートの下に手を入れて来ました。

「うっ……」

いけない私が悶えます。気持ち良くなってしまったのでしょうか？

呪符が溶けて体内に入り始めました。身体が痺れていくのがわかります。

これはますますまずいです。

「ほうほう、蘭子さんも準備完了のようですね」

道允は舌なめずりしました。

彼の右手でネラネラと光るのは、恥ずかしながら、私の「愛液」のようです。

その時でした。

『蘭子さん、聞こえますか？』

男の人の声がしました。

『え？ どなたですか？』

私はその人に尋ねました。

『貴女の心の恋人の神崎新です』
かんざきあらた

神崎新？ 麗華の幼馴染の？ でも、心の恋人って……。気持ちは悪いです。

『神崎さん！ どこにいるのですか？』

『残念ながら、僕がいるのはあの世です。道允に殺されました。あそこをちゃん切られて』

神崎さんの声は悲しそうでしたが、「ちよん切られ」情報は要りません。

『いいですか、蘭子さん、摩利支天まりしてんの真言を自分の身体の中に向かって放ってください』

神崎さんは意外な事を言いました。

『どついつ事ですか？』

意味がわかりません。すると神崎さんの声は、

『これ以上話していると道允に気づかれぬます。とにかく、僕の言う通りにしてください。お願いしますよ』

と言うと、その気配を消してしまいました。

「今、誰かと話していましたね？ 誰です？」

道允が険しい表情で尋ねます。

「誰とも話していねえよ、バーカ」

いけない私はこの期に及んでもそんな事を言います。でも、何だか気持ちいい返しです。

「まあ、いいでしょう。もうすぐ貴女は僕の肉人形になるのだから」

道允の右手がまたスカートの下に入って来ます。

(こうなったら、神崎さんを信じるしかない！)

私は、摩利支天の真言を身体の中に向かって唱えました。

(オンマリシエイソワカ！)

え？ 何？

「ぬわ！」

道允が飛び退きました。次に私の身体から呪符が放出され、ポオツと燃え尽きました。

うまくいったようです。神崎さんに感謝ですね。伝わるでしょうか？

「何をした？」

道允が驚愕の表情で私を見えています。

「教えてやらねえよ！」

いけない私は身体を取り戻したのを知ると、一足飛びに道允に近づきました。

「おらああー！」

ラッシュです。もう惨たらしいほどの拳の嵐です。

「ほく、ぶき、くぼ、ぬれ……」

道允の顔はボコボコになり、すでに原型がわからないほど腫れ上がっています。

「げべべ……」

道允はそのまま後ろにドサツと倒れました。

「まだだよ、エロヤロウ！」

いけない私がニヤツとして大きく足を上げます。

何だか嫌な予感です。

「おらあ！」

いけない私は、渾身の一撃を道允の股間に見舞いました。

「ぎゃああああー!!」

地下駐車場に道允の絶叫が響き渡りました。

いけない私は満足そうにニツと笑うと、ようやく引っ込んでくれました。

こうして、いざなみ流古神道との戦いはどうにか終了したのでした。

ああ、削除デリートしたい記憶が多過ぎる……。

しばらくして、何とか足腰が立つようになった麗華と共に、絶叫したままの顔で気を失っている道允を呪術を練り込んだ特別な縄で縛った私は、G県の江原えはら雅功まさとしさんに連絡しました。

「何で蘭子だけ、江原さんの携帯番号知ってるねん？」

不満そうな麗華。何を考えているのでしょうか？

確かに雅功さんは素敵な男性ですが、奥さんがいるのです。

それに、雅功さんの息子さんは、友人の箕輪まどかちゃんの彼です。

恋愛対象になりません。人としてダメな考えです。

「無事、解決のようですね」

雅功さんは電話に出るなり言いました。

「はい。後は長野県の本拠に行つて、女性達を解放してあげないといけません」

すると、雅功さんが意外な事を言います。

「そちらは、私のお師匠様に任せてください。それと、道允もお師匠様のところに連れて行きますので、私が行くまで預かっていてください」

「そんなんですか」

私はチラッと麗華を見ます。

「おお、江原さん、ここに来るんか？」

嬉しそうな麗華が怖いです。妙な事をしないと良いのですが。

「できるだけ早めに伺いますので」

雅功さんはそう言って通話を切りました。

「楽しみやなあ。また服選びで悩まないかなあ」

麗華はヘラヘラしながら言います。

「麗華は大阪に帰らなくていいの？」

私はわざと意地悪な事を言ってみました。

「あ、蘭子、ウチに雅功さんを盗られる思ってるな？」

麗華は何をどう勘違いしたのか、とんでもない事を言い出します。

「何言ってるのよ」

私は呆れて、麗華に背を向けました。

「心配せんでええよ、蘭子。雅功さんにはチョツカイ出さんから」

「あのね……」

振り返ると、意外にも真顔の麗華がいました。

「おおきに、蘭子。今日は助けられてばかりやったな」

「麗華……」

何となく照れ臭い私。すると麗華は、

「それより、早^{はよ}、服着た方がええで」

とニヤニヤしながら言いました。

「え？」

はっと気づくと、私はまだブラ丸出しの格好です。

「早く教えてよ！」

顔を真っ赤にして、私は麗華に言いました。

「いや、蘭子は暑くてその格好してるんかなあて思ったんよ」

麗華はニツとしました。

「そんな訳ないでしょ！」

ムツとして言い返しながらも、何だかおかしくなって笑っています。

麗華も釣られて笑い出しました。

何にしても、お互い貞操が無事で良かったです。

西園寺蘭子でした。

魅惑の占い師（依頼編）

私は西園寺蘭子。さいおんじ らんこ 霊能者です。

先日、妙な陰陽師の襲撃を受け、私と親友の八木麗華は、危うくそいつの肉奴隷にされてしまつところでした。

でも、「いけない私」の活躍で、その陰陽師、蘆屋道允は倒れま
した。

そして、次の日に、G県の退魔師である江原雅功さんが道允を引
き取りに来てくださいました。

私は襲い掛かりそうな麗華を何とか押し止め、雅功さんに道允を
お願いしました。

「江原さん、ええなあ」

麗華が頬を染めて乙女全開なのは、ゾツとしました。

まあ、それは良かったのですが……。

数日後、私は事務所の電話に出て、猛省中でした。

「蘭子ちゃん、何のために厳しい修行に堪えて来たのか、わからんぞ」

電話の向こうから、出羽の大修験者である遠野泉進様の落胆ぶりが伝わって来ます。

「申し訳ありません、泉進様。もう一度修行をし直します」

私は、見えないのはわかっていますが、深々と頭を下げたお詫びしました。

「蘭子ちゃんの裏の人格は、確実に蘭子ちゃんを蝕んでいる。何年もその状態が続くと、いつか立場が逆転してしまうぞ」

「はい……」

それは大変恐ろしい末路です。絶対に困ります。

「一刻も早く、僕の所に来なさい。但し、あの関西女の同行は不要だ。代わりに小松崎瑠希弥ちゃんを……」

泉進様がそこまで仰った時です。

「何やと、ジイさん！　ウチは行ったらあかんのかい！？」

隣で聞き耳を立てていた麗華が、受話器を奪い取って怒鳴りました。

泉進様が狼狽える姿が目に見えるようです。

「どづいづ事か、説明してもらおか？」

麗華はその筋の人も逃げ出しそうなドスの効いた声で続けます。

「わっはっは、冗談じゃ、冗談。僕はな、麗華ちゃんが来ると、ドキドキして、何も手につかなくなるんじゃないよ」

「白々しい事抜かすな、エロジジイ！」

麗華はムツとしたままで私に受話器を返し、ソファにドスンと座ります。

「氣イ悪いわ、ホンマに」

腕組みをして剥れる麗華。ちょっと可愛いです。

「すみません、泉進様」

私は麗華の非礼をお詫びしました。麗華が隣にいるのを言わなかった責任も感じましたし。

泉進様は大笑いしてから、

「まあ、すぐに来る必要はない。窮地を救ってくれた神崎新かんざきあらたという靈能者の言った事を応用する事だ」

泉進様の言葉に、私は思わず麗華と顔を見合わせました。

「どつという事ですか？」

不思議に思って尋ねます。すると泉進様は、

「自分の身体の中に毎日、摩利支天まりしてんの真言を放つのだ。そうすれば、

裏の人格の持つ凶暴性と残虐性が薄まる。そうすれば、裏の人格に取って代わられる危険性が弱まる」

「そうなんですか」

私はまた麗華と顔を見合わせました。

「但し、完全に裏蘭子を消してしまうと、蘭子ちゃん自身の力に影響するから、程よく抑える程度に留めた方が良いだろうな」

「そうなんですか……」

何だか難しそうです。私としては、できれば裏蘭子には奇麗さっぱり消えてもらいたいのですが……。

「どうしても裏蘭子が手に負えなくなったら、また来なさい。まあ、蘭子ちゃんなら、裏の人格とうまく付き合っていけると思うがな」

「はあ……」

あの「いけない私」とうまく付き合っていく自信は全くありません。

私は泉進様にお礼を言って、受話器を置きました。

「次はウチは行かへんで。あのジジイ、ムカつく」

麗華はまだ怒っているようです。

「まあ、行かずにすむようにしたいわね」

私がそう言って、麗華の向かいに座ろうとした時です。

ドアフォンが鳴りました。

ドアの向こうから伝わって来る気を感じから、クライアントのようです。

私は麗華に目配せしてからドアに近づき、開きました。

そこには私達より何歳か年上くらいの女性が立っていました。

白地にドット柄の半袖カットソーとネイビーブルーのパンツの組み合わせ。

左手の薬指の指輪を見るまでもなく、発する気で既婚者だとわかります。

でも、何だか結婚されている女性にしては、妙に淫の気を漂わせています。

欲求不満という状態でしょうか？

「あ、あの、西園寺蘭子先生ですか？」

女性が口を開きました。私は微笑んで、

「はい。何かお悩み事ですか？」

と尋ねました。すると何故か女性は俯いて頬を染め、

「はい」

私は取り敢えず、彼女を事務所に招き入れ、ソファに座らせます。

麗華は給湯室で飲み物を入れてくれているようです。

珍しいです。なんて思ったら、悪いですね。

「よろしければ、お話を聞かせていただけますか？」

私はできるだけ女性を刺激しないように気をつけながら言いました。

「夫がその、全然してくれないんです」

「え？」

一瞬にして、彼女の悩みがわかりました。

えーと……。私の方が赤面してしまいます。

「何や、エッチしてくれんのか、旦那さん？」

アイスコーヒーを入れたグラスをトンとテーブルに置くと、麗華は不躰にそう言い、女性の隣に座ります。

「はい」

女性はグイッと顔を近づける麗華から離れながら答えました。

只の欲求不満にしては、彼女の気は悩みに溢れています。何かありそうです。

「旦那が何かに嵌ってるな？」

麗華が言うと、女性はビクツとして、

「はい。最近、占いに嵌っているんです」

「占い？」

私と麗華は異口同音に叫びました。

女性の名前は、篠崎美都子さん。

大学時代に知り合った孝雄さんと三年前に結婚したそうです。

子供はまだらしく、早く欲しい美都子さんと、まだ一人きりの生活を楽しみたい孝雄さんの思いがすれ違っていますね。

そんな時、孝雄さんは雑誌で知った有名な占い師のところに行き、どうすればいいか訊いたそうです。

するとその占い師は、

「子供はまだ早い。貴方は仕事に打ち込みなさい」

と言ったようです。それ以来、孝雄さんは美都子さんと、えーと、その、エッチをしなくなったそうです。

「しょうもない旦那やな。占い師の戯言を間に受けおって」

麗華はソファにふんぞり返って言いました。そして、私の視線に気づき、

「も、もちろん、占い師にはピンからキリまであるからな。ハハハ」とわざとらしく笑います。

私も占いをしますので、気を遣ったつもりなのでしょう。

別に気にしてませんが。

すると美都子さんは衝撃的な事を言いました。

「夫は、子供を作りたくないだけで、エッチが嫌いな訳ではなかったんです。ですから、毎日のように私達は愛し合っていました」

美都子さんは真っ赤になりながら説明してくれます。私も顔が火照るのがわかりますが、麗華は楽しそうです。

「でも、その占い師のところに行ってから、私を全然求めて来なくなっただけです」

美都子さんは涙ぐんで言い放ちます。

「その占い師の名前、もしかして、太田梨子おた りこやないか？」

麗華が真顔になって尋ねました。

太田梨子。メディアでも引つ張りだこの売れっ子占い師です。

彼女は、その辺にたくさんいるエセ占い師ではなく、本当に力のある人です。

但し、あまりにも派手な生活と、占いをビジネスにして恥じないその性格を同じ占い師達に疎まれ、嫌われています。

「はい、そうです。あの占い師が、夫を誘惑して……」

なるほど。美都子さんは、孝雄さんが太田梨子と肉体関係にあると思っっているのです。

確かに太田梨子は若くて奇麗で、その上プロポーションも抜群。

加えて、過激な服装でテレビや雑誌に登場しているので、男性の人気も抜群です。

「浮気の兆候があるのですか？」

私は美都子さんを通じて孝雄さんを調べようと思いました。孝雄さんにコンタクトできないので、そう尋ねました。

「占い師のところに行った日は、とても疲れた顔をしているんです。その顔は、夫が果てた時の顔なんです」

美都子さん、今、凄い事言いましたよ！ 私と麗華は思わず顔を見合わせました。

「そうか、なるほどな。旦那、いろんな意味で、太田梨子に嵌ってるよつちな」

麗華がニヤリとして言いました。

「お願いです、あの人を占い師から救ってください。心なしか、日に日にやつれているような気がするんです」

美都子さんは私に縋^{すが}りついて言います。目からポロポロと涙が零れていました。

「わかりました。調べてみます。連絡先を教えてください」

私は名刺を渡し、メモ帳に美都子さんの携帯の番号を書いてもらいました。

そして、当事務所の料金体系を説明します。

「何かわかりましたら、連絡致します」

「どうぞよろしく願います」

美都子さんは何度も頭を下げて、事務所を去りました。

「太田梨子、あの人の旦那を縛ってるな、呪術で」

麗華が言いました。

「そうね。さつき、美都子さんを通じて孝雄さんを調べようとしたら、邪魔されたわ」

「なかなか楽しめそうやな」

麗華は嬉しそうです。

「にしてもや」

麗華は私がしまいかけた料金表を取り上げ、

「安過ぎるで、これ。こないな金額やから、蘭子は貧乏から抜けられないねん」

と酷い事を言います。

麗華は、私が亡くなった両親の遺産で生活できている事を知りません。

ですから、私がひもじい生活をしていると思ひ込んでいます。

でも、瑠希弥がいた時にも相当な金額を「稼いだ」ので、今は多分、遺産より私の通帳の残高の方が多いと思います。

これも、麗華には内緒です。ごめんね、麗華。

「まあ、ええ。それより、これからどないする？」

麗華は料金表を私に返して尋ねました。私は料金表を机の引き出しにしまって、

「まずは、旦那さんに会ってみましようか。ご本尊様に会うのは、

その後ね」

「そつやな」

さて、新しい依頼です。太田梨子はどんな女性なのか。

何か企んでいるのか？ 興味は尽きません。

西園寺蘭子でした。

魅惑の占い師（孝雄編）

私は西園寺蘭子。霊能者です。占いや骨董品の鑑定も承っています。

怪しい陰陽師の一件が解決してまもなく、今度は夫の浮気相手が占い師らしいと言う調査依頼を受けました。

但し、その占い師は、今メディアを騒がせている美貌の占い師、おおた太田梨子りしこです。

その能力は、私も認めざるを得ないほどですが、派手な衣装とそのあまりにもビジネス優先なところが、同業者達の反感を買っています。

「ホンマ、金に汚い女らしいで」

依頼者の夫である篠崎孝雄さんが勤務している建設会社に向かう車の中で、私の親友の八木麗華が言います。

「……」

私は、太田梨子も、麗華にだけは「金に汚い」と言われたくないだろうな、などと想像し、つい笑ってしまいます。

「笑い事やないで、蘭子」

麗華は助手席でふんぞり返って言いました。シートベルトを着けている意味がない態勢です。

「はいはい」

私は肩を竦めて、ハンドルを切りました。

孝雄さんの会社は、丸の内の一等地にあるビルの中です。

私達のような怪しい女二人が入れるような場所ではありません。

「どないする、蘭子？」

さすがの麗華も、こういうところにはコネクションはないようです。

「取り敢えず、正攻法で行ってみましょうか」

私は麗華を伴い、ビルの中に入ります。

正面に総合受付がありました。

このビルには、日本有数の大企業である五反田グループの関連会社が入っているようです。

「あの、五反田建設の篠崎孝雄さんにお会いしたいのですが？」

私は笑顔で受付のお姉さんに話しかけます。何故か麗華は私の背後に隠れるようについて来ています。こういうのは苦手のようです。

「アポイントメントはおとりですか？」

受付のお姉さんが言いました。

約束がないと会えないのか!? 「いけない私」ならすぐにそう
言うでしょう。

「いえ、とっていません」

私は更にニコツとして答えました。

「お待ちください」

お姉さんは電話で五反田建設のフロアに連絡しました。

「一階受付の丸山です。篠崎課長はいらっしゃいますか？」

相手が答えているようです。

「はい」

お姉さんは受話器を戻すと、私を見上げて、

「篠崎は只今外出中です」

「どちらにおいでか、わかりますか？」

私は即座に尋ねました。

「それはお答えしかねます」

お姉さんは作り笑顔で言いました。でしようね。

確認してくれただけでもありがたい事かも。

「ありがとうございます」

私はお姉さんにお礼を言い、受付を離れます。

「まさかと思うけど、こんな時間から、太田梨子のとこやないやろな？」

麗華が呟きました。私もそんな気がします。

その時でした。

「五反田建設さんの篠崎課長はいらっしゃいますか？」

「どこかの会社の営業の方が、先程のお姉さんに尋ねています。

私と麗華は、わざと聞こえないフリをしてその場から去りました。

その営業さんは、お姉さんに何か言われ、ロビーのソファに向かいます。

「おやおやあ、客によって、いたりいなかったりするんか、この会社の人は」

麗華は、お姉さんに聞こえるような大きな声で嫌みを言います。

ふと受付のカウンターを見ると、お姉さんは俯いてこっちを見ないようにしていました。

「いるのはわかったから、降りて来るのを待ちましょう」

私はまだお姉さんを睨んでいる麗華を引き摺るようにしてビルから出ました。

そして、少し離れた場所から中を観察します。

「暑いから、中に入りたいわ、蘭子」

麗華が下品にも、ど派手なブラウスの襟をパタパタさせています。

「見えるわよ、麗華」

私は赤面して注意しました。

「別にええやん、減るもんやないし」

「……」

恥知らずな麗華に私は呆れました。

そんな事を言い合っているうちに、お目当ての孝雄さんが降りて来たようです。

「おお、なかなかイケメンやん。奥さん、心配なはずや」

麗華は、孝雄さんが男前なのに気づき、サツとビルに入って行き

ます。

「ちよつと、麗華、早いわよ！」

私も慌ててビルに入ります。

孝雄さんは私達に気づいた様子もなく、ソファで待つ営業さんに近づき、挨拶を交わしています。

「話が終わるのを待ちましょう」

私と麗華は、ロビーの端のソファに座ろうとしました。

「あの」

その時、近くにいた二人の警備員さんが声をかけて来ました。

「ちよつとこちらに来ていただけますか？」

言葉は丁寧ですが、私と麗華を挟み込むように立ち、私達の腕を掴みます。

「何すんねん!？」

麗華が振り払おうとしますが、警備員さんは私達より二十センチ以上身長が高く、体重も一人で二人分くらいありますから、どうにもなりません。

「く……」

しかも、右腕を強引に後ろに反らされたので、印が結べず、真言も使えません。

「さあ」

私達は、ロビーにいる全員の視線を浴びて、奥にある警備員の控室へと連れて行かれました。

「こら、ええ加減にせいよ！」

控室に押し込まれるように入らされると、麗華が怒鳴りました。

「どこの風俗店だ、お前達は？」

警備員さんが凄んで来ました。風俗店？ 麗華はともかく、私はそんないかがわしい格好ではありません。

「最近、グループの管理職に近づいて、浮気をネタにゆすりを働く連中がいる。お前達もその仲間だろう？」

警備員さんが言いました。何か変です。

妙な気が漂っているような感じですよ。

「蘭子、こいつら……」

麗華が警備員さん達を射るような目で見ます。

警備員さん達の目は、普通の人の目ではありません。

何者かに操られています。

「そんなに男が欲しいのなら、俺達が相手をしてやるよ！」

警備員さん達はいきなりズボンと下着を脱ぎ出します。

まさか、太田梨子の差し金？ 思わず麗華と顔を見合わせます。

「そんな貧相なもんぶら下げて、偉そうにすな！」

私は顔を背けたのですが、麗華はしっかり見ているようです。

貧相って……。どの辺がなのでしょう？ やだ、私ったら。

「インダラヤソワカ！」

麗華の帝釈天真言が炸裂し、

「ぐぎぎぎぎあー！」

警備員さんの大事なところに直撃したようです。

「ご愁傷様です。」

「やばいで、蘭子！ 事態は思うてる以上に深刻かもしれへんで」

麗華は痙攣している警備員さんを蹴飛ばして、部屋を飛び出します。

私は警備員さんを視界にいれないようにして、麗華に続きました。

ロビーに戻ると、ちょうど孝雄さんが話を終えて立ち上がるところでした。

まさにグッドタイミングです。

すると孝雄さんは私達に気づき、慌てて走り出します。

「逃がすかい！」

麗華は、

「オンベイシラマンダヤソワカ！」

と毘沙門天の真言を唱え、高速移動して孝雄さんの前に回り込みます。

またロビーの視線が麗華に集まりました。

「篠崎さん、私達は貴方の奥様に頼まれて来たのです。話を聞かせてください」

私も彼に追いつき、言いました。

「美都子に？」

孝雄さんはビクツとして私を見ました。

ロビーのソファで、私と麗華は孝雄さんに経緯を語りました。

孝雄さんはホツとした表情で、

「良かった。貴方達が妻の弁護士かと思っただんです」

孝雄さんは、自分が太田梨子に嵌っているのを知られ、美都子さんに離婚を迫られるのではないかと思っただそうです。でも、麗華のような服装の弁護士はいないと思います。

「美都子さんは、貴方の身体を心配しているんです」

私が言うと、

「あなたが太田梨子のところから帰って来ると、イッた時のような顔してて奥さん言っただで」

麗華がストレートに言います。私はギョツとしてしまいました。

孝雄さんは真っ赤になっています。

「そ、そんな事を美都子が……」

「そうや。奥さんは、あなたが太田梨子とエッチしてるんやないかて疑ってるんや」

麗華は更に直球勝負を仕掛けます。

「それはありません。私はあくまで太田先生のご助言を賜っているだけです」

孝雄さんは麗華を見て答えました。嘘を吐いていない事は、孝雄さんの出す気でわかります。

「ほなら、太田梨子とどこで何しとるねん？ 何で帰って来た時、イツたような顔しとるねん？」

麗華は苛ついて来ています。

「それは……」

孝雄さんは口籠りました。隠し事をしているのではないようです。

「覚えていないのですね？」

私が尋ねると、孝雄さんは私を見て、

「はい。太田先生のところに行つて、話を聞いていただくと、最後に先生がお香を焚いてくださいます。その辺りから、お部屋を出るまでの記憶が曖昧で……」

お香ですか？ そこに何かがありそうですね。

「太田梨子のところにはもう行かない方がいいですよ。行き続けると、貴方の命が危うくなります」

私は脅かす訳ではなく、そう忠告しました。

「そうですね。最近、身体の疲れが酷くて、妻の話の相手をする気力もなくなつて……」

孝雄さんは毎日帰りに太田梨子のところに寄り、相談をしていたそうです。

「いくらあなたが精力絶倫でも、このままやとやばいで」

麗華が孝雄さんを覗き込むように見ました。孝雄さんは思わず股間に手をやりました。

「はあ……」

孝雄さんは何か心当たりがあるのか、項垂れます。そして、

「どうすればいいのでしょうか？」

と私を見ました。私の視界の端にムツとする麗華が見えました。私は何か言いたそうな麗華を無視して、

「今日はこのまま早退して、私の事務所に来てください」

「え？」

孝雄さんは「そんな事で会社を早退できるか！」と言いたそうでしたが、

「命に関わるんですよ」

という私の言葉で、

「はい」

渋々納得し、受付から自分の上司に電話し、体調が優れないと伝え、早退を申し出たようです。

私達は、孝雄さんを車に乗せ、一旦事務所に戻りました。

太田梨子が何か仕掛けて来ると思いましたが、何もありませんでした。

多分彼女は、私達が乗り込む事を予測し、手ぐすね引いて待っているのでしょう。

望むところです。

「絶対にここから出ないくださいね」

私は何度も念を押し、孝雄さんを事務所に残して、太田梨子のいる屋敷へと向かいました。

さて、どんなところなのでしょう？

何だかドキドキして来ます。

西園寺蘭子でした。

魅惑の占い師（ご本尊編その巻）

私は西園寺蘭子。霊能者です。

太田梨子というメディアに大変露出している（しかもご本人も大変露出度が高い）占い師が自分の夫と肉体関係を結んでいるのではないかと疑惑を抱いた篠崎美都子さんの依頼を受けました。

まず、私と親友の八木麗華は、美都子さんの夫である孝雄さんが勤務している会社に行きました。

そこで、私達は怪しい警備員さん達に襲われそうになり、麗華の真言で難を逃れました。

太田梨子の魔の手がそこまで迫っている事を感じた私達は、孝雄さんを早退させ、事務所かくまに匿い、太田梨子の邸に向かいました。

太田梨子の邸は東京と神奈川の境界近くにあるようです。

「仰山稼たかいだ汚い金で、ごつつい金びかな豪邸建てて、メイドも置かんと、たった一人で暮らしとるらしいで。見られたら困るもんがあるんやろうなあ」

助手席で、麗華が嬉しそうに言います。

「麗華はどう見ているの、孝雄さんの事を？」

私は前を向いたままで尋ねます。安全運転が第一だからです。

「多分、あの強欲な女の事やから、あのイケメンの子種を絞り取って、何ちゃらバンクとかに売ってるんじゃないか？」

「何ちゃらバンク？ 何、それ？」

私をカマトトとか言う方が時々いらっしやいますが、本当に何も知らないのです。

「精子バンクや」

「せ、精子……？」

ああ。聞かなければ良かったようです。顔が火照って来ます。

「蘭子も知ってるやろ？ 子種を売り買いしてる商売があるゆう事は？」

「し、知りません」

私は熱くなった顔をどう冷ませばいいのか考えながらハンドルを切ります。

「あれ、かなり儲かるらしいねん。ウチもやりたいくらいやけど、ある程度資本がいるねん。そやから、諦めてん」

何を言っているのでしょうか、この人は？

「美都子さんの旦那、間違いなく子種を抜かれとるんや。太田梨子

はたくさんのお金を誑かして、子種を仰山取ってるんやで、きっと

麗華の推理が当たっているとすれば、何ともおぞましい話です。

「もちろん、真面目に商売してる会社もあるから、子種を売る事が悪い訳やない。問題はその採取方法や」

麗華は名探偵気取りで話を続けます。

「採取方法？」

私は自転車が渡り切るのを確認してから左折しました。

「そつや。あのイケメン旦那の話にあつたやろ？ 相談が終わると、最後に梨子がお香を焚いてくれるて」

「ええ、そつね」

麗華はニヤツとして、

「恐らく、そのお香に何か仕込んでんねん。男がいき易くなる何かをな」

「いき易くなる……」

また顔が熱くなって来てしまいます。

「で、恍惚としてる隙に子種をチャチャツといただくんやろな」

「そつなの」

麗華があまりに得意そうに推理を展開するので、私は何も言わずに聞き役に徹しました。

その方が楽だからです。

「見えて来たわ」

住宅街から更に境界に向かうと、開けた河原に出ました。

その遙か先に白亜の豪邸が建っています。

あれが太田梨子の邸です。麗華の想像とは少し違い、見た目は上品です。

中身はどうかわかりませんが。

「何や、センス悪いな。ウチが豪邸建てたら、こないな風にはようせんわ」

麗華はムスツとして太田邸を睨みました。

邸のすぐ前まで来ると、門扉が開けられていて、まるで私達に入れと言っているようです。

「どつする、麗華？」

私は直前で車を停止させて尋ねました。

「前進あるのみや、蘭子」

麗華は門の向こうを指差しました。

「了解」

私もそう思いましたので、アクセルを踏み込みます。

車が門をくぐるのとほぼ同時に、門扉がガシャンと閉じました。

「おうおう、挑発してるやんけ、太田梨子が」

麗華はまた嬉しそうにしています。全く、怖いモノ知らずなんだから。

私は邸の車寄せまで進み、停車しました。

玄関の扉は閉じたままで、誰かが出て来る気配はありません。

「待ち伏せしてる様子もないな」

麗華はそう言いながら、車を降ります。私も降りました。

確かに扉の向こうに誰かが潜んでいる感じはしません。

余裕なのか、もっと奥に罠があるのか？

「取り敢えず、行こか」

麗華はその重々しい扉を押し開きます。

大きい割に簡単に開いたので、麗華はそのまま向こうに倒れかけました。

「見かけ倒しの扉やな」

彼女は扉を蹴飛ばします。もう、下品なんだから。

「は！」

その時、大きなエントランスの向こうから五人の黒尽くめの男達が走って来ました。

全員サングラスをかけている上、太田梨子に何かされているのか、心が読み取れません。

「何や、あんたら!？」

麗華は指をボキボキ慣らしながら怒鳴ります。しかし、当然の事ながら、彼らは何も答えません。

「ようこそ、我が館へ」

どこからか、太田梨子のものと思われる声が聞こえました。

「どじやっ？」

麗華がまた怒鳴ります。私も周囲に気を配りますが、邸に何か仕掛けられているのか、全く気配がしません。

「じじじ」

その声に私と麗華は仰天して振り返りました。

いつの間にか、太田梨子がそこに立っていました。

噂通り、思った通りの綺麗な女性です。しかも、まるでベリダ
ンスでも踊り出しそうなくらいセクシーな衣装で、おへそが丸見え
です。

頭にはキラキラした髪飾りを着け、顔の下半分をシースルーの布
で隠しています。

それにしても考えられません。一体どうやって私達の背後をとっ
たのか？

玄関の扉は開いていないのです。

「う……」

私達が梨子の出現に驚いている隙を突き、男達が私達を羽交い締
めにします。

「何さらすねん!？」

麗華がもがきます。でも、男達はビクともしません。

「いらしていただいて早々、手荒な真似をして申し訳ありません。
お眠りくださいな」

梨子はニヤリとし、私と麗華の鼻腔に白いハンカチを押し当てま

した。

「く……」

睡眠薬が染み込まされているようです。途端に堪え難い睡魔が襲って来ました。

私は普段から薬を服用しないので、余計に効果観面こうかてきめんなのでしょう。そのまま夢の中へとまっしぐらです。

ああ。空を飛んでいます。どこまでもどこまでも……。

「起きてくださいな、お二人共」

梨子の声がありました。ハツとして目を開けます。

飛び込んで来る目も眩むような眩しいライトの光。

手術室のみたいな部屋です。

私と麗華は、手術台のようなものの上に寝かされています。

手首と首を拘束具で固定されています。

よく観察すると、私と麗華は手術着に着替えさせられていました。

手術着の下は何も着ていません。という事は、今周りにいる男達

にすっかり「見られた」という事です。恥ずかしい。

もっと恥ずかしい事に気づきました。

私達は、足を開かされているのです。

ちょっと！ そちら側に立っている人、こっちを見ないでください。

叫びたいのですが、声が出ません。

口には猿轡さるべしわを噛まされています。

「お目覚めですか、西園寺さん、八木さん？」

視界に梨子が入って来ます。その顔は奇麗というより、狡猾といった方がよく当てはまっていますね。

「西園寺さん、もしかして、男性を知らないのかしら？ 奇麗ねえ」

梨子が私のあそこを覗き込みます。死ぬほど恥ずかしいです。

「それに比べて、八木さんはよく使っているみたいねえ。でも、名器なきみたいね」

麗華も覗かれて恥ずかしそうですが、「名器」と言われてにやけています。

名器ってどういう事なのでしょう？

「でも、お二人共、出産は未経験みたいね」

梨子の言葉に私も麗華もピクンとしました。

「これから、その貴重な体験をさせてあげるわ」

梨子は妙な形の試験管のようなものを持ちました。それには白い液体が入っています。

まさか！？

「人工受精を体験していただくわ。そして、もちろん、ゆくゆくは、出産もね」

ちょっと待つてください！ どの誰とも知らない人の、えーと、その、子種をいただいての妊娠なんて納得ができません！

「そんなに怯えないで。大丈夫よ、痛くないから」

梨子は舌舐りしたなめすして言いました。

どうしましょう？ 口を塞がれて、何も言えない上、手首を拘束されて印も結べません。

でも、このまま納得がいかない妊娠はしたくありません。

その時、出羽の修行の事を思い出しました。

『蘭子ちゃん、気を自由に移動させる事ができれば、指先からも相手を倒すほどの威力のある気を練り出す事ができるのじゃよ』

遠野泉進様の教えです。

(今はそれをやってみるしかない)

私は右手の人差し指に気を集中します。

それを見ていた麗華も気づいたようで、気を集中し始めました。

「！」

試験管モドキが押し当てられました。

「さあ、力を抜いてください、西園寺さん」

梨子が耳元で囁きます。早く何とかしないと！

「ぎゃっ！」

私より先に麗華が気を放ったようです。梨子の脇腹に命中したようで、彼女はそのまま部屋の端まで吹っ飛びました。

私は高めた気を拘束具に当てて破壊し、試験管モドキを投げ捨てました。

麗華も拘束具から抜け出せたようです。

「おのれ！」

憎らしそうに私達を睨むと、梨子は部屋を飛び出して行きました。

残されたのは、私と麗華、そして十人ばかりいる黒尽くめの男達です。

猿轡を外し、

「まとめてぶちのめしたるから、はよかかって来いや！」

と麗華が凄みました。

果たしてこれからどうなるのでしょうか？

西園寺蘭子でした。

魅惑の占い師（ご本尊編その弐）

私は西園寺蘭子。霊能者です。

現在、まだピンチのようです。

依頼を受けて訪れた魅惑の占い師の太田梨子の邸内おたで、私と親友りこの八木麗華は梨子の奇襲に遭い、睡眠薬を嗅がされ、妙な部屋で危うく「人工受精」の実験台にされるところでした。

出羽の修験者である遠野泉進様の言葉を思い出し、身体の中の気を指先に集中させて難を逃れた私と麗華。

さて、目の前にいるのは、梨子の「魅力」で操られている黒尽くめの男達です。

怒髪天を衝く状態の麗華は、指をボキボキ鳴らしています。

黒尽くめの男達は十人います。五人が割当でしょうが、麗華は一人で全員倒す気満々です。

「さっきの子種の持ち主はお前らの中におるんか？ おるんやつたら、そいつから血祭りや！」

あまりそれは関係ないと思うのですが、意見してもややこしくなるだけなので、何も言いません。

「こいつら、完全に梨子の虜やな。まあ、ええ」

麗華はどつちが悪役かと首を傾げたくなるような顔で笑います。

「ちょっと前歯折れるかも知れんけど、恨まんといてな！」

彼女はそう言い放つと、男達に向かいます。

「うおー！」

男達はまるで何度もりハーサルをしたかのような整然とした動きで、麗華の蹴りと突きの攻撃をかわし、反撃して来ます。

「やるやないか」

ちよつとだけ焦っている麗華。でも、私に助けを求めようとはしません。

「よおし、ウチも本気出すぞ」

麗華は虚勢を張ります。さつきも十分本気だったように見えましたが、言っても無駄なので黙っています。

「麗華、ここは頼んだわよ」

「おうー！」

私は梨子を探す事にし、男達の隙を突いて部屋を出ました。

ほんの少し、「そりゃないやる？」という悲しそうな顔をした麗華が目に入りましたが、多分大丈夫です。

そこは長い廊下です。全く窓がないところを見ると、地下室のようですね。薄暗い程度の明かりが点いています。

「きゃっ!」

それでも、そう仕込まれているのか、三人の男が私を追って来ました。

私はどちらかというところ、「運動音痴」に入りますので、格闘系は苦手です。

もちろん、「いけない私」なら、男三人くらい、〇・五秒で倒すでしょうが、今回は絶対に出て来て欲しくないのです、それはなしです。

今回「いけない私」に出て来て欲しくないのは、私の自我崩壊の危険性もあるからなのですが、それ以上に厄介な事になりそうだからなんです。

なんていう事を考えている場合ではありません。必死に逃げないと。

「インダラヤソワカ!」

私は振り向きざまに帝釈天の真言を唱えました。

「ぐわあ!」

一人が雷撃で倒れます。しかし、真言攻撃はしない方が良かったみたいです。

立ち止まったせいで、私は他の二人に追いつかれてしまいました。

「オンマリシエイソワカ」

操られているのなら、その糸を断ち切ってあげようと思い、摩利支天の真言を唱えます。

バシユウと何かが弾ける音がして、男二人は気を失って倒れました。

「蘭子！」

そこへへとへと気味の麗華が走って来ました。

「麗華！ 大丈夫？」

「心配しないと、ブツブツうるさいのです。」

「もちろんや。ウチを倒すには、百人以上用意しとけっちゆうこっちや」

ガハハと笑う麗華ですが、息が上がっているのか、苦しそうです。

「梨子がどこにいるのか探しましょう」

「そっちな」

二人で梨子の気を探りますが、やはり邸全体に何か結界のようなものが施されているのか、梨子の気は感じられませんでした。

仕方がないので長い廊下をそのまま進むと、エレベーターのあるホールに出ました。

地上に出るには、エレベーターに乗るしかないようですが、キンキラキンに飾り立てられた扉があらさまに怪しいので、

「どっつする？」

と麗華に尋ねました。麗華は腕組みして扉を睨み、

「行くしかないやろ。どんな罠があろうとも、ウチ等は大丈夫や」

と言って、親指を突き立てました。そのポーズに何の意味があるのか、よくわかりませんが。

「よっしゃ、行くぞ」

麗華は勇んで壁にある昇降ボタンを押します。

モーターが駆動する音が聞こえ、エレベーターが降りて来ます。

チンという音が聞こえ、キンキラキンの扉が重々しく開きます。

内部を探ってみますが、特に罠は仕掛けられていないようです。

「何や、見かけ倒しかい」

麗華はそう言いながらもホツとしたように溜息を吐き、中に入ります。

私も続けて入りました。

「え？」

利用階のボタンを押そうとして、私は驚きました。

B5まであります。私達がいるのはB1なので、あと四階も地下があるのです。

もう一度梨子の気を探ってみますが、やはりわかりません。

「梨子はB5やろ。悪い奴は地下が好きやねん」

麗華は名推理をした探偵気取りなのか、フツと格好をつけて笑いました。

「そうかもね」

私は苦笑いして、「B5」のボタンを押します。まさか、あんなところに着くとは思いませんでした。

扉がゆっくりと閉じ、キューーンとモーターが動き出し、滑車が回り出す音がします。

エレベーターは下に行く時のあの独特の嫌な感覚を発生し、降り始めました。

エレベーターは、様々な人が利用する狭い空間なので、嫌な気が溜まりやすいのは事実ですが、よくテレビの恐怖映像であるような

事は滅多に起こりません。

ところがです。

ガクン、とエレベーターが停止しました。

「こ、故障か？」

麗華がビクツツと言います。実は彼女、閉所恐怖症です。隠してるつもりみたいですけど。

だから、霊は全然怖くないし、大抵のものにはビビったりしないのですが、エレベーターは違うんです。

普通に動いている時は、全然怖くないらしいですが、止まったりするとパニック気味になります。

「ら、蘭子」

麗華は私にしがみついて来ました。震えているようです。

「西園寺さん、八木さん、私の邪魔をしないでくださいませんか？」

梨子の声がスピーカーから聞こえて来ました。

「何をしたの？」

私はごく冷静に尋ねます。

「エレベーターの駆動系を切りました。しばらくそこで、私の可愛

いペット達と楽しんでいてくださいな。私は大事な儀式がありますので」

「儀式？」

しかし、梨子はもう別の場所に移動したのか、何も答えはありません。

「ふうふうおお！」

その時、天井からいきなり練り込まれた悪意を放っている霊が入ってきました。

「そういう事なのね」

私は麗華に目配せし、印を結びます。霊は緩やかに舞い降りると、瞳のない目を私に向けます。

若い女性の霊のようです。白いワンピースを着て、おかっぱのような髪形をしています。

梨子が術で縛っているらしく、何の感情もありません。

「わ！」

閉所にたじろいでいる麗華は、壁から別の霊が現れたのに仰天し、叫びました。

普段の彼女からは考えられません。戦闘不能状態です。

壁から現れた霊は、中年の男性で、髪が薄く、メタボど真ん中
です。同じく、瞳のない目で、感情は読み取れません。

この人達は、梨子とどんな関わりがあるのかを探ろうとしまし
たが、梨子の術で縛られているため、何も見えて来ませんでした。

「ひいうわあ！」

二人が私達に襲いかかります。

「オンマリシエイソワカ！」

役に立たない状態の麗華を庇って、私は再び摩利支天の真言を唱
えます。

「ひゃあー！」

男女の霊は真言に弾かれ、後退しました。

「オンアロリキヤソワカ」

私は観世音菩薩の真言を唱えました。

「ひゅつづつー！」

しかし、観音様の慈悲の光が二人の霊には届いていません。

(どづいづ事?)

謎を解こうと考えていると、また別の霊が現れます。

しかも今度は五体同時です。全員、白装束を纏っていて、修験者のようです。

「あああ！」

修験者の霊は麗華に迫りました。

「麗華！」

私が動こうとすると、修験者の霊が二手に分かれ、三体が私に向かって来ます。

「ああ……」

戦闘不能状態の麗華は、修験者の霊に服を剥ぎ取られ、胸を、そのえーと……。

「あああ！」

麗華の喘ぎ声が狭い箱の中に響きます。

「オンマリシエイソワカ！」

私は修験者の霊を弾き飛ばそうとしましたが、

「オンアボキヤベイロシヤノウマカボダラマニハンドマジンバラハラバリタヤウン」

修験者の霊は光明真言を唱え、私の真言を打ち消してしまいました

た。

（厄介な霊ね）

私はギリツと奥歯をかみしめました。

魅惑の占い師（ご本尊編その参）

私は西園寺蘭子。霊能者です。

魅惑の占い師である太田梨子の邸に入った私と親友の八木麗華は、エレベーターの中で霊の襲撃に遭っていました。

閉所恐怖症の麗華は、戦闘不能状態に陥り、修験者達の霊に弄せつめばれています。

「あああ！」

とても表現できないような所を触られ、舐められ、麗華は悶絶しています。

ちょっとだけ気持ち良さそうに見えるのは、思い違いでしょうか？

「最近、男日照りやねん」

彼女が先日、そう言っていたのを思い出したからかしら？

助けに行きたいのは山々ですが、私にも修験者の霊が襲いかかって来て、それどころではないのです。

しかも、修験者だけあって、真言を使えるらしく、私の真言を弾かれました。

とても厄介な敵です。気を引き締めないと勝てません。

「その乙おつに澄ました西園寺蘭子もボロボロにしてあげなさい」

また梨子の声がスピーカーから聞こえました。

その言い方、かなりムカつきますが、反論しても仕方ないので、私は気を集約させます。

「ひいっわあ！」

修験者達の霊は嫌らしい笑みを浮かべ、舌なめずりしながら私に迫ります。

「はあ！」

真言が効かないのなら、物理攻撃です。

私は右手の人差し指に集中させた気を彼らに放ちました。

「ぐぎゃああ！」

三体のうち一体が気の塊を食らって消滅しました。二体はそれを見て私から離れます。

離れるといっても、狭いエレベーターの中ですから、それほど遠くに行った訳ではありません。

時間をかけていると、麗華が崩壊してしまいそうなくらい悶えているので、急ぎます。

「ええい！」

私は気を棒のように伸ばし、修験者の霊を攻撃します。

「ぎいええおあう！」

もう一体が気の棒に触れ、消滅しました。残る一体は不利と悟ったのか、壁を通過して逃げてしまいました。

「麗華！」

ようやく助けに行けると思って油断したのかも知れません。

私は先に出て来ていたおかつぱの女性の霊と中年の男性の霊に捕まってしまいました。

エレベーターの壁の向こうに潜んでいて、いきなり現れたのです。

「くー！」

中年の男性の霊は涎よだれを垂らしながら私に顔を近づけます。

女性の霊は私を後ろから羽交い絞めにしていて、

「ひいうわあ！」

と気持ち悪い吐息を耳に吹きかけて来ました。思わず背筋がゾツとしてしまいます。

「ひびきききー！」

男性の霊は雄叫びを上げて、私の手術着を引っ張ります。

あまりに貧弱なので、すぐに破れてしまいました。

その下には何も着ていないので、要するに「全裸」です。

「ぶぎぎぎぎー！」

男性の霊は狂喜して、私の乳房に吸い付きました。そんなに強く吸われると痛いです。

「母乳は出ないわよー！」

私は指先から気を発し、男性の霊を弾き飛ばしました。

気の練りが甘かったのか、男性の霊は飛ばされただけで、消滅し
ません。

「あがあー！」

女性の霊が首を絞めます。呼吸が止まりそうです。

「くっ………」

私は印を結び、

「オンマリシエイソワカ」

と摩利支天まりしてんの真言を放ちました。

「ぐげ！」

女性の霊は私から離れ、苦しみました。

（この人達、浄化できないのね）

先程の修験者の霊もそうですが、すでに人ではなくなっているようです。

姿こそ人なので、余計に哀れですが、消し飛ばすしかないようです。

「オンマカキヤラヤソワカ！」

私は「いけない私」の十八番おはじの大黒天真言を唱えました。

「ひいっあおがあー！」

女性の霊と男性の霊はその力で消滅しました。

彼らの素性は全くわかりませんが、梨子が術で縛って、人でなくしたのは確かです。

許せる事ではありません。

「麗華！」

私はハツとして、親友を助けようと身をひるがえ翻します。

しかし、そこには修験者の霊はいず、イッてしまったらしい麗華

がヒクヒクしながら倒れていました。

「どうやら、さっきの大黒天真言で、修験者の霊も消滅したようです。」

でも、いくら気を失っているからって、股を大きく広げているのはやめて欲しいです。

そういう私も、麗華同様全裸ですが。

「麗華、大丈夫？」

私は麗華に駆け寄り、頬を軽く叩きました。

「ああ、蘭子！」

麗華は泣きながら私に抱きついて来ました。

全裸の女同士がエレベーターの中で抱き合っているのって、かなり危ないですね。

「さすがね、西園寺さん。いいわ。私の儀式の部屋においてなさい」

もう一度梨子の声がしました。その途端、ガコンとエレベーターが動き出しました。

「……………」

麗華は怯える目で天井を見渡しています。

階表示が「B5」になり、エレベーターは停止して、扉がゆつくりと開きます。

私は震える麗華を庇うようにして立ち、扉の向こうを睨みました。

「いらつしゃい、西園寺さん、八木さん。ここが私の儀式の部屋よ」
扉の向こうには、むせ返るような線香の煙と、目が眩みそうになる金ピカの大きな仏像がありました。

広い部屋です。天井まで十メートル以上はあるでしょう。もしかすると、地下五階なのはこのせいかも知れませんか。

気味の悪い仏像は目を見開き、口には笑みを浮かべています。

今までに見た事がない隠微な顔と身体です。大きさは坐像ですが、五メートルくらいあります。

えーと。男性の巨大なあれが、仏像に付いているのです。しかも、そそり立っています……。

恥ずかしい……。

目のやり場に困ります。

「なるほど、あなたの信心してるんは、摩多羅神まんだらしんやな？」

エレベーターから解放されたので、いつもの麗華が復活です。

「ほお。良くご存知ね。そうよ。私のご本尊様は、摩多羅神。最強

の神よ」

梨子はニヤリとして言いました。梨子も全裸です。結構毛深いです。ね。コホン……。

こうなって来ると、裸なのがあまり恥ずかしくなくなつて来ます。

但し、梨子の身体は何だかヌメヌメと輝き、妙な臭いがして来ます。

「何が最強や。男の子種を搾り取って集めて、それを徳の高い僧侶の骨を砕いて練りこんで作った壺に三日三晩仕込み、それに浸かると、神の子を宿せるなんちゅうアホみたいな事信じてるんやろ？笑つてまうわ」

麗華は一歩進み出て梨子に言い放ちました。

何、その信仰？ それに近いものは聞いた事があるけど……。

「笑いたい者は笑えばいい。すでに私は、神の子を宿しているのだからな！」

梨子は高笑いをして、自分のお腹を擦りました。

「そんなん、子種を提供させられた男の子やろ？ 神の子ちゃうわ」

麗華が今までの鬱憤を晴らすかのように梨子を挑発しました。

ちょっと待つてください。話の流れから察するに、梨子の身体でヌメヌメ光っているのは、子種ですか？ じゃあ、この烏賊が腐っ

たよくな嫌な臭いは……。

全身から汗が噴き出します。

「我が神を愚弄する者は許さぬ！」

梨子の顔が鬼の形相になりました。すると麗華は、

「やっと本当の顔見せたな、エロ占い師。この麗華さんが叩きのめしてくれるで」

と舌なめずりします。

「我が神の怒りを食らうがいい！」

梨子が仏像に手を合わせると、仏像からニューツと同じ姿をした霊体が現れました。

何ですか、あれ？ 直視できません。

「おうおう、またケツタイな神さんやなあ。ぶちのめしがいがあるわ」

麗華は指をボキボキ鳴らしながら、そのおぞましい姿の霊体を見上げます。

「一つ言^ゆつとくわ。あれはごつけねばいいちゅ^ゆもんやないで、梨子はん」

麗華はその霊体の股間にそそり立っているあれをジッと見て言い

ます。

ちなみに私は見ていません。無理です。カマトトと言われようと、ぶりっ子（死語ですか？）と言われようと、見られないものは見られないのです。

「貴女もすぐに我が神の素晴らしさがわかるわよ、八木さん」

梨子是不敵な笑みを浮かべて言いました。

あの余裕、気になります。麗華、大丈夫？

西園寺蘭子でした。

魅惑の占い師（ご本尊編終の章）

私は西園寺蘭子。霊能者です。只今、隠微な部屋に突入し、遂に魅惑の占い師である太田梨子と対峙しています。

「蘭子、あのバケモンはウチに任しとき。あんたは梨子を頼むわ」

親友の八木麗華が私にウィンクします。なるほど、そういう事ですか。

「行くで、デカマラ！」

麗華はニヤリとして、太田梨子の「ご本尊」である摩多羅神まんだらじんに向かいます。

それにしても、デカマラって……。恥ずかし過ぎるのでやめて欲しいです。

「あら、西園寺さんは私がお相手するのかしら？」

梨子はゾクツとする笑みを口元に浮かべ、目を細めて私を見ます。

「では、行きますわよ」

梨子は足を踏み鳴らすと、フツと消えました。

「え？」

この部屋も結界の中らしく、彼女の気配は探れません。

でも、今の梨子の消失は、決してテレポートとかいうSF紛いの力ではなさそうです。

玄関で不意に現れたのも、マジックの応用なのでしょう。

それを見抜かれないための結界。

種は割れましたが、彼女の居所がわからないのでは、対処のしようがないのは一緒です。

「はあ！」

梨子は突然私の背後に現れ、私の首にピアノ線のような細い糸を巻きつけて来ました。

「くう！」

私は慌てて指をかけ、締め付けを止めます。

「そんな事しても、指ごと首が切れるだけよ、蘭子さん！」

血走った目を見開き、梨子が言いました。確かにピアノ線は私の指に食い込み、皮膚を切り裂き始めました。

「痛い！」

思わず叫んでしまいました。滲み出た血がピアノ線を伝わり、床に滴り落ちます。

「早く楽になりなさいよ、蘭子さん！」

梨子の力が更にピアノ線に加わります。

「うっうっ！」

指からドクドクと血が噴き出し、私の胸やお腹にも滴ります。このままではまずいです。

ふと麗華に目を向けると、麗華は摩多羅神のあそこから逃げ惑っていました。

「この変態が！ それしか興味ないんか、おのれは！？」

麗華は真言で攻撃しながら、摩多羅神を振り切り切ります。

「お仲間の心配をしている場合ではなくてよ、蘭子さん」

梨子が耳元で囁き、私の頬を舐めました。

「うっうっ……」

私は顔を背けましたが、首を絞められているので、思うに任せません。

このままではいけません。ピンチになると出て来てしまうっ！いけない私」が登場してしまいます。

「はあー！」

少しだけ練った気を指先から発して、梨子に見舞いました。

「ぎゃっ！」

梨子はそれを顔に食らったらしく、呻き声を上げて倒れました。

私は血が止まらない指で何とかピアノ線を解き、梨子を見ます。

傷口に気を集中し、治癒力を高めながら、私は梨子に尋ねました。

「こんな事をしてどうするつもりなの？」

梨子はゆっくりと起きて立ち上がり、私を睨みつけました。

「不老不死よ！ 我が神の子を宿すと、不老不死になれるのよ！」

梨子は半狂乱状態になっていました。

「それなのに、あんた達がじゃまをしてえええッ！ もう殺す！
絶対に殺す！」

梨子の目が更に狂気を帯びて行きます。どうしたのでしょうか？

「わわ！」

一方、麗華はまだ逃げ惑っていました。

「蘭子、このバケモン、エロ過ぎや！ 手伝ってえな！」

涙目で言う麗華も珍しいので、見物しようかとも思いますが、さ

すがにそれは可哀想です。

「ごめんね、麗華。私もまだケリがついてないの」

私はもう一度梨子を見ます。あら？ 梨子の顔が変わったような……。お母さん？

「どうしてくれるのさ！？ 我が神がお怒りで、私は力を失いかけているんだよ！」

梨子の顔はどう若く見積もっても、六十代です。

艶のあつたお腹も皺で覆われ、張りのあつた乳房も萎んで来ています。

梨子は年齢詐称をしていたようです。実際は六十代、いえ、もしかすると七十代かも知れません。

彼女は力を失ったようです。でもそれは摩多羅神の怒りのためではありません。

麗華が逃げ惑いながらも、梨子とあの仏像との繋がりを切ったからです。

麗華は、梨子の、その、えーと、あそこの毛が仏像にお札でまとめて貼られているのに気づいて、それを引き剥がしたのです。

ですから、梨子に流れていた力が止まり、梨子は本来の姿に戻ったという事のようにです。

梨子に、如何にも麗華が囷で、私が本命と見せかけた陽動作戦が成功したのです。

「こっちはもう放っておいても大丈夫みたいね」

私は老いさらばえて足腰が震えている梨子を放置し、未だに麗華を追い続ける摩多羅神に向かいます。

「麗華、やるわよ！」

「おう、待ってたで、蘭子！」

私達は印を結び、同時詠唱します。

「オンマカキヤラソワカ」

大黒天真言がダブルで炸裂し、隠微な仏像を粉微塵に打ち砕きます。

「ぶっつおおおー！」

その途端、麗華を追い回していた摩多羅神も消滅し、静けさが訪れました。

「ぶっ、ぶっ」

梨子は一気に抜け落ちた歯を口から吐き出しながら、何とか立ち上がるつとめています。

「殺す、コロ……ス、コロコロコロ……」

そこまで言った時、彼女の動きが停止し、ボンと碎けてしまいました。

私は思わず目を背けました。

邪法に手を染めて、不老不死を手に入れようとした者の末路だとわかっていても、何ともやるせないです。

私は麗華と顔を見合わせてから、梨子に対して手を合わせました。

他人事たうじんではないのです。私達も一歩進む道を間違えれば、梨子と同じ運命になってしまうかも知れないのですから。

「取り敢えず、シャワー探そか。このままやと、ウチら、どこの誰とも知れん男の子種で妊娠してまうかも知れへんから」

麗華の言葉でハツと我に返った私は、ビクツとしてしまいました。

どうでもいいけど、身体中、酷い臭いです。

エレベーターで一階に上がると、私達は浴室を探し、シャワーを浴びました。

その時、麗華がふざけて私の胸を揉んだので、思い切り睨んであげました。

「そない怒らんでえな、蘭子」

全く、何を考えているのかしら？

あちこち探しても、私達の服が見つかりません。梨子の服は借りたくないですし。

取り敢えず、バスタオルを身体に巻き、全裸生活は終了です。

「このままはさすがに帰れんからなあ」

麗華が言います。麗華なら全裸でも平気で帰れると思ったのですが、それは言わないでおきます。

途方に暮れそうになりましたが、ある事を思い出しました。

「瑠希弥に連絡して、私のマンションから服を取って来てもらおうか」

「ああ、それ、ええな」

麗華はポンと手を叩きましたが、

「あ、でも、蘭子の服、ウチ、着られるかなあ」

と自分の胸を見て言ったので、

「貴女はそのまま帰ってください、八木麗華さん」

と私はムツとして居間の電話の受話器を取ります。

「ああん、冗談やて、蘭子。堪忍して」

麗華が慌てて謝罪します。

私は瑠希弥がお世話になっている江原雅功先生えはらまさとしのお宅に連絡し、瑠希弥に事情を説明しました。

「すぐに向かいます」

電話の向こうから、瑠希弥の嬉しそうな気が伝わって来ました。

私も何だか嬉しいです。

「やっぱり、あんたら、そういう関係なんか？」

麗華が冷たい視線を浴びせて来ます。

「違うわよ!」

私は慌てて否定しました。

瑠希弥がいるのはG県ですから、少なくとも見積もっても、五時間くらいはかかりそうです。

到着は夜中になりそうですね。

「それまでどうしよか? 暇過ぎやぞ」

麗華は股を広げてソファに座りました。私しかいないとしても、そんな格好はしないで欲しいです。

「疲れたから、私寝るわね」

私は麗華の向かいのソファに横になります。

「襲っちゃおっかなあ」

たどたどしい東京弁で呟く麗華を私はまた本気で睨みました。

「もう、蘭子、最近怒り過ぎやで」

麗華は苦笑いしています。

その時、私は更にある事に思い至ります。

「いつけない、篠崎孝雄さんが事務所にいるんだった！」

もう一度電話を使い、今度は事務所に連絡しました。

篠崎さんには、携帯ではなく事務所の電話に連絡すると言っているのに、彼はすぐに出てくれました。

「西園寺さんですか？ 良かった、ご無事なんですね？」

篠崎さんはホッとしたようです。

「もう大丈夫です。奥様が心配なさっていますから、おうちに帰ってあげてください」

私は篠崎さんの声に何だか癒された気がしました。

「ありがとうございます！」

篠崎さんが、電話の向こうで何度も頭を下げている光景が目には浮かびました。

「一件落着やな」

麗華が手を出します。私はそれにタッチして、

「ええ、そうね」

と応じました。

瑠希弥を待つ間、私達は居間にあつた様々な資料や写真を見ました。

太田梨子は、本名は太田サダ。明治四十年生まれで、今年百四歳です。

彼女は少なくとも、八十歳は若返っていた計算になりますが、一体いつから邪法に手を染めていたのか。

たくさんの写真を辿って行くうちに、遅くとも四十代ですでに摩多羅神と出会っていたらしい事がわかりました。

「凄い執念やな。ウチにはようわからん」

麗華は写真を投げ出し、ソファに寝そべります。

「眠くなつたわ。寝る。襲わんでな、蘭子」

「誰が！」

私は呆れ気味に突っ込み、写真を元あったケースに戻し、瑠希弥が来るのを待ちました。

私も、老いを迎えると、梨子のようになってしまうのかしら？

ちょっと自信がありません。

西園寺蘭子でした。

世にも危険な愛犬家（前書き）

シリーズ初の三人称視点が入ります。

世にも危険な愛犬家

私は西園寺蘭子。霊能者です。先日、魅惑の占い師の太田梨子の邸に潜入し、大変な目に遭いながらも、何とか梨子の野望を阻止しました。

彼女は不老不死の力を手に入れようとしていたのですが、それは人間である以上誰もが考えてしまう事ではないでしょうか？

私は、梨子のようにはならないと断言する自信がありませんでした。

そして、今回の私達に振りかかる事件は、世にも危険な愛犬家の男が起こします。

さて、太田梨子の邸まで弟子の小松崎瑠希弥こまつき るきに迎えに来てもらった私と親友の八木麗華は、翌日の早朝、無事私のマンションに帰り着きました。

梨子との戦いで心身共に疲れ果ててしまった私と麗華は、マンションの部屋に到着すると、何もしないでそのまま寝てしまいました。

「うん？」

朝日がカーテンの隙間から射し込み、目覚めを誘います。

それと同時に、美味しそうな匂いが鼻腔を擦ります。

そうです。瑠希弥が泊まってくれて、朝食を用意してくれているのです。

昨夜は、着の身着のままベッドに倒れ込んでしまった私でしたので、キッチンから漂うお腹を刺激する香りに抗いながら、バスルームに行きました。

隣のベッドにいた麗華は、まだ泥のように眠っています。しかも、肉食獣のような躰を掻きながら。

これならシャワーを浴びていても、昨日のようにいきなり胸を揉まれたりしません。

私は汗まみれの服を脱ぎ捨て、シャワーを浴びました。

昨夜も梨子の邸でしっかり身体を洗ったのですが、何だかもう一度じっくり隅々まで洗浄したくなったのです。

気のせいなのでしょうが、身体からまだ何となく烏賊の腐ったような臭いがして来そうなのです。

梨子の邸には私好みのシャンプーがなかったので、満足な洗髪ができなかったのも一因でしょう。

ようやく人心地つけた私は、私専用のバスローブを纏うと、瑠希

弥がいるキッチンへと歩を進めました。

「おはようございます、先生」

「おはよう、 瑠希弥」

可愛らしいキャラクターもののエプロンを着て長い髪をポニーテールにした瑠希弥が笑顔全開で私を迎えてくれました。

「ちょうど支度が整いました」

瑠希弥はテーブルいっばいに料理を並べてくれました。

きつね色のトースト、新鮮なバター、濃厚な牛乳（昨夜の体験のせいでこれだけはちよつと気持ち悪くなりました）、シャキシャキの新鮮な野菜がたくさん入ったサラダ、フワフワした半熟の目玉焼きとカリカリのベーコン、程よい大きさのフライドポテト。更に淹れたての炭焼き風のコーヒー。

一般の人にはごく普通の朝食ですが、包丁が怖くて使えない私には夢のような朝食です。

瑠希弥と二人で暮らしていた頃を思い出し、ジーンとしてしまいます。

「何や、ええ匂いやな」

ボサボサの髪を掻きむしりながら、麗華が藪睨みの目でキッチンに入って来ました。

「麗華、シャワー浴びて来なさいよ。汗臭いわよ」

私はそのままテーブルに着こうとする麗華の前に立ち塞がって言いました。

「ええやん、夕べ梨子の邸で浴びたんやから」

麗華はそう主張して私を押しつけて席に着いてしまいました。

「せめて、顔くらい洗って来なさいよ！」

私は麗華の態度に呆れ、彼女の襟首を掴んで引き上げました。

「わかったがな」

麗華は仕方なさそうにキッチンを出て行きました。

私は席に着き、何か言っただけで欲しいような瑠希弥を見上げました。

「ありがとう、瑠希弥。迎えに来てもらっただけでなく、朝食まで用意してくれて。本当に感謝してるわ」

「いえ、とんでもないです。弟子として、当然の事をしただけですから」

瑠希弥は顔を赤らめて、恥ずかしそうに言います。この子の素晴らしいのは、この謙虚なところです。麗華には瑠希弥の十分の一でいいから、謙虚になって欲しいですね。

私達はついつい見つめ合ってしまいます。もちろん、私と瑠希弥

はそういう関係ではありませんが。

「はいはい、お邪魔さんです」

麗華が嫌みつたらしくそう言っ、私と瑠希弥の間を通り、席に着きました。

「な、何がよ？」

ムツとして言いました。すると麗華はニヤツとして、

「別にイ」

ととぼけました。憎らしいです。

蘭子達が和やかに朝食を摂っていた頃。

彼女達のいるマンションから程近い場所にある大きな池を中央に抱える区営の公園での出来事。

「まあ、可愛い。撫でていいですか？」

タンクトップと短パン姿で、首からスポーツタオルを提げたジョギング中の若い女性が、白い小型犬を散歩させている青のジャージ姿の中年の男性に尋ねた。

「ええ、いいですよ。そいつ、若い女の子が大好きなんですよ」

メタボまっしぐらの体型で、髪の毛もすっかり寂しくなっているその男は、狡猾な笑みを口元に微かに浮かべた。

「ホント、可愛い！ これ、何ていう犬種なんですか？」

その女性は、男の様子が変わったのも気づかず、戯れつく小型犬を撫でている。

「さあ。僕は犬には興味がなから、知らないなあ」

男の冷め切った応答に女性はビクツとする。しかし、遅かった。彼女はすでに畏に嵌った小動物と一緒にだった。

「ぶぐ……」

男は女性の背後に忍び寄り、睡眠薬を染み込ませたハンカチを女性の口に押し当てた。

女性は小型犬から手を放してしまう。その途端、何かを感じたのか、キャンキャンと悲鳴のような鳴き声を発しながら、小型犬は走り去ってしまった。

「ききき……」

男は眠りに落ちた女性を軽々と抱きかかえると、その場から歩き出す。

「ハーレム実現まで、あと二人」

男は血走った目で女性を見ると、舌舐りした。そして眠ってしま

った女性の顔を舐め、胸を弄る。更にその手は下半身へと伸び、短パンの下に滑り込んだ。

男の後ろに蠢く黒い影。それは普通の人には見えない凶悪な存在だった。

私達は、食後のコーヒーを楽しんでいました。

まさにその時でした。

まるで雷に打たれたかのように身をよじらせて、瑠希弥が立ち上がります。

「どうしたの、瑠希弥？」

私と麗華はびっくりして瑠希弥を見上げました。瑠希弥はしばらく放心状態でしたが、

「今、魔物を感じました。近くにいます」

彼女は窓に近づくと、サツと開き、ベランダに出ました。

私と麗華は顔を見合わせてから、瑠希弥に続きます。

感応力にかけては、私も麗華も瑠希弥には及びません。

彼女はG県に住む高名な占い師の江原菜摘さんの指導で、以前より遙かにその能力を向上させたのです。

「あの辺りです」

瑠希弥が指差したのは、近所にある区の公園です。一見何もいないように見えるのですが、瑠希弥が言うのですから、何かの怪異が起こったのは間違いないでしょう。

「先生、八木様、私に触れてください。魔物を感じられますから」

瑠希弥が言います。私と麗華は瑠希弥の肩に手を置きました。

「ああ！」

ほぼ同時に、私と麗華は叫んでいました。

何でしょう、この凶悪な存在は？ 今まで感じた事のないものです。

しかも、こんなすぐそばにいるのに気づかなかった。

瑠希弥の能力に驚嘆すると同時に、自分の至らなさを痛感します。

「それにしても、何や、この気色悪いもんは？」

麗華が眉間に皺を寄せて呟きました。

「確かに」

何とも形容しがたい不愉快な感覚。何者なのでしょう？

やがて私達は、その「魔物」に忖もなく出会う事になります。

瑠希弥も巻き込んで。

西園寺蘭子でした。

姿なき怪異

私は西園寺蘭子。霊能者です。

大きな事件を一つ解決した私と親友の八木麗華は、私の弟子である小松崎瑠希弥こまつまき るきやの助けを借り、東京の私のマンションに帰る事ができました。

優しい瑠希弥は、そのままマンションに泊まって、翌朝の朝食まで用意してくれました。

私達は久しぶりに楽しい朝食をいただいたのですが、近所の公園から湧き出した得体の知れない怪異が、そんな楽しい一時を一瞬にして消し去ってしまいました。

私達はその怪異を調べようとしたが、それはまるで何もなかったかのように消滅しました。

私達はあまりに呆気ない結末に顔を見合わせました。

「何やのん、さっきの？ 楽しい気分が台無しや」

リビングのソファに寝そべって、麗華が怒っています。

口を動かす暇があるのなら、手を動かして欲しいです。

彼女は食べるだけ食べて、後片づけをしてくれませんか。

「麗華、今度から朝食は一人で外に食べに行つてね」

私は瑠希弥と洗い物をしながら嫌みを言いました。

「な、何言つてるねん、蘭子オ。冷たい事いわんといてえな」

麗華はビクツとして起き上がり、慌ててキッチンに來ました。

「先生も八木様も休んでいてください。私一人で大丈夫ですから」

瑠希弥は気を遣つてくれたのか、そう言いました。

「いいのよ、瑠希弥。料理をしてもらつたんだから、後片づけくらい、私達でするわよ」

私は瑠希弥の言葉を聞いて、またソファに戻ろうとする麗華を睨みつけながら言います。

「いえ、その、先生にお手伝いしていただくと、その……」

瑠希弥は何だか言いにくそうです。すると麗華がソファにドスンと座り、

「蘭子、あんた、そろそろ自分が炊事の才能が皆無やゆう事に気づいた方がええで」

「え？」

私はギクリとしました。

そして、洗ったお皿を見直します。

よく見ると、全然洗えていません。食べ物残りや、油やお醤油の痕が残っています。

それにシンクの端には、いくつもの割れたお皿やコップの破片が……。

「……………」

顔が真っ赤になります。ああ……。

「先生、その……………」

瑠希弥が私の項垂れようにびっくりし、言葉をかけようとしたようでしたが、

「大丈夫よ、瑠希弥。ごめんね、余計な仕事を増やしてしまった……………」

私はリヴィングへと歩き、麗華の向かいに腰を下ろし、溜息を吐きました。

「あの、先生、私は決してそんなつもりは……………」

瑠希弥の気遣いはよくわかるのですが、もうそっとしておいて欲しいです。

ああ、穴があったら入りたいとは、まさに今の私のような状態の

事なのでしょう。

しばらくして、瑠希弥がG県に戻る事になりました。

G県に在住の私の親友である靈感少女の箕輪まどかちゃんと共に参加しているG県警刑事部霊感課の仕事があるのだそうです。

「また何かあったら、お呼びください。私はいつでも参りますので」

瑠希弥が地下駐車場の自分の車の前で言います。

「そやな。美味しい朝食食べたなら、呼ぶわ」

麗華がニヤツと言います。私は少しだけムツとしたので、

「麗華が大阪に戻った時に連絡するから、その時来て頂戴」

「蘭子、そらないがな」

麗華は口を尖らせて言いました。

「あー!」

その時、また瑠希弥がピクンとしました。

「どづしたの、瑠希弥?」

いきなり外に向かって走り出した瑠希弥を私と麗華は慌てて追い

かけます。

瑠希弥は駐車場の出入り口の斜面を一気に駆け上がり、マンションの前の舗道に出ました。

さすがです。息切れしていません。

「何があったの、瑠希弥？」

私は呼吸を整えながら尋ねました。

「先生、あの犬……」

瑠希弥は、舗道の向こうから小学校低学年くらいの可愛い女の子が散歩させている白い小型犬を指差します。

「あの犬がどうしてん？」

麗華はゼイゼイ息をしながら呟きました。

「あ、もしかして」

私は瑠希弥を見ます。瑠希弥は頷いて、

「さっきのあの怪異が起こった時、その場にいた犬です」

「やっぱり」

私と瑠希弥は女の子に近づきました。

「どづいづづっちゃ？」

麗華も首を傾げながらついて来ます。

「こんにちは」

瑠希弥が微笑んで女の子に話しかけます。女の子は瑠希弥を見て、

「こんにちは」

と笑顔で挨拶しました。この子からは何も感じません。

そして、彼女が連れている犬からも何も感じません。

しかし、間違いなく、あの現象が起こった現場にこの小型犬はいたのです。

「その犬、可愛いね。でも、迷子になっていなかった？」

瑠希弥は女の子と目の高さを合わせるためにしゃがみました。

「うん、公園で散歩したら、どこかに行っちゃったの」

女の子はその時の事を思い出してしまったのか、涙ぐんでいます。

「でも、帰って来てくれたのね。良かったね」

瑠希弥は女の子の頭を撫でて言います。女の子は涙を流す事なく、またニッコリして、

「うん！ メルはいい子だから、ちゃんと帰って来たんだよ」

瑠希弥は女の子に手を振り、別れました。女の子は実に楽しそうにその犬と舗道を去って行きます。

「どういう事や？ あの犬、関わりがあるはずなのに、全然それっぽくなかったな」

麗華は女の子と犬を見送りながら、不思議そうに言います。

「先生、あと一日、泊まってもいいですか？」

瑠希弥が考え込んでいたと思ったら、そんな事を言い出しました。

「気になるのね、今朝の事が？」

私も瑠希弥に残って欲しいと思っていましたので、渡りに船です。

「謎が多いですから。あの犬は利用されただけのようですが、それだけではないようですし」

瑠希弥は黒縁眼鏡をクイツと上げ、探偵のような顔になりました。そして、

「それから、あちらから走って来る中年の男性」

瑠希弥が目を向けたのは、青のジャージを着た如何にもメタボ感溢れるおじ様です。

髪の毛もつつすらとしており、どうせなら、

「全部剝っちゃえばいいのに」

と思うくらいです。

その男性は、あの犬と同様に何にも感じるものがありません。

禍々しさの欠片もない、普通のおじ様です。

でも、瑠希弥を通じて感じた凶悪な存在と関わりがあったのは間違いないと思います。

おじ様は、苦しそうな息をしながら、私達の横を通り過ぎて行きました。

その途端、何かを仕掛けて来る事もなく、おじ様は舗道の向こうに見えなくなりました。

「ますますわからんなあ。何がどうなってるねん?」

麗華は肩を竦めました。

「公園に行ってみましょう」

瑠希弥が言いました。

「ええ? ウチ、金にならん事、したないなあ」

麗華が不満を口にしました。私は瑠希弥に近づき、

「麗華は大阪に帰るようだから、送ってあげましょうか、瑠希弥」と言いました。瑠希弥と麗華は同時に驚きました。

「先生、それは……」

「蘭子、ちょっと待ってえな」

麗華は、

「わかったがな。ウチも公園に行きます。それやったら、ええんやろ？」

と口を尖らせたままで言いました。

私と瑠希弥は顔を見合わせました。

私達は一度部屋に戻り、術具の用意をして、改めてマンションを出て、問題の公園に向かいます。

「麗華、無理しなくていいのよ。これは貴女の大嫌いな只働きなんだから」

私はもう一度念を押しておきます。途中で文句を言わせないためです。

「もう、堪忍してえな、蘭子。ウチもたまには只働きたいねん」

麗華は顔を引きつらせて笑いました。

面白いので、デジカメで撮っておきたかったです。

その公園は本当にすぐ近くでしたから、私達は五分もかからないで現場に到着しました。

辺りを見回しても、ごく普通の公園です。

霊の存在もありませんし、特別に何か悪意が吹き溜まっている様子すらありません。

「何もいませんね」

瑠希弥はがっかりしたようです。

「もしかすると、何か条件が揃わないと現れないのかも知れないわ。明日の朝、また調べましょう」

私の頭の中には、一つの仮説が組み上がり始めていました。

もしそうだとすると、敵はとんでもない存在です。

蘭子達がいる公園からそれほど離れていないところにある廃ビル。

その三階の一番奥の部屋に蘭子達が気づいた怪異の犠牲者達が閉じ込められていた。

「はああ、あん、あん」

赤い蝋燭ろうそくが三つ灯っているだけの薄暗い部屋の中では、五人の若い女性達が全裸で絡み合って悶えていた。

中にはお香の煙が立ち込め、女性達は油でテカテカと光っている。

女性達は互いを求め合うように舐め合い、抱き合い、撫で合っている。

「あと二人」

どこからともなく、気味の悪い声が聞こえた。

迫り来る魔物

私は西園寺蘭子。霊能者です。

弟子の小松崎瑠希弥（こまつき るき）の類い稀なる感応力で、マンションの近くの公園での怪異に気づいた私達は、親友の八木麗華が一番苦手な「只働き」をする事にしました。

「二人共、ウチの事、誤解してるねん。ウチはケチやないで」

マンションに戻る途中、麗華が自分の事を切々と語ります。

ケチじゃなくて、ドケチなんでしょ？

そう言いたいところですが、さすがにそこまでは言えません。

「只やと、力が入らへんねん。それだけの事や」

麗華は何だか、達成感を得たような顔で言いました。

いやいや、それを世間一般では、「ケチ」と言うのだと思います。

彼女は根本的にその辺りがズレているようです。

まあ、私もズレているのは自覚していますが。

部屋に戻った私達は、リビングでシンキングタイムです。

「普通、あれほどの禍々しさを放つものが、その痕跡も残さずに消えてしまうなんて考えられません」

瑠希弥が真顔で言います。麗華は腕組みをして、

「そやな。ウチもそこが引つかかるねん。どうにも腑に落ちんのや」

「公園にいたはずのあの小型犬とおじ様も、全く影響を残していなかったわね」

私も、ある程度推理を組み立ててみたのですが、謎の部分があるのです。

禍々しさの痕跡を残さず、現場から姿を消す。

あり得ないのです。瑠希弥の言う通りなのです。

「何か、私達が気づいていない事があるはずなのよ。それさえわかれば、怪異の原因も正体も、誰がそんな事をしているのかもわかるはず」

私は麗華と瑠希弥を見ながら言いました。

蘭子達が話し合っていた頃、犠牲者の女性達が閉じ込められている部屋は、いよいよおぞましい事になって来ていた。

「あああー！」

一人の女性が全裸のままでのけ反って悶えている。他の四人の女性達もそれぞれ、一人で悶え始める。

それはさながら、一人セツ　ス。見えない相手と快楽に溺れているようなのだ。

「あん、あん、あん……」

女性達は髪を振り乱し、白眼を剥き、涎を垂らし、愛液を垂れ流しながら絶叫していた。

「快楽に全てを捧げよ。お前達は我が僕しもへ。何も考える必要はない。只、欲望のままに生きよ」

また不気味な声が部屋の中に響く。

「もうすぐだ。もうすぐ、完成する。我が曼荼羅まんだらは……」

声はその後、低く笑った。

私達は、しばらくいろいろと考えてみたのですが、どうしても謎が解けません。

小型犬は利用されただけで怪異そのものに関わった訳ではないのはわかります。

そして、あの青いジャージのおじ様は、怪異に利用され、何かを

したのはわかりますが、それ以上は突き止められません。

「時間……」

私はふと思いついた事を口にしてみました。

「それです、先生。私は、場所にはかり囚われていましたが、時間が関係しているのですよ。ですから、あの怪異が起こったのと同じ時間に公園に行ってみましょう」

瑠希弥が目を輝かせて私を見ています。

「そうやな。そして、おっさんと犬も、何か関係してるんやろ？
術具ゆう程ではないけど」

麗華が腕組みを解いて言います。

「それから、あの公園で最近何かが起こっていないか、調べる必要があるわね」

私は事務所に行かないとダメだと思いましたが、

「大丈夫です、先生。任せてください」

瑠希弥は自分のアタッシュケースからiPadを取り出しました。

メカ音痴の私には、本当に羨ましい才能です。

「ほう、さすがやな、瑠希弥」

麗華はiPadを覗き込みます。

「蘭子は、炊事だけやのうて、メカもダメやったな」

麗華は嬉しそうに私を見ました。ムカつく顔です。

でも、本当の事なので、グツと堪えます。

「最近、公園で起こったいくつかの事件がヒットしました」

瑠希弥が検索結果を見せてくれました。

あの公園で、ここ数ヶ月の間に何人かの女性が姿を消しているようです。

「これやな」

麗華が食い入るように記事を読みます。

姿を消したのは、全部で四人。皆、あの公園でジョギングが日課だった人達だ。

「あの公園、ドッグランもあるのね。犬を連れて来る人も多いみたい」

私も画面を覗き込んで記事を読んだ。

「但し、消えた女性を連れ去ったと思われる人物については、毎回目撃情報が違っているようですね。最初の事件の犯人と思われる男は、長身で二十代前半でタンクトップと短パン姿です。二人目の時

は、七三分けの三十代前半で小柄でスリッ姿。三人目の時は、痩せた長髪の三十代後半の男、四人目は目つきが鋭くて、筋肉質の大柄な男です」

瑠希弥が読み上げてくれました。

なるほど、見間違いとは思えないくらい、容疑者の人相風体が違っています。

「そして、五人目の被害者と関わりがあると思われるのが、あの青いジャージのおじ様ね」

私はその人の姿を思い起こして言いました。

メタボ体型で、髪の毛が寂しい人。

「あのおっさんの居所を突き止めて、話を聞くんですが、一番手っ取り早いんとちゃうか？」

麗華が提案しました。私は瑠希弥を見て、

「あのおじ様の家、わかる？」

「はい、もちろん。行ってみますか？」

瑠希弥は即答して尋ね返して来ます。

「いきなり行ったら、迷惑じゃないかしら？」

私は苦笑いして答えました。すると瑠希弥は、

「あの人、アパートに一人暮らしですから、多分大丈夫ですよ」
とニッコリ笑って言いました。そこまでわかるなんて、瑠希弥、ちよつと怖いわ、貴女……。

私は思わず麗華と顔を見合わせてしまいました。

そして、早速私達は瑠希弥の先導で、マンションの前で見かけたおじ様の住むアパートへと出かけました。

「あの歳で一人暮らしなんて、部屋の中見るん、何や恐ろしいなあ」
麗華は身震いしながら呟きます。確かにそうです。

ああ、また太田梨子邸の悪臭が鼻の奥に蘇って来るようです。

「いえ、部屋の中は綺麗に片づいていますよ。只、その……」

瑠希弥はそう言って口籠ります。心なしか、顔が赤くなっています。

彼女には、おじ様の部屋の様子まで見えているのでしょうか。

そして、恐らく見てはいけないようなエッチ系のものを見つけてしまったのかも知れません。

「こっちです」

瑠希弥はそれでも挫けずに私達を案内します。

やがて人通りの少ない狭い路地に入りました。

「中年オヤジの一人暮らしで、部屋が奇麗に片づいてるなんて、それはそれでゾツとするなあ」

麗華はいずれにしてもゾツとするようです。

「多分、エロDVDがズラツと並んだ棚があるんやろな」

にやにやして瑠希弥の顔を覗き込みます。意地悪ですね。

瑠希弥は麗華にそんな事を言われて、ますます顔を赤らめてしまいました。

「あ」

瑠希弥が不意に歩みを止めました。

「何や、気に障ったんか？」

麗華がギクツツとして言い、私を見ます。どうして私を見るの、麗華？

「違います。この先にいるんです。あの時の禍々しいものが……」

瑠希弥が震え出しました。

「ホントだ」

私もその禍々しいものを感じ始めました。時間はキーポイントではないのでしょうか？

「なるほど、敵さん、ウチらに気づいたっちゅう事か？」

麗華はニヤリとしました。

「その通りだよ、お嬢さん方」

背筋に冷たいものを入れられたような感覚に襲われる声が聞こえました。

「何者なの！？」

私は数珠を手にして周囲を見回します。麗華と瑠希弥も同じです。

「三人はいらない。二人だけ来てもらおうか」

もう一度声がしました。私達は一斉に声が聞こえた方を見ます。

「貴女と貴女。一緒に来てください」

そうやってニヤリとしたのは、どう見ても私達より遙かに年齢が上のタキシードを着た白髪の老紳士でした。

この人が怪異の元凶なのでしょうか？ でも、違うような気がします。

どどじじななっっててししままううののかかししらら？

西園寺蘭子でした。

魔物の正体

私は西園寺蘭子。霊能者です。

私のマンションの近くにある公園で起こった怪異を調べて行くうちに、私達はその禍々しい気を纏ったタキシード姿の老紳士と遭遇しました。

「二人だけ？　どういう意味や、ジイさん？」

麗華は老紳士が発した言葉に眉をひそめて尋ねます。しかし老紳士は、

「貴女と貴女。貴女は知らないから、知る必要もない」と麗華を見てニツと白い歯を見せました。

「貴方は何者ですか？　人の身体を渡り歩いて、何をしているのです？」

私の弟子である小松崎瑠希弥こまつかほが尋ねます。

「ほお。それがわかりか？　さすが、小松崎瑠希弥さんだ。私が見込んだだけの事はある」

老紳士はニコツとして瑠希弥を見ます。

麗華に見せたのが「嘲笑」だとすれば、瑠希弥に見せたのは間違
いなく「贅辞」。

そういう事には人一倍敏感な麗華が、気づかない訳がありません。

「おい、ジイさん、ウチを舐めとるんか！」

麗華は印を結び、いきなり真言を唱えます。

「オンマカキヤラソワカ！」

それも大黒天真言です。

「ぐはあー！」

老紳士は避けるでもなく、防御するでもなく、それをまともに受け、地面に倒れました。

「何や？」

麗華もそれを見てギョツとしたようです。

「しっかりしてください」

私と瑠希弥はすぐさま老紳士を助け起こします。

「ど、どういいうっちゃ？」

麗華は訳がわからないようです。

「この人は只の依り代です、八木様」

瑠希弥が麗華を見上げて説明します。

「依り代？」

麗華はまだ事情がよくわかっていないようです。

「私は一体……？」

老紳士は私達に助け起こされながら、自分を取り戻したようです。

「大丈夫ですか？」

私は老紳士に治癒の気を送りながら、肩を貸します。

「ああ、ありがとう、お嬢さん」

やはり、見かけ通りの優しい人のようです。

しばらく私と瑠希弥で老紳士に治癒の気を送り、回復したのを確認して、別れます。

「麗華、私達が相手にしようとしているのは、実体を見せずに動き回る手ごわい奴よ」

私が歩きながら言うと、麗華はようやく理解したようで、

「そうか。何らかの方法で他人に乗り移って、悪さをしてるんやな」
「？」

「ええ。現場に全く痕跡が残らないのは、そのためよ。依り代から

抜け出せば、そいつの気は完全に途絶えてしまつから」

私はそう言いながら瑠希弥を見ます。瑠希弥は頷いて、

「強敵ですね。まだ居場所すら特定できていませんし」

「青ジャージのおっさんとここに行くしかないか？」

麗華は腕組みをして呟きました。すると瑠希弥は首を横に振り、

「今、お爺さんに接触してみてもわかつたのですが、依り代にされた人は全くその時の記憶がないようです。無意識層に探りを入れても、何もわからないと思います」

「そうかあ」

麗華はがっかりしたようです。

「それに、さっきのお爺さんから感じた気は、公園で発せられたものより弱かつたと思います」

瑠希弥が続けます。私と麗華は瑠希弥を見ました。

「やはり、公園、時間、そして依り代とされる人、それから犬が、何らかの形で関わっているのではないかと思えます」

瑠希弥がもう一度 iPad を起動させて記事のサイトを開きました。

そしてその記事から派生する別の記事、あるいは噂話のようなサ

イトまで閲覧しました。

「記事には載っていませんでしたが、襲われた女性は全員犬と接触しているようです」

私は顎に手を当てて考え込みました。

公園。犬。人。時間。

それを操る見えない敵。

「瑠希弥、その事件より更に前に、何かの事件が公園で起こっていないかを調べられる？」

メカ音痴の私には、iPadがどれほどのものかわかりませんので、探るような目で尋ねました。

「わかりました」

瑠希弥は真面目な顔でそう答えて、また画面をタッチします。

その指の動きがあまりにも華麗で、うっとりしそうになりました。

メカに強い人、本当に尊敬してしまいます。

「三十年ほど遡りましたが、取り立てて大きな事件は記録されていませんね」

残念そうな顔で、瑠希弥は告げました。瑠希弥は申し訳なさそうに私を見ているので、こちらが恐縮してしまいます。

「もしかして、記事にもならんような事かも知れへんで」

麗華がニヤツと言います。きっと嫌みのつもりだったのでしようが、

「それかも！」

と私が同意したので、彼女はビクツとしました。

「え？ 当たり前なんか？」

私達は、直接探るしか道はないと判断し、再び公園へと向かいました。

その頃。

公園からそれほど離れていない廃ビルの一室では、何度もイッてしまった全裸の五人の女性達が虚ろな目で床の上を這いずり回っていた。

部屋の中は、淫靡な匂いが立ち込め、それが女性達を更に恍惚とした表情にしていく。

「あと二人は、小松崎瑠希弥と西園寺蘭子。この二人の力を得れば、我はまさしく無類無敵になれる」

不気味な声言い、クククと低い笑いを漏らした。

私達は、また公園に足を踏み入れました。

すでに会社や学校の始業時間になっているので、人影はまばらです。

そこにいるのは、仕事を退職した年配の男性と、これから買い物に行くために自転車に乗る若い主婦、悠悠自適な生活をしている有閑マダムと思しき中年女性らがいました。

「加害者と思われる男性は、全員働いている年代です。そして、時刻も会社が始まるしばらく前。この時間とは公園に漂う波動が違いますね」

瑠希弥が全体を見渡しながら言いました。

確かに、朝の公園はもつと慌ただしい感じがしました。

「先生、八木様、こっちです」

瑠希弥が何かを感じて歩を速めます。

「何や？ どないしてん？」

麗華も大股で瑠希弥を追います。

「待って」

考え事をしていて出遅れた私は、駆け出して二人を追いかけました。

「ここです」

瑠希弥が何かを感じたのは、ドッグランでした。

今は、中年の女性が幾人か、自分達の飼い犬を気ままに遊ばせています。

「ここがどうしてん？」

麗華はそんな呑気そうなおば様達を見渡しながら、瑠希弥に尋ねました。

「感じませんか？　ここであつたある事件を？」

瑠希弥がそう言ったので、ようやく私も気づけました。

「これは……」

そのドッグランのそばで、一人の女性がある犬に噛まれるという事件がありました。

女性は大した怪我でもなく、事件にもならなかったので新聞にも載りませんでした。

ところが、その女性はどうしても噛んだ犬が許せず、何日か後になって、その犬に毒入りの餌を食べさせて殺してしまったのです。

飼い主は真相を突き止め、警察に訴えましたが、警察は訴えを取り上げてくれませんでした。

飼い主は女性を恨むあまり、自分でいろいろ調べ、復讐を企てたようです。

そして辿り着いたのが、今回の事件の黒幕的存在。

「こいつは根が深いで、蘭子」

麗華もその存在を感じて眉間に皺を寄せました。

「犬の飼い主も、そいつに利用されているわ。飼い主を盾にして、自分は安全な場所にいる」

私は黒幕のあまりに用意周到な隠れ方に虫酸が走りました。

飼い主の正体までは辿り着けるのに、その先が完全なブラックボックスなのです。

「どうしますか、先生？」

瑠希弥が私を見ました。麗華も私を見えています。

「こうして嗅ぎ回っていれば、私達の事を鬱陶しく思って、またちよっかい出して来るでしょ？ それを待つしかないわね」

そこで意味あり気に麗華を見ます。麗華は肩を竦めて、

「わかったがな。今度は不用意に仕掛けんて」

と言いました。

今まで出会った敵と違い、陰湿で抜け目のない敵。

手強いですね。でも、麗華と瑠希弥が一緒なら、何とかなるでしょう。

西園寺蘭子でした。

瑠希弥危機一髪！

私は西園寺蘭子。霊能者です。

私が暮らしているマンションの近くにある公園で起こった怪異をきっかけにして動き始めた何か。

どうしても辿り着けない黒幕を誘き寄せ^{おび}るために、私達は敢えて目立つ行動に出る事にしました。

次の日の朝、私達は、今まで連れ去られたと思われる女性達と同じようにジヨギングスタイルになりました。

私は半袖のTシャツにスポーツタオルを首に巻き、短パンにジヨギングシューズ、腰にはスポーツドリンクを入れたポーチを着けました。

弟子の小松崎瑠希^{こまつまき るき}も、黒のタンクトップに黄色の短パン、ジヨギングシューズにリュックサック。サンバイザーが大きめの帽子も被っています。

それなのに、親友の八木麗華は上半身は花柄の水着ブラのみ、下は今時珍しい濃紺のブルマです。

靴だけはプロ仕様のようなスパイク付きのものです。

おまわりさんに職務質問されそうです。

それより、一緒に歩きたくありません。

取り敢えず、公園に着くまでは麗華には白のジャージ上下を着てもらいました。

「何やねん、蘭子？　ウチのスタイルの良さに嫉妬したな？」

どこまでも便利な思考の麗華は、そう言っ得意そつに笑いました。

私は思わず瑠希弥と顔を見合わせてしまいます。

まもなく公園に着きました。

周囲を見渡すと、思い思いのペースで走ってる人達が予想以上に多くて驚いてしまいました。

「健康に気を遣っている人達って、随分多いのね」

私は溜息交じりに言いました。すると麗華は早速ジャージを脱ぎ捨てて、

「全く、浅ましいこっちゃ。人間、長生きすればええゆうもんやないのにな」

と元も子もないような事を口走ります。

彼女のすぐそばを通りかかったおば様ランナーが、キツと麗華を睨んで走り去りました。

「ほな行こか」

麗華はそんな事を気にかける様子もなく、走り出します。

「私達も行きましょう、瑠希弥」

「はい、先生」

瑠希弥と共に私も走り出します。

今のところ、何もおかしな気は漂っていません。

ですので、私達は犬を連れている人を探します。

昨日行ったドッグランの方が犬に会う確率が高いと思われたので、私と瑠希弥はそちらに向かいます。

麗華を探すと、イケメンさんが団体で走っている後をつけていました。

相変わらずそういつところは目敏いのですが、

「あの方達、女性に興味がないようですよ」

感応力を研ぎすませ始めた瑠希弥が小声で言いました。

なるほど、そういう方々ですか。麗華、ご苦労様。

やがて私達はドッグランに到着しました。

朝も早いのに、そこも盛況です。

瑠希弥が調べたところによると、この付近にはドッグランがある公園が少なく、ここが穴場の存在らしいです。

その辺りも、黒幕さんの思惑と一致したのかも知れません。

「ワンちゃん達も、特に変わった様子はありませんね」

瑠希弥が辺りにいる犬達を見渡しながら囁きます。

「そうみたいね」

私は周囲に怪しい行動をしている男性がいないか気を配りながら応じました。

その時でした。それはあまりに突然訪れたのです。

「きゃあ！」

瑠希弥の後ろに不意に現れた大柄な男が、彼女を羽交い締めにして、ハンカチのようなもので口を覆います。

「瑠希弥！」

私は慌てて瑠希弥に近づこうとしましたが、男は瑠希弥を眠らせると、サツと肩に担ぎ、走り出します。

「ちょっと、待ちなさいよ！」

私は男を追いかけました。ところが、その私も後ろから羽交い締めに遭い、ハンカチを押し当てられ、眠ってしまいました。

不覚です。私達の警戒をかい潜って、敵は仕掛けて来たのです。

しかも、すぐそばに来ているのに全く気づかせないという方法で。

「蘭子オツ！」

私達が発した気を感じ、麗華が走って来ました。

しかし、その時すでに私と瑠希弥は、完全に意識を失っていたのです。

どれほどの時間が経過したのかもわかりません。

私が目を覚ましたのは、妙なお香の匂いと油の臭いが交じり合った場所でした。

薄暗いところです。蝋燭の火だけが、周囲を照らし、私の目にその光景を映し出します。

「あん、あん、あん……」

そこは何とも言えない淫靡な世界でした。

五人の全裸の女性達が絡み合い、舐め合い、弄り合っています。

彼女達の全身は油が塗られているようで、蝋燭の明かりで怪しく輝いていました。

自分がどんな格好をしているのかと怖くなって見ると、さっきのままです。

服は脱がされていません。只眠らされてこの怪しい場所に連れて来られただけのようです。

「瑠希弥！」

ようやく思考が正常のものになって来て、私は瑠希弥の姿が見えないのに気づき、叫びました。

「先生！」

瑠希弥の声が聞こえました。しかし、部屋の壁の構造のせいなのか、このお香のせいなのか、どちらから聞こえて来たのかわかりません。

私は周りを見渡します。そして、息を吞んでしまいました。

瑠希弥は、部屋の一角に建てられた十字架のようなものに磔はりつけにされ、タンクトップを切り裂かれ、短パンを剥ぎ取られています。

要するに、上はブラのみ、下はパンティのみなのです。

「瑠希弥！」

私はふらつきながらも何とか立ち上がり、彼女の方へと歩き出します。

するとさつきまで互いを舐め合っていた五人の女性達が突然私に襲いかかって来ます。

「きゃっ！」

五人の女性に掴みかかれ、私は身動きが取れません。

「西園寺蘭子、まずは手始めにお前の弟子を愛でてしんぜよう」

どこからともなく、不気味な声が聞こえます。

生者のものとは思えない声です。男とも女ともつかない、魂を鷲掴みにされたような感覚に陥るおぞましい声でした。

「何のつもり？ あなたは誰？ 何が目的なの！？」

私は女性達の腕を振り払おうと身体をよじります。しかし、彼女達の力は、とても人間の若い女性のものとは思えないほど強力でした。

（何なの、この人達は？）

彼女達を見てみますが、霊能者ではありませんし、オリンピック強化選手でもないようです。

本当にごく普通の若い女性です。

「う……」

五人のうちの何人かが私の身体を触り始めました。

しかもいきなり、あそこです。

両手両足を強く押さえつけられているので、抵抗どころか動く事もままなりません。

ああ、ちよつと！ 今、舐められているのかも……。ああ……。

膝に力が入らなくなります。感じてしまっているのでしょうか……？

お香のせい？ ふと瑠希弥を見ると、彼女は下着を剥ぎ取られていました。

瑠希弥の大きな乳房がプルンと揺れ、そこにどこからか油が注がれています。

「ああ……！！」

瑠希弥が悶えています。何も存在していないのに、彼女の胸が揺れ、脚が開かれて行きます。

瑠希弥はもう二十歳を過ぎたのかしら？ 彼女の薄い繁みが見え隠れしています。

何だか、私も興奮して来ているようです。

そんな事を考えてしまうのも、お香のせいでしょうか？

「さあ、そろそろ愛でるとするか、生娘の味を」

また不気味な声が聞こえました。

「うっうっ！」

瑠希弥はその壮絶な感応力を使い、必死に抵抗しているようです。

開きかけた脚が閉じました。

「無駄な事よ。抗う事はない。至上の快樂はもうすぐそこぞ」

薄気味悪い声が瑠希弥を籠絡しようと囁きます。

「瑠希弥、身の内に摩利支天真言を！」

私は以前、蘆屋道允あしやどういんという陰陽師との戦いで、麗華の幼馴染の神崎新さきあらたさんに教わった事を瑠希弥に伝えました。

「はい、先生」

何とか届いたようです。瑠希弥は私の方に目を向け、微かに頷きました。

そして私です。出羽の大修験者である遠野泉進とのおのせんしん様の教えに従い、指先に気を集中します。

「はあ！」

ある程度集約したところで放出すると、

「ぎゃっ！」

私を押さえ込んでいた三人の女性が吹っ飛び、倒れました。

「えい！」

次に自由になった両手で抑えて、私のあそこを必死に舐めていた一人を蹴倒します。

私の短パンは、涎塗れよたねみでネラネラと光り、凄い事になっています。

「ぐは！」

更に胸を揉んでいた最後の一人を、

「オンマリシエイソワカ！」

と摩利支天の真言で吹き飛ばします。

「ぐげ！」

五人の女性達は摩利支天真言で悪い気を取り払われ、魔物の支配から抜け出したようです。

でも、まだ終わりではありません。

「先生……」

瑠希弥が全く抜け出せていないのです。

「真言など我には只の戯言たわごと。無駄だ、西園寺蘭子」

謎の言い、不気味な笑い声が部屋中に響きました。

魔物の真実

私は西園寺蘭子。霊能者です。

次から次へとジョギング中の女性を襲っていた魔物。

そいつに、私と弟子の小松崎瑠希弥こまつき るきみは捕まってしまうました。

私は捕らえられていた女性達に襲いかかられ、瑠希弥は見えない敵に服を引き裂かれ、下着を褫り取られました。

「抗うな、小松崎瑠希弥よ。快樂に身を委ねよ」

またしても不気味な声が薄暗い部屋の中に響きます。

「瑠希弥！」

操られていた女性達を摩利支天の真言で解放した私は、瑠希弥を助けに向かいます。

「先生……」

瑠希弥は自分の感応力を全開にして脚を開かせようとする魔物に抵抗しています。

（真言が通じないなら！）

私は気を右手の人差し指に集中します。

「はあ！」

練りに練った気をまるでレーザービームのように放ち、瑠希弥の背後を打ちました。

「ぐげええ！」

ヒキガエルのような声だし、瑠希弥の脚を開こうとしていた力が消えました。

「終わった？」

私はホツとして瑠希弥に近づきました。

「先生！」

瑠希弥が叫びました。

「え？」

消えたと思っていた魔物が私に襲いかかって来ました。

「やはりお前から愛でる事にするよ、西園寺蘭子！」

背筋がゾツとするような気を背中に感じたかと思った次の瞬間、私は身動きできなくなっていました。

「先生！」

瑠希弥は気ので礫はりつけかせの枷を破壊し、私に駆け寄って来ます。

「ほお。お前も生娘か、西園寺蘭子？」

魔物の声が耳元で囁きます。何かムカつく言い方です。

「ならば尚の事、愛で甲斐があるというものだ」

Tシャツと短パンが一瞬にして引き千切られ、ブラとパンティもたちまち剥ぎ取られます。

私も瑠希弥と同じく全裸にされてしまいました。

「何じゃ、愛で甲斐のない乳房よのう」

魔物の声があからさまにがっかりした口調で言います。

もっとムカつきました。でもこのままムカついて行くと「いけない私」が出て来てしまうので、ダメです。

「先生を侮辱するのは許さない！」

瑠希弥がその大きな胸をゆさゆささせながら言うてくれました。

嬉しいような、悲しいような、複雑な心境です。

「はあ！」

瑠希弥は気を集中し、指先から放ちます。

しかし、魔物にも学習能力があるらしく、サツとかわしたようにで

す。

「同じ手を食らう程、我^{われ}は愚かではない」

魔物は高笑いをしました。ますますムカつくます。いけません、
「いけない私」が出て来てしまいそうです。

「お前もまた愛でてやろう！」

啞然としている瑠希弥に魔物がまた襲いかかりました。

「きゃあー！」

瑠希弥はまた動けなくなり、胸を揉まれます。大きいので揉み甲斐があるという事ですね。

またちよつとムカつきます。

「お前はこちらが美しいのっ」

魔物が言いました。

「ああ……」

私はいきなりあそこを刺激されました。

何でしょう？ 舐められているのとも触られているのとも違います。
す。

いけません、陶醉して来てしまいました。

要するに「感じて」「しまっているようです。

「おうおう、洪水じゃのう。なかなか名器の気配じゃ」

魔物が歓喜の声をあげました。

名器？ 以前、麗華が太田梨子に言われていましたが、どういう意味なのでしょう？

でも、私のあそこは恥ずかしい事にすっかり反応してしまい、所謂「愛液」を放出しているようです。

真言が効かない相手に何をすれば……。

力が抜けて行く中、私はある事を思い出しました。

この魔物は残留思念でしょうか？

以前、サヨカ会の残党と戦った時も、こうのいたいせん鴻池大仙の残留思念に苦戦しました。

あの時は、大仙の奥さんを利用できましたが、この残留思念は正体がわからないので、無理です。

私と瑠希弥はこのままこいつの虜として裸の生活を続ける事になりそうです。

ああ。麗華、もう一度遭いたかった。

あれ？ 麗華？ 麗華はどうしたのでしょうか？

私達が連れ去られたのを見ていたはずですよ。

ここがわからないのでしょうか？ 私達にもわからないのですから、仕方ないのですが。

「先生、八木様が……」

瑠希弥は胸を揉まれながらも、麗華の事を探っていたようです。

「麗華がどうしたの…ああ、ううーん」

尋ねながらも喘いでしまう自分が情けないです。

「おまつとさん！」

ドーンと部屋のドアが開けられて、麗華が飛び込んで来ました。

「やっと理由がわかったで。ウチが除けもんにされたな！」

麗華はニヤリとして言いました。今はそんな事はどうでもいいですから、早く何とかして欲しいです。

「蘭子、こいつの正体は残留思念や。しかも、生娘が大好きやねん。それと純真な女がな」

なるほど、納得です。麗華はそのいずれにも当てはまりません。

「あの公園で、何人ものエロオヤジ共が、ジヨギングしてる若い女

の子を邪な目まじしめで見ている事によって吹き溜まった邪気が何十年も積もり積もって変化へんげしたんや」

麗華がそう言うと、当たっているのでしょうか、魔物が動揺したのがわかります。

「で、例の犬の毒殺事件が引き金になって、怒りと呪いの力が邪気と融合し、魔物になったんや。だから、いくら辿っても、真相に行き当たれんかってん」

麗華は得意そうに胸を張って言いました。

「飼い主は見つけたで、蘭子。そっちは後で説得するとして、今はこいつやな」

魔物が麗華に敵意を向けました。その怒りが集約し、今にも爆發しそうです。

「あんたの相手はこいつに任せるわ」

麗華は胸の谷間からお札を取り出します。

「さあ、行きや！ 徹底的に愛されたれ！」

麗華のお札から飛び出して来たのは、逆の気です。

男性のジョギング姿をずっと邪な目で見っていた中年の女性の邪気です。

麗華はそれを公園で集めていたようです。

途端に私と瑠希弥を押さえ込んでいた邪気が萎えて行くのがわかりました。

何だかおぞましい事になりそうです。

「ぶ、ぶへええ、やめろ、やめてくれえ！」

魔物の断末魔でした。

マイナスとマイナスをかけるとプラスになる。

麗華の見事な作戦でした。

しばらくして、私達は麗華の取り計らいで、近所の貸衣装屋さんから服を調達してもらい、何とか外に出られました。

囚われていた五人の女性達も、そのあまりにすごいセンスの服しか借りて来てくれなかった麗華を恨めしそうに見ながら、それぞれの家へと帰って行きました。

私と瑠希弥も、もう二度と着たくないと思うような服を着て、隠れるようにしてマンションに帰りました。

「何やねん、氣イ悪いわ。ウチが調達した服、そないに嫌か？」

マンションに着くと、麗華が剥れて言いました。

「まあまあ」

私と瑠希弥は麗華を時間をかけて宥めました。

あの魔物より、麗華の方が面倒臭いです。

でも、麗華のお陰で助かったのですから、お礼をしないとイケません。

「今度、ホテルのディナー御馳走するから、許して、麗華」

「耳元で囁きました。」

「お、おう」

麗華は嬉しそうに私を見ました。何だか、嫌な予感がします。

「一体いくらのディナーを食べるつもりかしら？ まあ、いいですよ。」

西園寺蘭子でした。

危ない女子学園

私は西園寺蘭子。霊能者です。

先日の見えない敵との戦いはまた新たな絆を生み出すものとなりました。

私の弟子である小松崎瑠希弥こまつかき るきやを危険な目に遭わせてしまった私は、本当に心から瑠希弥に謝罪しました。

「先生、私は貴重な体験をできたので、むしろ感謝しているんです。謝らないでください」

優しい瑠希弥はそう言ってくれましたが、私は、

「そんな事ないわ。私がついていながら、本当に申し訳ないと思っているわ」

と頭を下げました。

「先生……」

涙脆い私達は、抱き合って泣いてしまいました。

「何やねん。一番活躍したウチは放ったらかしかいな」

親友の八木麗華はムスツとして言いました。

「ごめん、麗華。貴女にも感謝してるわよ」

私と瑠希弥は両側から麗華を抱きしめました。

「おほほ、悪い気はせえへんけど、ウチ、そっちの気はないで」

麗華が照れながら言ったので、私と瑠希弥は慌てて麗華から離れました。

そして、瑠希弥は私のもう一人の数少ない親友である箕輪まどかちゃんの待つG県へと帰って行きました。

ちよっぴり寂しかったのですが、それを言うとお互いのためにならないと考え、敢えて我慢しました。

そして、麗華も大阪で依頼を受け、久しぶりに私は一人です。

麗華とは、山形の大修験者である遠野泉進様とあのせんしんのところで一緒に修行して以来、ずっと一緒だったので、寂しさも一人ひとりです。

マンションで一人で生活するのは、山形へ修行に行く時以来ですから、一年くらいなかった事です。

余計寂しさが増して来ます。

こんな時は、依頼を受けて、仕事に没頭するのがいいのですが、そんな時に限って依頼がありません。

それから一週間、私は一人の生活をしました。

瑠希弥と出会う前は、ずっと一人暮らしだったのに、今こうして一人で生活してみると、人恋しさが倍増しています。

寂しがり屋度が強くなっています。

まず麗華に電話してみますが、

「すまん、蘭子、あと一週間は帰れへんねん」

麗華は九州の方で依頼を受け、これから出発するところらしいのです。

「堪忍な、蘭子」

麗華のその言葉に私は泣きそうになりましたが、

「平気よ、麗華」

と強がってみせました。

次に瑠希弥に連絡しようとした時でした。

事務所の電話がなりました。

嬉しいような、悲しいような、複雑な思いになりました。

「はい、西園寺蘭子霊能事務所です」

私は努めて明るく電話に出ました。

「こちらは、菫蒲^{しよぼう}学園です。学園の部室棟に出る悪霊を除霊していただきたいのですが」

仕事の依頼でした。

菫蒲学園は、埼玉県にある名門女子校です。

女子校と知り、ほんの少しだけ嫌な予感がしましたが、今は仕事を選んでいく段階ではないと判断し、

「お受け致します」

と二つ返事で受諾した私は、車を飛ばして菫蒲学園に行きました。

学園に着くと、園長先生と教頭先生が出迎えてくれます。どちらもふくよかな年配の女性です。

「西園寺先生は、以前私の知り合いの方が理事長を勤めている学校の事件を解決されたそうですね」

園長室で、私は園長先生に言われました。

でも、実際に学校関係の除霊は数限りなくしておりますので、どこの事かはよくわかりません。

「害があつた訳ではないのですが、学園の名に傷が付くのと、入学希望者が減るのは困りますので、除霊をお願いしたいのです」

教頭先生が言います。私はそのあまりにも割り切った感じの言い方にちよつと違和感を抱きました。

(何だろう?)

その時はその程度しか感じませんでした。

教頭先生の案内で、私は学園の高等部の校舎に向かいます。

霊が出るのは、高等部の部室棟の一角らしいのです。

「本日は部活動は休止にして、部室棟には誰もいない状態にしています。じっくりとお仕事をなさってください、西園寺先生」

教頭先生が言いました。彼女の顔がどことなくやけていたような気がしたのは、私の考え過ぎだと思ったのですが。

部室棟が建てられている区画に近づくと、確かに気の流れが変わりました。

最初は、生徒達の悪戯ではないかと疑っていた私でしたが、その疑念は消えました。

(これは……)

以前、瑠希弥と訪れた女子校でも、同じような気を感じました。

そう。百合の気です。端的に言えば、女子同士の恋愛の気。

女子校には多い気ですが、今日感じるそれは、生きている人の気ではありません。

(これは……)

次第に真相がわかった来たのですが、俄には信じられません。

私の結論はこうです。

その百合の気の元は、初代園長、すなわち、この菖蒲学園の創業者の霊のものなのです。

創業者の女性は、今から百年ほど前に亡くなっています。

明治末期。まだ男女の権利が不平等だった時代です。

その頃、すでに百合族がいたのでしょうか？

いえいえ、大奥の昔、いや、平安の時代から、日本には女性同士の恋愛は存在していたようです。

只、今回の園長の気は、それらとは同列には扱えないものです。

彼女は亡くなってからずっと、この学園でその百合の気を増幅し続けて来たのです。

とてつもない気です。

幾人もの女性を生きたまま虜にし、その気を全て吸い尽くし、今や魔となりかけています。

「そこね」

私は部室棟の裏手にある祠を見つけました。

封じているのかと思ったら、違います。

創業者を祀っているのです。

「これは一体……？」

気の流れに変化を感じ、私は後ろを見ました。

「さすが西園寺先生です。もうお気づきですか？」

そこには、教頭先生と二十人ほどの生徒が立っていました。全員一糸纏わぬ姿です。

「どういふ事ですか、教頭先生？」

私は数珠を取り出して尋ねました。

「貴女をお仲間にしたいのですよ。そして、我が神のお力をもっと高みに」

教頭先生はニヤリと言います。周囲を見回すと、すでに私は

完全に囲まれています。

全部で百人近くいるでしょうか？ まだこれから青春を謳歌する年代なのに……。

私は教頭先生を睨みます。

「貴女がどんな思想信条をしようと私は何も言いません。でもこの子達を巻き込んだのは許せないわ！」

私は大声で言いました。すると教頭先生はその三段腹をゆさゆさと揺らしながら、

「奇麗事を言いますのね。この子達は、私が引き込んだものではありません。自分達の意志で参加しているのですよ」

「何が自分達の意志よ！ これだけの気を放っている霊を祀って、その力を強化すれば、彼女達は否応なく参加してしまうわ！」

私は自分も取り込まれそうになりながら、更に反論しました。

「そこまでわかつたいるのなら、説得は無理のようね。皆さん、西園寺先生を取り押さえなさい。この人は私達の神を認めないそうです」

教頭先生は私を指差しました。その途端に周りにいた女子生徒達が私に向かって走り出しました。

中には私より立派な胸を揺らしながら走って来る子もいます。

あ、いえ、それはどうでもいい事です。

「オンマリシエイソワカ！」

私は摩利支天の真言を唱えました。

「ぐぎゃっ！」

女子生徒達が真言で弾き飛ばされます。やはり何らかの邪気が使われているようです。

早く何とかしないと、彼女達が危険です。

それにしても、相手が多過ぎます。

そんな時に限って、麗華はいません。

もしかすると、今までで一番のピンチかもです。

攻撃的な真言を使えば、生徒の皆さんを傷つけてしまいますので使えません。

どうしたらいいのでしょうか？

西園寺蘭子でした。

裏蘭子降臨！

私は西園寺蘭子。霊能者です。

久しぶりに一緒に寝泊りした弟子の小松崎瑠希弥こまつじゆきがG県ぎぎけんに去り、親友の八木麗華が大阪に帰ってしまい、人恋しさが倍増していた私。

仕事に没頭して、寂しさを紛らわそうと思っていた時、埼玉県の菖蒲学園という女子校から依頼がありました。

これ幸いと学園に向かった私でしたが、それは罠だったのです。

悪霊を退治して欲しいというのは嘘で、むしろその悪霊と化している学園の創業者である初代園長を祀っていました。

教頭先生と生徒さん達があられない姿で私を取り囲んでいます。

「さすが、音に聞こえた西園寺蘭子。そう簡単にはいかないようですね」

教頭先生はプルンプルンと三段腹を揺らせながら言います。

「ええ。そう簡単にはやられませんよ、私は」

私はスーツの内ポケットからお札を取り出し、祠に投げつけました。

「な、何をするう!」

祠にお札が張り付くと、教頭先生が絶叫しました。

「どうやら、初代園長の霊は、教頭先生を触媒にして、その力を生徒さん達に及ぼしているようです。」

「その禍々しいお札を剥がしなさい!」

教頭先生が生徒さん達に命じました。彼女達は言われるがままに祠に向かいます。

「させないわ……」

それを阻止しようと思って動こうとした私を、別の生徒さんの一団が取り押さえました。

「く……」

大柄な生徒さんが私を羽交い絞めにして、もう一人が両足首を押さえつけたので、完全に動きが取れなくなりました。

「お姉さん、早く私達の仲間になろうよ」

一人の生徒さんが焦点のあっていない目をして私に近づきます。

「オンマリシエイソワカ」

印が結べませんが、摩利支天まりしてんの真言を唱えてみます。

「効かないわよ、そんなの」

やはり印を結ばないと威力が半分にも満たないようです。

「ほらあ、早くう」

その生徒さんは私のブラウスのボタンを外しにかかり、他の生徒さんがスカートのファスナーを下げています。

女子高生に脱がされる。何という仕打ちでしょう。涙が出そうです。

ブラウスのボタンが全部外され、スカートもずり下ろされます。

「ストッキングは面倒だから破いちゃいなさい」

教頭先生が復活して言いました。ということは、お札が剥がされてしまったという事ですね。

ストッキング……。それ、安くなかったんですけど……。

無残な状態にされてしまいました。

「わあ、お姉さん、このブラ、私が小学生の時にしていたのと同じだよ」

生徒さんの一人がそう言ってケラケラと笑いました。

いけません。ブラの事をそんな風に言うては……。

しかも、言うに事欠いて、小学生の時のブラと同じですって！？
もうダメです。私自身が限界です。

バシユンと何かが弾けるような音がしました。

「きゃあ！」

私を押さえつけていた生徒さん達が一斉に後ろに吹き飛び、尻餅を突きました。

「だ・れ・が、小学生のブラだ！」

完全に怒りMAXの状態で、「いけない私」が降臨しました。

「てめえら、年上の人を敬う気持ちを持ちやがれ！」

いけない私はいつになくまともな事を言いました。

確かにその通りですが、今そんな事を指摘している場合ではありません。

「む？ 気の質が変わりましたね？ 貴女はどなたです？」

教頭先生がようやく、というか、急に教育者らしい顔つきになりました。

とは言え、三段腹とすっかり垂れ下がった乳房を丸出しにしています。

「はあ？ 何言ってるんだ、このクソババアは？ 私は西園寺蘭子様だよ。頭悪いのか？」

いけない私は絶好調の毒舌を放ちます。年上の人を敬う気持ちはないのでしょうか？

「おやまあ、口の利き方を知らない人ですね。そんな人に私の可愛い生徒についてあれこれ言われたくはないわね」

教頭先生の顔が凶悪になりました。

「お仕置きをしないとイケませんね」

いけない私はそんな事を言われると喜ぶタイプです。

「へえ。お仕置き？ この蘭子様にかい？ そりゃあ面白い。やってみなよ、できるものならさ」

いけない私はニヤリとして大股開きになり、挑発します。

今はブラとパンティのみなのでから、あまり脚を広げないで欲しいです。

「やっておしまいなさい」

教頭先生の号令がかかりました。

「何が始まるのかな？」

いけない私は嬉しそうに呟きます。その時でした。

「うおお！」

いきなり頭上から液体を大量にかけられました。

どうやら、部室棟の二階の窓からかけられたようです。

「な、何だこれは!？」

いけない私はその液体がかかった身体を見て言いました。

ヌルヌルしています。何でしょう？

「さあ、その礼儀知らずのお姉さんにお仕置きをしてあげなさい」

「はい、教頭先生」

生徒さん達がニコニコしながら一斉にいけない私に近づきます。

「わわ！」

そのヌルヌルはどうやらローションのようです。

用途はよくわからないのですが、麗華がよく買っているのを見ました。

ヌルヌルは足元まで届いていたので、いけない私はその場にドスンと倒れてしまいました。

「わわ、やめろ、何考えてるんだ、私は女だぞ！」

生徒さんに押し掛かれていけない私が動揺しているのは面白いのですが、これはまずい状況です。

「わはは、やめろお！」

生徒さん達が私の身体のおちこちを舐め始めたようです。

いけない私は、最初はくすぐったがっていましたが、そのうちに、

「あああ………」

感じて来てしまったようです。いつの間にか、ブラもパンティも剥ぎ取られています。

「くっくっ………」

ある箇所を舌で舐め回され、いけない私は痙攣しました。

どうやら、いけない私はこの手の攻撃に弱いようです。

いや、私自身も弱いですけど。

「さあ。貴女も私達と同じ神を崇めるのです、西園寺さん」
教頭先生の後ろから、園長先生が現れました。

園長先生もちろん全裸です。しかも、プルプルした三段腹の下の股間に何か着けています。

天狗の鼻のような……。

え？ もしかして……。

あの、えーと……。テンパってしまって、どういふ事がわかりません。

「ああ！」

私は両手両足を押さえつけられ、股を開かされ、迫って来る園長先生を見ている状態です。

嘘！ いくら何でも、初体験がこれって……。いえいえ、こんな状態でそんな事、絶対にしたくありません！

「さあ、力を抜いて、西園寺さん」

園長先生がすぐそばで膝を着きます。

「痛くないから、安心して。この子達も皆こうして我が神の世界に入ったのよ」

満面の笑みで恐ろしい事を言う園長先生。

その言葉に、行けない私ではなく、本来の私が切れました。

まだこれからいろいろと経験して育って行くべき子達に何て事を！

全身の気が一気に高まり、爆発的に膨らみました。

「ひいい！」

園長先生は元より、私を押さえつけていた生徒さん、そして周りにいた生徒さん、教頭先生、全てを巻き込んで、私の中の気が炸裂しました。

やっと身体の自由を取り戻し、いけない私も引っ込んでくれたので、ホツとして起き上がります。

取り敢えず、この人達はもう大丈夫ですが、まだ本体が残っています。

「我が願いを邪魔するのか、娘？」

どうやら初代園長が降臨されるようです。

祠が揺れ、中から禍々しい気が噴き出して来ました。

悪霊化していますね。もう浄化は無理でしょう。

吹き飛ばすしかないようです。

「え？」

私はその本体の気の大きさに驚いてしまいました。

祠から出て来た初代園長の霊は、まさしく神に近づこうとしていたのです。

決して神にはなれない禍々しさですが。

「許さぬぞ。我が百年の計を邪魔する事は断じてさせぬ」

ゆっくりと初代園長の姿がはつきりして来ます。

「あら？」

更に驚いた事に、初代園長は享年二十七歳。

私よりほんの少しお姉さんなだけです。現在の園長と違って美人でスタイルもいいです。

服装は神社の巫女のような衣ですが。

しかも、百合の世界にのめり込んでいたので、男性を知らないまま亡くなったようです。

何とも因縁深い霊ですね。

何とか説得できるでしょうか？

西園寺蘭子でした。

初代園長剣崎天子

私は西園寺蘭子。霊能者です。

今回は女子校の依頼で、部室棟付近に出る霊を抜つはずでしたが、見事に嵌められてしまいました。

園長始め、生徒達までもが百合一色です。

何とか、園長以下を真言で退けたのですが、とうとうご本尊様が現れたようです。

初代の園長にして、この菖蒲学園の創業者ですね。

「私は剣崎天子けんさき てんこ。この学園の守護神である」

初代園長は射るような目で私を見て言いました。

確かに守護神の名に相応しく、気の量が膨大です。

恐らく、創業から今までの多くの人達の気を吸い取って来たのでしょう。

但し、人を殺めてはいないようです。

彼女の目的は自分の信者を増やす事。

気を吸い取った代わりに、自分の信念と情熱をその人達に注ぎ込む。

吸血鬼と同じ要領です。

「お前は私に敵対する者のようだな。許さぬ。我が信仰は神聖にして絶対であり、不可侵である」

剣崎園長は気を更に放ちながら言います。

普通の人がこの気を浴びたら、間違いなく彼女の信者になってしまつてしょう。

これはちよつと骨が折れそうですね。

やっぱり、親友の八木麗華か、弟子の小松崎瑠希弥「小松崎瑠希弥」がいてくれた方が良かったです。

でも、今更そんな事を思ってみても、何の解決にもなりません。

「貴女がどんな事を信仰しようと、それについて何か異議を申し立てるつもりはありません。でも、学園の生徒達を巻き込むのはどうかと思いますけど？」

私は何か身体に纏まとうものがないかと探しましたが、そこに倒れているのは全員が全裸です。

身に着けるものと言えば、現在の園長が着けているあれくらいです。

いくらあそこを隠したくても、あれは着けたくありません。

「お前にこそそのような事を言われたくないな、西園寺蘭子。お前自身、自分の考えを他人に押し付けていよう？」

剣崎園長はギラツと目を輝かせて私を威嚇します。

「何の事ですか？」

私は本当に心当たりがないので尋ねました。すると剣崎園長は、

「お前は、男と女が愛し合うのが正しいと考えていよう。そして、そうでない者を異端とし、蔑む^{みげす}」

「蔑んでなんかいません！　そして、女同士の愛が間違っているなんて思った事ありません！　貴女はそうやって周り中を敵ににしてしまって、孤立したのがわからないのですか！？」

私は剣崎園長が自分の心を曝け出してくれたので、そこに入り込む事ができました。

「うぬ……」

剣崎園長は苦虫を噛み潰したような顔で私を睨みますが、反論できません。きないようです。

だって、私が言ったのは、紛れもない事実なのですから。

剣崎園長は、ヨーロッパのある国の修道院での生活で、百合の世界に目覚めてしまい、男は汚らわしい者と思ひ込んでいます。

それは確かに、多くの殿方は汚らわしいかも知れません。

だからと言って、そうやって次々に否定したら、世の中のあらゆるものを否定する事になるでしょう。

「貴女は間違っではないけど、あまりに了見が狭過ぎます。もっと視野を広げて、新しい事に目を向けるべきです」

全裸の私が奇麗事を言っても、あまり説得力がありませんが、仕方がないです。

「そう思ふのなら、私に忠誠を誓え。我が世界に足を踏み入れ、共に生きるのだ」

剣崎園長は私を洗脳しようとして気を集中して来ました。

瑠希弥の感応力とは違います。言葉は悪いですが、思い込みの気ですね。

一般的にそんな気で人を操る事などできる訳がないのですが、剣崎園長の場合はその桁が違っているので、可能のようです。

「く……」

私はずっと心の中で真言を唱えているのですが、それでも剣崎園長に取り込まれてしまいそうです。

(何て凄まじい気なの?)

ハッと我に返ると、剣崎園長の美しい顔が目の前にあります。

「我らの愛は美しく、穢れなく、高貴なるぞ」

剣崎園長の右手が私の胸を揉みます。

霊なのに、まるで生身の女性に触られているようです。

いけません、感じてしまいそうです。

「ほれ、こちらも喜んでおる」

剣崎園長の左手は私のあそこに分け入って来ました。

「ふう……」

気が遠くなりそうです。

今までのどんな攻撃より、いけない攻撃です。

この人は、女の感じるところを知り尽くしています。

「さあ、無理をせず、我らの世界に来るのだ、西園寺蘭子」

剣崎園長の声が耳元で囁きます。

落ちてしまった方が、楽なのかしら？

ふとそんな事が頭の中を過ります。

「さあ、受け入れよ」

剣崎園長の唇が私の口を塞ぎました。

舌が入って来て、口内が蹂躪じゅうじゅうされるようです。

もうダメ。もう無理。

私、堕ちてしまう……。

その時でした。

『蘭子さん、そちらに行かないでください』

声が聞こえました。以前にも聞いた事がある声です。

「ぬう?」

剣崎園長が私から離れました。彼女の顔は鬼の形相になっています。

「男か? どこにおる?」

剣崎園長は目を血走らせて辺りを見回しました。

そうか。あの人だ。神崎新かんだまあらた。麗華の幼馴染です。

すでにお亡くなりになっていますが。

『神崎さんですか?』

地獄に仏とはこの事でしょうか? 神崎さんには、陰陽師と戦っ

た時に助けてもらって以来です。

何だか嬉しいのは、決して彼に恋をしたからではありません。

『はい。貴女の心の恋人、神崎新ですよ』

「……………」

私は苦笑いをしました。

『あなたを助け、そしてまたこの女性も助けますね』

神崎さんが言いました。何をするつもりでしょうか？

「おのれ、姿を見せよ、物の怪め！」

剣崎園長の怒りはもう沸点越えしているようです。

「わかりました」

そう言っつて、神崎さんが現れました。イケメンです。でもその姿は彼の幻術によるものです。

『それにしても神崎さん、霊になってもその力を使えるのですか？』

『この術は、蘭子さんの力を使わせてもらって実現しています』

「なるほど」

私は納得しました。

「おのれ、西園寺蘭子！ まだ私に抗あしがうか！？」

剣崎園長が私を睨みました。

「違うよ、ハニー。僕は貴女のその素敵でスタイルに感動して、
霊界から戻って来たのさ」

神崎さんは私が聞いても背筋がゾツとするような事をあっさりと
言いました。

「え？」

何故か剣崎園長が頬を染めています。えええ！？ どういう事？

「貴女はこの世の何よりも美しい。どうか僕の恋人になって、霊界
と一緒に行ってください」

「はい」

剣崎園長は神崎さんに縋りつき、更に頬を赤くしました。

もう、完全に訳がわかりません。多分、神崎さんの力なのでしょう
うけど。

「では、蘭子さん、ご機嫌よう」

「失礼した、西園寺さん」

恥ずかしそうに神崎さんの腕を掴む剣崎園長を見て、私は啞然と

してしまいました。

二人は次第に光に包まれながら、天へと昇って行きました。

「かい、けつ？」

私は首を傾げて咳きました。

しばらくして、園長先生以下、全員が意識を取り戻し、一時は大パニック状態に陥りましたが、何とか真言の力で冷静さを取り戻させ、全面解決です。

「知らぬ事とは言え、西園寺先生には大変ご迷惑をおかけしました」
園長は自分が身に着けているモノに一回卒倒してから、改めて私に詫びてくれました。

どうやら、私を呼んだ事すら覚えていないようです。

生徒さん達は、学園の中にいた女性の先生方を呼んで、バスタオルをありったけ持って来させて保護しました。

制服は体育館にあるようなので、彼女達はそちらに行きました。

皆礼儀正しく、私に「ありがとうございました」と言ってくれます。

何だかとっても嬉しいです。

「初代園長先生の霊は昇天されました。ですから、あの祠は神主さんにお被いしてもらって解体して、改めて初代園長先生の供養塔を建ててください。そうすれば、今後このような事はないでしょう」

私はようやく行き渡ったバスタオルを身体に巻きながら言います。

「はい」

園長先生と教頭先生は声を揃えて言いました。

「但し、剣崎園長の教えの中にも正しい事はたくさんあります。それはそのまま受け継ぎ、間違ったところだけ直してください」

私はそれがあの気高いけど純情な剣崎天子さんにできるせめても
の供養だと思いました。

それにしても神崎さん、凄いわ。ある意味尊敬してしまいます。

でも、助けに来るなら、もう少し早く来て欲しかったかな。

贅沢を言っではいけませんね。

西園寺蘭子でした。

蘭子、強姦魔に襲われる？

私は西園寺蘭子。霊能者です。

百合に染まった埼玉県の菖蒲学園の事件は解決し、今は人心地。

事務所のソファに寛いで、紅茶を愉しんでいます。

「麗華？」

携帯が鳴ったので表示を見てみると、九州に行っているはずの親友の八木麗華からです。

珍しいですね。

遠出をした時には、絶対に携帯にかけて来ないのに。

「どうしたの、珍しいわね？何かあったの？」

すると私のその言葉が気に障ったのか、

「何やねん、ウチが蘭子の携帯にかけるのがそないに意外か？」

と妙に突っかかって来ます。どうやら、九州の仕事がうまくいかなかったみたいです。

「そんな事ないよ。そう聞こえたのなら、ごめん」

すると麗華は愚痴を言い始めました。

「クライアントの奴、バカにしおって！ 大阪から出張ってるんに、出張費取るんはおかしいゆうてな……」

私は苦笑いして、しばらく麗華の愚痴を聞きました。

「そやから、予定を切り上げて、もう戻ってん。今東京駅やから、迎えに来てんか？ そのまま、飲み会や！」

麗華はそう言つとサツサと携帯を切つてしまいます。

「勝手なんだから」

そう言いながらも、ちょっと人恋しくなっている私は、つい顔を綻ばせて出かける準備をします。

麗華が来るのがこれほど嬉しかった事は久しくありません。

後から考えれば、そんなウキウキ気分がいけなかったのでしょうか。

私は事務所を閉め、外廊下を歩いて、先日麗華が助けたコンサルタント事務所の所長さんに挨拶し、エレベーターへと向かいました。

いつもの私なら、その時気づいたはずなのに、その時の私は全く警戒心がありませんでした。

エレベーターで地下駐車場に降りた私は、自分の車のところへと歩き出しました。

まさにその時でした。

「ぐう！」

いきなり後ろから羽交い絞めになり、口を皮の手袋をした大きな左手で塞がれます。

「騒ぐな。騒ぐと殺すぞ」

右手は私の喉元にカッターナイフを突きつけていました。

抜かりました。霊能者にあるまじき失態です。

顔を何とか動かすと、大柄な男です。

上から下まで黒尽くめで、サングラスをかけ、マスクをしています。す。

髪は七三に分けてあり、僅かに見える頬には髭が生えています。

私は引き摺られるようにして、駐車場の端に連れて行かれました。

そこは柱と機械のせいで人目につかない場所です。

恐らく、この男はこれから私を犯すつもりなのでしょう。

そんな事絶対させませんけど。

「脱げ」

男は私を壁に押し付け、ナイフで脅します。

私はようやく自分の愚かさに気がつきました。

(この人、操られている？ どういう事？)

何だか、複雑な事情がありそうですね。

摩利支天まりしてんの真言を唱えます。

「オンマリシエイソワカ」

男を縛っている呪詛はそれほど強くなかったので、簡単に消滅しました。

「ぐあー！」

男に取り憑いていた呪詛の元がボワツと燃え上がって消えました。

「く……」

男はそのまま気を失い、ドスンとコンクリートの床に倒れ伏しました。

私は携帯を取り出して、

「麗華、ごめん。私、迎えに行けなくなった」

「何やってー!? どういうことじゃー!?」

麗華は激怒しています。私は携帯を耳から放して、

「強姦されそうになったのよ」

「何ー!?!」

麗華の声は普段から大きいですから、怒鳴られると鼓膜が破れそうになります。

しばらくして、タクシーで駆けつけた麗華が地下駐車場に来てくれました。

「蘭子、大丈夫か?」

「ええ、何とかね」

私は麗華に微笑んでみせてから、足元に倒れている男を見ました。

「そいつか、身の程知らずな阿呆は? む?」

麗華もその男の身体に纏わりついている気を感じたようです。

「何や、こいつ? 妙な気イを纏ってるな」

「そうなの。操られていたみたいね」

すると麗華はドスツと男のお腹を蹴りました。

「麗華、そんな乱暴しないで」

「何言うとるねん、こいつはあんたを犯そうとしたんやで」

私の言葉に麗華は呆れ顔で応じます。

「うっ……」

麗華の蹴りが効いたのか、男が目を開けました。

「気がつきましたか？」

私は頭を抑えながら起き上がったその人に近づき、しゃがみ込んで話しかけました。

「え？ あれ？ 貴女はどなたですか？」

その人はサングラスを外し、マスクを取って私を見ました。あら、結構男前ですね。

「私は西園寺蘭子と言います。貴方に襲われたのです」

するとその人は目を見開き、

「も、申し訳ありません！」

と土下座しました。

私と麗華は思わず顔を見合わせました。

取り敢えず、その人に事務所まで来てもらって、事情を聞きま
した。

名前は長良邦彦ながらくにひこさん。

大手企業に勤めている方です。

「本当に申し訳ありませんでした。貴女が霊能者で良かったです。
普通の女性でしたら、間違いなく……」

ソファに座った長良さんは涙ぐんでいます。

根はとても真面目な人みたいですね。

「実は、以前にも知らない女性を強姦しかけたんです。今、その女
性と示談交渉中なのですが、この事を知られば、私は刑事裁判に
かけられて、破滅です」

長良さんは、突然記憶がなくなり、気がつくや女性に馬乗りにな
っていたらしいです。

彼自身の気を探り、深層心理にまで分け入ってみました。嘘は
吐いていません。

「あんだ、誰かに恨まれてへんか？」

ジッと長良さんを見つめていた麗華が尋ねました。すると長良さ

んはビクッとして、

「やっぱり、それなんですか？」

「どっついう意味や？」

麗華が身を乗り出して長良さんの隣に座ります。

好みのタイプみたいです。全くもう。

「実は、三年付き合った女性と別れたんです。彼女はどうしても別れたくないと言いましたが、私は堪え切れな思ったので、強引に別れました」

長良さんは麗華から身を引いて答えました。

「その人の名前は、大久保美蘭おおくほ みその。貴方の幼馴染ですね」

私は長良さんの心の中に恐怖で括られている部屋のような場所に封印されているその女性の記憶を感じました。

「そ、そうです。わかるんですか、そんな事が？」

長良さんはニコツとして私を見ました。するとそれが面白くないのか、麗華は私と長良さんの間に入って、

「それくらい、朝飯前やで。ウチらを誰やと思ってるねん？」

麗華はドヤ顔で言います。すると長良さんは、

「そう言えば、貴女はどなたでしたっけ？」

麗華はずつこけてしまいました。彼女は長良さんに自己紹介していなかったのです。

知らなくても仕方ないですよね。

「ウチは八木麗華。霊能者や。蘭子のマブダチやで」

麗華はキツと長良さんを睨んでいます。

「そ、そうなんですか……」

長良さんは顔を引きつらせています。麗華が怖いのでしょうか？
怖いのでしょうかね。

長良さんの話では、大久保さんと付き合い始めたのも、大久保さんが強引だったからで、長良さんは最初から乗り気ではなかったそうです。

昔、長良さんは大久保さんとよく遊んだ事があり、その時、

「将来は美園ちゃんと結婚する」

と言っただけなんです。

二人で撮った写真を見せてもらいましたが、大久保さんは美人です。

でも、その写真を通じてもわかるくらい、傲慢で不遜です。

自分は美人で、誰からも好かれ、どんな男も自分に好意を抱いている。

そんな感情が読み取れるほど、自尊心の強い人です。

長良さんもほんの少しですが、靈感があるようですから、大久保さんのその感情を普通の人以上に感じてしまい、堪え切れなくなつたのでしよう。

「しかも、悪い事に、美園は悪い宗教に嵌つたらしくて、その教祖に『絶対に長良邦彦と結婚しなさい』と言われたらしいんです」

長良さんは身震いしながら言います。

その宗教というのも、何だか怪しいです。

「よし、わかった。引き受けたら、あんたの依頼」

麗華が突然言いました。

「は？」

長良さんは当然キョトンとしています。私も唾然としました。

「ほい、ここにサインや。そしたら、あんたはもう安心やで」

ほとんど催眠商法紛いのやり方で、麗華は長良さんに契約させようとしています。

「あの、大丈夫なんですか？ もしこの状態を全て解決できるのなら、お金を惜しんだりしませんか」

長良さんがすぎるような目で私を見ます。その視線、まずいですよ。

ほら、麗華がムツとしてる。

「何でそれを蘭子に言うねん？ ウチに訊きいな！」

「あ、そうですね、すみません！」

長良さんはビクツとして麗華に頭を下げました。

「まあええ。ほれ、はよサインしてや」

麗華はそれでもニコツとして、長良さんにペンを差し出しました。

本当にいいのかしら、そんな事で？

西園寺蘭子でした。

恐るべき執念

私は西園寺蘭子。霊能者です。

東京に戻って来た親友の八木麗華を迎えに行くために事務所があるビルの地下駐車場に降りた私は、見知らぬ男性に襲われました。

その人の名は長良邦彦^{ながらくにひこ}。大手商社に勤めているイケメンさんです。

長良さんは、別れた元恋人の大久保美蘭さんに呪詛をかけられ、知らない女性を襲ってしまったそうです。私もその一人になるところでした。

すっかり長良さんを気に入ってしまった麗華は、催眠商法のような手口で強引に長良さんと契約し、大久保さんの呪詛を叩く事になりました。

本当にそんなやり方でいいのかしら？

私と麗華は、長良さんの案内で大久保さんが住んでいる町へと車で向かいました。

いつもなら私に運転させる麗華が、何故か運転しています。

理由は簡単です。助手席に長良さんに乗せて並びたいからです。

全くもう、何を考えているのでしょうか？ 子供みたいです。

心なしか、長良さんは顔を引きつらせていました。

「あんだ、その女に下の毛、抜かれたんちゃうか？」

麗華が真剣な表情でとんでもない事を尋ねました。

「え？」

長良さんは真っ赤になってしまいました。

「恥ずかしがってる場合やないで。もし、あんだの陰毛をその女が持つてるんなら、呪詛はこれからも続くゆう事や」

麗華のその言葉に長良さんはギクツとしました。

「美園は積極的に強引で、私を酔わせて、その……」

俯きながら話す長良さんの回想が見えてしまいます。

美園さんは長良さんを酔わせて昏倒させ、服を全部脱がせて……。

そこから先は、とても描写できません。

所謂アダルトビデオ紛いの事が行われたようです。

恥ずかしくて、とても覗いていただけませんでした。

「気がついたら、剃毛されていました」

長良さんの仰天発言に私は目を見開きました。

以前麗華にそんな趣味がある人の話を聞いた事があります。

長良さんは剃られてしまったのです。開腹手術でもないのに。

「怪我さえへんかったか？」

麗華は何の心配をしているのでしょうか？

信号待ちを良い事に、長良さんの股間を覗き込みます。

「あ、その、幸いというか、傷一つありませんでした」

長良さんも心配だったのでしょう、細かく見たようです。

あ、いけない、その時の光景が見えそう……。

「ちゅう事はや、その女はあんたの下の毛を大量に持っててるゆう事
や」

麗華は車を動かし、前方を見て言いました。

「そ、そうですね……」

長良さんは蒼ざめています。

「早う何とかせんと、大変な事になってまうで」

麗華は至って真剣な顔です。でも、長良さんは真っ赤になったま

ままでした。

いろいろと思い出してしまったようです。

私も力を制御して、長良さんの回想を覗かないようにしました。

やがて、長い橋を渡り、大久保さんが住んでいる町に入りました。

しばらく進むと、何故か信号機の間注連縄が張られていました。

「あかん！」

麗華が叫びました。私も感じています。注連縄をくぐった途端、
気の流れが変わったのです。

大久保さんの背後にいる宗教団体が、町全体を覆う結界を張って
いました。

どうやら私達は罫に嵌ってしまったようです。

「くそ！」

麗華は歯軋りして車を路肩に寄せて停めました。

周囲を見ると、たくさんの男性が歩いています。

それも虚ろな目で。

そして彼らは皆、私達の方へと歩いていきます。

気がつくとすっかり取り囲まれています。

「何？」

私は妙な声を聞きました。

『犯せ！ その女達を犯せ！』

そういう声が聞こえたのです。

男達の顔つきが変わり、私と麗華を見ます。

「ふうふう！」

助手席の長良さんも変貌していました。

「うわー！」

麗華はいきなり胸を揉まれて叫びます。

「何すんねん！」

彼女はバシンと長良さんの手を跳ね除けました。

「蘭子、逃げるで！」

「逃げるって、どこへ？」

私はすっかり取り囲まれてしまった車の周りを見て尋ねました。

「取り敢えず、遠くへや！」

麗華は車に取り付く男をドアを勢いよく開けて跳ね飛ばしました。

「そうね」

ここにいても危ないと思った私は、長良さんの腕を跳ね除け、ドアを開いて飛び出しました。

「オンマリシエイソワカ！」

二人で同時に摩利支天まりしてんの真言を唱えました。

「ぐげえ！」

近づいて来た男達はそれによってバシンと弾かれ、倒れます。

「まとめて吹き飛ばしたる！」

麗華が十八番おはじの大黒天真言を唱えようとしたので、

「ダメよ、それは！」

と止め、私は彼女を引き摺るようにして男達の囲みを突破しました。

彼らはさながらゾンビのようにユラリユラリと追いかけて来るので、簡単に振り切れそうです。

「一旦撤退や。あまりにも準備ができてないわ」

麗華にしては冷静な判断ですが、長良さんを置いて来てしまったので、何とかしないとイケません。

「殺される心配はないやろ。もしその気イなら、とつに殺されてるやろからな」

麗華の推理が珍しく訝えています。

「事務所に戻つて、作戦練り直しや。まさか長良さんの元カノが嵌つてる宗教団体が絡んでるとは思わんかったな」

麗華は走りながら言いました。

「ここまで手を広げているという事は、何かを企んでいるわね」

私も走りながら応じます。

ところが、敵もさる者です。橋は同じような男達に封鎖されています。

「どないする、蘭子？」

麗華は男達を睨みつけて言います。私も周囲を見渡して、

「強行突破するしかないでしょ？」

「そやな！」

私達は印を結び、摩利支天の真言を唱えながら走りました。

「ぐげえ！」

幾人かはそれによって倒れますが、数が多過ぎます。

「蘭子、やっぱり大黒天真言や！」

麗華が男達を蹴飛ばし、殴り倒しながら言いますが、

「そんな事したら、この人達、死んでしまっわよ！」

私はそこまですたくありません。こうなったら、一旦捕まるしかないようです。

「じゃあない。そうするか」

麗華は私の考えを読み取ってくれて、抵抗をやめました。

男達は私と麗華を羽交い絞めにし、そのまま抱きかかえるようにして運び始めます。

やがて男達は町の一角に止められたトラックの荷台に私達を押し込めました。

そこは冷蔵室のようで、ひんやりとしています。

「おいおい、凍らせるつもりか？」

閉所恐怖症がまだバレていないと思っている麗華がそう言います。

冷蔵庫ですから、凍る心配はありませんが、涼しいというより寒いくらいなので、ちょっと嫌です。

「わわ！」

ガクンと揺れ、トラックが走り始めたようです。

「長良さんは大丈夫かしら？」

私は身体を摩りながら咳きました。

「そんな事より、ウチらはどないなるねん!？」

すでに半泣き状態の麗華です。相当怖いのでしょうね。

まだ明かりが点いているだけ良かったです。

そうでなければ、パニックになっていたでしょうから。

しばらくグラグラと揺れていましたが、どこかに着いたらしく、トラックは停止したようです。

「わわつとー！」

麗華がまたバランスを崩しかけ、

「ひいー！」

と泣き出しかけます。こんな時の麗華はちょっと可愛いです。

「大丈夫、麗華？」

私が彼女に声をかけた時、扉が開かれました。

「あんだ達ね、私の呪詛を邪魔したのは！」

女性が大声で言いました。顔を見るまでもありません。

その人こそ、長良さんの元カノ、大久保美蘭さんでした。

「降りなさい。邪魔をした報いを受けてもらうから」

大久保さんはニヤリとしました。まさに魔女のような顔です。

美人なのでしょうが、百人が百人とも「怖い」と言うでしょうね。

私達は男達に引つ張られて荷台から降ろされました。

どうやらそこは、大久保さん達が嵌っている宗教団体の本部の庭のようです。

視線の先には巨大な五重塔が建っており、五輪塔を頂くお堂も見えます。

仏教系の団体らしいですね。

「貴方達にお仕置きをしてくださるのは、このお寺の住職様よ。謹

んで受けなさい」

大久保さんは勝ち誇ったように言いました。

麗華が大人しいと思ったら、すでに閉所恐怖症を発症してしまっ
たらしく、目も虚ろです。

まずいです。うまく切り抜けられるかしら？

西園寺蘭子でした。

工口住職現る

私は西園寺蘭子。霊能者です。

元カノの逆恨みで操られ、私を強姦しようとしたイケメンの長良ながら邦彦くにひこさん。

親友の八木麗華が長良さんを気に入り、催眠商法紛いの方法で契約を交わし、私達は長良さんと共に逆恨みの元の大久保美蘭さんが住んでいる町に行きました。

ところが、その町全体が怪しげな宗教団体に制圧されており、町中の男達が淫靡な目で歩いていました。

人海戦術で追い込まれた私と麗華は、一計を案じて敵の本拠に連れて行ってもらおう作戦に出ましたが、乗せられたトラックが冷蔵庫で、麗華は閉所恐怖症を発症し、役立たずになっていました。

「ほうほう。なかなかの上玉ですな」

黒い袈裟を着た僧侶風の老人が現れました。

僧侶風と表現したのは、その人の醸し出す気が決して修行を積んだ仏法者のものではないからです。

「貴方は何者？ 袈裟を着ているけど、お坊様ではないわね？」

私は男達に押さえつけられながらも、その老人を睨みつけて尋ねました。

「ほっほっほ、これはまた気の強いお嬢さんだ。私が僧でないとおっしゃるのか？」

老人はにこやかな顔で尋ね返して来ます。

「失礼だぞ！ この方こそ、明日の日本の仏教界を背負われる方だ！」

美園さんは目を血走らせて怒鳴りました。

これは洗脳などという生易しい方法ではありません。

魂を縛り、全てを掌握する邪法です。

ますますお坊様ではありませんね。

「お坊様ならば、何故周りにいる人達を邪法を使って操っているのか、答えてください」

私は更に押さえつけて来る男達に抵抗しながら言いました。

「なるほど。これはお仕置きが必要ですね、大久保さん」

老人はニヤリとして美園さんを見ました。

「はい。是非、一番きついお仕置きをしてください」

美園さんも嬉しそうに言います。

「始めなさい」

老人の目が鋭くなり、ギラツと光ります。

すると男達は私と麗華を抱え上げ、移動しました。

「何をする気？」

私は高々と掲げられてスカートの中が丸見えなのを気にしながら、老人を見ました。

麗華はすでにパンツ丸出しで運ばれていますが、まだトリップしたままのようです。

「皆に子種を注ぎ込んでもらう。そして、大久保さんを傷つけたあの男に罪を背負ってもらおうのだよ」

老人は狡猾な顔で答えました。

「そんな事をしたって、DNAを調べれば、長良さんが犯人じゃないってわかるわよ」

私が言い返すと、

「そんな事はわかっている。しかし警察は『私がやりました』と言った者を犯人にするのさ。その方が楽だし、手っ取り早いからね。もちろん、実際にあいつの子種も混ぜるしね」

老人は更に悪い顔になって高笑いしました。

「何ですって……？」

私は思わず美園さんを見ました。しかし彼女は完全に老人に操られているため、一緒に笑っているだけです。

「でも、被害者の私達が証言するわ。この人は犯人ではありませんて！」

私は向きを変えられて見えなくなった老人に叫びます。

「無駄だ。貴女達は強姦されて殺される事になっている。証言はできんよ」

老人のその言葉に私は啞然としました。

いくら長良さんが憎いと言っても、このままでは彼は無実の罪で刑務所行きです。しかも、悪くすれば、死刑……。

美園さんは本当に長良さんの事が憎いの？

それが気になりました。

私と麗華はお堂の中に連れて来られました。

そこには、象に似た巨大な歡喜天の像が飾られていました。

やはり、これは真言立川流の流れをくむもののようにです。

その流派には、男性の子種と女性の愛液を混ぜ合わせて鬻どくろにそれを百二十回塗り、加持して祀り上げるといふ儀式があると言われている。

あの老人はそれを実践するために美蘭さんを利用しているのでしょうか？

「ああ……」

麗華は服を剥ぎ取られ、すでに全裸にされています。

そして彼女を押さえつけている男達も全裸。

しかも、えーと……。描写できません。

「きゃっ！」

私も男達に服を脱がされ、スカートを切り裂かれ、床に押し倒されました。

「さあ、皆さん、思う存分注ぎ込んでおあげなさい。そうすれば、貴方達は必ずや極楽浄土に行けましょう」

そんな事をして極楽浄土に行けるのなら、エッチなビデオに出ている男優さん達は神になっていますよ。

「まずはご住職様からお願い致します」

何故か裸になっている美蘭さんが言いました。

結構胸が大きくて、あそこの……。おっといけませんね。

「わかりました。では私が手始めに見本をお見せしましょう」

老人は袈裟を脱ぎました。

道鏡という奈良時代の僧は、

「道鏡は座ると膝が三つでき」

と江戸時代の川柳に歌われるほど、えーと、あれが大きいと言われていたようですが、この老人も凄いです。

私は本当に男性経験がないので、大きさとかはわからないのですが、間違いなく凄いです。

ジッと見てしまいそうになりましたので、目を閉じました。

「ふむ。こちらのお嬢さんは、まだ少し成育が足りないようですね。こちらのお嬢さんは毛深いですが、なかなかの名器のようですね」

老人が言うのが聞こえました。

成育が足りない？ 冗談ではありません！ 私はもう二十四歳です。

十分成育していますよ！ その言葉、あの子にも聞かれています。

ましたよ！

どうしてくれるんですか、もう！

ああ、いけません、また出て来てしまいそうです。いけない私です。

「ぬあ！」

私を押さえつけていた男達は、私の身体から放たれる強烈な気によって跳ね飛ばされ、床に叩きつけられました。

「む？」

麗華にのしかかろうとしていた老人が動きを止め、私の方を向きます。

「何なの？」

美園さんも驚いてわたしを見ています。

「成育不足で悪かったな、デカマラジジイ！」

いけない私はピョンと飛び起き、老人を睨みつけました。

「何ですか、貴女は？ 先程のお嬢さんも気が強かったが、貴女はそれどころではない。人間ですか、本当に？」

老人は眉をひそめて私を睨み返します。

「人間だよ、ジジイ。てめえらのようなエロエロな化け物とは違って、正真正銘の人間さ！」

そう言いながら、いけない私は中指を突き立てます。

ああ、忘れたい……。

「ほう。それは面白い。これは犯し甲斐がありますね」

老人は怯むどころか、更に闘志を燃やしたようです。

根っからのスケベなのでしょうか？

「この西園寺蘭子さんを犯す、だと？ 言葉に気をつけるよ、ジジイ！」

いけない私がヒートアップします。

そんな事を言っている間に、麗華がピンチです。

まだ閉所恐怖症から脱していない麗華は、まさにされてしまいそうです。

「インダラヤソワカ」

いけない私は何度も申し上げておりますが、情け容赦がありません。

操られているだけの人達でも手加減などせず、制裁を加えます。

「ぐぎゃあ!」

帝釈天真言の雷撃が炸裂し、麗華にのしかかっていた男達が吹っ飛び、気を失いました。

「は!」

そしてようやく麗華も長旅から帰還のようです。

「げ、蘭子……」

麗華は途端に私がいけない私になっている事に気づき、顔を引きつらせます。

「おう、麗華、まだ未遂だったか。良かったな」

そう言つてのけ反つて笑ういけない私。

ああ、記憶から削除したいです。

「西園寺蘭子……。なるほど、貴女があああのサヨカ会を壊滅させた靈能者ですか」

老人はニヤリとして言いました。

「何だ、あの化け物と知り合いか?」

いけない私はフツと笑います。すると老人は、

「知り合いではありませんがね。その件に関しては、お礼を言わせ

ていただきますよ。サヨカ会は我らにとっても邪魔な存在でしたからね」

とちよつとビクツとするような事を言います。

「何だと？」

いけない私はムツとしたようです。嫌な奴に礼を言われるのが気に食わないのでしよう。

「さてと。ご挨拶もすみましたから、そろそろ儀式を始めましょうか、西園寺さん」

気のせいかも知れませんが、老人のあれがさつきより更に大きくなりました。

もう「膝」どころではありません。

子供の顔くらいあります……。気持ち悪いです……。

本当に大丈夫かしら？

西園寺蘭子でした。

元の鞘？

私は西園寺蘭子。霊能者です。

訳ありの「強姦魔」である長良邦彦ながらくにひこさんの依頼（？）で、私と親友の八木麗華は、長良さんの元カノの大久保美園さんの住んでいる町に来て、とんでもない連中に捕まってしまいました。

真言立川流。

一説によると、邪法。一説によると時代に翻弄されただけのごく普通の一派。

どちらにしても、私達が相手にしている老人は、少なくともまともな仏法者ではないですね。

「さあ、我らで愛でて進ぜよう」

老人の顔が更に狡猾さを増しました。そしておぞましい事に更にあそこを大きくしました。

長さは野球のバット以上、先端はバレーボールほどです……。

ああ、こんな物を見せられてはもうお嫁に行けないかも……。

行くつもりだったのか、とか言わないでくださいね。

「バカだな、ジジイ。マラはでかけりゃいってもんじゃねえんだよー！」

悩んでいる私に関係なく、いけない私は老人のそれをものともせず、印を結びます。

「オンマカキヤラヤソワカ」

行けない私の十八番じはちばんの大黒天真言だいこくてんしんごんです。

バリバリバリツと凄まじい勢いでお堂の床が裂け、老人に真言が向かいます。

「はああ！」

すると老人は信じられない事にあその袋を狸のように広げ、真言を弾いてしまいました。

「化け物か、てめえは!？」

大黒天真言を弾かれたいけない私が激怒します。

私はそんな事より、老人の袋に驚いてしまいました。畳み一畳くらいました。

とんでもないものを見せられて、ますますお嫁に行けなくなりそうです。

「蘭子、幻覚や! そのジイさんはそこにはおれへん!」

脇で私達の戦いを観ていた麗華が叫びました。

「何!？」

いけない私はキツとして老人を睨みます。

私も同時に気づきました。

老人は身代わり童子を使っているのです。

「余計な事を言わないでくださいよ」

老人はにこやかな顔で麗華を見ました。

麗華はまた起き上がった男達に取り囲まれます。

「さつきはようもやってくれたな!」

閉所恐怖症から完全に立ち直った麗華は反撃に出ました。

「おりゃああ!」

全裸なのに全く臆する事なくハイキックを繰り出す麗華をこの時ばかりは尊敬してしまいます。

いけないところが丸見えなのです。

「目くらましかよ。卑怯な戦い方だな、ジイさん?」

いけない私の怒りは頂点に達しようとしています。

「それが戦略というものですよ、西園寺さん」

老人は涼しい顔で言ったのけました。

「やかましいよー！」

いけない私はまた印を結びました。

また同じ事をするつもりでしょうか？ 頭が悪いのでしょうか？

その時でした。

『おい、もう一人の蘭子、聞こえるか？』

いけない私が私に話しかけて来ました。

こんな事は初めてです。

『え？ こんな事ができたの？』

私は驚いてしまいました。

『できるさ。私達は西園寺蘭子様なんだぜ』

いけない私は得意そうに言います。

『そうね』

私は苦笑いしました。

『私がジジイにもう一度大黒天真言をぶつけるから、その際に奴の

本体を探つて摩利支天まりしてんの真言をぶつける』

いけない私にしては、知略に富んだ作戦です。

『私をバカにしてるだろ?』

いけない私はムツとしたようです。

『そんな事ないわよ。やってみるわ』

私は思った事がいけない私に全部伝わってしまう事に気づきました。

いけない私は老人の幻覚をもう一度睨み据え、

「オンマカキャラソワカ!」

とさつきより強力な大黒天真言を放ちました。

「愚かな。また同じ事をするのですか、西園寺さん」

老人は再びあそこの袋を巨大化させました。

その隙に私は老人の本体を探ります。

そばにはいないようです。

どこにいますでしょうか? 探索範囲を広めて行きます。

お堂にある歓喜天像の中から人の気配を感じます。

『そこね!』

私は老人の本体を見つけました。

「オンマリシエイソワカ!」

私といけない私の二重奏の摩利支天真言が歡喜天像に向かいました。

「ぎえええ!」

いけない私の力が合わさったので、歡喜天像は砕け散り、中に隠れていた老人はその下敷きになって気絶しました。

同時に幻覚を作っていた身代わり童子が砕け、麗華と戦っていた男達も皆倒れてしまいました。

いけない私は満足したのか、引っ込んでくれました。

こうして、私と麗華はピンチを凌いだのでした。

私と麗華は引き裂かれた服で何とか胸と腰を隠しました。

老人をお堂にあつた鎖でグルグル巻きにして、全裸で倒れている男達にお堂の奥から持って来た座布団を置きます。

取り敢えず、見えない方がいいところだけを隠しました。

外にも倒れていたのので、座布団を補充して載せました。

そして、その中に美蘭さんを見つけてきました。

美蘭さんの服は近くにあったので、それをかけました。すると彼女が目を覚まして起き上がり、

「私……」

と突然泣き出します。どうやら、一部始終を記憶しているようです。

「私、邦彦さんに別れ話を切り出されて、頭に血が上って、復讐してやろうと思っていました」

美蘭さんは涙を拭いながら語ります。

「そんな時、この住職と出会って、優しい言葉で慰められて、彼への報復に力を貸すと言われ、その気になってしまいました。それで、気がついた時には、邦彦さんに酷い事を……」

美蘭さんはまた泣き出しました。

そこへ長良さんが現れました。彼も老人の術が解けているので、もう大丈夫です。

「美蘭……」

長良さんは微笑んで言いました。美蘭さんは恥ずかしそうに服で身体を隠して立ち上がります。

「邦彦さん、ごめんなさい。私、取り返しのつかない事をしてしまったわ」

「美蘭……」

長良さんは微笑んだまま美蘭さんを抱きしめます。

「僕も悪かった。君を避けてばかりで、君の気持ちを少しも理解しようとしなかった」

「邦彦さん」

美蘭さんも長良さんに抱きつきました。服が落ち、美蘭さんは丸見えになってしまいましたが、気にしていません。

「アホらしなあ。何やねん、しっかりより戻しておって」

麗華はムスツとして抱き合う二人を仁王立ちで睨みました。

「長良はん、契約の通り、ご請求申し上げますんで、よろしゅうに」

麗華はそう言ってスタスタと歩いて行きます。

「蘭子、置いてくで！」

「せっかちなね、麗華は」

私は肩を竦め、

「良かったですね。お幸せに」

と長良さんと美園さんに声をかけ、麗華を追いかけます。

麗華はラブラブなカップルが大嫌いのようです。

ましてや、長良さんに惹かれていたのですから、美園さんよりを戻されたのが気に食わないでしょう。

そんな麗華も可愛いのですけどね。

それにしても、いけない私と会話ができるとは思いませんでした。

もしかすると、うまく付き合っていけるかも知れませんか。

そうなるのが一番良いと思います。

西園寺蘭子でした。

歌手連続自殺事件

私は西園寺蘭子。霊能者です。

「何やねん、氣イ悪いわア、ウチ」

事務所を出て、ドアのロックを閉めている時、親友の八木麗華が
言いました。

「何よ、いきなり？」

私はニコニコしながら尋ねます。すると麗華は肩を竦めて、

「それをウチに言わすんか、蘭子？ 結構陰険な性格やな？」

何だか酷く機嫌が悪いのです。どうしてでしょうか？

「どういう事？ 意味がわからないんだけど？」

私はおとぼけではなく、本当に理解できなかったのです。

「ホンマ、蘭子は天然やな」

麗華は呆れているようです。ますますわかりません。

「ごめん、麗華。ホントにわからないのよ。理由を教えて」

私は手を合わせて言いました。麗華は大きく溜息を吐いてから、

「あんだ、朝から浮かれ過ぎやねん。ウチが来た時もそれくらい喜んでくれんか？」

「え？」

ようやく私は自分がウキウキしているのに気づいたのでした。

自覚症状がないなんて、どうしようもありませんね。

ウキウキの理由は、我が弟子である小松崎瑠希弥こまつきりゅうきでです。

彼女がとうとう帰って来るのです。

改めて、私はどれほど瑠希弥に頼っているのかわかりました。

この前の怪異の事件の時に、このままいて欲しいと言いたかったのです。

でも、そんな思いをグツと堪えて、瑠希弥をG県に送り出しました。

G県の靈感少女である箕輪まどかちゃん達のために瑠希弥に残ってもらったのですから。

今回瑠希弥が私の所に帰って来るのは、瑠希弥の故郷の先輩である椿直美さんの存在があります。

彼女は瑠希弥の姉弟的存在で、瑠希弥を育てた経歴もあります。

その椿直美さんが、まどかちゃん達の指導と護衛を兼ねる事にな

ったので、瑠希弥が戻れる事になったのです。

まどかちゃん達の事を思うと、あまり手放して喜ぶのもどうかと思えますし、サヨカ会の残党の存在も気になります。

先日戦った僧侶もどきの老人は、サヨカ会とは敵対する存在らしいですし、なかなかあちらの業界も複雑なようです。

要するに麗華は、私が瑠希弥の帰還をあまりにも喜び過ぎていると言いたいのです。

「まどか達も、瑠希弥を見送った時、泣いとっいたらしいで。それ聞いたら、ウチは蘭子みたいによう喜べへんわ」

麗華はムツとして言いました。確かにそうかも知れませんが、それを麗華に指摘されるのはどうにも納得がいきません。

それでも、正論を言っても、麗華には通用しないのですから、ここは大人の対応をします。

「私、麗華みたいに頭が良くないから、はしゃいじゃって。ごめんなさいね」

すると麗華は何故か慌てました。

「あ、いや、そない謝らんでええて、蘭子」

少し顔を赤らめています。照れているようです。相変わらずわかり易くてホツとします。

そして、外廊下を歩き、エレベーターで地下の駐車場へと降りました。

「西園寺蘭子先生ですか？」

エレベーターを降りたところに立っていた恰幅のよい男性が声をかけて来ました。

その隣には、瘦身の若い女性が悲しそうな顔で立っています。

「誰や、あんた？」

私が尋ねる前に麗華が前に出て言いました。すると男性は慌てて名刺を差し出し、

「私、芸能プロダクションを経営しております、篠沢武と申します」と言いました。

私は篠沢さんの気から、只ならぬ用事なのを察知し、事務所に戻る事にしました。

瑠希弥を迎えに行くために駐車場に来たので、瑠希弥の携帯に連絡し、迎えに行くのが遅れると伝えると、

「大丈夫です、先生。直接そちらに行きます」

と行ってくれました。

私は、篠沢さんと女性を事務所に通し、ソファに座ってもらって、早速用件を訊きました。

「実は、私の事務所にいた新人歌手が突然自殺してしまいました」

篠沢さんは若い女性を気にしながら切り出します。

「どちらは？」

私はお茶を出しながら訊きます。

「この子はその歌手の妹さんの天城静佳さんです」

静佳さんと呼ばれたその女性は憔悴し切っているのか、弱々しくお辞儀をしました。

篠沢さんが話してくれたのは、衝撃的な内容でした。

静佳さんのお姉さんの波留香はるかさんは、篠沢さんの事務所が地方で発掘した新人演歌歌手でした。

しかし、そのデビューはあまり恵まれたものではなく、鳴かず飛ばずが続いていたそうです。

そんな時、ある有名な作詞家と作曲家が手がけた唄を歌わないかと大手のレコード会社から声がかかったのだそうです。

篠沢さんはその企画を聞いて二つ返事で飛びつき、波留香さんも喜んでお願いしたのだそうです。

そして、レコーディングをすませ、いざCD発売の直前になり、波留香さんは全く理由なく自殺したのだそうです。

「理由がないで、そないな事あるんかいな？ あんたらがわからなかったただけやないか？」

麗華が腕組みをして口を挟みました。

「それはあり得ないんです。波留香は親戚中に連絡して、田舎の同級生達にも応援を頼んでいたほど熱を入れていました。自殺なんてあり得ないんです」

篠沢さんは麗華を睨みつけて言いました。麗華もその迫力にギョツとしたようです。

「それから数日経って、とんでもない事がわかりました」

篠沢さんは靴の中から一枚のCDケースを取り出し、テーブルの上に置きました。

「これは……」

私と麗華は、そのCDのジャケットを見た途端、何があったのか悟りました。

凄まじい憎悪。怨嗟。

通常、人が亡くなった時、いくばくかの負のオーラが残る時があります。

でも、そのCDケースには、その何万倍ものオーラが宿っていたのです。

しかも、そのCDに入っている曲こそが、波留香さんが歌うはずだった曲なのです。

そのCDのジャケットに写っているのは波留香さんではありません。
ん。

きのした まりあ
木下真里亜。演歌歌手です。

しかも自殺しています。

彼女が発しているのです。そのおぞましいまでの怨嗟と憎悪を。

「波留香が勧められた唄は、この木下真里亜さんが元々歌うはずでした。ところが、木下さんは自殺してしまい、そのまま曲も発売されずに終わっただけなんです」

妙です。波留香さんの死は確かにこの曲絡みですが、木下さんが呪った訳ではありません。

木下さんの怨嗟と憎悪は、彼女が所属していた事務所に向けられています。

「何や、複雑そうやな」

麗華もこの件の事情に気づいたようです。さすがです。

「作詞家と作曲家の先生を問い詰めてようやくわかったのですが、その曲を歌おうとした歌手が今まで何人も自殺しているんです」

篠沢さんのその言葉は、私と麗華を打ちのめしました。

そこまで見えなかったのです。

「わあああー！」

その途端、まさしく火が点いたように静佳さんが泣き出しました。

「それを知っていれば、私はその企画に乗らなかったし、波留香も引き受けなかった。何ともやり切れなくて……」

篠沢さんは、犯人を突き止めて欲しい訳ではないようです。

「西園寺先生、八木先生、もうこれ以上、波留香のような犠牲者が出ないようにしてください。お願いしますー！」

篠沢さんは、大手の甘い誘いに乗ってしまった自分を責めています。ですから、損得抜きでこの悪しき連鎖の元を断ち切って欲しいようです。

そして、静佳さんは言葉にこそしていませんが、篠沢さんと同じ気持ちのようです。

「わかりました。お引き受けします。この負の連鎖、断ち切ります」

私は麗華が細かい事を言い出そうとしているのを感じ、それを遮るように言いました。

「ありがとうございます、西園寺先生」

篠沢さんは涙ぐんで頭を下げてくださいました。静佳さんも泣きながら頭を下げてくださいました。

この一件、一筋縄ではいかない感じですよ。

西園寺蘭子でした。

自殺事件の真相

私は西園寺蘭子。霊能者です。近頃、危険な目に遭ってばかりです。

誰のせいとは言いませんが。

今回は久しぶりに正式な依頼です。

新人演歌歌手の天城波留香あまぎ はるかさんが、理由なく自殺したので、それを不審に思った波留香さんの事務所の社長である篠沢武さんと波留香さんの妹さんの静佳さんが、その真相を探って欲しいと依頼して来ました。

恐ろしい事に、波留香さんが歌うはずだった唄は、今まで何人も演歌歌手が歌おうとして自殺している因縁の曲だったのです。

そして、そもそもその唄を歌うはずだった木下真里亜きのした まりあという演歌歌手の凄まじい憎悪と怨嗟。

彼女の怒りは所属事務所に向けられたものでしたので、彼女によって唄が呪われているわけではないようです。

事件の背景の複雑さを感じた私と親友の八木麗華は、私の弟子である小松崎瑠希弥こまつまき るきやが事務所に着するのを待って、行動を開始する事になりました。

「ウチは別に瑠希弥は待つてへんよ」

麗華がニヤリとして言います。

「そついつ事を言つての」

意地悪な麗華に私はムツとします。

「え、いや、その、そない怒らんでえな、蘭子」

急に慌てて謝る麗華。またビビらせてしまったのでしょうか？

ちよつと悲しくなります。

そこへ瑠希弥がやって来ました。

「西園寺先生、八木先生、ご無沙汰しています。これ、お土産です」

瑠希弥は私と麗華にG県名物の焼きまんじゅうを持って来てくれました。

「ありがとうございます、瑠希弥」

私は喜んで受け取りましたが、麗華は、

「焼きまんじゅうて、うまいんか？」

と嫌な事を言います。

「私は美味しいと思いました。まどかさんのお兄さんにご馳走にな

った時しか食べていませんが」

瑠希弥が申し訳なさそうに言うと、

「何やて？ 何であんたが慶君にご馳走になってん？」

麗華は嫉妬心剥き出しで詰め寄ります。

慶君とは、G県の靈感少女である箕輪まどかちゃんのお兄さんの慶一郎さんの事です。

以前、何度かデートをした事がある麗華は、慶一郎さんは自分の彼だと思っているのです。

でも、慶一郎さんには、里見まゆ子さんという同僚の恋人がいるのです。

いずれにしても麗華の思いは空回りですから、瑠希弥が恨み言を言われる筋合いはありません。

「麗華」

私は麗華を窘めようと睨みます。麗華は途端にビクッとして、

「冗談やて、蘭子。怒らんでえな」

と引きつり笑いをして言いました。

全く仕方がない子です。

「おおきに、瑠希弥。後で食べさせてもらっわ」

麗華は瑠希弥を見て言いました。

「はい」

瑠希弥はホツとしたように微笑みます。そして、

「先生の机の上にあるCDケース、何ですか？ おぞましい気を放っていますか？」

と早速尋ねて来ます。さすが瑠希弥です。

「まあ、かけて。詳しく話すから」

私は瑠希弥をソファに座らせて、自分も向かいに座り、話し始めます。

麗華は私の横の肘掛けに座り、足を組みました。

話を終わると、瑠希弥は考え込んでしまいました。

「妙ですね。そのCDケースの気は、歌手の皆さんには向けられていない。事務所を恨んでいるようです」

「そうなのよ。そこが不可解なの。だから、木下さんのこの気は直接事件には関わりがないと思いたいのだけねど……」

私がそこまで話すと、

「そない単純な事件とちゃう雰囲気があるな。それと、木下真里亜の所属事務所も何か知ってるな」

麗華が割り込みます。瑠希弥は麗華を見て、

「そもその始まりは、木下さんの自殺だと思います。彼女の所属事務所に行くべきではないでしょうか？」

「そつやな。蘭子、どうする？」

麗華は私を見ます。私は頷いて、

「それでいいんじゃない？ 木下真里亜さんの自殺の理由がどうしても見えて来ないのも気になるしね」

と応じました。

その時でした。

「何!？」

私達は一斉にCDケースから離れました。

そこからいきなり凄まじい気が放出されたからです。

「いらん事をするな、お前達。この件は手出し無用。関わる者は殺す」

CDケースを通じて、何者かの念が私達の頭の中に送られて来ます。

「あなたは誰？ 何が目的？」

私はそいつの気に取り込まれないように印を結び、尋ねます。

「私が誰であろうとお前達には関係ない。これは警告だ」

「キャッ！」

ケースから何かが飛び出しました。

「いやあ！」

一番近くにいた瑠希弥がそれに黒のスカートスーツを切り裂かれ、ブラとパンティが剥き出しになりました。

「次は殺す。いいな」

そう言うと、そいつは潮が引くように気配を消しました。

「大丈夫、瑠希弥？」

私は瑠希弥に近づきました。

「平気です。服が破けただけですから」

瑠希弥はニコツとして答えました。

何だか彼女、また胸がおおきくなったのではないかしら？

床に落ちているお札を拾う瑠希弥の胸がプルルンと揺れました。

「羨ましそつやな、蘭子」

麗華が耳元で囁きます。

「そ、そんな事ないわよ」

私は凶星を突かれて焦ってしまいました。

「この札、CDケースに仕掛けられていたのでしょうか？」

瑠希弥がお札を私に示して言います。

「さっきまでそのケースには木下さんの気以外何も感じられなかったわ。どういふ事かしら？」

私は麗華を見ます。麗華は腕組みをして、

「ほんの一握りの霊能者の中には、瞬間物体移動能力アポーツを使えるモンがおるゆづのを聞いた事がある」

「アポーツ!？」

私は驚愕しました。もしそんな能力を持った者が相手だとすると、脅威です。

「只、それには触媒がいるはずや。恐らくさつきはそのCDケース

がそつやったんやろ。いくら何でも、ところ構わず物体を移動できへんて」

麗華は私の動揺を感じたのか、そう言ってくれました。

「それにしても、凄い能力ですね」

瑠希弥はお札を不動明王真言で燃やしながら言います。

「ええ。慎重に行かないと、大怪我をしそうね」

私達は互いに顔を見合わせ、頷きました。

私達は、一旦私のマンションに立ち寄りました。

瑠希弥の服がないからです。

「すみません、太っていて」

瑠希弥はそう謙遜しました。事務所にあつた私の服では瑠希弥のウエストは入っても、胸とお尻が入らないのです。

「気にしないで、瑠希弥」

私は仕方なく瑠希弥に私のコートだけを着せ、事務所を出たのです。

男の人だったら、完全に変質者ですよね。

「蘭子、顔が引きつってるで」

麗華が助手席で嬉しそうに言いました。

「うるさいわね！」

私はムツとして怒鳴りました。

そして瑠希弥は自分の服に着替え、改めて出発です。

「気休めにもならんかも知れへんけどな」

麗華が車のあちこちに魔除けのお札を貼りました。

何だか恥ずかしいのですが、命には代えられませんので、何も言いませんでした。

目指すは木下真里亜さんが所属していた芸能プロダクションです。

篠沢さんに場所を確認したので、ナビに登録し、そこへ向かうだけですが。

「何や、ワクワクして来たな」

麗華は嬉しそうですが、さっき服を切り裂かれた瑠希弥は浮かない表情です。

「瑠希弥、心配なの？」

私はルームミラー越しに瑠希弥を見ました。

「いえ、そんな事はありません。只、先ほどのお札なのですが、C
Dケースから飛び出したのではないようなのです」

「何やて？」

麗華が驚いて振り返ります。瑠希弥はそれに驚いたようです。

「それやったら、車で移動するんは危険やないか？」

麗華は探るような目で私を見ました。

「そのようね」

私は顔を引きつらせて答えます。

「どないしてん、蘭子？」

私の様子に気づいた麗華が更に尋ねます。

私はハンドルを強く握りしめたままで、

「さっきからハンドルが全然効かないのよ」

「ええ？」

麗華と瑠希弥が八モるなんて滅多にない事ですが、そんな事に感動している場合ではありません。

私の車は、私の意志とは無関係に進んでいるのです。

「この車、乗っ取られているわ。どこに連れて行かれるのかしら？」

私は引きつりながらも言ってみました。

「知るか！」

麗華は窓を開こうとしたり、ドアを開けようとしていますが、ダメみたいです。

どうなってしまっのかしら？

西園寺蘭子でした。

呪いの根源

私は西園寺蘭子。霊能者です。

謎の自殺を遂げた演歌歌手の天城波留香あまぎ はるかの所属事務所の社長と妹さんの依頼を受けた私達は、調査に乗り出した矢先に手荒い歓迎を受けました。

事件の大元に関わりがあると思われる木下真里亜きのした まりあという演歌歌手がいた芸能事務所に向かう途中、私の運転している車が何者かの力で操作不能に陥りました。

「事故死させるつもりはないみたいね」

私はハンドルが効かなくなったので、手を放しました。

「ホンマか？」

疑い深い親友の八木麗華はそれでもドアが開かないかと努力しています。

「八木様、敵に殺意は今のところないようです」

弟子の小松崎瑠希弥こまつまき るきやが言いました。

「そうか？」

麗華はようやくやくドアとの格闘を諦め、座席に座り直しました。

もし、敵が私達を事故死させるつもりなら、すぐに対向車とでも正面衝突させればすむ事です。

それをしないという事は、何か裏があるという事ですね。

只、どういう仕掛けなのか、私の車を操っている人の正体は探れません。

仕方がないので、私は流れに身を任せる事にします。

やがて車は私達が目指していた芸能事務所ではなく、全く別のところに着きました。

「何や、ここは？」

麗華が窓の外を見て呟きました。

そこは河川敷です。

整地された場所には野球のグラウンドがあり、子供達が試合をしています。

「どついう事やねん？」

麗華はドアがあっさり開いたので、不審そうな顔をしながら外に出ます。

私と瑠希弥も目配せをし合って車を降りました。

「ここは、木下さんが自殺をした場所ですね。この先の橋の下に口
ープを垂らして首をくくったようです」

瑠希弥がグラウンドとは反対の方向の数十メートル下流にある橋
の方を見て言いました。

私も車を降りた途端それをすぐに感じました。

でも妙なのです。

CDケースにはあれほど凄まじい憎悪と怨嗟を宿していた木下さ
んですが、自殺した現場には全くと言っていいほどその痕跡がない
のです。

一般的に、自殺者の怨念はその場に留まる事が多いのです。

妙な話です。

「けつたいな事やな。ますます不思議な事件やで」

麗華は腕組みをして河川敷を見渡しました。

波留香さん自殺は紛れもなく木下さんの自殺が関わっていると思
われるのですが、その木下さん自身の霊は波留香さんとの直接的な
つながりはないのです。

そして、その真相を探ろうとすると、まるで濃い霧のように行く
手を遮る存在があります。

それが事務所でCDケースから放たれた呪術とお札を送り込んだ人物です。

その人物は未だに何者なのか、どこにいるのかもわかりません。

そして、車を操り、私達を木下さんの自殺現場に導いたのもその人物だと思われます。

その人の意図がわかりません。

(妨害しているの？ 真相を突き止めさせたいの？)

私はその人物の心に辿り着けないかと思案しました。

「瑠希弥、力を貸してくれる？」

私は瑠希弥を見ました。すると瑠希弥は微笑んで、

「はい、先生」

と言つと歩き出しました。

私と瑠希弥は事件の根源を探るべく、木下さんが首を吊った橋の下に向かいました。

「氣イつけや、蘭子、瑠希弥。さっきのけつたいな奴がまた仕掛けて来るかも知れへんで」

麗華が後ろから叫びます。

「大丈夫よ、麗華」

私は振り返らずに手を振って応じます。

離れていた時は感じられなかった木下さんの気が、橋の下まで来たら感じられました。

一気に増幅された感じですよ。

「これは……」

瑠希弥が目を見開きます。

木下さんの無念が私達の心の中に怒濤どたうの如く押し寄せてきました。

木下さんは当時まだ二十五歳。

デビューは十五歳でしたから、芸歴だけで見れば、十年です。

しかし、歌手としての活動はごくわずかで、後は同じ事務所の先輩や先にメジャーデビューした後輩達の裏方をしていました。

所謂いわゆる下積み時代ですね。

そんな悪夢の十年のトンネルをようやく抜け出すチャンスが巡って来ます。

それが例の演歌でした。

ところが、木下さんの身体を欲しがった当時の事務所の社長が一夜を共にする事を条件に木下さんにその曲を提供すると告げたのです。

俗に言う「枕営業」を強要した訳です。

本当は絶対にそんな事をしなくなかった木下さんでしたが、もし断われれば契約も解除すると脅迫され、逃げ場を失いました。

曲は今をときめく黄金コンビが作詞作曲を手がけています。

それを歌わせてもらえるなら。

木下さんは決断しました。

歌手としての栄光を掴むため、自分の身体を社長に差し出したのです。

社長は貪るように木下さんを抱き、彼女の中で何度も果てました。

事が終わった後、血が出るくらい身体を洗い、社長の匂いや感触をこそぎ取るうとした木下さん。

あまりの出来事に瑠希弥は号泣しています。

私ももうその一歩手前です。

木下さんはそのまま死にたいと思ったほどでしたが、メジャーデビューができる信じ、思い止まりました。

しかし、悲劇は更に続きます。

別の歌手が社長に自ら枕営業をし、その唄を奪ってしまったので
す。

木下さんは絶望のあまりとうとう命を絶ちました。

それがここです。

私と瑠希弥は目を赤くして橋脚を上げました。

首を吊っている木下さんが見えます。

「酷過ぎます」

瑠希弥が叫びました。そして、

「でも先生、CDケースの怨嗟と憎悪は、ここで感じられたものは違いました」

と私を見ます。私はそこまではわからなかったので、

「どづいつ事、瑠希弥？」

すると瑠希弥は、

「CDケースの憎悪と怨嗟は何者かが手を加えたもののようにです。
つまり、あれは木下さんの本意ではないと思います」

「どづいづこつちゃ？」

離れて聞いていた麗華が近づいて来ました。瑠希弥は私と麗華を交互に見て、

「木下さんの悲劇を嘆いた誰かが、術者に頼んで呪殺をしてもらっているのではないかと」

と自分の推理を話してくれました。

「どうしてそう思えるの？」

私が尋ねると、

「何故なら、ここに私達を連れて来たのは、CDケースに細工をした人物ではなく、木下さんだからです」

瑠希弥は橋脚から目を転じて、川の反対側の河川敷を見ました。

そこには木下さんの霊が立っていました。

そして、私達に祈るように手を合わせ、消えてしまいました。

「木下さんに関わりのある誰かの思いが利用されています。木下さんはそれを悲しみ、私達をここに導いてくれたのです」

瑠希弥は涙を流しながら言いました。

「木下さんの強い思いが私の感応力に干渉して、車を操ったのだと思います」

瑠希弥は涙を拭いながら私と麗華に訴えるように話しました。

「なるほどな。木下真里亜の思いが瑠希弥を通じてウチらに訴えかけたゆうことか」

麗華も涙ぐんでいます。

女だったら、木下さんの悔しさに涙しない人はいないでしょう。

彼女を辱めて裏切った社長も許せませんが、彼女の思いを利用して呪殺をしている術者はもっと許せません。

霊能者として、女として。

「落ちぶれて死んだ歌手風情が、我が行いを邪魔するとはな」

その時、またあの人物の気配が現れました。

「あなた、一体何がしたいの？ 人の思いを踏みにじって、何をするつもりなの!？」

いつになく怒りMAX状態の私です。でも、いけない私は出て来ません。

「お前達を知る必要はない。警告したはずだ。次は必ず殺すとな」

橋脚の下に黒い影が現れます。

それはコウモリのように見えましたが、違います。

呪いの塊です。

様々な人の憎悪や嫉妬、恨み嫉みなどが凝り固まったものです。

「ただ爛れて死ぬがいい」

気配が言いました。

こんなところで死ぬつもりはありませんし、こんな奴に殺されるつもりもありません。

「オンマカキヤラヤソワカ！」

私と麗華と瑠希弥が繰り出す大黒天真言の三重奏です。

襲いかかって来た塊は一瞬にして消え去りました。

「おのね。あくまでやり合いつもりか。覚悟はできているということだな」

気配が言いました。私はフツと笑って、

「あなたこそ覚悟はできているの？ 私達にちよっかいを出した事、後悔するわよ」

と返しました。

「笑止。後悔するのはお前達だ」

気配が消えました。いなくなったようです。

「蘭子の言う通りや。あの阿呆、これから死んでも後悔するで」

麗華がガハハと大笑いします。

さて、これからが本番ですね。

西園寺蘭子でした。

悪徳芸能事務所へ

私は西園寺蘭子。霊能者です。

新人演歌歌手の天城波留香あまぎ はるかさんの自殺の原因が呪いにある事を突き止めた私達は、その背後にいる邪悪な存在と戦う事になりました。久しぶりに義憤に駆られる思いがします。

呪術を悪用する者も許せませんが、人の弱みに付け込んで、自分の欲望を満たす連中はもつと許せません。

私達三人は同じ思いを抱き、事件の発端となった木下真里亜きのした まりあさんが所属していた事務所に向かいました。

そもそも、この事務所の社長が木下さんを騙したりしなければ、彼女は自殺しなかったし、その後の連続自殺事件も起こらなかったのです。

惚けられるのを覚悟で、私は彼に一言言ってやりたいのです。

木下さんの自殺を根源に動いている連中は、彼女と何かしら繋がりがあろうようです。

霊視で探れない事は、現実で探るしかありません。

「社長を締め上げれば、何かわかるやろ」

助手席でふんぞり返っている親友の八木麗華が言います。

おまわりさんに睨まれるので、きちんと座って欲しいです。

それを言うと細々と言い返して来て煩わしいので、放っておく
ですが。

「八木様、その社長さんが危ないかも知れません」

後部座席で感応力を駆使していた弟子の小松崎^{「まつしま」}瑠希弥^{「るきや」}が言いま
した。

「何やて？」

麗華は身を起こして瑠希弥を見ました。私もルームミラー越しに
瑠希弥を見て、

「何かわかったの？」

瑠希弥は私を見て、

「はい。社長は木下さんの恋人に詰め寄られたようですが、木下さ
んの自殺の理由はわからないと惚けたようです。そして、木下さん
から曲を奪った人が、その数日後に自殺しています」

「そこまでは自業自得やけど、その後にくく自殺と波留香さんの自
殺はその一件とは関わりがないな。どういう事や？」

麗華も真面目な顔で考えています。雨が降るかも。

「恋人の行方はわかりません。恐らくその人があの術者と関連があ

ると思います」

瑠希弥が続けました。私は頷いて、

「とにかく、今は、木下さんがいた事務所の社長に事情を訊くのが最優先ね」

と応じた。

何とか無事に芸能事務所があるビルに辿り着いた私達は、その事務所がある三十階に行きました。

事務所の名前はスターマックス。何がマックスなの、と尋ねたくなります。

社長は会議中とかで、私達はしばらく応接室で待つ事になりました。

「門前払いされるか、居留守使われるかやと思うたけどな」

麗華は意外そうに言いました。私もそうです。

「先生、何だか気持ち悪いです」

瑠希弥が震え出しました。

「え?」「

私はギクツとして感覚を研ぎ澄まします。

「何や？」

麗華も眉をひそめ、ソファから立ち上がります。

これは……？

ガチャツとドアにロックがかかりました。

「どついう事や、ドアが開かんで！」

麗華がドアを蹴飛ばして叫びました。

霊の気配はしません。

「瑠希弥、摩利支天真言まりしてんを唱えて！」

私はスーツのポケットから数珠を取り出しながら叫びました。

「はい！」

私と瑠希弥は数珠を手首に巻き、

「オンマリシエイソワカ」

と摩利支天真言を同時詠唱しました。

「効かぬよ、そのような戯言は」

どこからか声が聞こえます。

「何!？」

天井と壁から煙のようなものが出て来ました。

ガスです。睡眠ガスのようです。

「く、何やこれ……」

壁に一番近かった麗華は防御する間もなく膝を着き、倒れてしまいました。

油断しました。まさかここで何かを仕掛けられるとは思わなかったのです。

「溜希弥……」

「先生……」

いくら霊能力を駆使しても、睡眠ガスは防げません。

私と溜希弥もなす術なく、眠りに落ちてしまいました。

そして、どれほどの時間が経過したのでしょうか？

私は目を覚ましました。

背中に冷たい感触を覚えたからです。

ハツとして自分を見ると、服を全部脱がされています。

やはり、さつき感じたのは淫の気だったようです。

私達三人は私を真ん中にして横並びで医療用の椅子に縛り付けられていました。

これって、産婦人科で見かけるものです。

三人共、大股開きというあられもない格好をさせられています。

まさしく、「どうぞいらっしやい」なのです。

「気がついたようだね、お嬢さん」

目の前に中年の男が立っています。

彼も全裸です。

醜くせり出した下腹、見事に禿げ上がった頭、たらこ二段重ねのような唇、横線を一本引いただけのような細い目。

何をしようとしているのかは、彼のあそこが大変な事になっているのから想像できます。

「ああ……」

右隣の瑠希弥も目を覚ましました。

「先生」

瑠希弥が潤んだ目で私を見ました。

彼女が私を見た時、その大きな胸がプルルンと揺れました。

こんな非常時ですが、相変わらず羨ましい大きさです。

「な、何や、これ？」

左隣の麗華も目を覚ましたようです。

「ようこそ、我が宴に。これからたっぷり可愛がってあげるからね」

男はにやりとして言い、やはりというか、瑠希弥に近づきました。

「いやあー！」

瑠希弥は男が何をしようとしているのかわかったのでしょうか、大声を上げました。

「ほう、その取り乱し方、生娘か。こいつは貴重だな」

男はベロリと舌なめずりします。気色悪いです。

この男、どうやら例の社長のようです。

瑠希弥が霊視したのと状況が違うようです。

「いやあ！」

社長は瑠希弥の乳房を揉み始めました。

瑠希弥は泣いて嫌がっています。

「そのうち気持ち良くなるよ、お嬢ちゃん」

社長は下卑た笑い顔をし、更に乳首を吸い始めました。

「こら変態、そないに強く吸うたら、痛いやないか！ それにその子は子供産んでへんのだや！ 乳は出えへんで！」

麗華が怒鳴りました。しかし社長は麗華には目もくれず、瑠希弥の乳首を吸い続けます。

「いやああ！」

瑠希弥は涙を流して身を動かしますが、どうする事もできません。

「瑠希弥！」

その時、私の中のいけない私がまた話しかけて来ました。

『私に代われ、もう一人の蘭子！ この手枷てかせと足枷あしかせはお前の気では壊せない』

『え？ どういう事？』

私はいけない私に尋ねました。

『術をかけてある。並みの力じゃ壊せないんだよ。早く代われ！
瑠希弥がやられちまうぞ！』

いけない私はいつになく焦っていました。

私が瑠希弥を大事に思うのと同じように、いけない私も瑠希弥の事を心配しているのでしょう。

『わかった。頼んだわね、もう一人の私』

『任せとけ、もう一人の蘭子』

そしていけない私の登場です。

「おらああー！」

いけない私は、気で手枷を壊すのかと思いましたが、いきなり引きちぎってしまいました。

衝撃的です。何という怪力でしょう。

「何だと？」

呑気に瑠希弥の乳首を吸っていた社長は、私の変貌に驚いたようです。

「先生？」

瑠希弥も潤んだ目を見開いて私を見ています。

「ら、蘭子……」

麗華はすっかり怯えていました。ああ。

「オンマリシエイソワカ！」

いけない私の超弩級の摩利支天真言が放たれ、私の足枷、そして瑠希弥と麗華の手枷と足枷が破壊されました。

「ぐはあ！」

飛び散った破片の全てが社長に突き刺さったのは、いけない私なりの報復でしょう。

「いで、いで、いで！」

社長は床を転げ回りました。

何しろやる気満々のあそこに破片が突き刺さったのですから、相当痛いですし、出血も凄いです。

「このおっさん、あの術者と取引してるぜ。危つくやられちまうところだったな」

いけない私は超絶的な感応力で、社長の心を読んだようです。

「こいつも連中の仲間やったんか」

麗華が呟きました。

「瑠希弥、大丈夫だったか？」

いけない私が優しい目で瑠希弥を見ます。

「あ、はい。ありがとうございました、先生」

瑠希弥は目を潤ませたまままで頭を下げた。

「どつって事ねえよ」

いけない私は何故か顔を赤らめて頭を掻きました。

結構照れ屋さんなのですな。

『余計な事考えるな！』

いけない私が私の思う事を全部読んでしまう事を忘れてました。

しばらくして、私達は落ち着いた社長に服を返させ、事情聴取をしました。

「木下の自殺の原因がお前にある証拠を持っている。悪いようにはしなから、我らに協力しろ」

社長は妙な白装束の一团に事務所に来られて、半ば脅して協力する事になったそうです。

「連中の正体はわからんのやな？」

麗華が社長のおそこをぐりぐり踏みつけて尋ねます。

いけない私と麗華は、社長が服を着るのを許さず、後ろ手にガムテープで縛り、正座させています。

瑠希弥は呆気にとられてやや離れたところからそれを見ていました。

ああ。瑠希弥の私への信用が失墜しそうです。

「いまだ、はい、何も知りません。只、木下の男の居所なら知っています」

社長は涙目になりながら答えました。

「早く言え」

いけない私が更にあそこを踏みつけました。

「言いますから、踏まないでえ！」

社長は絶叫しました。

まあ、この人はこれくらいは我慢しないとイケないくらいの悪行三昧だったのですから、全然私も同情しません。

私達は木下さんの恋人の住所を入手し、事務所を出ました。

恋人は何をしようとしているのでしょうか？

まだ何か裏がありそうなのですが……。

西園寺蘭子でした。

復讐のためだけに生きる男

私は西園寺蘭子。霊能者です。

演歌歌手の謎の自殺事件の真相を探る依頼を発端に、私達は強力な呪術を使う術者と対峙する事になりました。

そして、恐らくその術者の依頼主であると思われる事件の発端となった演歌歌手の木下真里亜さんの恋人だった男の人が住んでいる町に向かいました。

木下さんが所属していた芸能事務所の社長から入手した情報では、名前は井上学。二十七歳。

違う芸能事務所に所属する若手の俳優で、まだ露出は少なく、木下さんとは同郷のため、芸能界に入る前から付き合っていたそうです。

将来を誓い合いながら、まだ見ぬ夢を追いかける。

何だか泣けて来そうなお話です。

そして、実際に泣けてしまう結末を迎えてしまったのですが。

木下さんの自殺。

それによって、井上さんは事務所を辞めてしまったそうです。

井上さんの素性を聞き、彼のところに向かううちにいるいろと見

えて来ました。

感応力では飛び抜けている弟子の小松崎瑠希弥こまつしきが読み取った事情によると、木下さんは、井上さんのステップアップも約束されて社長に抱かれたようです。

木下さんの思いからはそこはわかりませんでした。井上さんの放つ強い念が瑠希弥に教えてくれたようです。

「恋人の今後まで言われたら、もう身を任せるしかないと思うたんやろな」

親友の八木麗華は、相変わらずふんぞり返った姿勢で助手席に座っています。

「言わないとダメでしょうか？ 言うともっとダメな事になりそうですが。」

「あの社長、事件のケリがいたら、もう一度どつく」

「どつくだけじゃすませねえ。もっと追い込んでやるぜ」

その言葉に麗華と瑠希弥がビクツとして私を見ます。

「そうです。忘れてました。」

「いけない私が表に出たままなのです。」

「だからそんな事を言ってしまった。」

「麗華」

いけない私が麗華を一瞥します。

「あ、はい！」

麗華はふんぞり返っているのをやめ、キチンと座りました。

「楽しみだなあ、大暴れしようぜ。相手はなかなか楽しませてくれ
そんな奴みたいだからよ」

「あ、はい」

麗華は顔を引きつらせて笑っています。また更に怖がらせてしま
ったみたいです。

「さすが溜希弥だ。そこまではこの私にも見えなかったぜ」

いけない私はルームミラー越しに溜希弥を見ました。

「あ、はい、ありがとうございます、先生」

溜希弥はもつと怖がっています。あああ……。

『もう下がってよ、もう一人の私！』

私は我慢できなくなっていけない私に言いました。

『まだ待てよ、もう一人の蘭子。もう少し楽しませろよ』

いけない私は交代するつもりがないようです。

『わかりました。ではこちらにも考えがあります』

『何？』

いけない私は私の策略を読み、焦ったようです。

『わわ、それはやめてくれ、もう一人の蘭子。それを何度もされると、私は消えちまうよ』

私は以前出羽の大修験者の遠野泉進とのおのせんしん様に言われた事を実行しようと思ったのです。

そう、身体の中に向かって、摩利支天真言まじししてんを唱えようとしたのです。

『交代するよ。だからそれだけは勘弁な』

いけない私はそう言つと、下がってくれました。

「さあ、もう少しよ、二人共」

私はいけない私が下がった事を知らせるためにそう言いました。

麗華と瑠希弥はホツとしたようです。

やがて車は、井上さんが住んでいるマンションの前に着きました。

私達は術者が何か仕掛けて来ないか警戒しながら車から降ります。

「心配はないようです」

瑠希弥が周囲をサーチして言います。

私達は頷き合って、マンションのエントランスに入りました。

そのマンションはオートロック付きのマンションで、住人以外は中からロックを外してもらわない限りエレベーターにすら乗れない造りになっています。

「またややこしいとこやな」

そういう手続き関係が嫌いな麗華が露骨に嫌な顔をします。

「部屋番号まで聞いて来たから大丈夫よ、麗華」

私はあの社長が寄越したメモを見ながら、インターフォンに備え付けられているボタンで部屋番号を押します。

「はい。どちら様ですか？」

井上さんの声が尋ねて来ます。

「西園寺蘭子と申します。天城波留香あまぎ はのりかさんの自殺の件でお伺いした
い事があるのですか？」

私は断られるのを覚悟で尋ねました。

「わかりました。どうぞおあがりください」

井上さんはあっさり許可してくれました。

また嫌な予感がします。

あの悪徳芸能事務所の二の舞？ そんな事を思ってしまった。

しかし、考えてみても仕方ないので、私達はエントランスから口ツク解除されたドアを通り抜け、エレベーターホールに行きました。

「また畏か？」

麗華も同じ事を考えているようです。

「でも、井上さんの声からは何も悪意は感じられませんでした。ここにはあの術者は来ていないと思います」

瑠希弥が言いました。

「そうか」

麗華も瑠希弥の言葉に安心したようです。

「何階や？」

麗華はあの占い師の館の出来事を思い出したのか、エレベーターに乗るのを躊躇しました。

「三階よ。階段で行く、麗華？」

私は一応訊いてみました。

「そ、そやな、最近運動不足やからな」

麗華は苦笑いして誤魔化し、階段へと歩き出しました。

私と瑠希弥は顔を見合わせてから、麗華に続きました。

「ひい、ふう、きつついなあ」

麗華は息を切らせています。本当に運動不足のようです。

運動が苦手な私より息が上がっています。

「やっと着いたか」

麗華が三階のフロアに足を踏み入れた時でした。

「何や!？」

息を切らせていたとは思えない身のこなしで、麗華が反応しました。

私と瑠希弥も三階のフロアに上がった時、結界を通り抜けたのを感じました。

「やっぱり罫か？」

麗華が鋭い目で前方を睨みます。

「ああ、そつだよ。俺の復讐を邪魔する奴には、死んでもらうのさ」

廊下の先に鉈を右手に持ち、左手には金属バットを持った男が言いました。

井上学さんです。

術者に操られていると言うより、術者と同調していると言った方が正しい表現かも知れません。

洗脳に近いのですが、井上さん自身がそれを望んでいるのです。

「イケメンなのに、考えが残念だな」

麗華はムツとして言い返しました。

他の住人が巻き込まれては大変と思いましたが、このフロアには井上さんしか住んでいないようです。

「井上さん、木下さんはそんな事を望んでいないわ。やめてください」

無駄とは思いましたが、一応言ってみます。すると井上さんは、

「お前達に何がわかるんだよ！？」 自分のために好きでもない男に

抱かれ、その揚げ句手に入ると思われていた栄光を横取りされた真里亜の気持ちがわかるのかよ!？」

と叫びました。彼は泣いていました。

術者によつて嘘の記憶を刷り込まれ、木下さんが復讐を望んでい
ると思ひ込まされているのです。

あのCDケースに込められていた木下さんの怨嗟と憎悪を強力な
ものにしてしまったのは、井上さんのこの悲しいまでの怒りの心で
した。

でも、井上さんとは話し合いで解決できそうにありません。

「お前らも死ぬね！　そして、真里亜に詫びろ！」

すでに井上さんは全ての人を憎しみの対象にしてしまっています。

このままでは、史上最悪の殺人鬼が誕生しかねません。

「麗華、瑠希弥」

私は二人に目配せし、井上さんに向かって走り出します。

「殺されに来るか、いい覚悟だ」

井上さんは舌なめずりをして鉦を振り上げます。そして走り出
しました。

「オンマリシエイソワカ」

摩利支天真言まりしてんの時間差三重奏です。

麗華、瑠希弥、私の真言が次々に井上さんにぶつかります。

「何をしても無駄よ。その男は自らの意志で鬼になるうとしているのだ。お前達如きの真言ではどうにもならぬわ」

突然術者の気配が漂い、声が聞こえます。

「何!?!」

井上さんにぶつかった真言は霧のように消滅しました。

その井上さんの背後に白装束を身に纏い、顔も白い頭巾で覆った術者が現れました。

「!?!」
「どついつ事や? このフロアには井上以外に誰もおらんはずやで」

麗華が術者を見て叫びました。

そうなのです。誰もいなかった場所にいきなりそいつは姿を現しました。

もしや、瞬間移動テレポート? そんな……。

「その者が鬼となるための糧になるがいい」

術者はニヤリとしたようです。

まずいです。一転ピンチになりました。

どっしりおしゃうっ？

西園寺蘭子でした。

狂気の恋人

私は西園寺蘭子。霊能者です。

木下真里亜さんの自殺に端を発した一連の事件の裏には、得体の知れない白装束の男がいました。

「お前達はその男が鬼となるための糧だ。食らわれよ」

井上学さんは、目を血走らせ、鉈と金属バットを振り上げて走って来ます。

「蘭子、容赦してる場合やないで！」

麗華は印を結び、

「オンマカキヤラソワカ」

と大黒天真言を唱えます。

「効くか！」

しかし、井上さんは怯みません。真言は彼の直前で消えてしまいました。

「何やて!？」

麗華は仰天しました。

「どういう事でしょう？ やはり、このフロアに張られた結界が邪魔をしているのかも知れません。」

「先生、私、真里亜さんの霊を呼んでみます」

弟子の小松崎瑠希弥こまつき るきやが階段を駆け下りました。

結界を抜ければ、交霊もできるはずです。

「行かせぬ！」

白装束の男が右手を突き出しました。

「くっくっ！」

階段を駆け下りていた瑠希弥はまるでワイヤーアクションのように宙を戻され、壁に叩きつけられました。

「はあ！」

白装束の男は次に右手から陰陽道の式神しきがみのようなものを放ちました。

「こいつ、何モンやねん？」

麗華が吸引のお札を出し、式神を吸い込みます。

「お前らが束になっても私には敵わぬ」

男はニヤリとしたようですが、白い頭巾で顔の半分が隠れている

のではつきりわかりません。

「死ねえ！」

井上さんが麗華に鉈を振り下ろし、私に金属バットを振り下ろしました。

「く！」

麗華と私はそれをかわし、後退しました。そして起き上がった瑠希弥に駆け寄ります。

「大丈夫、瑠希弥？」

「はい、大丈夫です」

瑠希弥は壁に叩きつけられる瞬間、感応力でガードしたようです。

「逃がさん！」

井上さんは涎よだれを垂らしながら、更に突進して来ます。

「しゃあない！」

麗華は井上さんに物理攻撃をするようです。

「気をつけて、麗華！」

私は思わず叫んでいました。麗華はステップを踏んで間合いを詰めました。

「おらあ！」

麗華の回し蹴りが井上さんの顔面に向かいますが、

「させぬ！」

また白装束の男が右手を突き出します。

「い！」

麗華は回し蹴りの途中で動けなくなってしまいました。

要するにパ ツ丸見え状態です。

「おりゃあ！」

井上さんの鉦が麗華の硬直した脚に振り下ろされる直前、いけな
い私が発動です。

「でりゃあ！」

いけない私もパ ツ丸見えの飛び蹴りで、井上さんをダウンさせ
ました。

「ぐはあ！」

井上さんは鼻血を出しながら倒れます。決して私のパ ツを見た
からではないと思います。

確かに今日は面積の小さい黒のスケスケですが。

それ、麗華のプレゼントなんです。私の趣味ではありませんから！

でも、履いているのですから、偉そうな事言えませぬね、わかっています。

「また出たか、化け物め」

白装束の男が言いました。

「化け物に化け物呼ばわりされる覚えはねえよ」

いけない私は中指を突き立てて言い返しました。ああ……。

「大丈夫か、麗華？」

いけない私が硬直が解けた麗華に尋ねます。

「はい、大丈夫です」

妙に他人行儀な麗華に私は密かに落ち込みました。

「麗華にかけた術、私にもかけてみるよ、へボオヤジ」

いけない私はいきなり挑発しました。

すると白装束の男は、

「お前には別の術を使わせてもらおうか」

「何？」

いけない私は眉をひそめます。

「く……」

井上さんが頭を振りながら起き上がります。

「まだか……」

いけない私がもう一度井上さんを蹴ろうとした時です。

「僕は一体……？」

さっきまでの凶悪な人相と打って変わり、井上さんはイケメンに戻っていました。

どうやら白装束の男の術が解けたようです。

「信じられない。もう一撃！」

いけない私が蹴ろうとするのを、

『ダメよ！ そんな事したら、摩利支天真言まりしてんを唱えるわよ』

私はいけない私を黙らせました。そして引っ込んでもらいます。

「しっかりしてください、井上さん」

私は起き上がるうとして井上さんに近づき、手を差し伸べました。

「ありがとう」

井上さんは微笑み、私の手を取ります。

「何がどうしたのか、全くわからなくて」

井上さんは頭をもつ一度振って呟きます。

「とにかく、下がっていてください。お話は、あの変なおじさんをやっつけてからです」

私はチラッと白装束の男を見ます。

「はい」

井上さんを麗華と瑠希弥の方に行かせてから、私は白装束の男を睨みました。

「こんな事をして何のつもり？ 貴方は一体何者なの！？」

いつもより数倍怒気を含んだ私の声は、麗華と瑠希弥をビクッとさせたようです。

「蘭子！」

「先生！」

二人の叫び声がした後、私は何かが身体に当たるのを感じました。鈍い痛みが背中を走ります。

「ぐ……」

口に鉄の味がすると思ったら、血です。どうしたのでしょうか？

更にお腹を見ると、何かが突き出ています。

「ナイフ……？」

血塗れのそれは、キラツと光りました。先端からポタポタと赤黒い液体が零れています。

「死ね！」

背後で井上さんの声がします。

「どうして……？」

私は前に崩れました。ズルツとナイフが身体から抜ける感触がありました。

「……」

そのまま突っ伏すように床に倒れてしまいます。

「蘭子！」

「先生！」

麗華と瑠希弥の声が遠くに聞こえました。

『だから言ったんだ！ お前は人が好過ぎるんだよ、もう一人の蘭子』

いけない私の声が聞こえます。

『ごめん、もう一人の私……』

これが私に対する術だったのです。見事に嵌められましたね。情けないです。

私はそのまま意識を失いました。

そして……。

次に目を覚ましたのは、私の事務所の仮眠室のベッドの上でした。

私はお腹に包帯を巻かれ、真言が書かれた布団をかけられています。

「氣いついたか、蘭子？」

真っ赤な目をした麗華が私を見下ろしています。

「私……」

ふと見ると、足元には瑠希弥が泣きじゃくって立っていました。

「先生、良かったです……」

瑠希弥は嗚咽をあげながら言いました。

「傷に術をかけられていてな、普通の病院では治療できへんねん。そやから、ウチの知り合いの心霊医師を呼んで、治療してもらった」

麗華は涙を拭いながら教えてくれました。

「そう。ありがとう、麗華。それで、井上さんとあの白装束の男は？」

「わからん。蘭子を庇って逃げ出すんで精一杯やったからな。あいつ、ムチャクチャ強いで」

よく見ると、麗華も瑠希弥も傷だらけです。

「ごめんね、麗華、瑠希弥。私のせいで、怪我したんだね」

私は痛みを堪えながら礼を言い、涙しました。

「ええて。ウチら、親友やんか。何があっても、あんたはウチが守る」

麗華はまた涙を浮かべて言います。

「私もです」

瑠希弥が涙を零しながら言ってくれました。

私の不注意で、二人を傷つけてしまいました。何としてもこの一件、解決しなければなりません。

「それにしても、さすが蘭子や。医者も驚いてたで。あの傷で助かるとはってな」

麗華にそう言われ、私はある事を思い出しました。

いけない私との交信です。

『もう一人の蘭子、ちょっと私の力を分けてやるよ。でないとお前、死んじまうからな』

確か、そう言われました。

いけない私が、私を助けてくれたのです。

何だかジンとしてしまいます。

私達は元々一人です。いけない私を消すのではなく、一人に戻る。

それがあるべき将来の私達の姿だと思いました。

そして、その将来のためにもあの白装束の男を倒します。

人の心を弄ぶのは、どんな理由があろうと許される事ではありません。
せん。

必ず報いを受けさせます。そうでなければ、木下真里亜さんが可哀想です。

西園寺蘭子でした。

更なる展開

私は西園寺蘭子。霊能者です。

新人演歌歌手の自殺事件の調査から始まった謎の術者との戦い。

敵の罠に見事に嵌ってしまった私は、酷い怪我を負いました。

親友の八木麗華と弟子の小松崎瑠希弥（小松崎 瑠希弥）に心配と迷惑をかけてしまいました。

そして、あのいけない私には、命を助けてもらいました。

絶対にあの術者は許しません。

私達を苦しめた事はいざ知らず、一般人の井上学さんを巻き込んだ事。

木下真里亜さんの自殺を利用して、得体の知れない事を企んでいく事。

同じ霊能者として放っておく訳にはいきません。

ベッドから起き出そうとした私を麗華と瑠希弥が止めます。

「まだ無理や、蘭子！」

麗華は涙ぐんでいます。

「先生、安静にしてください」

瑠希弥は涙を流しています。

「でも、こうしている間にも……」

私が反論しようとした時です。

ドン！ 玄関のドアの方で大きな音がしました。

「まさか？」

麗華と瑠希弥が顔を見合わせます。

「あり得ません！ このビルには強力な結界を張っているんです。ここまで来るなんて……」

次の瞬間、もっと大きな音がして、何かが崩れる音がしました。

「そこか、西園寺蘭子」

井上さんの声です。やはり、結界を破ってここまで上がって来てしまったようです。

「そんなアホな……」

麗華は驚愕していました。仮眠室のドアが蹴破られ、井上さんが入って来ました。

「お前達を殺せば、真里亜が生き返るんだよ！」

井上さんは日本刀を持っています。

よくここまで警察に捕まらなかったな、と思いましたが、警察が止めようとしてもどうする事もできないでしょう。

「ウチらを殺しても、あなたの恋人は生き返らへん！」

麗華が言い返しました。

「うるさい！ いいから、死ね！」

井上さんは日本刀を振り回しながら近づいて来ます。

「オンマカキヤラソワカ！」

麗華は室内なのを忘れて大黒天真言を唱えました。

「真言は効かないよ！」

井上さんはニヤリとしましたが、

「わかってるわ！」

麗華もニヤリとしました。

大黒天真言は井上さんを狙ったのではなく、天井と壁を狙ったものでした。

「ぐえ！」

天井が崩れ、壁が弾け跳び、井上さんに当たりました。

井上さんは瓦礫の下敷きになり、気を失いました。

「真言そのものは通じんけど、物理的な力は防げん。どや、ウチの作戦？」

麗華はまさしくドヤ顔で言いました。

「溜希弥！」

麗華は溜希弥と力を合わせ、気絶した井上さんを不動金縛りの術で動けなくし、呪術を練り込んだロープで縛りました。

「はあ……」

私は麗華が壊した天井と壁を見て溜息を吐きます。

「心配せんでええ、蘭子。あんたが貧乏なんは知ってるから、ウチが修理代出す」

麗華は私の様子に気づいてそう言ってくれました。

「ははは、ありがとうございます、麗華……」

私は苦笑いして言いました。

私が溜息を吐いたのはその事ではありません。

「この大家さん、うるさい人で、何があったのか細かく訊いて来ると思っんですよね。」

憂鬱^{ゆううつ}で、気が滅入ります。

「先生、いい機会ですから、事務所を移りましょう。私の先輩の椿直美さんがいた一戸建ての家が空いています」

瑠希弥が嬉しそうに言いました。

「一戸建て!?!」

私と麗華は声を揃えて叫びました。

「一戸建てなんて、一体いくら家賃がかかるの?」

「そこは直美さんの持ち物ですから、家賃は要りませんよ。それにそこなら、事務所兼自宅にできますから、効率的ですし」

瑠希弥はまるで不動産屋さんのようです。

「家賃は要らないって、それでは悪いわよ。いくらかでも払わないと」

私は椿さんと面識^{めんしき}はありませんが、同年代の女性だとはG県の退魔師である江原雅功^{えはらまさとし}さんから聞いています。

「その家は、直美お姉ちゃん、あ、いえ、直美さんが前から私に

住むように言ってくれていたところなんです。西園寺先生にご迷惑をかけるから、西園寺先生のマンションと一緒に住むのは控えなさ
いって」

なるほど、そういう事ですか。

「家賃要らんで、ええなあ。蘭子が借りんのなら、ウチが借りよか
？」

麗華がニヤリとして言いました。瑠希弥がギクツとしたのがわかります。

私は瑠希弥を見て、

「じゃあ、お言葉に甘えるわ、瑠希弥」

「はい、先生」

瑠希弥は嬉しそうに頷きました。

「ちっ」

麗華が舌打ちしたので、私は呆れました。そんなに借りたかったの？

すると、瑠希弥が、

「家は広いですから、八木先生も一緒にどうぞ」

「ほお、さよか？ さすが瑠希弥や、ええ子や」

麗華は瑠希弥を後ろから抱きしめました。瑠希弥は恥ずかしそうです。

瑠希弥の説明によると、その家は結界も貼られており、そう簡単には破れないらしいです。

私は事務所を引き払うのではなく、一時そのままにして、直美さんの家に移る事にしました。

「蘭子」

麗華が瑠希弥が給湯室に行った際に、

「蘭子、ここの修理代、ホンマにウチが出すから、心配せんといena」

「ありがとう、麗華」

私はまた苦笑いして応じました。

そして翌日、井上さんを縛ったままで、私達は椿さんの家に向かいました。

途中であるの白装束の男が仕掛けて来る可能性も考えられたので、まだ夜が明ける前に出発です。

「行くで！」

ワゴン車を調達して来た麗華が運転します。

何だか心配ですが、私は無理ですし、瑠希弥も大きな車は怖いよ
うなので、麗華しかいません。

「この車は対呪術仕様やから、ちょっとやそつとの攻撃ではびくと
もせんぞ」

麗華は胸を張って言います。

私と瑠希弥は後部座席で顔を見合わせて苦笑いしました。

幸いな事に、私達は無事に椿さんの家に着きました。

「わあ」

思わず感嘆の声があがってしまいました。

その家は、邸宅と呼んだ方がいいくらいの大きさです。

10LDK、バスルーム三室。もう大金持ち気分です。

「椿さんで、そつとうあこぎな人なんか？」

麗華がこそつと耳元で囁きました。担架なんて大袈裟と思った私

でしたが、持って来て良かったと思うくらい広い家です。

「どうかしらね？」

麗華に「あこぎ」とか言われたら、椿さんもムツとするでしょうね。

「事務所として、別棟があります」

瑠希弥は車が十台は悠々と止められる駐車を抜け、庭を進みます。

麗華が担架を押しについて行くと、そこにはまた別の邸宅がありました。

「ここが直美さんが使っていた事務所です」

瑠希弥が言いました。私と麗華はもう開いた口が塞がりません。

「中にはたくさんのお呪術に関する書物や武器、お札があります。自由にお使いくださいと直美さんに言われました」

瑠希弥に案内されるままに事務所の中に入りました。

「わあお」

麗華が叫びました。私も呆気に取られました。

そこはまさに博物館です。ありとあらゆる書物とお札と武器があります。

「これなら、あのバケモンにも対抗できそうやな」

麗華が嬉しそうに言いました。

「テレビを点けてください！」

突然瑠希弥が大声で言いました。

「何や？」

麗華は近くにあったリモコンでテレビを点けました。

そこに映ったのは、演歌歌手の自殺の報道でした。

「ええ！？」

更に別の演歌歌手が自殺したようです。

「そんな、どないなっとんねん？」

麗華は私を見ました。私にもわかりません。

「あの曲、何人もの演歌歌手に渡されていたようです。まだ他にもいる可能性が……」

瑠希弥はあまりの出来事に泣き出してしまいました。

「まさか！」

麗華はハツとして玄関に走ります。

「麗華？」

私は麗華に声をかけましたが、彼女はそのまま出て行ってしまいました。

「どうしたのかしら？」

私は瑠希弥を見ました。瑠希弥は涙を拭いながら、

「井上さんが逃げたようです。信じられませんが、術も縄も解いたようです」

「ええ！？」

そこへ麗華が戻って来ました。

「あのイケメンがいなくなってるで、蘭子」

麗華は汗まみれです。

「ホンマにあの術者、何モンやねん……」

麗華の声が震えているのがわかります。

得体が知れないだけではなく、途轍もなく強い。

私達で勝てるのかしら？ 本当に心配です。

西園寺蘭子でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2042/>

西園寺蘭子の霊感情話（完全版）

2011年11月20日19時33分発行